
花ぐるま事件帳～恩讐の彼方～

笠原綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花ぐるま事件帳〜恩讐の彼方〜

【Nコード】

N8039A

【作者名】

笠原綾乃

【あらすじ】

ただいま、改行調整中につき、読みづらい部分もあるかと思いますがご了承ください【PC版のみ】m(_____)m 時は享保。八代將軍吉宗の御世。幕政改革を推し進める吉宗を陰で支えた若者たちがいた。彼らは「庶民のための御庭番」として、江戸の町の平和のために、自らの命を賭けて悪しきものたちと戦う。

この物語は江戸時代を舞台にしていますが、主人公をめぐる設定は架空のものであり、実際の史実とは関係はありません (1/15更新分より「残酷描写あり」の注意書きを、3/06よりR15

の指定をさせていただきました。苦手な方はご覧いただく際お気を
つけ下さい)

序章 前夜・遭遇・（前書き）

【用語説明】

・呼子笛……同心や目明しが携帯し、緊急時に仲間を呼ぶ笛のこと。

序章 前夜・遭遇

亥の刻（午後十時）をつげる鐘の音が、漆黒のなかへゆっくりと溶けていった。

一月ほど前までは、この時間を過ぎては灯りの消えない料亭から千鳥足で出て行く酔客を、青や紫の着物に身を包んだ芸者が見送る、あるいは同伴する光景でいっぱいだった本所・深川界隈も、ほとんどの店がのれんをしまい、そびえ立つ建物を強い北風がなめるように吹いていく。

そんな中、唯一灯笼に灯がともっている料亭「浮雲」の玄関先に、黒の布地に大きな蝶の刺繍をあしらった振袖を細い身体にまとった芸者、京香が、本日最後の客である、大店の主人らしき人物を送りに、外へと出た。

「どうもありがとうございました。またどうぞ」

京香のあでやかな声に頬をゆるめた初老の主人が、恰幅のいい身体を駕籠の中に沈める。一人だけついてきた番頭らしき人物の合図で、駕籠が発した。

「やれやれ、あの御仁も度胸がいいね。いつ何時、辻斬りが現れるかもしれないのに。あんたも気をつけてお帰りよ」

白髪混じりの頭を結っている女将の呆れた物言いに愛想笑いを浮かべ、地につくくらい長いすそを持ったのと逆の手で提灯を持った京香が軽く会釈をして、闇の中へと歩き出した。

料亭が並ぶ通りを抜け、小さな橋を渡るとそこは、武家屋敷街になっている。

京香のはるか前方には、先ほど見送った駕籠があるのを示す提灯の灯りが揺らめいている。

犬の鳴き声すら聞こえない静寂の中、突然、空気が動いた。

（来た）

先ほどまでにこやかに微笑んでいた京香の大きな目が鋭く光った。提灯を投げ捨てて、胸元の扇に見立てた短刀を取り出し、駕籠のほうへ向かって駆け出すと同時に前方の灯りが放物線を描く。

少しの沈黙の後、刀を切り結ぶ音がした。そして。

「ぐわっ！」

番頭に化した供侍のものらしきうめき声が、辺りに響く。

「お待ち！」

たまらず叫んだ京香が、男と駕籠の間に割り込んだ。編笠をかぶった男は一瞬、虚をつかれたように立ち尽くすが、すぐに体勢を立て直す。

静かなただずまいだが、鋭い殺気。一瞬でも隙を見せれば、今度は自分が刀の露に消えてしまう。

「邪魔立てすると……、斬る！」

男は低い声で言う、京香に向かって刀を振り下ろした。それを短刀でなぎ払い、逆手に構えて呼吸を整える。

そこへ。

「かかったな」

声がして、駕籠から出てきた大店の主人　に化した、元、紀伊和歌山藩江戸屋敷城代家老の清水天膳が、京香の横に並ぶ。

「お主の正体、今度こそ見極めさせてもらうぞ」

「伯父上！　出てこられては！」

京香は思わず叫んだ。

「心配するな。腕はまだ衰えてはあらぬ」

そついう問題ではない。ここで天膳に怪我をされた場合、困るのは姪の京香だ。

昔は、なみいる強豪をねじふせる腕を持ち、当代一の剣豪と名高かった天膳だが、自らの長男である清水忠直に家督を譲り、悠々自適の隠居生活を送ること約五年。

齢五十を過ぎても腰を曲げずに歩いてはいるが、見かけは立派な

「おじいちゃん」なのだから。

そんな京香の心配に構わず、天膳は刀を引き抜いた。

二人の間を、男の切っ先が襲いかかる。

京香に構うことなく、男の刃が天膳のほうへ向けられた。辛うじてよけてはいるものの、ひいき目に見ても、天膳の分が悪いのは明らかだ。

大きな音とともに、刃と刃がぶつかった。

押された天膳の足元がふらつき、後ろのほうへと倒れこむ。

それを見た京香は侍の刀を拾い、再度二人の間に割って入ると、刀を逆袈裟に振りぬいた。

身動きできずにいた男の編笠の一部が切れた。雲の間から差し込む月明かりに照らされて、男の顔が京香と天膳にさらされる。

きりりと上がった眉に、大きな目。

深いしわが刻まれた頬には、火傷のあとのような大きなあざがある。

「そなたは、もしや……」

背後で、天膳の声がしたのと同時に、呼子笛の音が聞こえて来た。

「姐さん、旦那！ 大丈夫か」

その声とともに、目が細く、鼻のすつと通った美青年が、十手をかざして踊りこんでくる。

「新さん！」

「お前さんが、今世間を騒がしている悪党か。ここで会ったが最後、新吉さまの十手でお縄にしてやるから、覚悟しやがれ」

新吉が、歌舞伎役者のような口上を言ったと同時に、京香らの前に、煙幕が張られた。

「待て！ ……っ」

天膳は立ち上がろうとしたが、咳き込み、腰を押さえてうずくまる。

「伯父上！ しっかりして下さい！ 伯父上！」

序章 前夜・集合・（前書き）

【用語説明】

・月代さかやき……

おでこから頭頂部までの髪を剃り落とした部分のこと。

江戸時代では元服

（成人）した男子のあかしでもあった。

・立髪たてがみ……

月代を剃らず、頭上の毛が立っている髪型のこと。おで

こは四角に剃って

いる。

序章 前夜・集合

「父上！ 何を考えておられるのです！」

あのあと、駆けつけた配下の者とともに、傷ついた供侍と天膳をどうにか屋敷へ連れ帰った京香と新吉を待っていたのは、天膳の長男であり、京香の従兄弟でもある、現、紀伊和歌山藩江戸家老の清水忠直の怒鳴り声だった。

「近頃、頻繁に『浮雲』に通っていらつしやると聞いて、いやな予感はしていたのですが……。まさか京香や新吉を巻きこんでの犯人捜しとは、好奇心も度が過ぎますぞ！」

おでこの月代に布をやり、冷や汗を拭きながら、忠直は声を荒げた。

「そんなに怒らなくてもいいではありませんか」

「京香。父上から話を聞いたときになぜ止めてくれなかったのだ。お前なら、父上がこうなることを知っておっただろうに」

京香は見かねて口をはさむが、忠直の怒りが、今度はこちらへ向いてしまった。

「こうなるとは何だ！ 忠直！ ……いたたた」

思わず起き上がった天膳が、痛みに耐えかねて腰を折った。京香は慌てて天膳に手を貸し、部屋中央にある布団へと再度横たえる。「とにかく、辻斬りのことは大岡様を中心に奉行所で探索しておりますゆえ、金輪際、手出しは無用に願います。わかりましたね！」まるで小さな子供を叱るかのような口ぶりで、忠直は天膳に言い渡した。しかし。

「だがな忠直。我らが動かねば、辻斬りの手がかりを得ることはできなかつたのだぞ。なあ、京香」

天膳は、目を細めて京香に問いかける。

「ですが旦那……いや、清水様。手がかりといいまして、わかつたのは頼に火傷のあとがある男というだけでは」

それまで黙っていた新吉が、やや遠慮がちに口をはさんできた。

「新吉！ 余計なことを申すな」

「父上、やつあたりはおやめ下さい。新吉の言うとおり、それは手がかりとは申せません」

不満げな表情を浮かべる天膳を、忠直が勝ち誇った顔で見つめた。その姿が滑稽だったのか、新吉が声を押し殺して笑っている。

しかし、気にかかることがある京香は、笑えずにいた。

それは、あの男を見たときの天膳の反応だ。

まるで、思わぬところで意外な人物に出会ったときの、あの態度。考えたくはないが、見る限り、あの男と天膳には、何か関わりがあるとは思えない。

「失礼します」

物思いにふけていた京香の意識が、そこで途切れた。

襖が開き、浅草にある示現流の道場を切り盛りしている天膳の次男、源三が姿を見せる。

頭を立髪に結び、薄い灰色の着流しに身を包んだ源三の面立ちは、父に似た精悍な顔つきの兄とは違い、やや目が細く、黙って座っていれば色事に明るい優男に見えなくもない。

「兄上。先ほどのからの大声は何事ですか？」

「ちようどよかった、源三。お前からも言ってくれ。年甲斐もなく無茶はしないでくれと」

なおも苦虫をかみつぶしたような表情で今の状況を説明する忠直に、京香の隣に座った源三は笑みすら浮かべて答えた。

「それは無理というものです、兄上」

「何！？」

「今まで、この父上が、私たちの言うことに耳を傾けてくれたことがありましたか？」

「……確かに、ないな」

わずかな沈黙ののち、忠直が納得したように返事をする。

それと同時に、ついにこらえきれなくなったのか、新吉が吹き出

した。

「こ、これ！ 新吉」

天膳の狼狽ぶりが、今度は京香の笑いのつばを刺激する。

「京香、お前まで！ ……もう、知らんわ！！」

完全にへそを曲げてしまった天膳には申し訳ないのだが、新吉同様、京香の笑いも止まらない。

しかし。

「ところで父上。火急の用ということで参ったのですが」

源三の言葉が、なごやかな雰囲気を一気に断ち切った。

渋い顔をしてそっぽを向いていた天膳が腕組みをし、目を閉じた。

笑い続けていた京香や新吉はもちろん、忠直も、天膳のほうへ緊張した面持ちを向ける。

「父上、もしや」

さつきとはうって変わった低い声で、忠直が問う。すると。

「……さよう。『依頼』じゃ」

目を見開き、おごそかに天膳が告げた。

序章 前夜・依頼・（前書き）

【用語説明】

- ・下知^{げじ}……将軍が命令を出すこと
- ・花ぐるま……椿の花の一種、「江戸椿」の別名

序章 前夜・依頼

『依頼』 それは、時の將軍吉宗から、天膳に向けて発せられる「指令」のことを言う。

「大岡様を通じ、上様より下知があつた。このたびの事件のことは皆も知っておろう」

一月ほど前から、幕府御用達の大店の主人が、次々と暗殺される事件が起きている。

米問屋の秋田屋、呉服商の能登屋、絹問屋の唐津屋。いずれも、吉宗が將軍職に就いてからその人柄、商売の様子などを見込まれて御用商人になつたものばかりだ。

「最近わしは、油問屋山崎屋の主人に化けて『浮雲』に頻繁に通つていた。というのは、奴らの次の標的が山崎屋との知らせが、公儀御庭番衆よりあつたからだ」

京香はもちろん、あの場に居合わせた新吉も、忠直も驚いた様子で天膳を見る。

「それと同時に、今回の事件の黒幕は、上様の御政道に弓を引こうとするある旗本であるらしいとの情報をつかんだのだが、まだ、肝心の証拠が何一つない」

「そうになると、町方では手が出せない、ということですね？」

十手を預かる身の新吉の問いに、天膳がうなずいた。

「そこで、我々の出番というわけだ。『庶民のための御庭番』として、一刻も早くこれを解決し、市中に平和を取り戻せ、とのことだ」

『庶民のための、御庭番』

これは、天膳が指揮する隠密組織『花ぐるま』に指令を出すとき、吉宗が必ず口にする言葉だ。

御庭番と言つても、吉宗に直接仕え、諸藩の内情や世情の探索を

する公儀の者とは一線を画し、どちらかという私兵組織の意味合いが強い。主に町奉行では手の出せない事件の探索に当たり、ことの次第によっては斬り捨て御免も許される。

ゆえに、その人選は幾重にも慎重に行われた。

十年前、早世した七代將軍家継に代わり征夷大將軍に任命された吉宗はまず、幕臣として登用した二百人の紀伊藩士の子供たちの中より候補者を募った。

そのうち残った十人を天膳に預け、武芸・忍術・芸事などをみっちり仕込んだもののうち、残ったのが、天膳の息子の源三。公儀御庭番林軍太夫の三男、新吉。

そして。

天膳の妹で、今は紀伊和歌山藩剣術指南役の佐々木小十郎の妻、りくの娘、京香。

この三人が、吉宗からの『依頼』を天膳より受けて、江戸庶民の平和を守るため隠密裏に活動を始めから、もうすぐ一年になる。

普段は各々仕事を持っており、江戸庶民と変わらぬ生活を送っているが、この『依頼』が来ると彼らの生活・行動は事件を解決することが最優先となる。

岡っ引の新吉や芸者の京香はともかく、一番やつかいなのは源三だ。

浅草で道場を開いているのみならず、最近では、近所の長屋のおかみさんに頼まれて、寺子屋の先生まで始めたのだから、子供たちを巻き込まないようにするのに、かなり神経を使っらしい。

しかし、事件は待つてはくれない。

天膳が目配せをすると、新吉の隣に座っている、忠直がうなずいた。

立ち上がった忠直が、隣の部屋から、底が浅い大きな木箱を手に戻ってくる。

その中には、各個人が使用する様々な刀と、三人分の封書が整然と置かれていた。

新吉が、清水家の家紋である椿の花が描かれた小太刀と手裏剣を、源三が大小の刀を、京香が刃の仕込んである番傘をそれぞれ手に取った。

そして、忠直から葵の紋が入った文を受け取る。

これは、吉宗から京香たちに向けての斬り捨て御免の赦免状。この文があつて、初めて下手人を斬ることが許されるのだ。

「上様より告げられた期限は七日間だ。皆の者、頼んだぞ」

天膳の言葉を聞いた三人の視線が、一瞬ぶつかった。

幼い頃より共に修行を重ね、助け合ってきた仲間の心は、京香も新吉も源三も、互いにわかっている。

視線をはずし、天膳に向き直った京香たちは、両手について深く頭を下げた。

第一章 一日目・異母兄妹

天膳から指令が下りて一夜明けた朝、麻の布地を薄紫に染めた小袖に袖を通した京香は、作りたての煮物を持って浅草へ向かった。

従兄弟の源三が元服し、天膳からの命令で剣術の道場を開いて約五年。

京香は、家事を全くしたことのない彼のために、朝食の支度と一日おきの洗濯、ならびに部屋の掃除は欠かしたことはない。

雲ひとつない空を見上げた京香の吐く息はすでに白く、冬が近いことを思わせる澄んだ空気が肌に心地いい。

しばらく歩いたところにある、大川をまたぐ小さな橋を渡ったたもとには、岡っ引だけでは食べて行かない新吉が経営している茶屋の建物が見える。

さっき作った煮物は、源三と二人で食べるには少し多いし、新吉のところへおすそ分けでもしようか。

胸元の風呂敷包みを見ながら思った京香は、小さな建物の粗末な作りの戸を引いた。戸締りをしていないところを見ると、まだ仕入れには出かけていないのだろうか？

「新さん、おはよう」

戸の向こうにかかっている紺色の暖簾をくぐり、中に入る。しかし、新吉の姿は見えない。

「新さん、いないの？」

入り口の近くの机の上に包みを置き、声をかけた京香の背後に、知らぬ気配が近づいた。しかもそれは、自分に対するかすかな殺気を含んでいる。

今、京香が持っているのは護身用の短刀のみ。

それを抜いたときの距離を計算し、胸元に手を入れるよりも早く、その気配が近づく。

一瞬のうちに、相手の刃物が京香の首筋を捉える。
「おとなしくしないと、怪我だけじゃすまないよ」
自分よりも少し高い位置で聞こえる、低い声。

（男、か）

武芸百般を修めている京香といえども、男と女の力の違いにはかなわない。

相手の隙をつき、一旦この男から逃れなければ。

京香は、わきあがる恐怖心を飲み込んで、小さく息を吸った。

そしてかすかに手を動かし拳を握ると、それを力の限り後ろへ叩きつけた。

にぶい手ごたえとともに、いすの転がる音などがして、男の体が離れる。

京香は胸元に手を入れ短刀を取り出すと、逆手に持って目の前に構えた。

「さあ、出ておいで」

机の向こうに隠れ、息を潜めている男に声をかける。しかし、相手はまったく動かない。

「何を盗りに来たのかは知らないけど、この店には金目のものなんてひとつもありゃしないんだから」

「それはこっちの台詞よ！」

反論した言葉を聞いて、京香は思わず目を見開いた。

声はさっきと変わらないのだが、物言いが男のものとは明らかに違っている。

「こんな朝早くから、いったい何のつもり！？」

立ち上がった声の主を見た京香は、驚きのあまり声を失った。

長く、豊かな髪を後ろで馬の尻尾のように一つに結び、灰色のはかまの上に同じ色の羽織をはおっているのは『少女』なのだ。

「あんた……、誰なの？」

ようやく言葉を出した京香だが、今度は少女が、小さく肩をすくめてから目をそらし、黙り込む。

「ちよつと、何とか言いなさいよ」

京香の言葉が終わると同時に、茶屋の扉が開いた。思わず振り返ると、そこには驚きの表情を固めたまま立ち尽くす、新吉の姿があった。

「姐さん、……おみつ」

「兄さん」

おみつの口から出た思いがけない言葉に、京香の頭は混乱していた。

「ちよつと、新さん」

「おみつ！ お前あれほど部屋から出るなって言っただろう」

京香にかまうことなく、新吉がおみつに詰め寄っている。

「だ、だつてこの人が突然」

「この人は、このなじみの京香姐さんだ。朝早くに来ることがあるからつて言っただじゃないか」

「聞いてないよ。そんなこと」

「やめなさい！」

取っ組み合いの喧嘩になりそうな勢いの二人に割って入って、京香は叫んだ。

「とにかく、説明してくれる？ 新さん」

入り口のほうに顔を向けて、新吉をうながす。

「……あいよ。おい、おみつ。今度は部屋でおとなしくしてろよ。わかったな」

観念したような表情で新吉はうなずくと、京香より先に、裏口から外へ出た。

冷たい風が、京香の頬をそつとなでていく。

「実は……、おみつは俺の妹なんだ」

「妹？ でも新さん、あんた、林殿の末っ子のはずじゃ」

「ああそうさ。……親父のなかじゃな」

昇りたての太陽に背を向けた新吉は自虐的に言っと、腕組みをしたまま小さく鼻で笑った。

「え？」

「おみつは妾の子でね。俺たち三人と完全に血がつながっているわけじゃない」

新吉の言葉に、京香は呆然と彼を見た。

「おみつはずっと、虐げられて生きて来たんだ。血のつながりが半分しかない。それだけで上の二人にいじめられた。かばっても俺の力じゃたかが知れてる。なのに親父はかばってもくれなかった」

「……そんな」

「そればかりか、吉宗様が將軍になることが決まって江戸へ出てくるとき、ずっとおみつをかばってきた俺は公儀御庭番衆からはずされて、おみつは紀州へ置いていかれた。……捨てられたんだよ」

京香には信じがたいことだった。

小さなころ、誰にも負けたくない一心でひそかに特訓をする自分に、軍太夫は温かい視線を注いでくれていたのに。

「常に穏やかな表情で優しい。そんなのは表の顔だ。裏じゃ、自分に役立てないものは容赦なく切り捨てる。それがあいつのやり方さ」京香の動揺を見て取ったのか、新吉は怒ったように吐き捨てる。

「俺は、おみつを捨てたあいつを許さない。絶対に」

「新さん……」

長く一緒にいたはずなのに知らなかった、新吉の過去。彼が持つ妹への深い愛情と、父親への強い憎しみ。

それをまざまざと見せつけられた京香はこれ以上、言葉を告ぐことができなかった。

第一章 一日目・葛藤・（前書き）

【用語説明】

・一尺……今の単位で換算すると、およそ30・3cm。京香の身長は五尺でおよそ152cm、源三は五尺六寸でおおよそ170cm。

・部屋住^{へやすみ}……旗本の次男、三男が相続権もなく屋敷にいること。

・戌の刻……現在で言う午後八時のこと。

第一章 一日目・葛藤・

「……おかわり」

目の前にいきなり茶碗を差し出された京香は、びっくりして目を見開いた。

「どうしたんだ？ ぼうつとして」

京香のその様がおかしかったのか、目の前の源三が含み笑いをし
て訊ねてきた。

「あ、いえ。別に」

茶碗を受け取ってご飯をよそいながら答えるが、新吉が最後に見
せたあの顔が、京香の脳裏から離れていかない。

「新吉のところで、何かあったのか？」

「なぜ私が、新さんのところへ行つたとご存知なんです？」

今日はまだ、新吉のところへ寄つてきたとは言っていないのに。
「その身長割にせわしく歩くお前が、いつになく遅かったから
な」

源三は背が高く、五尺六寸あるのに対し、京香の身長は五尺ちよ
つとしかない。

自分の背が小さいことが悩みの京香は、少しでも強く見せるため
の努力を怠ることはない。

源三の言う「せわしない歩き方」もその一環なのだ。

「まあ。そんなこと言う人にはもう、ご飯作ってあげませんよ」

それをちやかされたことに少しむつとした京香は、そっぽを向い
て意地悪く言つた。

「お、おいおい」

本当に慌てた様子で、源三が言つた。いかんせん、京香の教えで
ようやくご飯をたくことを覚えた彼にとって、京香がご飯を作らな
いのは死ねというのと同じことらしい。

「冗談に決まつてるじゃありませんか」

少し肩をすくめて京香が言うと、源三は心底安堵した様子で胸をなでおろした。

そんな源三を見て、ふと思う。

旗本の次男、三男に生まれたものは長男と違って家督の相続権がなく、冷遇されるものが多いと聞く。

清水家の家督を当たり前のように相続した忠直と違い、天膳の命令で修行を積み、野に下ったことを源三はどう思っているのだろうか。

「先生……いや、源三様」

元服する前の呼び名を口にした京香に、源三は怪訝そうな表情を浮かべた。

「源三様は、どう思っているんでしょう？ 忠直様とは違って野に下り、このような生活をしていること」

一瞬だけ、源三の目が険しくなった。しかし、すぐさま笑みを浮かべて言う。

「部屋住でくすぶっているよりも、今のほうが俺の性にはあっているよ」

「……本当に？」

「どうして、そんなことを聞くんだ？」

「いえ。何となく気になったものだから」

京香は源三を見ずに、言葉をにこす。

「京香は、今の生活に不満でもあるのか？」

新吉と同じように、京香も幼い頃に両親と別れた。

当時八歳。まだまだ父や母に甘えたい盛りに連れてこられ、すぐに厳しい修行に身を投じなければならなかったことを恨みに思ったこともあったが、今は何の不満も持っていない。

京香は、小さく首を振った。

紀州へいても、成長すればいずれは知らぬところへ嫁に行かねばならなかったはずだ。

だったら、信頼できる仲間とともに、江戸の庶民のために戦うこ

の暮らしのほうで、京香の性にもあっている。

「そうか」

源三が嬉しそうな笑みを浮かべてうなずいた。

でも、新吉はどう思っているのだろう。

おみつをかばったがゆえに、公儀御庭番衆から外れたのだとしたら、それこそ本末転倒な話ではないのだろうか？

あるいは、軍太夫が新吉を外し、おみつを紀州へ置いてきたのは、何か別の理由があるのだろうか？

笑みを浮かべて源三を見つめながらも、京香の思いは、新吉兄妹に向いたままだった。

「そういえば京香。お前、最近江戸へ出てきた山城屋を知っているか」

「山城屋さんと言えば、この前亡くなった米問屋の秋田屋さんに代わる次期御用商人と噂の……」

「ああ。上様が直々にお声をかけ、紀州から出てきたと言われている由緒ある米問屋だ。連中が次に狙うとするなら、その山城屋だろうな」

お茶とともにご飯を口にかきこみながら、源三が言う。

また、自分の出番のようだ。今度の相手は多分、目の前にいる源三だろう。

「いつになさいます？」

「今夜、戌の刻に『浮雲』に来るよう、父上に伝えてある」

「……またですか？」

京香はあきれた物言い、源三を見た。

「仕方がないだろう。本人が一番やる気なのだから。今度は兄上にも許可はとってあるよ」

どうせごり押ししたのだろう。忠直の、苦虫をかみ潰したような顔が目に見えかぶ。

「じゃあ、帰りに新さんに伝えておきますから」

あからさまにため息をついて、京香は残ったご飯にお茶をかけて

ほおばり始めた。

第一章 一日目・人捜し・其の一・（前書き）

【用語説明】

・一刻……いっとき今の時間で約二時間。半刻は一時間。四半刻は三十分。

第一章 一日目・人捜し・其の一

朝早く店を訪ねてきた目の大きい女性、京香が去って、一刻のこと。

おみつは、足を忍ばせて店の中央にある階段を下りた。人捜しのために紀州から江戸へ出てきて、早三日。

兄の茶店を見つけ、十年ぶりの再会を果たしたのはいいものの、あれから新吉は、自分をこの店に閉じ込めてしまった。

さつきだつてそうだ。自分を部屋に閉じ込めて、京香と何かこそ話をしていた。

何か知られたくないことでもあるのだろうか？

一応思いをめぐらせてはみるけれど、おみつには何の心当たりもない。

第一、今こんなところに押し込められているわけにはいかないのだ。

店の奥座敷で眠っている新吉に目をやり、動きがないことを確かめると扉をそつと開けて、外へ出た。

紀州から出てきたときの格好ではさすがにまずいので、新吉の着物の中で、一番地味で、小さなものを選び、見よう見まねで着付けをした。髪の毛も、四苦八苦した末に適当に結い上げた。

きれいな着物を身に着けていた京香とは程遠い格好ではあるが、少なくとも、ここににいる人たちと遜色ない姿にはなっているはずだ。

「わあ……」

両側へ並ぶ大きな建物、その前にはいろいろな絵を書いた看板や、小難しい字を書いたのれんが風にはためいている。そして、間をひしめきあうように歩く人の群れ。

紀州の山奥で、毎日泥だらけになって飛び回っていたおみつには、初めて見る光景ばかりだ。

こんな多くの人の中から、自分を置いて紀州を出て行った祖父、

菊池小太郎を捜すことができるのだろうか。

おみつの心に一瞬、不安がよぎる。しかし。

（まあ、とりあえず歩いていけば、じいちゃんに会えるだろう）
すぐに思い直したおみつはとりあえず、橋のほうへ向かっていく。
そんな自分に注がれる、妙な視線。それは主に、女性からのもの
だった。

やつぱり、おかしいのかな？

すれ違いざまに声を立てて笑った二人連れをぼんやりと見つめて
いたおみつの肩に、何かがぶつかった。

「痛いな、何するんだよ」

「あ？ 何だと。ばおつと突っ立ってたお前が悪いんじゃないのか」
見ると、頬に傷のある、恰幅のいいつり目の男と、その手下のよ
うな男二人が、こつちに向かつて歩いてくる。

今まで均一に歩いていた人の波が、おみつらをよけるようにさつ
と引いた。

何だか、氣にくわない。

江戸へ出てきてからの兄への不満やら、今朝の出来事に対する怒
りやらがうつ積っていたおみつは、思わず叫んだ。

「大の男が、ひとりじゃ歩けないのかい！ 情けないね」

「んだとお！ たかがぼうず一人だ。やっちまえ！！」

ぼうず、か。

おみつは心の中であざ笑いながら、向かってきた一人目の子分の
足をひっかけて転ばせ、腰を踏みつけた。

「子供だと思ってなめると怪我するよ。性根すえてかかってきな
！」

足元の男を踏み台にして飛び上がり、橋の欄干を軽く蹴ったのと
逆の足は、そのまま二人目の子分の肩先を捉えた。

大きな音とともに、最初にのした子分の上に、別の男が倒れこむ。

それを横目で確認したおみつは、橋のたもとの階段の向こうへ着地した。

そのとき、遠巻きに見ていた人垣からどよめきが起こった。

「貴様あ！」

親分が脇差を抜いておみつに斬りかかった。

早い切っ先をかるうじてよける。

しかし、慣れないものを着ていたせいか、すそを踏んで転んでしまふ。

そのとき、右の足に激痛が走った。

それをこらえて立ち上がろうと顔をあげたおみつの眼前ぎりぎりに、刃が突きつけられた。

「なめたまねしやがって。この俺様をだれだと思ってんだ。え？」

「さして勝負できないような男の名前なんて、知らないね」

上目づかいに親分をにらみつけて口を開いたおみつの冷えた頬に、生温かい液体が滴り落ちた。

あちこちから悲鳴があがった。しかし、今のおみつは不思議と恐怖は感じなかった。

顔色を変えずに睨んでいるおみつに業を煮やしたのか、鬼のような顔をして、男が脇差をふりあげる。

おみつは身じろぎもせず、その刀の先端を見つめ、息を止めた。

そのとき。

「そこまでだな。権六親分」

さっきより大きな悲鳴を割いて、穏やかな男性の声が聞こえてきた。

第一章 一日目・人捜し・其の二・

おみつは思わず、声のしたほうを振り返った。

すると橋の上から、白の着流しをきれいに着こなした侍らしき青年が、上品なたたずまいで下りてきた。

「……てめえは」

青年の姿を認めた男の声が、一段と低くなる。どうやらこの二人、顔見知りのようだ。

「こんな子供相手に、随分と大人げないことをなさいますな。親分」

「こいつは、俺たちをさんざんこけにしやがったんだ。それなりに痛い目見てもらわねえとな」

「親分たちじゃ、その子にはいくら束になってかかってもかないはしないですよ」

おみつは驚いて青年を見上げた。

自分の力を……見抜いている。

「言わせておけば……。おい、この男からやつちまえ！」

おみつの横をすり抜けた親分が、青年が通り過ぎた橋の上から子分らが一斉に飛びかかった次の瞬間。

男たちの結っている髪が、順番にほどけて落ちた。

青年のほうを見ると、彼は悠然と刀をしまっている。

「この野郎！ 覚えておけよ！」

慌ただしく頭をさすり、男たちは恥ずかしそうに走り去っていく。すると、周りの人間から歓声とともに拍手が沸き起こった。

「大丈夫か？」

青年がおみつに向かって手を差し伸べてきた。

やわらかな顔立ちだが、油断はできない。

手をとらずにじっと見つめていると、目の前の青年は困ったような表情を浮かべた。

「おいおい。そんなに警戒しなくてもよい。さ」

一瞬戸惑ったが、おみつは素直に彼の手を取り、立ち上がろうとした。

「……いたっ」

よけたおみつの体を青年が支えた。兄、新吉よりもずっとたくましい、大きな腕。

「どうやらくじいているみたいだな。よし、俺の家がすぐそこだから手当てをしてやろう」

「いや、いいよ」

「よくはない。それではまともに歩けないだろう。ほら」

しゃがんだ青年が、自らの背中を目で指してうながす。

おずおずと青年の背中に身を預けたおみつの胸が、なぜか熱くなる。

青年のぬくもりは、小さい頃、二人の兄に隠れて自分を肩車して歩いてくれた父、軍太夫と同じものだった。

青年は慣れた手つきでおみつの足に薬のついた布をあて、細く裂いた白布を巻いた。

「さ、これでよし」

「ありがとうございます」

目の前の青年に対する警戒を解いたわけではないが、おみつは素直に頭を下げた。

「女だてらに身は軽いし、腕つぶしは強いようだが、あまり無理しちゃいかな。あいつらは、この辺じゃ札付きの悪い連中なのだから」

「どうして……」

「多少、武術の心得がある。それにさっきおぶったときにだいたい

察しはついていたよ」

思わず口にしたおみつの意図を汲み取り、的確に返してくる。
やはり……只者ではない。この男。

警戒心をあらわにしたおみつに、青年は戸棚から大きなまんじゅうを持ってきた。

「さ、食べなさい。動いたあとじゃお腹も空いているだろう」

「子供だと思つて、馬鹿にしないで」

思わずむっとして口を返すが、体は正直だ。整った身なりからは想像もつかないほど狭い家中に響くような音で、お腹が鳴る。

青年が含み笑いをして、沸いた鉄瓶よりお湯を移し、茶を入れ始めた。

恥ずかしさに顔を真っ赤にしたおみつは、青年を横目で見ながら遠慮がちにまんじゅうを手にしてほおばった。

皮はふつくらとしているのに、中のあるこはしっとりとしていて、甘い。

「……おいしい！」

「そうか」

につこりと微笑んだ青年が差し出した茶を一口飲み、おみつは考える。

この人、悪い人じゃないかも。江戸にずっといるみたいだし、もしかしたら、じいちゃんの子の行き先を知っているかもしれない。

「あの、お侍さんは江戸にずっと住んでるの？」

「いや、十年前に紀州から出てきたんだ。家族全員でな」

「紀州？ それじゃ、菊池小太郎っておじいちゃん知ってる？」

「菊池小太郎？」

問い返してきた青年に向かって、おみつはうなずいた。

第一章 一日目・人捜し・其の二・（後書き）

突然失礼します。作者の笠原綾乃です。

作者紹介ページにも書かせていただいたのですが、このたび、諸事情により作品の更新・

発表を今月いっぱいお休みさせていただくことにいたしました。

再開時期は9月初めになる予定ですが、その時にはまたぜひご贖頂ければと思っております。

楽しみにしてくださっている方には申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

2006・8・1

7 PM 22:43

笠原綾乃

第一章 一日目・疑念・（前書き）

お久しぶりです。作者の笠原です。

このたび身边が落ち着きましたので、投稿を再開することになりました。

大変お待たせしてしまい申し訳ありませんでした。今後もしひいき
いただ

けると嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします。

第一章 一日目・疑念・

「菊池小太郎？」

問い返した源三に、少女は勢いよくうなずいた。

菊池小太郎、といえば確か、紀州では一、二を争うほどの忍び。將軍吉宗が江戸に来るときも、公儀筆頭御庭番を確実視されていたが、孫を育てるためという理由で突然隠居したと聞いている。

「君は、菊池殿の孫娘なのか？」

「うん。名前はおみつ。大きな声では言えないけど、公儀筆頭御庭番、林軍太夫の娘なんだ」

「軍太夫殿の？」

そう問いながらも、源三の頭には釈然としないものが残った。というのも、軍太夫の子は男子三人だけだと、父天膳が軍太夫本人から聞いているはずだ。

第一、十年前からともに修行をし、行動している新吉も『妹がいる』とは一言も言っていない。

かといって、この少女、おみつが嘘をついているとも思えない。

「お侍さん、じいちゃんと父さんのこと、知ってるんだね」

身を乗り出して訊いてくるおみつに気圧されながらも、源三はうなずいた。

「ああ。俺は、元・紀伊和歌山藩江戸屋敷城代家老、清水天膳の次男で、源三という」

「清水……様」

「今はすぐ近くの建物で剣術の指南と、近所の子供たちに読み書きを教えている。先生と呼んでくれて構わんよ」

「じゃあ先生、じいちゃんの行き先を知ってる？」

期待に目を輝かせて訊ねるおみつには悪いが、源三は首を横に振った。

「……そうだよ。そんな簡単に見つかるはずはないよね」

落胆を隠さずに、おみつはうつむいた。

「おみつ。菊池殿は、本当この江戸に来たのか？」

「うん。間違いないよ。じいちゃんが紀州を出る少し前から、変な男がよく家に来てたんだけど、そいつが頻繁に『江戸』って言うてたもの」

「変な男？」

「そう。深い編笠をかぶった、ここに大きなあざのある男」

自分の頬を指し示すおみつを見た源三の脳裏に、昨夜の出来事がひらめいた。

確か、天膳が京香や新吉とともに辻斬り捜しに乗り出したとき、彼らの前に現れた男の頬には確か、大きな火傷のような跡があったはず。

まさか、その辻斬りと小太郎の間に、何らかの関係があるというのだろうか？

だとしたら今晚、第二のおとり計画を実行するとき、小太郎も現場に駆けつけてくるやもしれない。

「先生？ どうしたの？」

自分に対する警戒心を解いたのか、おみつが、源三の顔の前に手をかざして訊ねてくる。

「いや別に。ところでおみつ、家はどこだ？ 送って行ってやろう」
突然、おみつが黙りこくった。何やら、家に帰りたくない雰囲気のようなのだ。

「どうした？」

「先生、お願い！ 私をこの家に置いてくれないかな？」

「何！？」

突然の申し出に目を見開いて言葉を返すが、おみつの表情は真剣そのものだ。

「実は私……。黙って家を出てきたの。兄さんにばれたら、今度こそ紀州に帰されちゃう」

おみつの話によると、三日前に一番下の兄を頼って江戸へ出てき

たものの、再会した兄は、彼女を早速家に閉じ込めて、話も聞いてくれないというのだ。

（新吉のやつ……。いったい何のつもりでこんなことを）

「なぜ閉じこめられるのか、心当たりはないのか？」

「私、小さい頃に上の兄さんにいじめられてたから、そのせいじゃないかとは思っただけど……」

不満そうな表情で、おみつは言葉を切った。

「でも、今の君はあの頃の君ではない、それは俺が保証するよ」

「本当！？」

顔を輝かせたおみつに、源三は確信を持ってうなずいた。きつちり修行を積みめば、花ぐるまの一員としてやっていけるだけの素質は持っている。

いくら幼い頃に兄にいじめられていたとしても、それくらいのことを見抜けぬ軍太夫ではないはずだ。どうも、この親子に関しては腑に落ちないことが多い。

「……いいだろう。ただし、二つばかり条件がある」

源三の言葉を聞いたおみつの顔に、緊張の色が浮かんた。

「条件、って？」

「まずは、俺がいなくときに寺子屋の生徒の面倒を見ること。読み書きは教えなくてもかまわんから、遊び相手になってやってくれ。そしてもうひとつは」

「先生、いらっしゃいます？」

もうひとつの条件を言いかけたとき、京香の声が障子越しに源三を呼んだ。

顔がさっとこわばったおみつに目配せをして、源三は玄関先へと立つ。

「どうした、京香。忘れ物か？」

「いえ、新さんに頼まれて人を捜しているんです。おみつって名の少女、知りませんか？」

新吉の手配せの早さに少々辟易としながらも、源三は、この場を

どう切り抜けるかを考え始めた。

第一章 一日目・秘密・（前書き）

【用語説明】

・島田（鬻）……東海道島田宿の遊女の髪型をもとにした形で、さまざまな種類がある。

第一章 一日目・秘密・

「新さんが、大慌てで捜しているんですよ。何が何でも見つけて来
いて」

京香の声には、困惑の色が少しだけにじんでいる。

「京香はその少女の顔を知っているのか？」

「知っているも何も……」

何でも、新吉の店に行った京香にいきなり刃を突きつけてきたの
がおみつだと言うのだ。

「どうしてかは知らないけれど、新さん、おみつさんを外に出した
くないみたいなんですよ」

さっきまでのおみつと同じようなことを、目の前の京香も話して
いる。

……やはり、おかしい。

京香に事情を話すのはたやすいことだが、新吉が手を回している。
仲間意識の強い彼女に秘密を強いるのは酷か。

「どのような格好をしているのだ？ その少女」

とりあえず知らないふりをして当たり障りのないことを訊ねる。

「灰色の忍者装束です。私より背が少し高くて、髪は後ろで一本に
束ねてます」

「わかった。注意して捜してみよう」

適当に調子を合わせて答えると、京香は安心したような表情を浮
かべてうなずいた。

「それじゃ、よろしくお願いします」

頭を下げて帰って行く京香の背中に、心の中で謝りながらも、お
みつのことが知れなかったことに、源三は心底安堵した。

「……もう、大丈夫？」

扉の向こうから、不安そうな顔をしたおみつが顔を出した。

「ああ。しかし、京香に襲いかかったのは感心しないな。あの人は、

俺の従姉妹どのなのだから」

「ごめんなさい」

鼻っ柱は強そうだが、紀州でおおらかに育てられたおかげか、根は素直な少女のようだ。

「……よし、寺子屋に行こうか。子供たちが待つてるからな」

そうおみつを促したものの、源三は今一度彼女を見渡した。

この格好のままでは、また、男に間違われてしまい、寺子たちの混乱を招きかねない。

「先生？」

どうにか立ち上がったおみつがまた、源三の顔をのぞきこんでくる。

「寺子屋に行く前に、少し寄るところがある。つきあってくれないか？」

「女将、いるか？」

源三が、大通りを捜しているであろう京香や新吉に見つからぬよう気を配り、裏道を通って着いた先は、浅草寺の裏手にある小さな置屋、花かごだった。

「あら、源三様。お久しゅうございます。……そちらのお嬢さんは？」

「少しわけありでな。俺が預かることになったんだ。悪いが、着物を見つくるってくれないか？」

「かしこまりました。智香。このお嬢さんに着物をお願いね。それと着付けも」

「はい」

春香の声に顔を出したまだあどけない顔立ちの少女が、おみつを

奥へと連れて行く。

廊下の脇にある部屋に入り、腰を落ち着けた源三は早速切り出した。

「春香。申し訳ないがこのことは、京香には内緒にしてもらえぬだろうか？」

「もちろんですとも。旦那様によりしく仰って下さいましね」

「近いうちに顔を出すよう伝えておくよ」

さすがに抜け目がないな。そう思った源三は苦笑いをしながらうなずいた。

白い肌に切れ長の目が印象的な春香は、源三らが紀州にいたときよりの、天膳の馴染みの芸者だった女性だ。

早くに妻を亡くし傷ついた父、天膳の心を知らぬ間に解きほぐし、かと言ってでしゃばらぬその姿に、源三も、兄の忠直も、気づいたときにはすっかり心を許してしまっていた。

十年前、天膳が花ぐるま結成の準備のために江戸へ出て来た際に供をし、京香をはじめとした少女たちを厳しくも温かく指導し、芸者として育て上げたのもこの春香だ。

「あのお嬢さん、新さんの妹さんでしょう？ 目元にかすかな面影が」

源三にお茶を差し出しながら春香は言う。男装をしているおみつを一瞬で少女と見破り、自分ですら気づかなかった、兄との共通点を見出す。

「さすがだな」

その眼力の確かさに、源三も舌を巻くよりほかはない。

「さつき、随分慌てた様子の新さんが見えましてね。お父上に見つかる前に妹を紀州へ帰さなければ、みたいなことをつぶやいておられましたよ。もちろん独り言ですけどね」

「林殿に？」

伏し目がちに春香はうなずく。

「新さんはお父上のことがお嫌いなんです」

そう言われてみれば、新吉からあまり軍太夫の話を聞いたことがなかった。

自分と同じように集ったほかの子から話をされれば二、三言言うだけで、自分から肉親の話をしたことはない。

かと言つて、妹のおみつは軍太夫のことを嫌いなそぶりは見せていない。小さい頃別れたきりだから「父」と言われても実感がないだけのかもしれないが。

「先生」

おみつの声が、源三の思考をゆるやかに断ち切った。

声のした方を見ると、そこには薄い桃色の小袖に身を通し、髪の毛を島田に結い上げたおみつが少し照れたように肩をすくめて立っていた。

「あら、かわいらしいこと」

立ち上がった春香が、少し乱れている鬚まげを直してやる。

「ほお」

「馬子にも衣装って言いたいんでしょう？ わかってますよ」

源三が感嘆の声をあげたのと同時に、薄く紅をさした唇を少しすばませたおみつが拗ねたような口調で言った。すると、春香と、支度をしてくれた智香から笑い声が漏れる。

「そうは思つてないよ。さ、行こう。子供たちが首を長くして待つてるだらうからな」

ちらつと思つたことをおみつに看破され、少し後味の悪い思いをひきずりながら、源三は立ち上がった。

第一章 一日目・決意・

源三が、春香の所へおみつを連れて行った半刻前のこと。

「……どうも、ありがとうございました」

おみつの兄、新吉が花かごを出て、大きなため息をついた。

（つたく、どこに行きやがったんだ。おみつの奴）

人の気も知らないで、口を開けば『外へ出る』の繰り返し。

何をしに江戸に来たかは知らないが、早く見つけて紀州へ帰さなければ。

「あら、新吉親分」

「どうしたの？ そんなに慌てちゃって」

いつも町回りをしているときに軽い気持ちで声をかける茶屋の女性たちが寄ってくるが、今は彼女たちの相手をしている余裕はない。焦りを隠さず歩き回っている新吉の前に、大きな籠を背負っている男が歩いてきた。

その男の姿を見た新吉の背に、冷たいものが流れ落ちる。多分、今の自分の顔は青ざめているだろう。

「……親父」

「おみつが、江戸に出てきているようだな」

新吉にしか聞こえないような小さな声で、父、軍太夫が言う。

「……！」

「隠しても無駄だ。さつき、浅草の橋のたもとでならず者とやりあっているのを、弥助が見ている」

弥助とは、一番上の兄の名だ。

「言わんこっちゃない。これだから、おみつを外に出したくはなかったのに。」

「三日以内に、おみつを紀州へ帰せ。さもなくば……わかっておるうな」

非情の宣告に、新吉の心が凍りつく。

「あ、新さん」

後ろから聞き覚えのある声がする。それと同時に軍太夫が何事もなかったかのようにおじぎをして去っていった。

「今の方は？」

自分の前に回りこんだ声の主　京香が訊ねてくる。

「いや、別に」

「そういう表情じゃないようだけど？」

冷静に答えたつもりでも、幼い頃から一緒にいる京香に、心の中の動揺までは隠せない。

「おみつ、いたか？」

「いいえ。とりあえず、新さんの妹ってことは伏せて先生にも捜ししてくれるようお願いしてきましたけれど」

話をそらした自分に何かを言いたげな表情を浮かべてはいるが、京香は小さく首を振る。

「それより新さん。今夜、また『おとり』をやるそうですけど。やめときます？」

今度は京香が訊ねてきた。自分が何も言いたくないのを察してか、話題を変えてくれている。

「そういうわけにはいかねえよ。これはあくまでも俺個人の問題だ。お役目には関係ないさ」

新吉は、心の中で京香に感謝をしながらわざと明るく答えた。幼い頃から公私混同はご法度と叩き込まれているから、おみつとのことは別にできる自信はある。

しかし、父の言葉は、知らず知らずのうちに新吉の心に刃となって突き刺さっていた。

それが、彼の判断を微妙に狂わせてしまうことを、新吉はまだ知るよしもなかった。

月すらも出ていない暗闇に、犬の遠吠えがひびく。

日ごとに冷たくなる秋風が、新吉の体の表面を吹き抜けていく。

結局今日は、おみつを見つけられなかった。軍太夫が最後に言った言葉が、新吉の耳に残って離れない。

『三日以内に紀州に帰せ。さもなくば』

……その先は。

新吉は大きくかぶりを振った。

（そんなことはさせねえ。絶対に）

その時、新吉のはるか前方で灯りがともった。

昨日同様、天膳が店から出てきたときのものだ。

さつき源三と打ち合わせた時、天膳が参加することをあまり快くは思っていないように、新吉は感じた。

当然だ。

奴は、共に修行を積んだ京香ですらかなわないであろう殺気を放っていたのが、新吉のいた場所からもわかったのだから。

今度しくじれば、ここにいて誰かが確実に殺される。

こう思うのは失礼なのは重々承知だが、天膳の存在が足手まといにならぬように祈るしかない。

天膳に乗せた駕籠の在処を示す灯りが、ゆっくりと遠ざかって行く。

新吉は深い呼吸を一度だけ行い、後を追い始めた。

第一章 一日目・冷汗・

駕籠の前で揺れる提灯の灯りが、武家屋敷街へ続く小道を曲がった。

昨夜とは違う経路。

いつ何があってもいいように、南町奉行所に向かっている。

下手人がうまく網にかかった際を考えて、役宅には同心・岡っ引きが待機している。

その灯りを追っている新吉の耳に規則正しく聞こえてきた犬の鳴き声が、ぴたりと止んだ。

それと同時に、辺りの木の葉が不自然にざわめき始める。

(……！)

昨夜の辻斬りとは違う何者かが、両方向から新吉と併走している。

昨日の辻斬りの仲間だろうか？

だとしたら、ここで足止めをしておかなければ、奴が現れたときに乱戦になりかねない。

天膳の乗る駕籠のそばには芸者のいでたちをした京香が、そして番頭に扮した源三もいる。

(多少離れても……大丈夫か？)

新吉は、刃を仕込んだ十手に手をかけた。

立ち止まり、前を行く駕籠との距離を取る。

胸元の棒手裏剣に手をかけると、左右の堀の上を走る影へ投げつけた。

重いものを投げたような音と、手裏剣が瓦に当たったような乾いた音が同時に耳に入る。

とりあえず新吉の前に転がってきた一人目の忍びの胸に、刃を出した十手を突き立てる。

相手がこと切れたのを見届け、十手を引き抜いた。

もう一人の行方を捜そうと立ち上がり駆け出すが、まるで気配を

感じられない。

（逃がしたか）

仕留めることができなかった悔しさに舌打ちをした新吉の真正面に、忍び装束をした一人の男が立っていた。

（いつの間に……）

新吉の背中に、冷たいものが流れ落ちる。

「公儀筆頭御庭番、林軍太夫殿の三子、新吉殿ですね？」

長く生きてきた年輪を感じさせるが、抑揚のない、静かな声。

「人の名前を訊ねるときは、まず自分から名乗るのが筋つてもんだろ」

湧き上がる恐怖を無理やり飲み込み、新吉は吐き捨てた。

「一つだけ、忠告いたします。即刻、この事件から手をお引き下さい。さもなくば、あなたの妹が悲しむことになりますよ」

「な……！」

おみつのことを暗に提示された新吉の頭に、血が上った。

「誰だ！ てめえは」

素性ばかりか、自分ら家族と京香しか知らないおみつの存在を知っている。

熱くなっている心と裏腹に、背中からまた、どっと冷たい汗が噴き出した。

十手を再度握りしめた新吉の目の前に、突然煙幕が張られる。

「待ちやがれ！ ……っ」

辺り一帯にむせ返るじゃ香の香りが、新吉の全身の力を急速に奪っていく。

暗闇に落ちていく意識の中で、一瞬、悲しげな表情を浮かべたおみつの姿が浮かんだ。

「……さん」「新吉」

聞き慣れた声が、すぐ近くで自分を呼んでいる。

鼻をくすぐる、かぎ慣れた甘い香り。月明かりが、薄く開いた目に飛び込んでくる。

「しっかりおしよ！ 新さん」

「姐さん。……先生」

自分を心配そうにのぞく源三と京香が、安堵したようなため息をついた。

「いったい、何があつたんだ？」

「昨日の辻斬りの仲間らしい忍びとやりあつてな。ちょっと……、油断しちゃった」

よほど深くじゃ香を吸ったのか、のどがやけつくように痛み、声がかすれる。

「仲間？」

「一体なぜ、新さんを？」

「わからねえ。そっちは？」

「連中、今日は現れなかつたんだ。昨日の今日じゃ、同じ作戦をしても駄目だな、やっぱり」

「そうか……」

二人にうなずいて起き上がろうとするが、身体がしびれて力が入らない。

「おっと」

前のめりになった新吉の身体を、源三がしっかり支えた。

「京香、すまないが持ってくれ」

かすむ目の端に、源三が京香に提灯を渡している姿が入った。

次の瞬間、新吉の身体が宙に浮く。

「ちよ、先生。俺は……男におぶられる趣味は」

「こんな時に冗談言うな。力が入らないくせに。まったく……そろっ

て……」

「……え？」

源三が何かを言ったようだが、その意図を読み取ることは、今の新吉にはできなかった。

京香が何やら、源三に対して怪訝な顔を見せてはいるけれど、その思考すらも、急速に襲ってきた眠気にさえぎられる。

（何て、言っただろう……）

京香と源三のやりとりを遠くに聞きながら、新吉は思いをめぐらせる。

そして、あの忍びはなぜ、おみつのことを知っていたのだろうか？
おみつが悲しむと言った意図は？

しかし答えが出ないまま、新吉は、源三の背中に揺られるまま、深い眠りに落ちていった。

第二章 二日目・それぞれの朝・其の一

遠くで鳴くにわたりの声で、京香は目を開けた。

「あら、こんなところで寝ちまつたんだわ」

傍らで眠り続ける新吉を起こさないよう、そつと立ち上がり、部屋を出る。

彼が眠っている隣の部屋を開けるけれど、おみつが帰ってきた形跡はない。

彼女はなぜ、突然兄の前から姿を消したのか？

そして、新吉はどうして、執拗なまでにおみつを閉じ込め、捜しているのだろうか？

「……そういえば」

昨日の朝、自分が源三の家から帰る際、町で新吉に話しかけていた人物がいた。

薬屋を装ってはいたけれど、あのたたずまいからして、忍び。それも、公儀御庭番と見て、まず間違いはないだろう。

あのときの新吉はまるで、何かにおびえたような青白い顔をしていた……。

そして、もうひとつ。

昨晚、新吉をおぶったときに源三が言ったひとこと。

『きょうだいそろつて、強情なんだから』

きょうだい、と確かに源三は言った。

新吉に二人の兄がいることは承知しているが、京香はおるか、源三もその姿を見たことはないはずだ。

新吉は眠ってしまい気づかないようだったが、どう考えても、あ後の源三の様子はおかしかった。

「……何か、ありそうね」

京香はつぶやく。このまますぐにも源三の家に赴きたいところだが、眠っている新吉を、このままほおっておくわけにもいかない。とりあえず朝ご飯を作るために、京香は足音を立てずに下へと下りて行った。

「兄さんが？」

驚いたようなおみつの表情を見て、源三はうなずいた。

「たいしたことはないと思うが、いかんせん、眠り薬をかなり深く吸い込んでいるようだな。今、京香がついていてくれるよ」

「どうして……」

「ご飯を食べる手を止めたおみつが、一点をじっと見つめたままつぶやいた。

「岡つ引として下手人を捕らえようとやっきになったのだろう。命が助かっただけでも、よしとしなければな」

おみつが焼いてくれたいわしを頭からほおばり、ご飯をかきこみながら、源三は答える。

「これがまた、意外とおいしい。

紀州の山奥で天真爛漫に育ったおみつだけに、料理はできないはず、とたかをくくっていたのだが、家事一般を大方こなすようで、部屋はきれいになっていたし、洗濯物もきちんとたたんだのである。

「あたし……。兄さんのこと、何にも知らないんだね」

「十年ぶりに会ったばかりだ。知らなくて当然だろう。……どうする？ 家に帰るか？」

「それは」

おみつが言葉をつまらせた。

「もし、おみつが素直に帰るのなら、俺が兄さんに口添えをしてや

つてもいいぞ。紀州に帰るのは、菊池殿を見つけたあとだって構わないだろうからな」

「本当？ 先生」

暗かったおみつの表情が、一気に明るくなる。

「ああ。ちゃんと話し合つて誤解を解いたほうが、お前たち兄妹のためにも一番いいだろう」

「先生。ありがとう」

おみつの無邪気な笑顔に、源三の顔にも思わず笑みがこぼれた。

お粥の炊けたいいにおいが、新吉の鼻をくすぐった。

そつと目を開けると、明かりが差す障子の向こうで、小さな女性の影が動くのが見えた。

「あら新さん、起きたの？」

小さな土鍋をお盆に乗せて、京香が顔をのぞかせる。

今日もいい天気のようにだ。直接入ってくる朝日が、目にまぶしい。「悪いな。すっかり面倒かけちまって」

傍らにたたんであつた薄い半纏を羽織り、新吉は起き上がる。

まだ軽いめまいはあるものの、身体のだるさや頭痛はもう取れたようだ。

「何言つてんの。みずくさいわね」

「姐さん、風邪引いたのか？」

少し鼻にかかった声になっている。

「ちよつとね。そこで寝てしまったものだから。すぐ治るわよ」

「すまない」

気にすることないわよ、と笑つて、京香がお粥をよそつた茶碗を差し出した。

「食わせてはくれないの？」

「そんなこと言う元気があるんだったら、自分で食べなさい」
「ひでえな」

そう言いながら、一口、また一口とお粥を口にする。
塩加減がちょうどいい。

「ねえ、新さん」

しばらく黙っていた京香が、ふいに名を呼んできた。

「ん？」

「昨日の薬屋、新さんの知り合いなんでしょう？」

口に入れようとした最後の一口が、れんげからこぼれ落ちる。

「……何で、そう思うんだ？」

いつになく低い声が、自分の口から出た。京香を見る目が険しくなるのが、はつきりとわかる。

しかし京香はそれにひるむ様子もなく、ただ、まっすぐに新吉を見ていた。

第二章 二日目・それぞれの朝・其の二・（前書き）

【用語説明】

・縫物職……衣服に様々な色の糸を使って刺繍をほどこす者のこと。

第二章 二日目・それぞれの朝・其の二・

どれほどの時が過ぎたのか。

新吉と京香はまだ、何も言わずに互いを見やっていた。

「何とか言ったらどうなんだよ」

いたたまれなくなり、先に目をそらしたのは、新吉だった。

「それはこっちの台詞。新さんこそ、私たちに何か隠してるんじゃないの？」

痛いところをつかれ、一瞬、京香の胸元に視線をやる。

「いくら辻斬りの仲間に襲われたからって、あんなところで大の字になって寝てる新さんを見たら、何かがあったことくらい、察しがつくわよ」

……京香の言うとおりだ。

いつもの自分ならば、煙幕を張られる前にそれを察知し、何らかの防御はしたはず。

なのにそれをせず、やすやすと倒れてしまったのは、あの男におみつのことを言われて頭に血が上ったからにほかならない。

「眠り薬を吸わされただけだったからまだよかったものの、あそこで命を落としたら、だれが一番悲しむと思ってるのさ」

「……悪い」

「謝る相手が違うでしょう」

震える声でぶっきらぼうに言うと、京香は袖口で涙をぬぐい、改めてこっちを見た。

「答えてもらうわよ。あんたと、あの薬屋にどういった関わりがあるのかを」

京香の目が、再び新吉を見た。

もう、隠し通せない　新吉は、覚悟を決めて京香に向き直った。

外へ出ると、晩秋の空に高く昇った太陽が、おみつを照らした。大きく吐き出した息はすでに白く、江戸の町に冬が近いことを教えてくれる。

「さ、行くぞ」

中から棒をつっかけ、家の戸締まりをした源三がおみつに声をかけてきた。

「うん」

歩き出した源三に小走りで追いつき、小さくため息をつく。

「何か心配ごとか？」

「うん……。兄さん、怒ってるだろうなって」

「そりや当然だ。黙って家を出て、外泊したんだから。張り飛ばされるだけじゃすまないかもな」

「そんな」

「大丈夫だ。俺はあいつの弱みを握っているからな。うまく言うておくよ」

心底困ったおみつの頭にそつと手を添えて、源三が小さく笑った。そこへ。

「あら、先生」

小ぎれいな格好をした女性が、大きな風呂敷包みを持って声をかけてくる。

年の頃は三十過ぎだろうか。少ししわがめだつが、目の大きい、きれいな人だ。

「お小夜さん。また仕事か」

「ええ。注文がひっきりなしなもので。……そちらは？」

「ちよつと事情があつて預かっている、おみつって子だ。こちらは縫物職のお小夜さん」

「よろしく願います」

おみつは小さく頭を下げた。しかし、お小夜はそれに答えずに、ただじっとおみつの顔を見つめている。

「お小夜さん？ どうした？」

「え？ …… ああ、ごめんなさい。ちょっと知り合いのお嬢さんに似ていたものだから」

源三に向けて笑みを浮かべてはいるが、目が笑っていない。

「じゃ、急ぎますから。おみつさん、また」

「…… はい」

軽く会釈をして去っていくお小夜の後ろ姿から、おみつはなぜか目が離せなかった。

「…… 三日以内に紀州に帰さなければ、殺す？」

新吉から告げられた事実が、京香の胸を突き刺した。

「はつきり言ったわけじゃねえがな。多分、そういうことだろうよ」
胸の前で手を組んで、新吉が大きく息を吐いた。

「どうして、林様がおみつさんを殺さなければならぬのよ。いくら妾の子だからって、林様にとつて、おみつさんは実の娘じゃない」
身体の奥から、怒りがこみ上げてくる。

保身のためか何なのかは知らないが、存在自体をなかったことにしたあげく、江戸へ出てきたからって殺すだなんて、冗談じゃない。
「ねえ。おみつさんの母親って、どんな人なの？ 身分は？」

母親の素性に疑問を持った京香の問いに、新吉は、皆目見当がつかないと言った表情で小さく首を振る。

「あいつを親父から紹介されたときに、母親は死んだって聞かされた。身分も知らねえ」

「そう。…… でも、本当に亡くなったかどうかは、まだわからない

のよね」

「何、考えてる？」

暗くよどんでいた新吉の目が、京香の言葉に反応して輝いた。

「早くおみつさんを捜し出して、母親のことを詳しく聞くのよ。どうして、彼女の存在が林家から抹殺されなきゃならなかったのか。それを盾に林様に詰め寄れば、どうにかなるかも知れないわ」

「そんな簡単に言うなよ。相手は公儀筆頭御庭番だぜ。だいたい、俺たちにはやらなきゃならないことがあるじゃねえか」

弱気な台詞を口走った新吉に、京香は思わずむっとした。

「あ、そ。じゃあ、おみつさんがこのまま殺されてもいいって言うのね？」

「そんなこと、だれも言っていないじゃねえか」

「決まりね。私、おみつさん捜しに行つて来るわ。先生が来たらお願いね」

立ち上がつて部屋を出たのと同時に、階下の扉が開く音が聞こえた。

「あら。先生」

「新吉は寝てるのか？」

店の内側にかけてあるのれんをくぐつて、源三が訊ねてくる。

「いえ。起きてますけど……。何か？」

「新吉の捜し物を届けに来たんだがな。おい」

振り返り、身体をずらした源三の後ろには。

「……おみつさん」

昨日と全く違う装いをしたおみつが、うつむいたまま立っていた。

第二章 二日目・再会・兄と妹・

「どうしたんだ？ 姐さん」

上から、新吉の声が降ってきた。

「新さん、ちよつと」

再度二階に上がり、新吉が着ている青い半纏の袖口を引いて下へ降りる。

「……おみつ」

一階に下り、おみつの姿を見た新吉の声が、また低くなった。かと思つと、京香の手を振り払い、まっすぐおみつの方へ歩いて行く。

「新さん！？」

京香や源三が止める間もなく、新吉の手がおみつの頬を強く打つた。

その反動で、おみつの身体が玄關脇に飛んでいく。

「新さん！ 何もいきなり殴ることはないじゃないの」

「姐さんは黙ってる。おい、おみつ。一体、どれだけ人に心配かけりや気が済むんだ！」

「……………」

「何とか言ったらどうなんだ？ え？」

「訳も聞かずにいきなり殴られたんじゃ、言いたいことも言えないだろう。なあ、おみつ」

倒れたままのおみつに、源三が助け船を出す。

「新吉。お前が妹を心配する気持ちはわからんわけではないが、まず、おみつが江戸に出てきた理由を聞いてやるのが先だったんじゃないのか」

「おみつさんが新さんの妹だったこと、知ってらしたんですか？ 先生」

立ち上がったおみつが着ている桃色の小袖についた土ぼこりを払

ってやりながら、京香は訊ねる。

「ああ。昨日の朝、本人から聞いた。林殿の娘だということもな」
「それじゃ」

昨日、昼近くに訪ねて行った際、すでにおみつと会っていたということがある。

「すまない。内緒にしていた欲しそうだったからな」

京香の視線に気づいたのか、源三が申し訳なさそうに小さく頭を下げる。

「……あきれた。で、おみつさん。どうしてあなた、江戸に出てきたの？」

おみつに背を向けたまま動かない新吉に代わって、京香は問いかける。

「……人を、搜してるの」

「人を？」

「うん。私のおじいちゃん。名前は、菊池小太郎って言うの」

「菊池小太郎？ それがじいちゃんの名前か」

黙ったままだった新吉が、おみつのほうを振り返った。まだ少し顔色が悪い。

「お母さんは亡くなったって聞いたけど、その時のこと、覚えてない？」

「こいつが俺達のところに来たのが一歳半で、やっと歩き始めたばかりだったからな」

首を小さく振ったおみつのすぐあとに、新吉が答えた。

「ねえおみつさん。菊池殿はどんな人？ 紀州では、どんなお役目に就いていたの？」

「どうした？ 京香。やけにいろいろ訊いてくるじゃないか」

京香の様子に不審を持ったのか、源三が問うてくる。

京香は言葉に詰まった。殺されてしまうかもしれない本人を目の前にして、本当の理由が言えるわけがないではないか。

「先生、ちょっといいです？ 姐さん、おみつのこと頼むわ」

「新さん」

京香は驚いて新吉を見る。

京香を見返した彼の目には、ある種の決意があるのか、さっきとは違って変わった力強い輝きがあった。

「いいだろう。俺も、おまえに訊きたいことがあるからな」

うなずいて、新吉は階段を上っていった。源三もそれに続く。

二人の後ろ姿を、頬を真っ赤に腫らしたおみつが不安そうに見つめている。

源三の『訊きたいこと』は京香にもだいたい察しはついている。

そして、その答えも。

その答えを源三が知ったとき、彼は、この兄妹をどうするつもりなのか。

京香も少し、不安だった。

「……そうか」

自分が思っていた以上の答えを突きつけられ、源三はそのまま押し黙った。

「あいつのこと、黙っていてすみません。もし、清水様に報告する必要があるなら、して下さっても構いません。でも……」

流れる沈黙。

新吉が言いたいことはなんとなくわかっている。

林家では禁忌とされているはずのおみつの存在。

もし、それが天膳や忠直よりも上、つまり將軍や幕閣に知れたら、御庭番筆頭としての軍太夫の地位が危なくなる。

新吉は、それを心配しているのだろう。

どうすればいい。

おみつの存在を知ってしまった以上、自分の上司でもある父や兄に報告しなければならないのは、わかっている。

しかし……。

源三も知りたかった。軍太夫が江戸に出てきたおみつを殺す、と言ったその理由を。

彼女が江戸にいられる猶予はあと二日。

その間におみつを助けて小太郎を見つけ出すことができれば、彼を江戸へ連れ出し、京香たちに襲いかかった、頬に火傷の跡がある浪人との関わりを聞きだせるかも知れない。

「親父達には言わん」

「先生……いいんですか？」

驚いた様子で顔を上げた新吉に、源三はうなずいた。

「ただし、これはおみつにもお前にも、辛い仕事になるかもしれない。それでもいいか？」

「おみつも……ですか？」

源三はうなずいた。兄である新吉には、小太郎と浪人のことを話しておいたほうがいいだろう。

「実はな」

そう、口を開いたそのとき。

階下で大きな物音がするのを、源三は聞いた。

第二章 二日目・緊張・（前書き）

【用語説明】

・示現流……慶長五年（一六〇〇年）頃、薩摩の東郷重位しげたかによって創始された流派。
攻撃を主体とし、一撃で相手を倒すのが特長。

・満……示現流の構えの一つ。右ひじを大きく張り、剣を握った左の拳が右頬近くに来る構え。

第二章 二日目・緊張・

階下で聞こえた物音に、源三はもちろん新吉の表情にも緊張が走った。

傍らに置いておいた長刀を手に取り、源三は立ち上がる。

「新吉、おまえは無理をするな」

そう言い残し、源三は階段を駆け降りる。

その先に見えたのは、おみつをかばい、粗末な着物を身にまとった浪人らしき男の剣を短刀で受け止める京香の姿だった。

「京香！ おみつ！」

叫んだ源三は刀を抜き峰を返すと、その浪人の肩を打ち据えた。複数いる浪人と京香の間に割って入り、再度刀を返す。

示現流の「満」の構えを取り、呼吸を整える。

間合いを詰め、上体を沈めてきた別の浪人の肩口に渾身の一撃を繰り出した。

「ぐえっ！」

血しぶきとともに、男の身体がゆつくりと地に落ちていく。

「くそ！ ひけ！」

肩口を抑えた浪人を抱えた男の声で、残りの浪人が蜘蛛の子を散らすように店から出て行く。

京香が源三にうなずき、その者たちの後を追った。

「おみつ、怪我はないか？」

おみつは無言のままうなずいた。視線は、息絶えて横たわる浪人の方へ向いている。

「先生」

新吉が降りてきた。おみつが無事な様子を見て、安堵の表情を浮かべる。

「この男、番屋へ届けなければならんな。新吉、動けるか？」

「それくらいのことならできますよ。おみつ、ここで静かにしてる

んだぞ」

再度うなずいたおみつに軽く手を上げて、半纏を羽織り直した新吉が店を出て行く。

見たこともない連中だった。

こいつらは、一体誰を狙ってここへ来たのか？

辻斬りを阻止せんと動く俺達か。それとも、小太郎を捜しに出てきたおみつか。

可能性は五分。しかし、源三には、奴らがおみつを狙って現れたとしか思えなかった。

だとしたら、その理由は？

「先生。どうしたの？」

源三の視線に気づいたのか、おみつが、不安そうな面持ちで訊ねてくる。

「いや。俺と京香が、そなたの腕を新吉に披露する邪魔をしたと思っただけな」

「何言ってるんですか。もう」

源三の肩を軽く叩くおみつの顔に、かすかだが、笑みが浮かんだ。

方々に散った浪人の一人を追いかけて、京香は大川橋を渡り、浅草へと入った。

人がごった返す雷門を抜けると、その先は東本願寺を中心に多数の寺社が立ち並んでいる。

男は辺りを伺いながらも、まっすぐに目的地へ向かっているようだ。

東本願寺の手前の路地を左に曲がる。男はそのまま、ある武家屋敷の中へ入っていった。

「堀田山城守様のお屋敷だわ」

確か、京香の師匠、春香の馴染み客で、自身も二、三度お座敷に呼ばれたことがある。

それに忠直と同じ老中職で、次期筆頭老中と噂のある、切れ者で有名な男だ。

そんな堀田がなぜ、自分らを狙った浪人と関わりがあるのだろうか。

源三に報告しようと踵を返し、京香は歩き始めた。

すると、背の低い、灰色の着物を着た老人が、何だか頼りない足取りでこちらに歩いてくるのが見える。

「大丈夫ですか？」

目の前でよろけた老人を、抱き起こす。

そんな京香に、齢六十過ぎの男が突然、耳打ちをしてきた。

「これ以上、深入りするのは辞めなされ。じゃないと、そなたの命も危ないですぞ」

京香は思わず、老人を見た。静かな殺気をたたえたその目が、京香の心をざわめかせる。

「……あんだ、何者だい？」

「余計な詮索はせぬことです」

老人が言い終わらぬうちに京香は胸元から短剣を取り出し、刃を向けた。

「お嬢さん、あんたも腕は立つようだが、まだまだわしにはかありませんまい。おとなしく刀をしまったほうが賢明ですぞ」

……悔しいが、この男の言うとおりだ。

これ以上戦う意志を見せれば、即座に命を落とすのは目に見えている。

ひざを立てたまま動けない京香を、老人は横目で見た。

そして後ろで手を組み、さつきとは違う悠然とした足取りで歩き出すと、そのまま路地を曲がって行く。

しわだらけの小さな顔に、細く優しげな目。なのに、その男がか

もし出す空気は、他人の詮索を全く寄せつけないほど強固で、鋭い。
あの老人、一体何者なのだろうか？ なぜ、私がこの事件に関わ
っていることを知っている？

京香の心に、底知れぬ恐怖がわき上がる。老人の曲がって行つた
方向を見たまま、しばらくの間その場から離れることができなかった。
た。

第二章 二日目・いとこ同士・其の一・

「堀田山城守様の？」

源三の問いに、京香はうなずいた。今日もお座敷がかかっているのか、黒地に蝶の刺繍をあしらったいつもの着物に身を包んでいる。「ええ。迷いもせずに入って行きましたよ」

京香が、新吉の入れたお茶を飲み干した。どこことなく表情にかけりがあるように見えるのは、源三の気のせいだろうか。

「それと、変な老人に会いましたね」

「老人？」

新吉の目が京香に向く。

「この事件から手を引かないと、命を落としますよ、ですって」

京香が、言葉尻にとげを含ませる。どうやら、相当頭に来ているらしい。

「どんな奴だ？ その老人」

「背は私ぐらいで、優しそうな細い目をしているんだけど、何だか薄気味悪い感じだったわね」

「……そいつだ」

新吉が、遠い目をしてつぶやく。

「じゃあ、私が出たあの老人は、新さんを襲った奴と同一人物」
「間違いない。俺を脅すだけじゃなくて、姐さんまで……許せねえな」

目の前の新吉はそう言うと、嫌悪感を露わにして杯をあおった。

「私も一杯頂こうかしら。先生、注いで下さる？」

隣にいる京香も杯を差し出す。

「おい、京香」

「こんな気分じゃ、お座敷、務まりませんからね」

「今夜のお座敷、誰かに代わってもらうわけには行かないのか？
姐さん」

「そうしたいところなんですけど、お客様がねえ……」

京香が源三を横目で見た。

「春香と一緒に」

昨日、源三を通して春香に釘を刺されたのを受けて、早速天膳が心配したものらしい。

「場所はまだ『浮雲』かい」

「ええ」

「……ご愁傷様」

意味を察したのか、新吉が笑いをこらえ、京香に向かって合掌する。

「先生。早く」

京香が少し口をすばませて、再度杯を差し出した。

今新吉が飲んでいるのは、酒に強くない彼自身が水で二倍に薄めたもので、飲み慣れている京香なら、決して酔うことはない。

しかし普段の彼女なら、どんなに自分らが進めても、お座敷に出る前は決して酒を口にしないのに。

「まったく、しょうがないな」

差し出された杯に酒を注ぐとして源三は気づいた。

ほんのわずかに、だが、京香の手が震えている。

「どうも」

少し頭を下げた京香は、それを一気に飲み干した。

「さ、そろそろ行こうかしら。じゃ、新さん。お大事にね」

ほんの少しだけ笑みを浮かべ、京香は提灯を片手に店を出て行く。

「……相当荒れてるな。姐さん」

新吉は、京香の態度を額面どおりに受け取ったようだが、あの怒りはきつと、その老人に対峙できなかった、自分自身に対するもの。そして。

「あれ？ 先生。どちらへ」

立ち上がった源三を、新吉が見上げた。

「忘れ物を届けに行つて来る。一人で大丈夫か？」

机の脇にあつた自身の傘を掲げる。灯りを最小限にしてあるため、新吉は気づいていないようだ。

「なあに、いざとなつたら上で寝てるおみつを叩き起こして盾にしますよ」

二階を指差して、新吉が笑つた。まだ戌の刻（午後八時）を少し過ぎた頃だが、いろいろあつて疲れたのか、おみつはすでに夢の中だ。

「じゃ、すぐに戻るからよろしく頼む」

そう言い残すと、源三は右手に傘を抱え、提灯に火を灯して表に出た。

辺りに吹く木枯しが、源三の身体をなめていく。

月もない暗がりの中で、京香は今何を思ふのか。

決して弱音を吐くことのない従姉妹を追い、源三は足を速めた。

第二章 二日目・いとこ同士・其の二・

暗闇に、犬の鳴き声が響いた。

京香は思わず立ち止まり、辺りを確認する。

昼間は数多くの人が往来し、賑わう両国の通りも、今はほとんどの店が木戸を閉め、静まり返っている。京香以外の人間が歩いている気配は、今のところ感じない。

まだ、おびえているのか。

昼間会った老人が最後に見せた、あの雰囲気。

（違う。私はおびえてなんかいない）

小さく首を振るが、提灯を持つ手がかすかに震えているのを、抑えることができない。

目を閉じ、あの老人の顔を思い浮かべた京香の背に、冷たいしずくが流れ落ちる。

あの時感じた恐怖は、普段、自らに危機が迫ったときに感じる、冷や水をかけられるような直載的なものではなく、気づけば心に染みってくる、静かで、不気味なもの。

自分の力をひけらかすわけではない。かと言って、京香に対する殺気を隠すことなく、まるで赤子を諭すように忠告してきたあの老人は、一体何者なのか？

『座敷にあがる前には、酒を口にしない』 自ら課した禁を破つても恐怖心を消せない、未熟な自分に腹が立って仕方がない。

「ばかばかしい」

いつの間にか立ち止まり、自分自身を抱きしめていた京香は自嘲気味につぶやくと、歩き始めた。

『浮雲』まではまだかなり距離がある。急がなくては。

足を速めた京香の背後に、足音が迫ってきた。

辻斬りの顔を知っている自分は、いつ何時、襲われるかわからない。

京香はすぐさま、胸元に手を入れた。いつ襲撃されても対応できるように、歩く速度をゆるめ、息を吸う。

間合いを詰めてきた足音に耳を澄まし、短刀に手をかけたそのとき。

「京香」

後ろから聞こえた声が、京香の心身の緊張を解いていく。立ち止まった京香に向かって、提灯の灯りが近づいてきた。

「先生。どうしたんですか？」

声が震えないようにお腹に力を入れ、並んだ源三に問いかける。「浮雲までは遠いからな。送っていこう」

「ありがとうございます。でも、新さんは大丈夫なんですか？」

「新吉の身体はもう問題ない。それより、お前のほうが心配だな」

「……なにがです？」

心の動揺を押し隠して、再度問う。

「座敷前に酒を口にするなんて、京香らしくない。昼間の老人と何かあったのではないかと思ってな」

「別に。新さんの店で言った以上のことはありませんよ」

京香は源三を見ずに、再度足を速めた。これ以上、老人に関する話はしたくない。

「杯を持つ手が震えていても、か？」

源三が少し強い口調で、京香の背中に問いかけた。

（……やっぱり）

源三はすでに、見抜いていたのだ。京香の中に巢食っている、あの老人に対する恐怖心を。

足が止まった京香は、大きく肩を揺らして息を吐き出した。

「……嫌になっちゃう」

「京香？」

「先生は、何もかもお見通しなんだもの」
泣き出しそうな空を見上げ、つぶやく。

「当たり前だ。どれだけの時を共に過ごしていると思ってる」
思わず振り返った京香を、源三の真剣な眼差しが捉えた。

『いつから源三と共に過ごしてきたのか？』

そう問われても、京香ははっきりとした答えを出すことはできない。

気づいたときにはもう、源三は当たり前のようにそばにいた。

「京香」

ゆつくりと近づいた源三が、名を呼んだ。

「男も女も無いこのお役目を果たすために、お前がどれだけ努力しているのかは、俺が一番良く知っている。しかし、何かあったときは頼ってくれてもいいではないか」

京香の肩に置かれた源三の手のぬくもりと優しい言葉が、心の中に沁みてくる。

いつからだろう。

自分の本音 特に弱音を、出せなくなってしまったのは。

紀州にいた幼い頃は、痛い、悲しいといったは涙をこぼし、悔しいといえは源三が困惑するくらい怒り、楽しければ、時間が忘れるくらい笑っていたのに。

京香はふと、そのきっかけを作ったある出来事を思い出していた。

第二章 二日目・追憶・其の一・

いつから京香は弱音を吐けなくなったのか。

それは、自分の弱さが原因で、一人の少女を死に追いやったことに起因する。

そう、あれは……京香が十一歳の誕生日を迎えたばかりの春のことだった。

わけもわからぬまま両親と引き裂かれ、厳しい修行に身を投じる日々を送って早三年。

なぜ、自分は江戸に、しかも辺りに何も無い向島へ連れて来られなければならないのか。

どうして両親はそれを許し、便り一つよこさないのか。

その疑問を、修業に没頭し、常に源三の後を追いかけていくことで解消してきたつもりだけど、京香の心にたまったうつ積は、もう、限界に近かった。

現に、江戸へ連れて来られた十人の内、この三年間で脱走した仲間が二人いた。

けれど、その消息は知れない。

ここへ戻ってくることはおろか、紀州に帰ることができたのかもわからないのだ。

住んでいる森林地帯からの外出は禁止され、まるで檻の中に囚われた動物のように身を潜めていなければならないこの生活は、京香をはじめとした遊びたい盛りの子供達にとって、残酷以外の何者でもない。

『もうやだよ。おうちに帰りたいよ』

疲れ切った身体をひきずるようにして領地にある小屋へ帰ったとき、また一人泣き出した。

目が大きく、日に焼けた皮膚がいつも水ぶくれになるくらい色の白い少女、葵。

江戸に連れて来られた頃から、三つ年上の京香を「お姉ちゃん」と慕い、あとをいつもくっついて来る、妹のような存在の子だ。

『おいで、葵』

手招きすると、一目散に駆け寄ってきて、京香の胸で泣きじゃくる。

『うるさいな。さびしいのはみんな一緒なんだよ。なのによっても泣きやがって』

前髪をちょこんと結んだ同い年の康太が、葵に向かって叫ぶ。たしか彼は、紀伊和歌山藩大名留守居役の三男だ。

『しかたがないじゃないの。この子はまだ八歳なんだから』

『いつも言われてるじゃないか。お前達は、仲間であって仲間じゃないって。京香は優しすぎるんだよ』

仲間であって、仲間じゃない。

これも、京香には納得のいかないことだった。

厳しい時間のさなか、落ちこぼれそうになる子を助けると、容赦なく飛んでくる拳。

京香はもちろん、常に先頭を行く源三も、続く実力を持つ公儀筆頭御庭番の三男、新吉も同じ憂き目に何度もあった。

『そう言いなさんな。何かあったとき互いに助けられるのは、俺達しかないだろ』

古ぼけた壁によりかかって目を閉じていた新吉が、皮肉を込めて言った。

『何だよ。俺より年下のくせに、偉そうに』

康太は立ち上がると、まっすぐ新吉のところへ歩いていく。

『やるのか』

顔色一つ変えず、新吉も立ち上がる。

『やめなさいよ。二人とも』

抱いていた葵を座らせた京香が止める間もなく、康太が新吉の頬を殴りつけた。

新吉はすかさず反撃に出る。

日ごろ溜まっていた鬱憤が、このように出るのはしばしあることで誰も驚かないが、なまじ武術などを身につけて来ているので、あまり長引くと大怪我をしかねない。

力が自分と拮抗している新吉はともかく、康太ならまだ止められる。

そう思った京香が康太の背後にまわったそのとき。

『いい加減にしないか。二人とも』

新吉の背後から彼を羽交い絞めにしたのは、源三だった。

『こいつが先に仕掛けて来たんだ。売られたけんかは買わなきゃ気がすまねえ』

『どっちが先に仕掛けたとかは関係ない。四つに組んでやりあったら、誰が大怪我をするか、わからぬお主ではあるまい？』

新吉に向けた源三の言葉の意図を、京香はすぐに読みとった。

康太も腕を上げては来ているが、まだ新吉にはかなわない。

本気を出したらどちらが怪我をするかは、明白だった。

それを悟ったのか、康太は二人に背を向けると、そのまま走り去る。

『康太！』

源三が後を追った。唇の端から流れ落ちる血を乱暴にぬぐうと、新吉は仏頂面をしてさっきの位置に音を立てて座り込み、目を閉じた。

この新吉も、わからぬ少年だ。普段は何を考えているか全く読めないのに、葵のような小さい女の子が泣かされたりすると、途端に相手に牙を向く。

気まずい雰囲気がただよう室内に、葵の泣き声がまた、ひときわ

大きくひびく。

ここにいるのは子供ばかり。ささいな小競り合いは日常茶飯事だ。しかし今日の出来事が、京香の心に多大な影響を及ぼすきっかけになるうとは、京香自身、まだ気づいてはいなかった。

第二章 二日目・追憶・其の二・

犬の遠吠えが、暗闇に溶けていく。

まどろみの中、隣で気配が動いたのに気づいた京香は、そつと目を開けた。

『どうしたの？ 葵』

『おうちに帰る。帰りたい』

顔は見えない。しかし、震える声で、葵が泣いていることに気づく。

袖口にしがみつき、しゃくりあげた葵をそつと抱きしめて、京香は思う。

そもそも、自分達がこうして集められたのはなぜなのか、と。

父も、母も何も教えてくれないまま、江戸に連れて来られた。

何も聞かされないまま厳しい毎日に身を投じ、自分はもちろん、皆のうつ積は頂点に達しつつある。

このままでは……。いつか、この中の誰かが、仲間である誰かを手にかけてしまう。

京香は知りたかった。

ここに閉じこめられている、本当の理由を。

『お姉ちゃん？』

『行こう、葵。とりあえず……ここから逃げよう』

葵が大きくうなずいたのが、京香の手を握る力でわかった。

うつそうと生い茂る葉の音が、耳に障る。

京香は小さな葵の手をしっかりと握りしめ、月明かりを頼りに進む。

これまでずっと一緒にいた源三に別れを言えなかったのは残念だが、彼に知られたら止められると思ったから、会わずに来た。

『お姉ちゃん、痛い』

京香は立ち止まり、葵の足を見た。小さな枝や小石が刺さり、白い足に筋を作っている。

『ごめんね。気づかなくて』

京香は葵を背負って木の少ないところに移動し、平らな岩場に座らせた。

葵の足に刺さったものを抜く京香の心には、すでに焦りの二文字が横たわっている。

月が沈んでいく方角を頼りに進もうと考えたのだが、思った以上に茂った森を歩くうちに、方角がわからなくなったのだ。

自分ひとりなら、どんなことをしてでもこの森を抜けることが出来るのに。

ひとりなら、と。

湧き上がった感情を打ち消すように、京香は首を小さく振った。もともとは、葵のために危ない橋を渡り始めたのだ。いまさら、小さなこの子を置いていくわけにはいかない。

『お姉ちゃん、眠たい』

『もう少して、この森を抜けられるわ。町に出たらきつと、親切な人が助けてくれる。それまで頑張りましょう。ね』

自分の心を奮い立たせるために、大きな目をしょぼしょぼさせ始めた葵の肩を軽くゆする。

小さくうなずいた葵の手を引き、立ち上がるうとしたそのとき。辺りの葉が、不自然な音を立て始めた。

生臭い息を吐く音がせわしなく耳に入る。

月に反射した双眸が、距離を置いて京香たちを囲んでいるのかわかる。

おそらく、野生化した犬か狼。しかも、春を迎えたばかりのこの時期はえさも少なく、気が立っているはずだ。

葵の足の傷からだたよう血のにおいを嗅ぎつけて来たに違いない。京香は息をのんだ。ざっと見ただけで三匹から四匹はいる。

ひとつ間を間違えば、二人とも餌食になるのは火を見るより明らかだ。

また、京香の心に魔物がささやく。

「ひとりならば逃げられる。葵を置いていけ」

と。

しかし。

『お姉ちゃん』

自分を信じ、必死にすがりついてくる、小さな手。

（この子は……私が守らなきゃならない）

『葵。お姉ちゃんから離れてはだめよ』

音を立てないようにしゃがみ、足元の石で胸元に忍ばせていた煙玉すべてに火をつけると、地面に強く叩きつけた。

あたり一面に、煙が舞い上がる。

獣たちがひるんだ隙をつき、葵の手を強く握って走り出す。

追いかけてこないうちに、葵と二人で少しでも遠くへ逃げなければ。

京香はただ、前だけを見て森を駆け抜けた。

（遠くへ。あいつらが追いかけてこられないくらい、もっと遠くへ）
その思いが再び焦りに変わったとき、思いも寄らないことが二人に襲いかかった。

第二章 二日目・追憶・其の三・

遠くへ逃げたい。

葵の手を引き、走る京香の頭には、その考えしかなかった。

『あっ！』

握っていた葵の手が突然、離れた。

『葵？』

振り返ると、小さな身体がうつぶせになって倒れている。

引き上げて起こそうとするが、なぜか起きない。

それどころか、葵は火がついたように泣きじゃくる。

葵の足元に向かい、手を添える。突然の冷えた感触に、思わず京香は手を引いた。

これは。

葵の足をがちり掴んで離さないのは、たくさんの刃がついた、

鉄製の大きなはさみだった。

京香ははさみを両手で開き、葵の足を引きずり出そうとするが、一瞬でも力を抜くと、刃が再び彼女の肌に食い込んでしまう。

『いたい。お姉ちゃん』

葵の泣き声はだんだん大きくなるばかりで、京香は少しずつ苛立ちを覚えていた。

なぜ、こんな目に遭わなければならない？

親元に帰りたいだけなのに、なぜ、神様は私達の邪魔をするのだ？
そんな京香に、心の中で、魔物が断続的にささやきかける。

「逃げろ」と。

ここで葵にかまけていては、知りたかったことを知らずに命を落

とすぞ、と。

京香はその思いを断ち切ろうと、首を何度も横に振った。
ここで逃げたら、葵の命は露と消える。

『葵、もうすぐだからね。頑張るのよ』

自分に言い聞かせるように、葵に話しかける。

しかし。

『葵？』

泣き声は、いつの間にか聞こえなくなっていた。

『葵！ 眠っちゃ駄目！ 葵！！』

京香は葵の足元から移動すると、冷えた頬を必死に叩く。

『お姉ちゃん……、ねむいよ』

『葵、しっかりするのよ。今、助けてあげるから！』

思わず叫んだ。しかし、こんなとき、どうしたらいいのだ。

助けを呼べない。かと言って、この刃をはずす方法もわからない。

頬を叩く手は震え、双眸からは涙がこぼれ落ちる。

『お姉……ちゃん、さむい……』

京香に向かって差し出す小さな手を握りしめ、葵を抱きしめる。

『葵、お願いだから眠らないで。眠ったら死んでしまうのよ！』

京香は葵の耳元でささやいた。

最初こそはうなずいていた葵だが、その動きが少しずつ小さくな
っていく。

『葵、眠っちゃ駄目！』

あらん限りの力を込めて叫ぶが、葵からはもう、何の反応も返っ
ては来ない。

その瞬間、京香の首に回されていた手が外れ、腕に葵の全体重が
のしかかった。

『……………葵？』

力の抜けた葵の身体を離し、頬に手をやる。

まだ、ほんの少しだけ温かい。なのに。

『葵、起きて。葵！』

京香の声はもう、葵には届かない。

どうして？

葵はただ、足にけがをしただけ。なのになぜ、この世からいなくならなければならない？

両親に会いたい一心で、暗い夜道を、京香の手を頼りに歩いていた。

ただ、それだけなのに。

頬に落ちる涙をぬぐうことも忘れ、葵の亡骸を抱きしめる京香の身体を、風が吹き抜けた。

それに乗って、さつき追い払ったはずの奴らの臭いが京香の鼻をかすめる。

こんな暗いところに葵を置いてはいけない。

しかし、このままここにいたら、今度は自分が餌食になる。

涙を拭いた京香は、意を決して立ち上がった。

伝えなくてはならない。

まだ八歳の葵が、見知らぬところでどんなに頑張っていたのかを。そして、最期にどんなに両親に会いたがっていたのかを。

自分が紀州に帰り、伝えなくてはいけない。

『葵、ごめんね』

紀州へ帰る。葵の死と生涯を伝え、自分の疑問を解き明かす。

横たわる葵に背を向け、京香は走り出した。

近づいてくる獣たちから、まず身を隠さなくては。

そう思った矢先、京香の足元が突然その姿を消した。

一瞬だけ、宙に浮いた感覚が身体を捉える。そして。

京香の身体は、そのまま闇の中へと転がり落ちていった。

第二章 二日目・追憶・其の四・

暗闇にいた京香の意識を、降り注ぐ陽の光が引き戻した。
ゆつくりと目を開け、辺りを見回す。

木を寄せ集めて作ったような粗末な壁、何本かの木で格子状に作った小さな窓。

そして、雨が降ったら間違いなく漏れてくるであろう、穴だらけの天井。

『気がついたようだね』

低く、少し枯れた男性の声が、少し遠くに聞こえた。

『……ここ、は』

京香は寝たまま、声のした方向へ問うた。

『さあ。あの世でないことだけは確かじゃない』

少し揶揄を含んだ物言いだ、不思議と腹は立たなかった。

『ほれ、飲みなさい』

顔を上げた京香の目の前に現れたのは、白い髪を無造作に伸ばした、皺だらけの顔に柔和な笑みを浮かべた老人だった。

ゆつくりと起き上がり、差し出された茶碗を受け取ると、欠けた箇所口につけないようにしながら、白湯を少しずつ飲み干す。

『よく、生きておったな』

驚いた京香は、視線を老人のほうへ移した。

しかし薬を調合しているのか、老人はごりごりと音を立てて動かず手元から目を離さない。

『お前さんの前に逃げ出した幼子達は、野犬に食われるか崖下に落ちるかして、全員あの世へ行っておるというのに』

京香は思わず身構えた。

『……あなたは一体、何を知ってるの？』

発する声が、いつもより格段に低い。

『昨夜あったことは、忘れなさい。それがお前さんのためじゃ』

忘れる？ 葵のことを。

まだ小さな自分にすがりつき、親に会うことを夢見て逝ってしまった幼子のことを。

『それは……できません』

未だこちらを見ぬ老人を見つめて京香は言い切る。

『何故じゃ』

老人の声は、静かなままだ。

『自分の腕の中で消えた命を、あなたは忘れることができますか？』
『……』

『理由も聞かされずに連れてこられて、地獄のような日々を過ごして、両親に会えずに、命を落としたあの子のことを、私は忘れることなんてできません』

口に出した言葉が震える。鼻の奥が熱くなり、頬をいくすじも涙がこぼれ落ちる。

『忘れられないのは、一瞬だけ。あんたもじきに、その子のことを忘れる日が』

『忘れない！ 絶対に』

激情を吐き出すように、京香は叫んだ。

『紀州に帰って、あの子の両親に伝えるの。生きていた証を、伝えなきゃならないの！』

『それは許されん』

『どうして！？』

ようやく京香を見た老人の目が、怪しく光った。

背筋に、冷たいものが駆け抜ける。

ここを一步でも出ようとしたなら、自分の存在など露のように消されてしまいそうな、静かな殺気。

『命が惜しくば、迎えが来るまでおとなしくしてることじゃ』

老人が再び目をそむけたのと同時に、草をかきわけけるような音が京香の耳に届いた。

一瞬の沈黙。そして。

土と木のするる大きな音とともに、扉が開いた。

『京香！』

『……源三様』

おでこに無数の汗の玉を浮かべた源三は、京香の姿を確認すると心底安堵した様子で中へ入ってきた。

『あなたが、京香を救ってくれたのですか』

京香の隣で向き直った源三の顔を見る老人の表情は、最初に見た柔和な表情に戻っている。

『本当に、ありがとうございました。……あの、もう一人、幼い子がいたと思うのですが』

葵の安否を問った源三の言葉が、心に突き刺さる。

『あの』

『もう一人の幼子は、このお嬢さんのそばで息絶えておった』

老人の思いがけない言葉に、京香は思わず息をのんだ。

『遺体はいたみが激しかったのでな。勝手なことをして申し訳なかったが、この家の裏にある丘に埋葬させてもらったよ。真新しい石碑を建ててな』

どうして、そんな嘘を。

京香の視線に気づいた老人が目配せをしてきた。

口の端にのぼらせかけた言葉を、ぐっと飲み込む。

『……そうでしたか。本当に、何から何までありがとうございます。た』

手をつき、深くお辞儀をした源三を見ていられなくて、京香は目を伏せた。

『京香は連れて帰れますか？ 皆が、心配しておりますので』

『ああ。帰ったらこの薬を飲ませるとよい。傷につける膏薬と一緒に』

袋を受け取った源三に支えられ、京香は立ち上がる。

全身傷だらけの身体より、葵を救えなかった、そして、紀州に帰れない悔しさとやるせなさで、京香の心は激しく痛んでいた。

第二章 二日目・真の強さ

『ここだな』

歩きがぎこちない京香を支えながら山道を歩く源三が、真新しい墓石の前で立ち止まった。

申し訳ない気持ちでいっぱい京香は、目を向けることができない。

自分が、葵を止めていさえすれば。いや、葵を止められる強さを持つていたならば。

独りぼつちで土に還らずとも済んだろうに。

『……京香』

いつしか、はらはらと涙をこぼしている京香に気づいたのか、源三が、京香の手を強く握りしめる。

『葵が死んだのは京香のせいじゃない。だから、自分を責めるな』
源三の言葉に、ようやく救われる思いがした。けれど、葵を死なせてしまった自分の責は、どうあがいても消えるはずはない。

強くなりたい　今、京香の胸の中に初めて芽ばえた小さな炎。

ここで眠る葵のために今、京香に出来ることは、自分自身を高め、ここへ連れてこられた理由を自らの手で知ることだ。

そのためには、どんなささいなことからも、逃げてはいけ
ない。

そう決意した京香は涙を拭いて顔を上げると、新しい墓石をまっすぐ見据えた。

いつしか目を閉じ、封じ込めていた記憶に入り込んでいた京香の

頬に、雨粒が落ちる。

空を見上げた京香の視界に、源三が広げた傘の端が入ってきた。振り返ると、源三が何もかもをわかっていると言わんばかりの表情で見つめている。

あの日以来、京香に何かがあると一番に異変に気づき、必ず助けしてくれるのは源三だった。

今日も、自分が奥底にしまいこんだはずの感情を察知し、そばにいてくれる。

守られている。いつも。

ありがたいと思う反面、自分の弱さを見せつけられているような気がして、やりきれない。

「……情けない」

「京香？」

「先生にはいつも助けられてばかりで……情けないですよ。自分が」

『強くなりたい』

京香はあれから、葵を喪ったことを胸に秘め、ただその一心で厳しい訓練に耐えてきた。

それが実り、自分らが集められた目的 庶民のための御庭番として、上様のために働くことを知ったとき、もう二度と、葵のような犠牲者を出すまいと誓った。

しかし、その誓いが守られているとは言いがたい。

『もつと、自分が強ければ』 その思いが、常に心の中にある。

「俺は、京香を弱いと思ったことは一度もない」

「気休めはよしてくださいな」

源三が心の底から言ってくれたことくらい、わかっている。

しかし、今の京香にはそれを素直に受け止めることができない。
あの老人の底知れない強さに立ち向かえなかったことが原因で、
また、新たな犠牲者を出してしまうかもしれない。

そんな思いが今、京香の胸に染み渡っている。

「本当の強さとは、何だ？」

「……え？」

口調はいつもと変わらない。けれど。

「お前の思う真の強さとは、自分より強い相手に闇雲に立ち向かって行くことなのか？」

源三の視線が、こころなしか鋭く見える。

「真の、強さ……」

うなずいた源三の手が、京香の肩に優しく添えられる。

「相手の力量を察知し、自らを引く。それも『強さ』だ。決して逃げなんかではない」

まるで小さな子供を諭すような源三の言葉が、今度はゆっくりと心に満ちていく。

もし、あの老人に立ち向かって命を落としていたなら、自分は、そのことを草葉の陰で後悔することになったかもしれないのだ。

「そう……ですね」

不思議なほど素直に、京香はうなずいていた。

「第一、京香が目の前からいなくなってしまうては、俺が困る」
「え？」

真剣な源三の眼差しが、京香を見下ろした。

なぜか、いつもは聞こえない心臓の音が、京香の耳に届く。しかし。

「ご飯を作ってくれる人がいないと、俺は死んでしまうからな」
長年一緒にいる自分には、わかりきっていた言葉のはずなのに、
なぜ、胸が高鳴ってしまったのだろう。

「……まあ。そんなこと言う人には」

「ご飯を作ってあげませんよ、だろう？」

言い知れぬ感情を隠すように発したいつもの台詞を先回りされてしまい、京香は思わず、声を立てて笑った。

「さ、行こう。父上が首を長くして待っているぞ」

京香は、少しだけ肩をすくめてうなずいた。

源三と同じ傘の下で歩く、月の見えない夜。

京香は、自分が求めていた『強さ』の意味が少しだけ理解できたような気がして、また一步、踏み出せるような気がしていた。

しかし。

心を踏みにじるような事件がすぐそこまで来ていることを、今の京香は知る由もなかった。

第三章 三日月・秘めたる力・（前書き）

【用語解説】

- ・四半刻……今の時間に換算すると約30分。
- ・下っ引き……岡っ引きの子分のこと。

第三章 三日目・秘めたる力・

昨夜の雨とは打って変わった、雲一つない青空。

新吉の店からは歩いて四半刻ほどかかる源三の道場には、昇りたての朝日が、格子戸から降り注いでいる。

その中央で、紺の稽古着に身を包んだ京香が、肩で息をしていた。その表情は、古いつきあいの新吉ですらあまり見たことのない、緊迫したものだ。

一方で、彼女と対峙している妹のおみつは、多少息をはずませているものの、額に汗がにじんでいる程度で、どこかしら余裕を感じさせる。

(……こいつ)

新吉は、京香を凌ぐおみつの身の軽さに目を瞠った。

幼い頃は、二人の兄に『ぐず』『のろま』とののしられ、泣いてばかりいたおみつが、今、自分と同じくらいの実力を持つ京香と対等、いや、それ以上に渡りあっているのだから。

京香が息を大きく吐き出した。白い肌には玉のような汗がいくつも浮かんでいる。

正眼に構え、腰を落とした京香が目を閉じた。

おみつに翻弄され続け、動揺しているであろう心を閉じ、「無」になろうというのか。

京香のそのさまを見たおみつが、真っ正面から踏み込んだ。

「ばか！……」

新吉が二の句を告げる前に、おみつの剣が空を切った。

前のめりになり、膝をついたおみつが振り向いた瞬間。

京香が振り抜いた木刀が、おみつの眼前すれすれで止まった。

「それまで！」

白の着物に紺の袴をはいた源三の声が、場の緊張を解いた。すると。

「悔しいー！！」

座り込んだままのおみつが、口をとがらせた。

「お姐さん。もう一本！」

立ち上がったおみつは京香に向けて、人差し指をつきつける。

「待て、おみつ。今度は俺が相手をしてやろう」

まだ息が上がっている京香の様子を察したのか、源三が竹刀を持つておみつの前に立った。

「先生、負けないからね」

竹刀の先を軽く合わせて、おみつが源三に敢然と立ち向かっていく。だが、源三相手では、おみつも苦戦しているようだ。

源三は、まるで子供をあしらうように、おみつが逃げる先を見切り、軽く竹刀をあてがっていく。

「強いじゃないの。おみつさん」

いつしか隣に腰を下ろしていた京香が、源三らに視線を向けたままつぶやいた。

「完全に油断していたわ。もし、あの子がまっすぐに向かってこなければ、負けていたかもしれない」

京香の口から、小さく息が漏れたとき、ふと、新吉の脳裏に疑問がよぎる。

『なぜ、おみつは普通の少女として育てられなかったのか』と。

閉じ込めることばかりを考えていたため気にも留めていなかったのだが、たすき掛けをした白い着物の袖からのぞく腕は、厳しい修業に耐えた京香と同じような形をしており、おみつも、何らかの訓練を受けていたことは明らかだ。

「どうして、先生がおみつさんと手合わせをしろって言ったのか、わかった気がするわ」

「え？」

「新さんも手合わせしてみたら？　そうすればわかるかもしれないわよ」

言った意味がわからず問うた新吉に、含み笑いをしながら京香が返した。

その瞬間、源三のくり出した一手が、おみつの肩を強襲した。

おみつが倒れ込む大きな音が、道場内に響く。

「おみつ！」

心配した新吉が膝を立てる。しかし。

「痛いよ先生。手加減してくれたたっていいじゃないの」

肩を押さえて、おみつが立ち上がる。しかし、息は全くと言っていいほど乱れていない。肺の機能が相当鍛えられている証拠だ。

「そなたに手加減などしたら、こちらが寝首をかかれるからな」

「何で二人ともそんなに強いのか？　紀州じゃ私が一番だったのに」

「馬鹿。上には上がいるんだよ」

京香の脇から竹刀を取った新吉は、二人に歩み寄った。

「今度は俺が相手になろう」

新吉が竹刀を構える。すると、目の前に来たおみつが目を輝かせた。

「兄さんには負けないからね」

静かに対峙する。

構えはそれなりになっているものの、見た限り、竹刀の裁きかたはまだまだなつちやいない。

ならばなぜ、京香があそこまで追い込まれ、源三が本気を出したのか。

（紀州で培った実力、とくと拝見させてもらおう）

竹刀を軽く合わせる音。すずめの鳴き声。

それらが、おみつの胸元を見据える新吉の耳に入ってくる。

互いの剣先が力強くぶつかる。

先に踏み込んだのは、おみつだった。

真正面から来た彼女の切っ先を受け流し、右から竹刀を左に叩き込む。

しかし、おみつは身を翻ひるがえして新吉の剣をすつとかわした。

(……こいつ)

想像以上の速さだ。

「やるじゃねえか。おみつ」

「……兄さんこそ」

三人も相手にしているせいか、おみつの息が徐々にあがってくる。

新吉は構えなおすと、素早くおみつとの間合いを詰める。

一瞬、おみつの反応が遅れた。

(ここが、勝負！)

新吉が「満」の構えから斬り込もうとした、その時。

「兄い！ 兄いはいませんか！？」

騒がしい足音が、緊張を解いた。間に割って入った源三が、新吉の太刀を軽く受け流す。

「末吉さん、どうしたの？」

とんだ血相で飛び込んできた下っ引きの末吉に、京香が優しく声をかける。

「た、大変です。その河原に、死体が」

第三章 三日月・疑問と安堵・（前書き）

【用語説明】

・小銀杏……与力・同心の髷の結い方。額の広い月代と、小さく短い髷が特徴で「八丁堀風」とも呼ばれた。

第三章 三日月・疑問と安堵・

「死人？」

末吉のあわてたさまに、新吉はもちろん、源三も京香も緊張した様子で彼の言葉を待つ。

「へい。姐さんくらの背格好で、黒い着物を着てました。年の頃は六十前後じゃねえですかね」

京香が一瞬、こちらを見た。おそらく、考えていることは新吉と同じであろう。

「よし、案内しろ」

竹刀を源三に預け、腰の十手に手をかけた新吉は、再度京香と顔を見合わせうなずいた。そこへ。

「待つて兄さん。私も連れて行つて！」

おみつが前に立ちはだかる。事情を知らない末吉は、おみつを見て、目を白黒させている。

「お前はここにいろ」

「迷惑はかけないから、お願い！ その人……じいちゃんかもしれない」

「おじいさん？」

おみつに問う京香の顔に、戸惑いの色が浮かんでいる。自分だつて同じだ。自分らを脅しにかかったあの老人と、おみつの祖父が同一人物かもしれないとは。

「兄い。この子は？」

「田舎から出てきた、新さんの妹なの。ね、新さん。おみつさんにも来てもらいましょうよ。いいでしょう？ 先生」

京香の提案に、黙ったままの源三がうなずく。

「しかし先生」

「大丈夫だ。その代わり、おみつ、絶対に二人から離れてはいかんぞ」

「先生」

抗議しようとした新吉を、源三が目で制してきた。
承服しがたいが、源三が承知した以上、ここで言い争ってもらち
があかない。

「……わかった。姐さん、こいつ頼むわ」

「ありがとう、兄さん」

「末吉」

礼を言うおみつを見ずに、末吉を追って新吉は駆けだした。

「ほらほらどいた！ 御用の筋だ」

末吉の後ろから現れた新吉を見ると、人垣がさあつと引く。

「姐さん、おみつとそこで待っててくれ」

二人を押しとどめ、慎重に死体のあるほうへ近づく。

少々水に濡れている身体のすぐ横に、空の酒瓶が転がっている。

新吉は、その口にある水滴を指ですくい、そつとなめた。

すると、かすかに鼻につく味がする。眠り薬の類たくいにしては、風味
が強い。

（……毒薬？）

自ら毒を飲んで死ぬ気なら、こんな往来で実行はすまい。
と、言うことは

（殺し、か）

そう結論づけた新吉は、死体の顔をじっくりと見た。

さまは変わっているが、小さな目、皺だらけの頬。それらは先日、新吉を脅したあの老人に違いない。京香も、見ればわかるはずだ。問題は。

「おみつ」

ざわめいている人垣の前にいる妹の名を呼ぶ。

ゆつくりと、ふたつの足音が近づいてきた。

立ち上がり、京香に目をやる。死体のあるほうへ目をやった京香が、間違いない、といった風に小さくうなずいた。その直後。

「……じいちゃんだ」

京香の横で、おみつが力なくつぶやいた。

「間違い、ないか？」

驚きを押し殺し、おみつに訊ねる。するとおみつは、自分に似た小さな目から涙をはらはらとこぼし、しっかりとうなずく。

「どうして？ どうして、こんなところで……。じいちゃん！」

呼びかけると、おみつはひざを落とし、返事のない小太郎にすがって泣き始めた。

その痛々しさに、新吉は思わず目をそむける。

「そんな簡単に、殺されるものかしらね。あの人が」

隣にいる京香が、小さな声で新吉に問うてくる。

確かにそうだ。

自分をいとも簡単に翻弄し、京香を脅してきた人間が、こんなあっさり殺されるものなのか？

それよりも、おみつの祖父がなぜ、自分らに『この探索から身を引け』と言ってきたのだろうか？

答えを求め、再度、京香を盗み見る。

しかし彼女はしゃがみこみ、泣きじゃくるおみつの肩に手を置いているため、その表情を伺い知ることができない。

再度、人垣が割れた。

新吉が目をやると、髪を小銀杏に結い、端正な顔立ちに緊張の色をつかべた男が十手を持って現れた。

「笹川さま」

「身元はわかったのだな」

「ええ。恐らく、酒を飲みすぎて川に落ちたものと」

新吉の上役の同心、笹川将之進ささがわしやうのしんの問いに、新吉はうなずき、小声でささやいた。

「そうか……。可哀相に」

京香の隣で泣き続けるおみつを、将之進は哀れみを持った目で見つめる。

親代わりを失った妹の悲しむさまを見るのはつらいが、これでおみつを『期日内』に紀州に帰すことができる。

二つの相反する感情に気づき、心の中で苦笑いしながら、新吉は小さくため息をついた。

第三章 二日目・すれ違う心・（前書き）

【用語説明】

・夕七つ……今の時刻に換算すると、午後三時から午後五時の二時間。

・暮六つ……今の時刻に換算すると、午後五時から七時までの二時間。

第三章 三日月・すれ違ふ心

線香の煙とともにわき立つ香りが、暗い室内から廊下にただよっていた。

小太郎は、源三の道場の裏口に面した一室で、覚めることのない眠りにについている。

奉行所からは、小太郎は酒の飲みすぎで川に転落した、との判断が下された。

しかし京香は、そうは思っていない。それは新吉も同じであろう。なぜ、おみつを置いて江戸に出て来たかはわからぬが、もし、重要な任務を帯びていたのなら、前後不覚になるまで酒を飲む、ということはありえないはずなのだ。

鴉の鳴き声からすが、灰色の小袖に身を包んだ京香の耳に届いた。

外に目をやると、もうそろそろ、ぬけるように青かった空が、黒に塗り替えられることを告げる夕陽が、建物の向こう側で最後の輝きを放っているのがわかる。

京香は、火付石と油を持って、おみつらがいる部屋へ入っていく。数回音を鳴らし、中央にある行灯に灯りをとめすと、じっと身じろぎせずに座っているおみつの背中が、夕闇のなかに浮かび上がった。

「おみつさん、ご飯よ」

今朝、稽古をしたときと同じ服装のままのおみつは、何も言わずに首を振る。

「少しは食べなくちゃ。明日はおじいさんの野辺の送りだし、あなたまで倒れたら、おじいさん、きつと悲しむわ。ね」

京香を見上げたおみつの目は赤く染まり、たくさんの涙を流した後が、頬にくつきりと残っている。

新しいろくそくと線香を立てて小太郎に手を合わせた京香は、無理に笑顔を作っておみつを見た。

こうでもしなければ、自分が、彼女の悲しみに引きずられてしま
いそうだったからだ。

声を出さずに再度うながすと、おみつは小さくうなずいて立ち上
がる。

自分より少し背の大きいおみつが、何故か小さく見えた。

「あら、先生は？」

京香は、源三に用意した夕食に全く手がつけられていないのを見
て、新吉に訊ねた。

「早馬が呼びに来て、清水様の屋敷に行ったよ」

ああ、そうか。京香は思う。

事件が起きると、その日の探索結果の報告を夕七つから暮六つま
でに行うことになっているのだが、今日は、早朝から小太郎とおみ
つのことにかかりきりで、事件の探索どころではなかったのだ。

源三は、今日のことをどのように天膳や忠直に報告するのだろう
か？

新吉もそれが気がかりのようで、夕飯に全く手をつけていない。
そして、おみつも。

箸すら持たず、ただじっと一点を見つめている。まるで、何かを
決心するかのような強い目で。

「さ、食べましょう！　せっかく作ったのに、さめてしまうじゃな
いの」

京香は、沈みがちな空気を盛り立てようとわざと明るく振舞う。
しかし、二人は自らの世界に閉じこもったまま、扉を開かない。

京香はあきらめて、自分のお膳に手をつけ始めた。

道場のあたりには、子供らが遊ぶ音すら聞こえない。さつきから
京香の耳に入ってくるのは、悠然と鳴き続ける、鴉の声だけだ。

「おみつ。明日、じいさんの野辺の送りが終わったら……、紀州へ

「帰れ」

沈黙を引き裂いた鴉の鳴き声のすぐあとに、新吉が告げた。

「こう言っちゃ何だが、じいさんは死んだ。お前がもう、江戸にいる理由はないだろう」

「新さん、こんなときに言わなくたって」

「……ない」

おみつの小さな声が、京香の言葉をやんわりとさえぎった。

「え？」

「紀州へは……帰らない。まだ、やらなきゃいけないことが残ってる」

「何だと？」

新吉が鋭い目つきでおみつを見た。おみつも負けずに、強い決意を込めて兄を見返す。

「じいちゃんの仇を討つ。そうじゃなきゃ、紀州には帰れない」

「仇？ 何ぬかしてるんだ。おまえのじいさんは酒の呑み過ぎで」

「違う！ 殺されたんだよ！」

机を強く叩き、おみつが新吉の言葉をさえぎった。漬物をのせた小皿がはね上がり、床の上に落ちていく。

「じいちゃんは、お酒なんか飲めなかった。一口飲んだだけでも、顔を真っ赤にするくらい弱かったの。そんなじいちゃんが、お酒を飲み過ぎて死ぬなんて、絶対ありえないよ」

「だからって、殺されたっていう証がどこにある？」

一段と低い声で、新吉がおみつに問うた。

「それは……これから捜すよ。犯人だって、私の手で」

「いい加減にしろ！」

堪忍袋の緒が切れたのか、おみつよりも強い力で机を叩き、新吉が立ち上がった。

「お前がここにいて、どれだけの人間に迷惑がかかるのか考えたことがあるのか？ お前はな」

「新さん！」

このままだと、おみつに知られたくないことまで言い出しかねない。そう感じた京香は、新吉を強く制した。

我に返ったのか、新吉が苦々しい顔でおみつから目をそらす。

「……迷惑なの？ 私」

呆然とつぶやくおみつの顔から、感情が消えた。

「おみつさん。新さんはそんな意味で言ったんじゃない」

「私はここに……、江戸にいちやいけないの？ じいちゃんの仇も取っちゃいけないの！？」

京香に構わず新吉に近づき、肩を横から揺さぶっておみつが問う。
「そうだ。だから帰れって言ってるんだ。そんなこともわからないのか！」

おみつの顔が、ゆがんだ。しかし彼女は齒を食いしぼり、必死に涙をこらえている。

「……わかった。もういい！」

それだけ言うと、おみつは乱暴に戸を開けて部屋から出て行く。

「おみつさん！」

「姐さん、ほつとけ！」

頭に血がのぼった京香は、手元にあったお茶を、新吉の顔に勢いよくかけた。

水しぶきが辺りに飛び散り、木の机に大小さまざまなしみを作っていく。

「少し頭を冷やしなさいよ。あの子を放っておけないのは、あんたが一番よく知ってるじゃないか」

水がしたたるのも構わず立ち尽くす新吉を、唇をかみ締めて一瞥^{いちべつ}する。

そして、おみつを追いかけるべく、闇夜に向かって京香は走り出した。

第三章 三日月・襲撃・

辺りはもう、すっかり暗くなっていた。

黒い空間をほのかに照らす月明かりが、周りの建物の輪郭を、くつきりと浮かび上がらせる。

京香は、道場から飛び出していったおみつを捜すが、近くの武家屋敷街にも、源三が住む長屋にも、姿は見当たらない。

闇の帳を告げた鴉の鳴き声は、いつしか犬の遠吠えに変わり、京香の不安を煽っていく。

時が経てば経つほど、おみつを捜している京香の脳裏には、昔失った少女の泣き顔が浮かんでくる。

(……葵)

まだ小さかった自分が守れなかった、幼い少女。

この仕事に就いてから、思い出したことは一度もなかったのに。

昨日、小太郎より感じた底知れぬ恐怖が、過去の自分を呼び戻したのか。

もし、命を狙われているおみつを見つけられなければ、自分は、同じ過ちを繰り返すことに。

大店が立ち並ぶ庄屋街を流れる川岸に立ち尽くし、小さく身震いした京香の耳に、小さな水音が聞こえてきた。

顔を上げると、前方にある川面かわもが不規則に揺れている。

川をまたいでいる大きな橋の真ん中に、見覚えのある影が月に照らされて映っていた。

深くため息をついた京香は早足で橋に近づき、少女の名を呼ぶ。

「おみつさん」

「……お姐さん」

「心配したのよ。ずっと、ここにいたの？」

少し気まずそうに、おみつはうなずいた。

「さ、帰りましょう。新さんも心配してるわよ」

「でも……、私がいたら、迷惑なんでしょう？」

「何言ってるの。新さんの妹なら、私や先生にとっても妹同然よ。新さんがどう考えようと、迷惑だなんて思ってるじゃない」

一瞬、探るような目つきで見えてきたおみつだが、京香が笑みを浮かべてうなずくと、少しだけ表情がゆるんだ。そして。

「おととい、ここで、先生に初めて会ったんです」

頬を優しくなでていく風に揺られる水面を見下ろし、おみつが口を開いた。

「私、ならず者に囲まれてて。先生は、あつという間にそいつらから私を助けてくれた。そして、『もう、小さな頃の君じゃない。俺が保証する』って言うてくれたんです」

言葉の意味をはかりかねている京香に、おみつは真剣な眼差しで問いかけてきた。

「お姐さんは、私がじいちゃんの仇を取ることは反対ですか？ 私じゃ、じいちゃんの仇を取ってあげることにはできないんですか？」

京香は、言葉に詰まる。

実力だけなら申し分ない。事実、源三や新吉以外の人間で、自分をあそこまで追い詰めたのは、おみつが初めてだ。だが……時間がなさ過ぎる。

父である軍太夫に命を狙われている彼女の時間は、残り少ない。

その間に小太郎の殺された原因を探り、仇を捜し出すのは不可能に近いのではないか。

「お姐さん？」

おみつがまた、不安そうな眼差しを京香に向けてきた。

その瞬間、京香の周りの空気に、静かな殺気が忍び寄る。

「お姐さん」

言い募ってきたおみつを制し、京香は胸元の短刀に手を伸ばす。

「おみつさん、私から離れては駄目よ」

言い終わる間もなく、京香とおみつの間の手すりに、棒状の手裏剣が突き刺さった。

同時に背中 of 刀に手をかけた数人の忍び装束のものが、二人に向かって駆けて来た。

京香は、手すりにあった手裏剣を引き抜くと、刀を抜いてすぐそばまで来た男の肩口に、渾身の力を込めてそれを突き立てた。

大きな叫び声とともに男の手から離れた刀を奪い、自らの短剣をおみつに差し出す。

「お姐さん」

「躊躇ちゆうちゆうしたら駄目。いいわね」

引き締まった顔でおみつがうなずく。

と、同時に幾人かの男達が二人に襲いかかってきた。

振り下ろされた刀を受け流し、よろけた相手の脇腹めがけて刃を振り抜く。

おみつを見ると、彼女は身の軽さを最大限に活かし、流れるように男達の急所を斬りつけている。

今朝、長刀を持っていたときよりも動きは早く、まるで、短刀がおみつの手のように自在に動いている。

これならば、心配はいるまい。

小さく息を吐き、京香は精眼の構えで、自分を囲う三人の男に目を光らせた。

第三章 三日月・記憶・

京香を囲う男達が、じりじりと間合いを詰めてくる。

一斉に襲いかかって来るか、それとも別々か。

京香は構えたまま、身じろぎもせず奴らの動向をうかがう。するとしびれを切らしたのか、向かって右側にいた小柄な男が、踏み込んできた。

連携が乱れた空気を感じ取った京香は、かかってきた男に一太刀くねるとすぐに刃を切り返し、真正面の男の頭に向かって振り下ろした。

叫び声をあげることもなく、男がくず折れる。

それを横目で確認すると、京香は左の男に気を配りながら、おみつのそばへと駆け寄った。

体勢を崩したおみつに振り下ろされた刃をはねのけ、彼女をかばって立つ。

見渡すと、京香に差し向けられた人数よりも、おみつに対峙する数のほうが、圧倒的に多い。

しかも、男らの太刀筋はすべて、京香には見覚えのあるもの、もしくは手合わせした経験のあるものばかりだ。と、いうことは。

（公儀御庭番の手のもの、か）

新吉に聞いていた日数よりも早く、彼らは動いている。 おみ

つの存在を消すために。

京香は唇をかみ締めた。新吉の父、軍太夫に対する怒りが、心の中に渦巻く。

後ろで立ち上がったおみつの息は、すでに上がっている。やはり実戦経験のない彼女には、荷が重かったか。

多勢に無勢。

新吉や源三がいれば、こんな奴らはあっさりと退けられるのに。

一瞬湧き上がった感情が、京香の記憶を再びよみがえらせる。

『自分ひとりなら』

あの夜、何度思ったか知れない。葵さえいなければ、自分が思うように動けるのに、と。

そして、今も。

おみつさえいなければ、源三や新吉がそばにいてくれたなら、こいつらの始末などわけないのに。

京香は心の中で、半ば自嘲的に笑った。

葵を喪ったあの夜と、何も、変わっていないではないか。

どんなに腕を上げても、どれほどの事件と向き合っても、闇夜で震え、泣いていたあの時の自分から逃げていては、強くなどなれるはずがない。

逃げてちゃいけない。今、おみつを守るのは自分しかないのだから。

そう思った京香は呼吸を整え、刀を構えなおした。

大柄な一人の男が、再度間に割って入ろうとしたのを受け止めようとすると、力の差か、持っていた刀がはじき飛ばされた。

その隙を狙い、先ほど左手にいた男の小太刀が、京香の腕を切り裂く。

京香は顔をゆがめ、傷口に手を添えた。脈を打つような痛みとともに、温かい液体が指の間を流れ落ちるのがわかる。

「お姐さん！」

体勢が崩れた京香を、おみつが支える。

どうすればいい？

見たところ、残りは四、五人。手負いの自分と不慣れなおみつでは、この先は読めている。

『相手の力量を察知し、自らを引く。それも「強さ」だ。決して逃げなんかではない』

昨日、源三から贈られた言葉が、京香の脳裏に浮かんだ。

視線を移したその先に、月に照らされ、ゆらゆらと輝く水面がある。

この時期、川に飛び込むのはある意味自殺行為だが、このまま男達の手にかかって死ぬよりは、生き延びる可能性があるのではないだろうか？

京香は再度、おみつに目をやった。

意図を読んだのか、おみつは真剣な眼差しで、京香にうなずいてみせる。

どちらともなく、手を握り合う。そして。

にじり寄ってくる男達に背を向け、京香とおみつは橋の欄干に飛び上がり、その身を宙に躍らせた。

第三章 三日目―真実―

「それでは、お気をつけて」

声をかけてきた中間ちゆうかんに無言で頭を下げ、源三は清水家の門の脇から外へと出た。

昇ったばかりの月明かりの中、自分の足音しか聞こえない武家屋敷街で、今しがた兄の忠直から聞いた、思いがけない事実を反芻していた。

『菊池殿が、風魔の子孫だった？』

『左様』

目の前の忠直が、渋い表情でうなずいた。

おみつのことを伏せて、小太郎が遺体となつて発見されたことを報告するのに骨を折ったが、とりあえず、新吉の昔の記憶を頼りに身元を判別したと信じてくれているようだ。

しかし、小太郎がの風魔の子孫だった、とは意外な事実だった。

戦国時代に北条氏に仕えていた彼らは、神君家康公により江戸幕府が出来た頃、武家、商家を問わず押し入り、悪徳の限りを尽くした挙句、幕府によって滅ぼされたと聞いている。

『小太郎殿は確か、孫を育てるために公儀筆頭御庭番の要請を辞し、隠居したと聞き及んでおりましたが』

源三の問いに答えず、忠直は口を真一文字に結んだ。目を閉じ、じつと何かを考え込んでいる。

『兄上』

『……それは建前だ』

源三の促しに観念したのか、目を開き、忠直が口を開いた。

『孫を育てる、というのが隠居の名目だが、小太郎殿は、全国各地に散らばっている風魔の末裔達の頭領に育てた子を据え、幕府打倒

を目論んでいたとの情報もある』

『な……』

源三は慌てて言葉を飲み込んだ。おみつが我々と同じくらいの実力を持つまでになった陰に、そんな陰謀が隠されていたというのか。『今回の事件も、その布石と上様は見えておられる。だからこそ、我々に「依頼」が出されたのだ。父上も、それを確信しておられる』

『その根拠は？』

『先日、父上が京香らと犯人捜しをしたときのことを聞いておろう。厳しい表情を崩さずに続ける忠直に、源三はうなづく。

『父上の駕籠を襲った男がたびたび、紀州の菊池殿のもとへ行っていたことがわかったのだ。身元はまだ知れぬが、おってわかるであらう』

そこまで忠直は知っていたのか。しかし。

『兄上はそれを、誰より聞いたのですか？』

『それは……言えぬ』

『兄上』

言いかけた源三も口をつぐんだ。おみつの存在を兄に知られたら、公儀御庭番衆を揺るがす事態にもなりかねないと判断したのだ。

『何か、言いたいこともあるのか』

『いえ』

忠直は源三を探るように見つめていたが、やがて。

『この先は風魔一族と堀田様の関係を探り、大店を襲った理由と、その確たる証拠を掴むことに、全力を挙げてくれ』

忠直の言葉に、源三は無言で頭を下げた。

おみつは、軍太夫と風魔の末裔の血を引いた娘だった。

そして風魔は、おみつを頭領に抱き、幕府打倒を目論んでいる。

だからこそ軍太夫はおみつを紀州に置き、新吉らを連れて江戸へ来たのだらう。

おみつに話を聞いて以来解せなかった疑問が解けていくのを感じる反面、源三は、何も知らずに激流に飲み込まれた彼女を、そして必死に妹を守ろうとした新吉を哀れに思った。

そんな二人に対して自分は、そして京香は何をすればいい？

おみつをこのまま江戸にとどめておくと、生命が危険にさらされるのは目に見えている。

しかし……。

武家屋敷街から庄屋街に入る路地の真ん中で立ち止まり、逡巡する源三の耳に、突如大きな音が飛び込んできた。

まるで、川に人が飛びこんだような重い水音に、源三は思わず駆け出した。すると、黒の忍び装束を身にまとった男達が、こちらへ向かって走ってくるのが見える。

「待て！ その方ら、この先で何をした」

源三の言葉に、前を走る二人が刀を抜いた。腰に差していた長刀を抜き、応戦する彼の脇を、残りの忍び達が駆けていく。

一人を斬り、刀を返して残った男の肩を打ち据えた。

「おい！」

倒れた男を起こして訊ねようとしたが、いきなり舌を噛み切り、息絶えた。

舌打ちをして、川の方へと駆けだした源三の前方で、ずぶ濡れになった何者かが、岸にはい上がってくるのが、月の下に見えた。

第三章 三日月・懇願・

「おい！ 大丈夫か！？」

源三は、岸からはい上がりとうとする人物に手を差しのべた。

川の流れに逆らいながら手を取ったのを確認して、一気に引き上げる。

結っていたであろう長い髪がばらけて顔を覆っているため、誰かはわからぬが、女か、もしくは元服する前の少年か。

「しっかりいたせ。いつたい、何があつた？」

「先……生？」

咳き込みながらも自分の通り名を呼んだ人物の髪をかきあげ、顔をのぞきこむ。

「……おみつ」

「先生。お姐さんは？」

「お姐さん？ ……京香のことか？」

再度咳き込み、おみつがうなづく。

「何があつたんだ。京香がどうしたというんだ？」

「……忍びに襲われた私をかばって、お姐さん、怪我をしたの。このまま……、このままじゃ、二人とも殺されるからって、一緒に、川に飛び込んだんだけど……」

何度も咳き込みながら説明するおみつの目からは、涙が溢れてくる。

「お願い先生。お姐さんを助けて。じゃないと、私……」

「おい！ おみつ！」

薄れゆくおみつの意識を取り戻そうと彼女の頬を叩くが、よく陽に焼けた肌よりも、流れ落ちてきた涙のほうが温かい。

一刻も早く、京香を救いに行きたい。しかし。

源三は立ち上がり、足下にあつた葉を川に浮かべた。すると、いつもより流れが速いことを示すかのように、勢いよく葉が遠ざかる。

どこまで流されたかわからぬ京香を捜すには、新吉の協力が不可欠だ　そう判断した源三は、冷え切ったおみつの身体を抱き上げた。

どれだけの時間が流れたのか。

完全に意識を失ったおみつを抱えた源三は、道場の明かりを見て思わず安堵のため息をついた。

「新吉！　いるか？」

「先生、一体どうした……………」

扉を開けた新吉が、源三の腕に抱えられたまま、力が抜けているおみつを見て言葉を失った。

「忍びに襲われたおみつと一緒に川に飛び込んだ京香が、行方知れずになっている」

「……………何だつて？」

「俺は京香を捜しに行く。途中で康太に声をかけておくから、おみつを頼む」

「先生！」

「詳しい説明は、おみつが意識を取り戻してからだ」

新吉の言葉を振り切り、源三は再び闇の中へ飛び出す。

修行中の頃の仲間で、今は医師として、小石川養生所に勤めている康太の家に寄った源三は、足にからみつく裾を手に持ち、さつきおみつと出会った場所よりも下流の方向に向かって走り出す。

（頼む！　無事でいてくれ！）

気づいた時にはそばにいた従姉妹を想い、源三は心の中で叫ぶ。

もし、京香が目の前からいなくなってしまうたら　それを考えただけでも、恐ろしい。

修行中、京香が葵とともに姿を消した夜も、空に月が浮かび、冷

えた空気が辺りを覆っていた。

だが、京香を失う恐怖はあの頃よりも強く、源三の心を支配する。
「京香！ どこにいる」

流れる水に沿って足を動かしながら、源三は何度も声をかける。

しかし、京香の声はどこからも返ってこない。それどころか、姿すら水面に浮かんでこないのだ。

どこかで誰かに救助されたか、それとも、川底で……。

いや、そんなはずはない。腕に怪我をしたからといって、命を落としてしまうようなやわな女ではないはずだ。

心を支配しようとうごめく『恐怖』という闇を振り払い、どこまでも流れを追い続ける。

しかし。

朝陽が闇を照らし始める頃、ようやく最下流に到達した源三の目の前に京香が現れることはなかった。

第四章 四日目・砕かれた希望・

太陽が顔を出した空の向こうで、雀すずめが鳴き始めた。

源三が愛用している厚手の半纏はんてんを羽織り、うつらうつらしていた

新吉は、その声で目を覚ます。

「新吉。ちよつといいか」

緑の着物に白い前かけをつけ、髪を立髪たてがみに結った康太が、白い着物に着替えさせたおみつの胸に手を当て、状態を確認する。

「さすが新吉の妹だな。もう、命の心配はないだろう」

まだ目を覚まさぬおみつの脈を取った康太の言葉に、新吉は心の底から安堵した。

「すまないな。康太。今日も診療があるんだろ？」

「気にするな。俺の代わりはいくらでもいるさ。それに清水様から、何かあった時にはお前らの手当てを優先してくれ、ってお達しも出てる」

花ぐるまの一員となるべく修業を積んでいた子供の中で、新吉らと最後まで競せっていた康太だったが、その最中に身につけた薬草の知識などを天膳に高く買われて長崎に留学。最近、医師となつてこの江戸に戻ってきた。

昨晚、源三に乞われてここへ来てから、詳しいことは何も訊かずに、ずつとおみつを診ていてくれたのだ。それが、新吉にはどれほど心強かったか。

だが、おみつと共に川に飛び込んだ京香と、彼女を捜しに出た源三はまだ、帰って来ない。

源三は、京香を捜し出せたのだろうか。そして何より、彼女は生きているのか。

考えるだけで、胸がかきむしられるように、痛む。

『少し頭を冷やさないよ。あの子を放っておけないのは、あんた

が一番よく知ってるじゃないか』

最後に聞いた京香の言葉を思い起こし、新吉は唇を噛み締めた。

『祖父の仇を討ちたい』 自分に、おみつの切なる願いを汲み取ってやるだけの余裕がありさえすれば、おみつを、そして京香を命の危険にさらすことなどなかったのに。

「二人がこうなったのは、お前のせいじゃねえよ」

新吉の気持ちを見透かしたように、康太が笑う。

「京香が、そうそう死んでたまるかよ。お前だってよく知ってるじゃないか」

「……え？」

「もう忘れたのか。葵の件」

新吉の脳裏に、ふと、七年前に命を落とした少女、葵の顔がよみがえった。

幼かった頃のおみつのように、毎日、遅くまで残されてはべそをかいていた。

そんな葵を放っておけなくて、新吉はよく、彼女を馬鹿にした康太や他の仲間達と喧嘩したものだっただ。

「あの晩、一緒に脱走したのに京香だけ帰ってきやがってよ。……あれからあいつは変わったんだ」

そう……だった。

あれ以来、京香は葵のことを心の中に封印して厳しい修業を積んだ。源三にはどうしても敵^{かな}わなかったが、新吉や康太を凌ぐほどの実力を身につけて、花ぐるまの一員になったのだ。

「京香は、おみっちゃんを守りたかったんだろ？ 葵の代わりつてわけじゃないだろうけどよ」

康太の視線の先には、頬にかすかな赤みがさしたおみつが、未だ眠り続けている。

「大丈夫さ。今に、先生が京香を連れて帰ってくるよ。そのときはまた、俺の出番ってわけだ」

拳を握って二の腕を叩き、どこまでも明るく話す康太に、新吉の心がふっと緩んだその時、道場の入り口の扉が開く音がした。

康太と顔を見合わせ、新吉は玄関先へ歩いていく。

「先生。どうしたんだ？ その格好」

新吉の背後にいる康太が驚くのも無理はない。

いつもは髪をきっちり結び、小ぎれいな着物を身にまとっている源三が、それとは真逆の格好をしているのだから。

「川下まで、ずっと流れを追って行ったのだ。だが……」

しほりだすような、源三の声。その先の言葉はもう、聞かなくてもわかっていた。

新吉は思わず天を仰ぎ、目を閉じた。

第四章 四日目・焦燥・

『源三ならば、きつと京香を連れ帰ってくるはず』

康太が、そして新吉が抱いていた一縷^{いちる}の望みが絶たれた。その事実に黙り込む三人を、玄関口から入り込む陽光が照らしている。

「……よし、やっぱりここは、俺の出番だな」

「康太？」

重苦しい空気を一掃するかのように、康太が両手で頬を叩いた。

「昨日の京香の格好、教えてくれよ。もしかしたら、町医者の中に川でおぼれた京香を診たやつがいるかもしれない」

「だけど」

「こんなときに、安穩と仕事なんかしてられるかよ。俺にも協力させてくれ」

「康太……」

胸がいつぱいになった新吉は、何も言えずに頭を垂れた。康太の友情が、ありがたい。

「よし……、俺も行く。康太、何軒か案内してくれ」

「何言ってるんだよ。休まなきゃ駄目じゃないか」

医師の立場からか、康太が反対の意見を述べる。

「大丈夫だ」

「何が大丈夫なもんか。そんな蒼い顔して」

見ると、顔色はもちろんのこと、目も充血していて、焦点があまり定まっていけないように見える。

「康太の言うとおりだ。先生。少しでもいいから」

「休んでなんかいられるか！」

新吉の言葉をさえぎった源三のあまりに大きな声に、外でさえずっていた雀たちが一斉に飛び立つ音が聞こえた。新吉も驚き、言葉

を返せない。

「こんなときだからこそ、休むんだよ」

隣に立つ康太の真剣な眼差しが、源三を捉える。

「京香がいない。それに加えてあんたまで倒れたら新吉は一人だ。こいつだけに、重責を負わせるつもりなのか？ 先生」

康太の指摘が心に突き刺さったのか、源三が新吉から視線をそらす。

「姐さんの手がかりは、俺と康太で必ず探し出す。だから先生、せめて半日だけでもいいから、ここで休んでいてくれ。そして、おみつと小太郎さんを頼む」

こちらを見ぬ源三に、新吉は頭を下げる。康太の言うとおり、今ここで源三まで倒れてしまったら、事件を解決することも、父からおみつを守ることもできなくなってしまうのだ。

「……京香は昨日、灰色の小袖を着ていた。そして、どこかはわからぬが怪我をしているらしい」

しばしの沈黙の後、源三がつぶやいた。康太と顔を見合わせ、道場を出ようとする新吉を、源三が呼び止める。

「すまない。京香を……頼む」

「なあ、新吉。京香と先生ってどういう関係なんだ？」

昇り行く太陽とともに、個々の営みを始めた江戸の町を早足で歩きながら、康太が新吉に訊ねてきた。

「どついう……って。いとこ同士だろ。知らなかったのか？」

「いや、知らなかったわけじゃないんだけどよ」

確かに、さつきの源三の取り乱し方は尋常ではなかった。長年一緒にいるが、冷静で、どんな状況になっても変わらない彼の怒鳴り声を聞いたのは、今日が初めてといってもいいくらいだ。

「道ならぬ恋、ってやつかねえ」

「何馬鹿なこと言ってるんだ。どつから当たる？」

脱線しそうな康太を引き戻すため、新吉は本題に入った。

「そつだ。まずは二丁先にある良庵先生のところへ行ってみるか。あそこはけっこう評判がいいからな」

康太にうなずいて、新吉が方向を変えようとしたその時、深い編笠をかぶった浪人風の男が、一丁先の道を横切っていくのが見えた。

「おい、新吉。どうしたんだよ」

「悪い、今回の事件に関わってるかもしれない奴がここ通つたんだ。医者の方、まかせていいか？」

「わかった。気をつけろよ」

互いの健闘を祈り、康太と拳を突き合わせた新吉は、彼と逆の方へへゆつくりと歩き出す。

少しでも勘づかれるようなことがあれば、事件の手がかりを失ってしまう。

相手との距離を縮めないように気を配り、新吉は慎重に足を運んだ。

いくつかの角を曲がり、大通りへと出る。

使いに出ている商人風の男に、飴売りの娘。きらびやかに着飾った大店の娘らしき少女らが行き交う道の真ん中にある店の前で、男の足が止まった。

辺りを軽く見回し、奉公人らしき男に案内された浪人が、店の中へと入っていく。

看板を確認した新吉は、思わず目を疑った。

黒塗りのそれに記されていたのは、吉宗の肝いりで御用達になったとの噂が高い、山城屋の名前だった。

第四章 四日目・驚愕・

（なぜ、山城屋にあの男が？）

新吉は、浪人が入っていったのを確認して、外に出てきた別の奉公人の少年に近づいた。

「なあ、あの浪人さん、ここの何なんだ？」

新吉の手に握られた十手を見た少年は驚いた様子でこちらを見たが、声を潜めて答えてくれた。

「旦那様がお雇いになった用心棒です。名前は確か……平沼様と言います」

「いつからここに出入りしてるんだい」

「確か、五日ほど前からです」

礼を言つて少年に駄賃を持たせると、新吉は店の裏手に回った。幸い、小路に人影はない。見上げた先の小窓が開いているのを確認して、何ヶ所かに足をかけて飛び上がった。

音を立てないように中へ潜り、ゆっくり建物を中心へ向かう。

「……か」

板越しに声が聞こえる。話しているのは、二人だけのようだ。

「はい。明晩決行せよ、と仰せてございます」

「場所は？」

「ここ、山城屋との仰せだ」

どちらが話したのかはわからぬが、悠然としたその態度に、話を聞いたであろう人物の動きが止まったのが、天井裏の新吉にも伝わってくる。

「冗談はよして下さい。ここを襲えば、どうなるかは」

「だからだ。肝いりで江戸に入った御用商人のお前までも襲われれば、奉行所はおるか、老中の権威は失墜し、政が立ち行かなくなるのは必定。そこで、堀田様の出番というわけだ」

御用商人襲撃の裏で糸を引いていたのは、やはり堀田山城守だったのか。しかし、將軍吉宗が自ら推挙した山城屋まで絡んでいるとは。

「俺達は幼い頃から『風魔を滅ぼした幕府を許すまじ』と言い聞かされて育ってきた。俺とお前は地方から幕府を倒す足がかりを作るために同輩の者らと紀州へ渡り、基盤を作ろうと根来忍者の中へ入っていた。だが……」

山城屋と平沼は、幕府に滅ぼされた風魔一族の生き残り 思いがけない事実、新吉は息をのみ、次の言葉を待つ。

「ええ。一つだけありましたね。計算外なことが」

（計算外？）

声を落とした山城屋の言葉を聞き取ろうとした耳をそばだてた新吉は、背後に気配を感じた。ねずみの類ではない何かが、動いている。

胸元に忍ばせた短剣に手を添えたその時、その方向の柱に、何か突き刺さる音がした。

「くせものだ！」

その声に、新吉は柱に身を隠した。真下の部屋もにわかにはわめき出す。

小窓から差し込む光に照らされる二つの影が、刃の交わる音とともに、狭い空間でうごめいている。

（……あの男）

新吉は、すばしっこい、小柄な男から目が離せなかった。

あのたたずまい、どこかで見たことがあるような気がするのだが。外へと飛び出した小柄な男を追って、すりりとした体格の忍びも姿を消した。

「追え！ 逃がすな！」

平沼の声に、複数の足音が遠ざかる。

「何者ですか？」

「……小者だろう。あるいは、俺らをかぎまわっている公儀の手のもの……」

平沼が、意味ありげな響きを持たせて言葉を区切った。

「どうしました？ 平沼様」

「いや。明晩、おもしろい余興を見せてやろう。幕閣を揺るがす、大きなものをな」

そう言つて高笑いした平沼の足音が、部屋を出て行くのがわかった。

（幕閣を揺るがす余興だと？）

真意を探るべく、新吉は再び屋根裏から抜け出して店の表へ回った。

のれんをくぐり、辺りを見回した平沼の後をつけ、新吉はまた大通りの人波にまぎれていく。

庄屋街を抜けた平沼は大川橋を渡り、地藏が置いてある小路を抜け、笹やぶの中へと入っていく。

ふいに、速度を速めた平沼に追いつこうと駆け出した新吉の前に、灰色の装束を着た複数の忍びが立ちはだかった。

舌打ちをした新吉は短剣を取り出し、かかつてきた男の脇をめがけて振りぬいた。

叫び声をあげ、くず折れる男に目もくれず、目の前の男に向かって走る。

一瞬、ちゅうちよした大柄な男の腹に刃を突き立てた。続けて、左から向かってきた男の太刀を交わして拳をくれ、男が持っていた長刀を奪い、そのまま肩口から動脈を切り裂いた。

溜めていた力を息とともに吐き出し、新吉は笹やぶのほうへ目を

走らせた。しかし、平沼の姿はもう、どこにも見えなくなっていた。

第四章 四日目・来訪者 其の一・（前書き）

【用語解説】

・巳^みの刻：今の時間に換算すると午前10時から午後12時までの2時間の間を指す。

・朝5つ…辰の刻とも言い、今の時間に換算すると、午前8時。

第四章 四日目・来訪者 其の一

自分の頭が垂れる衝撃で、源三は目を覚ました。

壁にもたれかかり、長刀を支えに寝ていたせい、首と肩がやや張っているようだ。軽く腕を回して立ち上がった源三は、窓の外にある火の見やぐらへ目を向けた。

すでに、昇りきった太陽がやぐらの屋根のあたりから地上を照らしており、巳みの刻であることを江戸の町に知らせている。

新吉と康太が戻ってきた形跡は、未だない。

源三は眠っているおみつを起こさないように廊下へ出ると、小太郎の遺体を安置している隣室へ足を運んだ。

ろうそくは消され、線香はとうに尽きている。源三はそれらに火をつけると、小太郎に向かって手を合わせた。

京香が行方知れずになったことを、おみつの子にはしたくない。無論、京香もそれを望んではないだろう。きっと、おみつを助け、自分自身が生きる道として、冷たい川へと飛び込んだのだから。

しかし。

（小太郎が、そしておみつが江戸に出て来さえしなければ）

気づくと、心の奥から湧き上がるどす黒い感情が、源三を支配しているのがわかる。

『お前はこれから、幼子達をまとめなければならん。常に冷静・公平であれ。そして物事の裏を読むのじゃ』

修行に入る前、父、天膳から告げられた言葉が、今さらながら源三に重くのしかかる。

考えねばならないことは山ほどあるのに、頭が働いてくれない。浮かんでは消える京香の面影が源三の心を締めつける。

（早く、戻って来い。京香）

どんなに深手を負っていてもいい。お役目に就けない身体になったとしても、生きて戻ってさえくれば。

唇を噛み締めた源三の耳に、扉の開く音が飛び込んできた。ろっそくだけをすばやく消し、源三は玄関へと飛び出した。すると。

「あ、先生！」

伸びた髪をまとめ、赤い着物を身にまとった少女、千代と、頬を赤く染め、くすんだ緑の着物を来ている少年、太郎がひょっこり顔をのぞかせた。

「どうした、お前達」

無理やり笑みを作り、彼らと同じ目線まで膝を折ってから、源三は訊ねた。

「先生、もう時間過ぎてるんだよ」

「先生、今日はお休みなの？」

……そうだ。今日は、寺子屋の日だった。

お役目など、源三の都合で急遽休みにする時は、その日の朝五つまでに各々の家に走るのだが、京香のことあつて、今朝はすっかり忘れていた。

「すまない。今日は急に病気の人を看なくてはいけなくなつてな。申し訳ないが休みにしてくれないか？ 親御さんには、あとできちんと詫びに参る。な」

「この前来てくれたお姉ちゃんは？ 今日はいないの？」

太郎が目を輝かせて訊いてきた。寺子屋一のやんちゃ坊主である彼は、自分とずっと遊んでくれたおみつを、どうやら気に入ったらしい。

「お姉ちゃんは今、御用があつて江戸にいないんだ。もう少ししたら帰ってくるから、それまでおとなしくしているんだぞ」

嘘をつくのは心苦しいが、本当のことを言うわけにもいかない。

「なあんだ。つまらないの」

「やめなさいよ太郎。先生が困るじゃないの」

少しおませな口調で、千代が太郎をたしなめる。

「ちえつ。千代はいつも生意気なんだから」

「生意気はどつちよ。悔しかったら、私より読み書きができるようにならなくちゃね」

「よせよせ。とにかく、今日はみんなで仲良く、気をつけて帰るんだぞ。わかったな」

「はい」「先生、さようなら」

口々に言つて出て行く二人の後ろ姿を見て、源三は思わず微笑んだ。

何だかんだ言つても、太郎と千代は寺子屋で一番の仲良しだ。

紀州にいた時は、源三も京香と二人で野を駆け回り、同じ先生について勉強したものだ。しかしこのときはまだ、自分らがこのような過酷な役目につくことなど、考えてもいなかったのだが。

まだ小さな子供達に心癒されても、結局また、同じ場所へと戻ってくる源三の心。それらを振り払うように、小さく頭かぶりを振る。そこへ。

「御免」

源三の目の前に、また、思わぬ来訪者が現れた。

「兄上。……それに」

忠直の後ろに控えていた人物は、公儀筆頭御庭番の林軍太夫であった。

第四章 四日目・来訪者 其の二・

「突然申し訳ない」

新吉によく似た面差しの軍太夫が、小さく頭を下げる。

「こちらに、小太郎殿のご遺体と、おみつがいることを知って参った」

源三は、自らの表情がこわばっていくのを肌で感じた。

「はい。二人ともここにあります。ですが、何用で？」

軍太夫はおみつの命を狙っている。しかし、自分がそれを知っていることを、悟られるわけにはいかない。そう思った源三は、慎重に言葉を選んだ。

「いや、その……。二人が江戸へ出てきていることを小耳に挟んだので、会いたいと思うて」

「小太郎殿はともかく、おみつは今伏せておりますゆえ、話ができませんかどうか」

源三は、小太郎をまつすぐに見た。ほんの一瞬だけ、心の動揺がかいま見えたのは気のせいだろうか。

「昨晚、何者かに襲われまして、川へ飛び込んだ際に水を多く飲んだようです。命に別状はありませんゆえ、ご安心を」

目の前の軍太夫は表情を変えず、源三の言葉にうなずいた。

おみつ抹殺の指令を出したのは……軍太夫か。

兄に目配せし、源三は二人を小太郎の眠る部屋へと案内した。

「京香と新吉はどうした？」

軍太夫が小太郎に手を合わせている後ろで、忠直が耳打ちをしてくる。

「……京香は、おみつの一件で行方知れずになっております。新吉は康太とともに手がかりをつかむべく、探索を続けております」

努めて冷静に、事実だけを伝える。

「何？」

普段は感情を表に出さない忠直だが、さすがに、共に育った京香の安否不明を聞き、動揺を隠し切れぬようだ。

「かたじけのうござった。おみつは何処いすこに？」

兄弟の様子を意に介さず、向き直った軍太夫が頭を下げた。

「隣の部屋にあります。目を覚ましたか確認しますので、少々、お待ちいただきたい」

礼をして立ち上がると、源三は二人を残し、部屋を出た。

隣のふすまを開き寢床へ近づくが、おみつはまだ目を覚ましてはいない。

規則正しい寝息をたてている彼女の頬に、いく筋もの涙が流れている。

祖父を亡くした涙か。それとも、行方知れずになった京香を思い、流した涙か。

新たにこぼれた涙をそつとぬぐい、源三は、軍太夫をここへ通すか思案する。

軍太夫がもし、存在を消すために現れたのだとしたならば……。

京香の無事が確認されるまで、先ほど覚えた感情を拭い去れるとは思えないが、新吉のために、そして何より、彼女を救おうとしたであろう京香のためにも、おみつを渡すわけにはいかない。

遠い未来の風魔の頭領としておみつを育てた小太郎は、もういない。軍太夫の娘としては叶わなくとも、新吉の妹として、この江戸で暮らすことへのさまたげはもうないはずだ。

源三は意を決して立ち上がった。おみつをもう一度見下ろし、隣の部屋へと戻る。

「どうであつた？」

「まだ、眠り続けております。目覚めるまでにはまだしばらく時間が必要かと」

軍太夫の隣に座る忠直に、源三は言った。

「林殿。おみつを如何なされるおつもりか？」

軍太夫に向き直った源三は、思い切つて訊ねた。『無』だった彼

の表情が、みるみる強張るのがわかる。

「おみつの出自は、新吉と、そこにいる兄、忠直に聞いてほしい知っております。なぜ、彼女の存在を消す必要があるのか、お聞かせ願いたい」

「源三」

忠直が口を挟む。しかし源三はあえて兄を無視し、軍太夫を見据える。

「数日彼女と共に過ごしてまいりましたが、小太郎殿はまだしも、おみつに幕府打倒の意思があるとはとうてい思えませぬ。むしろ、小太郎殿が江戸へ出てきた理由すら知らない様子。そんな彼女を討つ必要はあるのでしょうか」

言葉を紡ぎながら、源三は、今さらながらおみつの気持ちを理解する。

彼女はただ、紀州での楽しい日々を取り戻したかったのだ。小太郎と二人、紀州の山奥でおおらかに暮らしていたあの頃に、戻りたかったただけなのだ、と。

源三は、京香を思うあまり、いつしかおみつの存在を閉じていた自分の心を恥じた。今一度、軍太夫に心から向き直る。

「林殿」

「源三殿。私は……」

源三をさえぎり、軍太夫が顔をあげたその時、玄関が勢いよく開いた。

近づく二人分の足音。ふすまの開く音に、後ろを振り返る。

「……親父」

源三の視線の先で、驚いた表情の新吉が、茫然と立ち尽くしていた。

第四章 四日目・出生の秘密 其の一

「……何しに来た」

後ろで、新吉の音がする。思いもかけない、そして一番会いたくない来訪者だったのか、普段より格段に声が低い。

「おみつを殺しに来たのか」

「お、おい。新吉」

「答えるよ！」

狼狽した様子の康太が口を挟んだが、新吉の言葉は止まりそうにない。

「新吉。よせ」

「先生は黙っててくれ。これは、俺と親父の問題だ」

大きな足音を立て、新吉は小太郎の傍らに座る軍太夫の前へ立つ。

「てめえ可愛さに、血を分けた娘を小太郎さんの前で殺すってのか
！」

「やめろ！ 隣でおみつが寝てるんだ。目を覚ましたらどうするつもりだ」

軍太夫に詰め寄る新吉を、源三が座ったまま制す。

目を見開いた新吉が、こちらを振り返った。

「お前が一番知られたくないことであろう？　少し落ち着け」

昂ぶる感情を押し殺すように、新吉が拳を握り締める。大きく息を吐き、源三のななめ前に腰を下ろした。新吉の目の前の軍太夫はきつく目を閉じ、何かを考え込んでいる。

張ったばかりの弓の弦のような沈黙が、部屋を包み込む。

「……俺は、ここにいちやまずいようだな」

その空気に耐えかねたのか、康太が口を開く。

「おみっちゃんの部屋にいるよ。目覚ましたら知らせに来るから」

「よし、私も失礼しよう」

「兄上」

「こちらおんみつりも、隠密裏に京香を捜す。最悪の場合は……わかっておるうな？」

忠直の言葉が、源三の心を刺した。心の動揺を悟られぬよう、目を伏せる。

源三ら隠密が探索中に命を落とした際は、誰に縁もゆかりもない

ものとして、密かに葬り去られる宿命を持つ。万が一京香が生きて戻らぬときは、自分と新吉ですら彼女がどこへ眠るかを、生涯知らずにいなければならないのだ。

「では。御免」

忠直に次いで康太も頭を下げ、部屋を出て行った。先ほどとは違う静かな足音が、ここまで聞こえてくる。

「新吉」

二人が出て行ったのを確認し、軍太夫が口を開いた。新吉の肩が小さく震える。

「お前にも話さねばならぬときが来たようだな」

「……何をだ」

「おみつの母親のことだ」

「おみつの、母親？」

新吉が軍太夫に向き直った。

「そうだ。おみつの母親はまだ生きている」

「何だって？ 生きてる？」

新吉の顔がこわばったまま動かなくなった。源三も、初めて知る

事実に驚きを隠せない。

「そつだ。私が母親からおみつを引き離し、手元に置いたのは……」

軍太夫が言葉を切った。口元をゆがめて再び目を閉じ、次の言葉を思案しているようだ。

源三から真実を言うのは簡単だ。しかし、これは彼ら親子の問題で、自分が口を出すことではない。

軍太夫が、大きく息を吐き出した。そして、新吉の目をまっすぐに見つめる。

「おみつの母親が、風魔の末裔だとわかったからだ。ここに眠る彼女の父、小太郎殿も同様」

「……風魔の、末裔」

事実を知った新吉が、所在なさげにつぶやいた。宙を泳ぐ彼の目が、心の動揺の大きさをうかがわせる。

「当時私は、探索中に殺された新吉らの母を想い、哀しみのどん底にいた」

淡々と事実を告げようとする軍太夫の表情が、心なしかゆがんでいる。源三は、京香を喪うかも

しれない今の自分の状況と、軍太夫の過去が重なる錯覚をなぜか覚えた。

「そんなとき、私は一人の女に出会った。国を追われて移住せざる

を得なくなつたが、父が病でこれ以上動けないという。だから私は、その親子に小さな住居を与え、住まわせた。……それが、あやまちの始まりだったのだ」

軍太夫は、自らの過去を掘り起こすかのように、三度目^{みたひ}を閉じる。

ななめ前で黙つたままの新吉を思いながらも、源三は、軍太夫の次の句を待つことしかできなかった。

第四章 四日目・出生の秘密 其の二・

二人分の足が床を鳴らす衝撃で、おみつは目を覚ました。障子にほどよく遮られた太陽の光がまぶしい。

再び目を閉じ、まどろみの世界に入ろうとしたが、脳裏に浮かんだ京香の顔が、おみつの意識を引き戻す。

首だけを動かし、辺りを見る。しかし、二組目の布団はこの部屋にない。

枕元のお盆に乗っている湯飲みも、一人分だけが伏せて置かれている。

(……見つからなかった)

ここにるのが自分だけだった、と理解した途端に目の奥が熱くなり、涙が浮かぶ。

京香は、生きているのだろうか？ その思いだけが、今のおみつの心を埋め尽くす。

自身の力が足りなかったばかりに傷を負わせ、京香が死ぬようなことがあれば、今まで面倒を見てくれた源三や、新吉に合わせる顔がない。

さっきの足音は恐らく、再び京香を捜しに出たであろう源三と新吉のもの。

自分も、行かなければ。

おみつはゆっくり身体を起こした。ずっと寝ていたせいか、節々が痛い。張っている肩を回して首を動かすと、目の前が揺れた。きつく目を閉じ、強引に揺れを止めて立ち上がる。

音を立てないように衣装箱を開けて、自分に合いそうな黒の野袴を見つけると、動きを制限する白の小袖を脱ぎ捨て、それに着替えた。

箆^{たんす}の引き出しをひと通り開けて、護身用の刀などがないかを捜す。だが、この部屋にはそれらしいものが一つもない。

丸腰で外に出ることに、おみつは一瞬、不安を覚える。しかし、昨日の連中も人通りの多いこの時間なら、不用意に襲ってくることはないだろう。

そう思い直したおみつは覚悟を決めて、入り口へと向かった。ところが、聞き慣れない足音がこちらへ迫ってきている。

おみつはとつさにふすまが開く方向の反対側へ身体を密着させた。拳を握り締め、大きく息を吸う。

開くと同時に、おみつは拳を振り上げた。しかし、入ってきた人物の手がそれをつかむ。

「……つと。何するんだよ」

聞き覚えのない小さな声が耳元を通り抜けると同時に、おみつの口元に手が添えられた。

目は大きい鼻が少し低いその男性が、小太郎のいる部屋をちらつと見て、ため息をつく。

「驚かせるなよ。いつ、目を覚ましたんだい？」

「つい、さっきだけど……あなたは？」

口元の手を強引にひきはがし、小さな声で、目の前の男性に問う。

「俺は、小石川養生所の医師をやってる、康太っていうんだ。新吉や源三さん、そして京香の幼なじみだよ」

緊張していたおみつの身体から、力が抜けていく。

「昨日、先生から連絡受けて飛んできたんだけど……。それだけ動けるなら、もう大丈夫だね」

「私のことなんかどうでもいいよ。それより、先生と兄さんは？
お姐さんを、京香さんを捜しに行っただけでしょう？」

「あ……つと、それが……」

表情をゆがめた康太が再度、隣の部屋のほうを見た。

「隣にいるの？」

「ああ。でも、君を向こうの部屋に行かせるわけにはいかない」

「どうして？」

後頭部を掻いている康太の目が、泳ぐ。

「まさか、お姐さんが？」

「いや、京香のことじゃないんだ。……実は、新吉の親父さんって人が来てて」

「父さんが？」

驚いたおみつに向かって、申し訳なさそうに康太がうなずいた。

「なんで会わせてくれないの？ 私、父さんに訊きたいことがあるのに」

「頼むから、何も言わずにここにいて。せめて、親父さんが帰るまでは」

おみつを押しとどめて、康太が頭を下げてくる。

「理由も言ってくれないで、ただここにいろって言われたって納得できないよ」

また、涙がこぼれそうになる。声が震えないようにお腹に力を入れて、おみつは続けた。

「私、何も知らないんだもん。父さんとじいちゃんに置いていかれた理由も、兄さんが何度も『紀州に帰れ』って言う訳も」

言葉を紡げば紡ぐほど、こらえきれない滴が、頬にこぼれて落ちる。

「……私、何も知らずに帰れない。帰るなら、その理由をちゃんと知りたいの」

「おみつちゃん……」

乱暴に涙をぬぐって康太を見据える。目を伏せた彼は、何かをじっと考え込んでいる。

やはり、駄目なのだろうか？ 小太郎の仇も討てず、京香の無事を確認することすらできずに、紀州に帰らなければならぬのだろうか？

……いや、そんなことはしない。もし、康太が止めにかかってくるのなら、もう一度、力づくでも。そう思ったおみつの肩に、康太の手が優しく置かれる。

「君には、かなりつらい話になるかもしれない。……それでもいいかい？」

「康太さん……」

「俺に、君を止める権限はないもんな。でも」

「大丈夫。何があってもちゃんと聞くよ。約束する」

本当は恐ろしい。けれど、今ここで父に会っておかなければ、後悔しそうな気がしてならない。

「わかった」

うなずいた康太が、出口に近づきふすまを開ける。そのあとについて、おみつは部屋を出た。

第四章 四日目・出生の秘密 其の三・

廊下には小太郎の、そして軍太夫らがいる部屋から、線香の匂いがただよっている。

おみつの前にいる康太が小さくため息をつき、ふすまを勢いよく開けた。

「どうした？ 康太」

心なしか疲れた様子の源三の声が、部屋の中から聞こえてくる。

「おみつちゃん、気がついたぜ」

康太が身体をずらした。すると、小太郎を背にした軍太夫の姿が、おみつの目に飛び込んでくる。

「おみつ……」

行商人の姿をした父が、驚きの眼差しでこちらを見た。

「どうしたんだ。その格好」

着替えたおみつを見て、源三が問ってくる。

「お姐さんを、捜しに行こうと思って。お姐さんは？」

「朝、新吉と康太が捜しに出てくれたのだがな、まだ……」

硬い表情のまま、源三が答える。おみつは目を伏せた。もし、このまま京香が帰らなければ、自分は源三にどう詫びればいいのかのさう。

「何の用だ？ おみつ」

新吉があさつての方向に目を向けたままで訊ねてくる。

「父さんがいる、って康太さんに聞いたから」

「康太」

責めるような口調で、新吉が隣にいる康太を見上げた。けれど、おみつのほうを見ようとはしない。

「何も知らないままにいるのは、もう嫌なんだってよ。な」

微笑む康太にうなずいて、おみつは改めて父を見た。軍太夫は腕組みをしたまま、口を開こうとはしない。

「私、父さんやじいちゃんに置いていかれた理由も、江戸へ出てきた私を、兄さんが必死に帰そうとしていた訳もわからない」

ひとつひとつ挙げていくたびに、こらえきれない想いが涙に変わって、おみつの頬を滑り落ちていく。

「昨日、兄さんにも言われた。私はここにいちや迷惑なんだって」

目を閉じたままの軍太夫の表情が、かすかにゆがむ。

「父さんもそう思ったの？ だから、私を紀州に置いていったの？」

「その通りだ。おみつ」

おみつを見上げ、軍太夫がよどみなく言い切った。

まるで敵を見るような冷たい眼差しに、おみつの視界が大きく揺れる。

「……つと」

よろけたおみつを、康太の身体が支えてくれた。しかし今の自分に、彼に対して礼を言う余裕など、あるはずもない。康太に寄りかかったまま、呆然と立ち尽くすおみつに追い打ちをかけるように、軍太夫が再度口を開く。

「私は昔……。お前の母親を風魔の末裔と知らずに愛した。お前も知っておろうが、風魔は、幕府と敵対し、転覆させようと虎視眈々と狙っている一族。その子孫と睦みあい、出来た子供を今生かしておくわけにはいかんだ。それが、我らの役目」

「……そんな」

自分は、望まれて産まれて来た子ではなかった。それどころか、命を狙われていたなんて。

「昨日の連中も、父さんが？」

「左様。風魔の陰謀をいち早く砕くために差し向けた連中だったが、まさか同業者に阻止されるとは、思いも寄らなかったがな」

『同業者』 その言葉に、おみつは源三と新吉を交互に見つめた。

「そこにいる二人も、そして行方知れずになっている京香殿も、上様のために、我々とは違う組織で働くものたちだ。下手をすれば、上様に対する反逆と取られてもやむをえんだぞ」

「ちよつと待った」

康太の声が、おみつの背中越しにひびいてくる。

「確かに、この二人は上様直属の組織に属してる人間だ。だが、この子は本当に幕府の威信を揺るがそうとしている危険な人物なのか？」

「康太」

「先生。これは、俺ごときが口を出す問題じゃないかもしれない。だがな、聞けば聞くほど腹が立つてしょうがねえんだ」

おみつの肩を抱く手に力を込めて、康太が軍太夫に詰め寄る。

「軍太夫さん、おみつちゃんが江戸に出てきたのは、幕府を脅かす

ためでも何でもない。いきなり

出て行ったじいさんと、故郷に帰るためだ。だいたい、この子を殺すことなんていつでも出来たは

ずだ。母さんの腹の中にいる時でも、子供の頃でもやろうと思えばいつだってよかったんじゃないのか」

軍太夫が、こちらから視線をそらし、目を伏せた。

「愛してたんだろう？ おみっちゃんも、母親も。愛してるから、今まで殺せなかった。そうだろう？」

思わず見上げた康太の横顔に勇気づけられて、おみつは再度、軍太夫を見つめた。

第四章 四日目・出生の秘密 其の四・

康太の言葉が心に突き刺さったのか、軍太夫はうつむいたまま動かない。

声をかけたいのに、おみつは、ただじっと見つめることしかできなかった。

ひとことでいい。軍太夫の口から、自分を愛しいと思った瞬間があったと言われれば、望まれて産まれなかった魂が、ほんの少しでも救われるような気がする。

しかし軍太夫は口を堅く閉ざし、時間だけが過ぎていく。

「林殿」

おみつのじれったさが頂点に達しようとした瞬間、今まで黙っていた源三が、静かに口を開いた。

「先ほど、あなたはおみつの母親を愛したことを『あやまち』と言った。しかし、本心は違うのではないですか？」

源三の『あやまち』という言葉が、おみつの心の傷を小さくえぐった。だが、それに反応したのか、軍太夫の顔が、かすかに源三の方を向いた。

「我ら隠密は、己を犠牲にして上様に忠義を尽くすのが暗黙の掟ですが、やはりその前に人間で

す。人間である以上、自分が愛し、慈しんだものをそう簡単に切り捨てられるとは思えません」

いつもと変わらぬ姿勢で語る源三の口調が、いつになく熱を帯びている。

「その証拠に、私が『おみつが伏せている』と告げたら、あなたは瞬だけ顔色を変えました。

話してくださいませぬか？ 本当の思いを。そして、おみつを母親から引き離した理由を」

軍太夫に向き直った源三の言葉が、おみつの胸を再度突いた。

「引き離した？ …… 母さんは、死んだんじゃないかったの？」

消え入りそうな声で問うたおみつに、軍太夫はうなずいた。とっ

さに康太の手を振り払って中に入り、父の前に座る。

「ひどいよ父さん。私を置いてけぼりにする前に、母さんを追い出してたなんて！ いくら、風魔の血を引いてるからって、そんなの……」

軍太夫の膝を何度も叩いたおみつの目から、また涙が流れ落ちる。

そんなおみつの拳を、軍太夫が握りしめた。驚き、見上げたおみつを一瞬だけ優しく見つめ、再度視線をそらす。

「……お二方の、言うとおりです。私は、母子を心の底から愛して

いた。しかし、私の弱さが、おみつの母親を紀州から追いやる遠因になったのです」

「父さん……」

『心の底から愛している』 父から出た思いがけない言葉に、おみつの視界が再度ぼやける。

「彼女が風魔の末裔であることを知ったのは、おみつが産まれてすぐのころでした。当時、若輩者

でありながら、紀州和歌山藩五代目当主であらせられた吉宗様のお側近くに仕えていた私のことを疎んじていた男が、こう語りかけてきたのです」

『軍太夫殿、新しい妻を娶^{めと}ったらしいな。もつぱらの評判だぞ』

その日の任務を終え、一旦宿所へ戻ろうとした軍太夫を、大月兵部^{ひょうぶ}が呼び止めた。

『妻？ ご冗談を。旅の途中で行き倒れた者たちを助け、住まわせているだけのこと。他意はござらん』

『そうか？ ずいぶん美しい娘と共に、子供をあやしている姿を見たものは数知れぬ。なあ』

ぎょろつとした目で無理やり笑顔を作り、周りにいた仲間らに声

をかける。

『あれは、知り合いの子をあやしていただけのこと。では、御免』

下卑た笑いを顔に張りつかせた男達の間を割り、出て行こうとした軍太夫の背中に、兵部が言葉を投げつける。

『徳川家の敵である風魔の娘とねんごろになっておると、吉宗公のご不興を買うぞ。お気をつけなされ』

（風魔の……娘？）

思いがけない兵部の言葉に、軍太夫の思考が止まった。

『やはり、ご存知なかったと見える。そなたがこの地に住まわせているあの父子は風魔の末裔。

今から五日前、里のはずれで風魔の下忍である『草』と呼ばれるものつつなぎを取っているのを、山口殿が見ておられる』

大きな目に、鼻筋の通った端正な顔に笑みを浮かべ、山口友三がうなずいた。この者も、兵部と親しい忍びだ。

『早いところあの父子を追いつか亡き者にすることですな。林殿。さもなければ、あなたの亡き奥方が遺した三人の愛息にも、何らかの危害が及びましようぞ』

友三の言葉が、辺りに再び嘲笑を呼び込む。

しかし、その嘲笑う声を引き裂くように人垣を割り、軍太夫は駆け出した。

城を抜け出し、林道を駆け抜ける軍太夫の耳に、獣の咆哮が飛び込んでくる。

娘は……本当に風魔なのか？ 妻を失った自分の寂しさを埋めてくれたばかりか、亡き妻との間にはなかった「真の安らぎ」を与えてくれた彼女が、旧敵の末裔とは、信じがたい。

しかし、「忠義第一」を叩き込まれた軍太夫の心は、月のない夜よりも深く、濃い闇に包まれてしまっていた。

第四章 四日目・出生の秘密 其の五・

吉宗が居を構えている城から半刻あまりのところに、父子が住んでいる家がある。

いつもは、月を愛でながらのんびり歩くのだが、今日は四半刻もかからぬ間に、目的地へと到着した。

『あら、軍太夫様。今日はいらっしやらないと仰っていたのに』

声を弾ませて出迎えた娘の腕には、まだ目も開けない愛娘、おみつが気持ちよさそうに眠っている。

『……話があるのだ。おみつを、小太郎殿に預けて来てはくれぬか』
平静を装ったつもりでも、声にとげを含んでいるのを感じ取ったのか、娘の顔がこわばった。

それに呼応するように、むずがるおみつの口から、小さな声が出た。

娘が本当に風魔の末裔なら、おみつも、風魔の血をひいた子供と
いうことになる。

藩主吉宗に絶対の忠誠を誓っている自分が、風魔との間に子をな
したことは、紀州和歌山藩のみ
ならず、徳川家への反逆にあたることは明らかだ。

娘が、おみつを預けに家へ入った。中から漏れるほのかな灯りと

ともに、軍太夫の心が揺れる。

『どう、されたのですか？』

か細い声が、娘の動揺を如実に表している。おそらく、自身の不安を感じ取ってしまっているのだろう。

口にすれば、娘の心を傷つけるのはもとより、返答によっては、この手で娘を斬らなければならなくなる。……無論、小太郎やおみつも。

しかし。

『軍太夫さま？』

『……そなた、風魔の血を引いているのか？』

軍太夫の中で育っていた愛よりも長きにわたる、徳川家への忠誠心がそのまま声になった。

娘の顔は見えない。しかし、軍太夫の口から出た「風魔」という言葉に驚き、戸惑っているさまがこちらにも伝わってくる。

嘘でもいい。違う、と言って欲しい。

軍太夫は心から願う。しかし、娘は何も答えない。

『なぜ、何も言わぬ』

沈黙に耐えかね、軍太夫は再度口を開く。

『……何と答えれば、納得してくださいますか？』

今度は、こちらが言葉に詰まる番だった。

納得する答えなど、とうに決まっている。しかし、その言葉を引き出したところで、胸の奥にくすぶってしまった火種が、そのまま消えてなくなるわけではないことも、軍太夫は知っていた。

『私は……嘘は、つけません。あなた様の仰るとおりです』

震える声で、それでもしつかりと、娘は言葉を紡ぐ。

軍太夫は天を仰ぎ、きつく目を閉じた。

『俺は、そなたを斬りたくない。……わかるな？』

『はい。近日中に父とおみつを連れ、この里を出て行きます。でも、これだけは信じてください。』

『私が、あなたを愛していることを』

そっと近づいてきた娘の声が、軍太夫の耳朵を通り抜ける。

『……さようなら』

触れたかどうかかわからぬ口づけを残し、娘は家へと入っていく。

いつものように抱きしめたくて伸ばした手を、軍太夫は引いた。もう、彼女と交わることを許さ
れないのが、心の奥底でわかっていたから。

おみつの目からこぼれる雫が、軍太夫の手に、何度も落ちた。

聞きたいことは山ほどある。でも、涙が邪魔をして言葉にならな
い。

「それで、おみつの母上殿はいかがされたのですか」

「翌朝、もう一度だけ顔を見たくて、あの家へ行きました。すると
そこには……」

いきなり、おみつの手が強く握られた。唇を真一文字に結び、何
かを堪えるように目を閉じた軍
太夫が、しぼり出すように続けた。

「私に『娘は風魔の末裔だ』と注進した大月兵部以下数人の忍びが、
無残にも斬り殺されており、
家の玄関で、背中に深手を負っていた小太郎殿が、泣きじゃくるお
みつを抱きかかえたまま倒れて
おりました。しかし、おみつの母は、身につけていた着物が散乱し
てただけで、どこにも……」

父の様子から察するに、恐らく、大月という男が小太郎と母に襲

いかつたのだろう。

ただ、風魔の末裔というだけで、ここまでひどい目にあわなければならぬのは、なぜなのか。

言いようのない怒りがこみ上げてきたおみつは、きつく唇をかみしめた。

第四章 四日目・怒りの渦

線香の煙がただよう室内を、重苦しい雰囲気包む。

父も兄も、源三や康太ですら口を開かない。

父や祖父に置いていかれた悲しみ、母が生きていた驚き。そして、風魔の血を引いているがゆえに、自分を含めた家族が、不遇のときを過ごした怒り……。

様々な感情が渦巻く中、今一番知りたいことを、やっとの思いでおみつが口にする。

「……母さんは、どこにいるの？」

「江戸にいることまでは突き止めたのだが、そこから先の行方がわからぬ。しかし、同胞が殺されていた状況から、風魔と行動を共にしていると見るのが妥当だ」

「もし、母さんを見つけたらどうするの？ まさか、殺しはしないよね？」

おみつはさすがのように、軍太夫を見上げた。ほんのかすかに、父の表情がゆがむ。

「……上様への反逆の志が見えるようならば、やむを得んだろう」

「どうして？ 母さんを、愛してるんじゃないの！？」

「私たちは、上様に仕えるために生きている忍び。愛や恋、家族のために、すべてを投げ打つ訳には」

「忍びである前に、人間だよ！　いくら上様を守るためだからって、そんなの……」

父の手を離し、おみつは叫んだ。また、言葉にならない思いが涙となり、頬を濡らしていく。

「母に、会いたいか」

軍太夫の低い声に、おみつは戸惑う。

物心ついてからずっと『死んだ』と聞かされていた母。今さら何を話せばいいか、どう接したらいいかが、わからない。

でも……、会えるなら一目だけでもいいから、会いたい。

母に、小太郎のおかげで大きくなったことを、伝えたい。

躊躇ちゅうちゆしながらもおみつは、軍太夫の顔を見て頷いた。

「……ならば私は、ここでおまえを斬らねばならん」

「林さん！」

軍太夫の言葉にいち早く反応したのは、入り口近くにいた康太だった。

その声でようやく、おみつも言われた意味を理解する。

「いや。本当はもっと早く……おまえの母が風魔であることを知った段階で、決着をつけておかねばならなかったのかもしれん」

軍太夫が、胸元から短剣を取り出す。

その手に光る刃を見つめたおみつの心を、やるせない気持ちが埋め尽くす。

自分はただ、これから祖父とともに穏やかに暮らして行きたくて、江戸へやって来ただけだ。

だいたい、おみつ自身に、徳川家に対する遺恨などは全くない。なのに、身体に流れる血の半分が風魔だと言うだけで、実の父に命を狙われ、幾度もなく危険にさらされた。

そして、そんな自分を助けるために川へ飛び込んだ京香は今、命の安否すらつかめなくなっている。

自分は、いらない人間なのか？　生きていては、迷惑をかけるだけなのだろうか？

『何言ってるの。新さんの妹なら、私や先生にとっても妹同然よ。迷惑だなんて思っていない』

父の配下に命を狙われる直前に言ってくれた彼女の言葉が、自分の存在を否定しかけたおみつの

脳裏によみがえった。

その瞬間、心の中で何かがはじけた。ある決意を胸に、おみつは立ち上がる。

「父さん。私、ここで討たれるわけにはいかないよ」

「何？」

軍太夫の険しい表情が、おみつを捉える。

「私、この江戸でやらなきゃならないことがあるの。それが終わるまでは、死ねない」

「今、表に出れば、私の配下がお前を亡き者にせんと動き出すぞ！」

身を翻して部屋を出ようとしたおみつの背中に、軍太夫が投げかける。

容赦ない父の言葉に、一瞬立ち止まる。しかし、心に溜まった怒りと悔しさは冷えなかった。

「やれるものなら、やってみたら！？」

今までの鬱憤を晴らすように言い返すと、おみつはそのまま部屋を飛び出した。

第四章 四日目・追手・

勢いよく道場を飛び出したおみつの周りに、殺気が忍び寄る。

父、軍太夫が手配した忍びが、自分と併走しているのがわかったおみつは、人気の多いところへ行こうと、身を翻して逆方向へ駆けだした。

身の軽さは自認しているが、護身用の小刀すら持たない今のおみつでは、囲まれただけで勝負がついてしまう。

自分の記憶が正しければ、少し先にある角を左に曲がると、庄屋が立ち並ぶ大通りに出る。

あと、少し。

あそこを曲がれば身の安全はとりあえず保証されるはず。

いつ飛んでくるかわからない手裏剣に神経をとがらせつつ、進路を左に取るうとしたおみつは、突然襲ってきた衝撃にはじかれ、尻もちをついてしまう。

「大丈夫ですか？ 父上」

少し慌てたような男性の低い声で、おみつは、人にぶつかってしまったのだと悟る。

「じ、ごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

慌てて起きあがり、恰幅のいい相手に手を差し出す。

「いやいや、平気じゃよ。お嬢さんこそ大丈夫かな？」

髪をきれいに結い上げた、頬のふつくらした老人に笑顔で問われ、おみつはうなずく。

しかし、おみつの手をとって立ち上がろうとしたその老人は、顔をゆがめて腰を押さえてうずくまる。

「父上。だから申したではありませんか。まだ治りきっていないゆえ、無理はしないように、と」

精悍な顔つきの侍が、おみつの反対側から支え、ようやく老人は立ち上がった。

「何を言う。忠直。こうやって歩かんと、足腰が弱ると医者が言っておったぞ。なあ、お嬢さん」

いきなり話を振られたおみつは、大きく目を見開いた。

「その娘に同意を求めて逃げようとしても駄目です。急いでおるのだろう？ 行きなさい。次からは気をつけるのだぞ」

「ありがとうございます。ごめんなさい、おじいちゃん」

忠直、と呼ばれた侍に促され、再び走り始めたおみつの背中に、老人の笑い声が聞こえた。

その声が、在りし日の小太郎の笑顔に重なる。

もしかしたら、野辺の送りをしないまま、小太郎の所へ逝かなくてはならないかもしれない……。

突如湧き起こる感傷を振り払うように、おみつは小さく首を振って、さらに一つ角を曲がる。

どうにか、人が多く行き交う通りへ出た。しかし、さっきとは別の人間の影が、少し距離を置きながらも、おみつの後ろについたのがわかった。

振り切れる、と思ったのは甘い考えだったか。

おみつは小さく舌打ちをした。一旦立ち止まり、大きく息を吸う。勢いよく足下を蹴り前へ進むと、建物の間に身を滑らせた。

しかし。

「おとなしくしてもらいましょうか。おみつ殿」

眼前に刃が突きつけられた。どうやら、別の忍びに先回りをされていたらしい。

「さすが軍太夫様の娘……と言いたいところですが、あなたにはこのまま、消えてもらわねばなりません」

薬売りを装った男が、おみつの後ろに目配せをした。

背後から間合いを詰めてくる男をかわすことができれば、まだ、勝算はある。

おみつは少しずつ息を吐き出し、一步だけ大きく下がる。その瞬間、男らの呼吸が乱れた。

おみつは後ろを見ずに、ひじを鋭く突き出した。刃がかすったような痛みと共に、男のうめき声が耳に入る。

「この！」

早い切っ先をよけた反動を利用して、目の前の男のみぞおちに拳を入れた。

手から離れた短刀を拾い上げ、おみつはそのまま駆け出した。

「待て！……」

もんどりうつているであろう男らに目もくれずに通りを突っ切り、すぐ近くの角にあった建物の扉を勢いよく開けて、中へと入る。

「だれ？」

衣擦れの音とともに、女性の鋭い声がおみつを迎え入れた。

「い、ごめんなさい。少しでいいから匿^{かくま}って欲しいんです」

「……おみつ、さん？」

自分の名前をいきなり呼ばれ、思わず顔を上げる。

すると、見覚えのある女性が驚いたような表情を浮かべ、こちらをじっと見入っていた。

第四章 四日目・手がかり

「確か、あなたは……」

目の前にいるのは、江戸へ来てすぐの頃、源三の家に泊まった翌朝に出会った女性、お小夜だった。

「一体、どうなさったんです？」

「ちょっと……」

心配そうな表情のお小夜が問うてくるが、はっきりとは答えられない。

扉の向こうで、複数の足音が近づく。顔色が変わったのを察知したのか、お小夜がおみつの手を引っ張り、ついたての向こうへ自らを匿ってくれる。

お小夜の手がおみつの肩を抱き、二人の身体がこれ以上ないほどに密着する。

おみつの鼻をくすぐる、甘い香り。今まで感じたことのない安心感に、なぜかおみつは、

（お母さん、ってこういう人のことを言うのかな）

と、お小夜の胸に頭を預ける形でぼんやりと思う。

「どうやら、行ってしまったみたいね」

お小夜の身体が、おみつから離れた。

「すみません。」ご迷惑をおかけして

頭を下げたおみつに、

「いいのよ。気になさらないで。でも、先生を心配させることをしては駄目よ」

微笑を浮かべながら、お小夜は身支度を始めた。

「どこかに、行かれるんですか？」

「ええ。仕事はまだ残っているものだから。……あら」

おみつのひじのあたりを見つめ、お小夜が袖をめくる。

「怪我をしているじゃないの」

さつき、忍びとやりあった時についた、ほんのかすり傷。

「大丈夫ですよ。これくらい。紀州にいたときはしょっちゅうだったから」

「……紀州？」

お小夜の手が止まり、おみつを凝視する。

「ええ。……何か？」

「いえ。別に」

おみつから視線をそらし立ち上がると、お小夜は戸棚から膏藥らしきものを持ってきて、傷口にやさしく塗ってくれる。

「さ、これでいいわ」

「ありがとうございます。あの」

さっきのお小夜の反応が気になったおみつの問いかけをさえぎるように、彼女は背を向ける。

「しばらく、ここにいるといいわ」

「え？」

「まだ、あなたを追っている人たちがこの辺にいるかもしれないでしょう？ 出る時に戸締まりだけお願いしますね」

「お小夜さんは……紀州にいたことがあるんですか？」

出て行くこうとするお小夜を呼び止めるように、おみつは声をかけた。

「いえ」

短く言うと、お小夜はおみつに目もくれず、外へと出て行ってし

まった。

一人取り残されたおみつは、小さくため息をついてその場へ腰を下ろす。

紀州、という言葉が出ただけで、態度が変わったお小夜のことが、気にかかる。

これはおみつの想像でしかないが、恐らく彼女は紀州にいただろう。そして、何かつらい思いをして、江戸へ出てきたのかもしれない。

江戸へ出てきてからつらい思いをしている自分とは正反対だな
おみつは自嘲的に笑った。

父からすべてを聞いた。いずれ、死なねばならない運命だろう。

だったらその前に、祖父の仇を討ちたい。いや、せめて、自分を助けてくれた京香を、自分の手で捜し出したい。

それだけを思い、後先考えずに道場を飛び出したものの、広い江戸で、自分はどうか動いたらいいの、今は皆目見当がつかない。

父の追手が確実に自分を追い詰めている。無鉄砲に動いても、自らの命を縮めるだけ。

どうすればよいものか。

思いを巡らせるが、何一つ解決策は浮かばない。それどころか、次第に眠気が襲ってくる。

少しだけ、眠ろうか。お小夜も、ここにいていいと言ってくれたし。

源三の部屋とほぼ間取りは同じだが、男所帯と違って掃除が行き届いているせいか、ちり一つ落ちていない。壁には豪華な刺繍をほどこした着物がたくさんかかっており、彼女の仕事が繁盛していることを物語っている。

「きれい……」

おみつは思わず、目の前にある黒い着物を手にとった。そのはずみで、横にかけてあった桃色の振袖が、おみつの足元に落ちる。

「いけない」

慌てて着物を拾い、元通りにかけ直した。そして裾を直そうとかんだおみつの目に、この場に似つかわしくない、地味な色の着物が乱雑に置いてあるのが見える。

たたみ直そうと手に取ったおみつの視線が、ある一点で止まった。

自分から向かって右側の袖口が大きく切り裂かれていて、人の血らしきものがべっとりといっている。

（この着物は……）

おみつを助けるために川へ飛び込んだ京香が着ていた小袖に、間違いない。

思わず、目の前の押入れのふすまを開いた。

しかし、人が寝ているような気配は感じられない。

（どうして、これがここに？ お姐さんをどこへやったの？）

お小夜に事情を訊こうと思ったおみつは立ち上がり、家の外へと飛び出す。

しかし、彼女の姿はもう、どこにも見えなくなっていた。

第四章 四日目・面影・

太陽が、初冬の江戸の町を西側から照らし始める時間。

突然出て行ったおみつを追い、康太と町へ出てきた源三だったが、彼女の行方は知れない。

『江戸へ出てきて間もない彼女が、そう遠くへ行けるわけもない』

そう源三は思っていたが、紀州の山奥を駆け回っていたおみつのことだ。どこへ飛んでいても
おかしくはないことに今さら気づき、小さくため息をつく。

それ以上に源三の心を支配するのは、おみつと共に川へ飛び込んだのに、安否不明な京香のこと。

人が多く行き交う大通りで、若い女性が笑いながら源三とすれ違
うたびに、この中のどこかに京
香がいないか、と、目で追う自分がいる。

今、先に捜しださなければならぬのはおみつだ。もし、彼女が
命を落としてしまっていたら、
京香が無事に戻ってきたとき、どう言い訳をしたらいい？

「先生」

立ち止まり、思いをめぐらせていた源三の前方から、康太が駆け
てきた。

「いたか？」

源三の問いに渋い表情を浮かべて、康太が首を横に振る。

「軍太夫殿の配下から身を守るためには、大通りだと思ったのだがな……」

独り言のようにつぶやいた源三に、康太も力なくうなづく。

「よし。路地裏を回ってみよう。もしかしたら、どこかの家に匿われているかもしれん」

すぐその角を曲がり、店の裏に出た。小路を川に向かって歩くと、源三の住む長屋の近くに出る。

「先生。あれ」

源三の少し前に行く康太が、左前方の角の家の方を指差した。見ると、おみつと同じような格好をした少女が、はるか前へ行こうとしているのが見える。

「おみつ！」

間違っただけでもかまわない。そう思った源三は叫んだ。

振り返った少女が源三と康太の姿を認め、血相を変えて近づいてきた。やはりおみつだ。

「心配したぞ。どこにいたのだ？」

「私のことなんかどうでもいいよ。それより……」

おみつが源三の腕を強く引っ張る。あの角の家は確か、縫物職のお小夜が、作業場として借りて
いるはずだ。

「どうした？」

「お小夜さんの家に、お姐さんの着物があつたの」

おみつの口から出た京香の名前が、源三の胸の奥を打つ。

しかし京香は、仕事で使うときの振袖の刺繍を、お小夜に頼んで
いるはず。

平静を装い、それをおみつに伝えると、

「違つうの！ あの晩に着ていた、灰色の小袖が……」

「何だつて？ では、京香はそこにいるのか？」

源三を見上げるおみつの顔が、泣き出しそうにゆがむ。たまらず
源三は駆けだした。

「先生！」

おみつと康太の声が追いかけてくるが、かまってはられない。

開け放たれた扉を越え、お小夜の作業場に入る。部屋の中央には、
おみつが置き去りにしたであ

ろう、京香の小袖が乱雑に置かれている。しかし、京香本人がここに
いる気配はない。

なぜ、着物だけがここにあるのだ？ お小夜が川に流された彼女
を見つけたのなら、本人
がいる
のが当然なのに。

手がかりになりそうではない、灰色の着物。それを持ち上げた
源三の手に、力がこもる。

「……ごめんなさい、先生」

後ろで、おみつの声がした。泣くのをこらえているのか、声が震
えている。

「おみっちゃん。自分を責めちゃいけない。京香だってそれは望ん
じやいないはずだ。な？」

自責の念に押しつぶされそうになっているであろうおみつを、康
太が励ましている。

「先生。とりあえず戻らないか。清水様が待つてるだろうし」

康太の声で、源三は今、自分が為さねばならないことを思い出す。
今すぐにでも京香を捜しに行き
たい衝動を押し殺すように着物を丁寧にたたんで立ち上がった。

「……よし。おみつ。とりあえず道場へ戻ろう」

源三から目をそらし、おみつは強く首を振る。

「おみつちゃん」

「父さんも、いるんでしょう？ 私まだ、死ぬわけには」

「私の父が、おみつに会いたいと言って訪ねてきているのだ。軍太夫殿も、父の前でそなたに手を出すことは絶対にはない。だから、一緒に戻ってはくれぬか」

おみつの言葉をさえぎり、源三は彼女の肩に手を置く。

「本当に？」

不安げな表情で、おみつが源三を見上げた。

突然訪ねてきた父の思惑が何であるかは気にかかるが、紀州にいたところの上司がいる前で、忠誠心を大切にする軍太夫が、娘に手は出せるはずがない。

そう確信した源三は、おみつの目をみてしっかりとうなずいた。

第四章 四日目・救いの手

木枯らしが、道場に帰り着いた源三らの身体をなめるように吹き抜けていく。玄関には、さつきよりも低くなった太陽の光が差し込んでいる。

「さ、おみつ」

草履を脱いだものの、足の止まったおみつを促し、源三は康太とともに小太郎の眠る部屋のふすまの脇を叩く。

「父上。おみつを連れて参りました」

ふすまを開け、窓を背に座っている天膳に声をかける。その姿を見たおみつが突然、

「おじいちゃん」

と父に声をかけた。

「おお、あの時のお嬢さんではないか。そなたが、おみつか」

「おじいちゃんが、先生の？」

源三と天膳を交互に見つめるおみつに、軍太夫が厳しい声で口をはさむ。

「これ、おみつ。口を慎め。この方は」

「よいよい、軍太夫。わしはすでに隠居の身。それにおみつにとつてみれば、もう『爺』だからな」

高らかに笑いながら、天膳が軍太夫を諭す。

一体、天膳は何のためにおみつに会いに来たのか？ 源三は、父に対する警戒心があることを肌で感じた。

「私に、何の御用ですか？」

「そなたと少し話がしたいのじゃ」

天膳が、改まった口調で訊ねるおみつに答え、目で合図する。

向かい合わせで座った二人の間に、源三は腰を下ろした。康太はおみつの後ろに座る。

「そなたの出自は、軍太夫からだいたい聞いておる」

表情を引き締めた天膳が、口火を切る。すると。

「……おじいちゃんも、私を殺しに来たんですか？」

顔をこわばらせたおみつが、静かに問い返した。

「なぜ、そう思う？」

「父さんが、私を殺そうと動いていたから」

一瞬だけ軍太夫を見つめ、おみつはすぐに天膳に視線を戻す。

「そなたは軍太夫に、まだやらなきゃいけないことがある、と言って出て行ったそうだな。それは一体何じゃ？」

「……そこで眠っている、じいちゃんの仇を取りたいんです」

「ほう」

天膳の相槌を受けて、おみつは死んだ祖父と紀州へ帰りたいかっと思いを語りだす。

それは、源三が今朝考えていたのと、ほぼ同じ願いだった。

身体の中に流れる風魔の血なんか関係ない。自分はただ、小太郎とともに今までどおり暮らしていければ、それでよかったのだ、と。

「もし、小太郎殿を殺害した人物が公儀の者であつたとしても、その思いは変わらぬか？」

おみつの言葉が切れたのを見計らい、天膳が彼女に問うた。

顔には笑みを浮かべているが、目の奥には何を考えているかわからない輝きを秘めている。

一瞬、天膳についてきた忠直と目が合った。たぶん、兄も同じ感想を持っているのだろう。

しかし、おみつはそれに構わずに言い切った。

「変わりません。たとえ、じいちゃんを殺したのが父さんだったとしても、仇を取ります」

忠直の側に控えていた軍太夫が再び短刀に手をかけ、膝を立てた。しかし天膳がそれを制した。

「それは、お上への反逆罪じゃ。そなたが公儀のものに手をかけたとあれば、軍太夫のみならず、わしのもとで隠密として庶民のために働いている源三や、新吉をも裏切る行為になりかねん。それでも、仇を取るというのか？」

天膳を見つめるおみつの目に、動揺の色が浮かんた。

「それは、お姐さんを、京香さんを裏切ることにもなるんですか？」
身を乗り出すように訊ねるおみつに、天膳ははつきりとうなずく。今まで目をそらさずに父を見ていた彼女が、初めて目を伏せた。

そんなおみつを見つめる天膳の表情は柔らかいまま、変わらない。しかし、それと対照的に、軍太夫のやや後ろに座っている新吉の顔は、源三自身が見たことのないほど、こわばっている。

「それは……できません」

しばしの沈黙のあと、おみつが再度天膳を見て言い切った。うな

ずいた天膳の顔に、笑みが浮かぶ。

「軍太夫。この娘、わしが預かるう。すぐに手の者を城へ帰すのじや」

「父上！」「清水様！」

天膳の宣言に、側に控えていた忠直と、軍太夫の声が重なる。突然のことに源三も思わず、新吉や康太と顔を見合わせた。

第四章 四日目・掟

「私が、おじいちゃんのところ？」

戸惑うおみつに、天膳が笑顔でうなづく。

源三は、信じられない思いで天膳を見ていた。父がおみつを保護してくれるのは願ってもないことだが、火種を抱え込むことになりはしないだろうか？

源三の、そして軍太夫の気持ちを察したのか、天膳がゆっくりと立ち上がる。おみつが、後に習った二人を不安げな表情で見上げてくる。

「おみつ。心配せずともよい。おとなしくここで待ってるのだ。忠直、頼むぞ」

父の言葉に、忠直が浅く頭を下げる。その様子を見たおみつも、天膳に向かって小さくうなずいた。

「清水様。いつたい、どういふつもりでございますか」

廊下を渡り、道場へ移るとすぐ軍太夫が天膳に詰め寄った。丁寧な口調ながら、言葉尻にはとげが混じっている。

「風魔の血を引くおみつをお手元に置けば、清水様のみならず、上様の御身にも危険が及ぶのは必定」

言葉を紡ぐたびに、形相が変わっていく軍太夫を見つめる父の目は、さつき、おみつを見ていた時と全く変わらない。

「どうか、この件だけは私にお任せ願えないでしょうか？ 伏して、お願い申し上げます」

「……それはならん」

「清水様！」

なおも言い募る軍太夫を、天膳は手で制した。

「あの娘は、良くも悪くもまっすぐな気性の持ち主じゃ。抑えつけようとすればするほど反発し、我が道を行こうとする。そうではないか？」

軍太夫が言葉に詰まったさまが、隣にいる源三にも見てとれた。父の言う通り、源三が江戸へ来たばかりのおみつと出会ったのも、新吉が抑えていたからだし、天膳と会ったのも、軍太夫が彼女を殺そうとしていたからにほかならない。

「そんなおみつが我々に反発し、生き別れた母がいるかも知れない風魔側へ行ってみよ。あの娘はたちまち、最大の敵になる」

軍太夫と自分の目を交互に見つめる天膳の表情が陰しくなった。

父の言う通りだ。

軽い手合わせの場で、とはいえ、自分や新吉と同等の実力を持つ京香をあそこまで追いつめた彼女を、風魔側へやるわけにはいかない。

「しかし」

「心配はいらぬ。抑えつけない限り、今のおみつは決して我らを裏切るようなことはせん」

「なぜ、そう言い切れるのです？」

軍太夫は、厳しい表情でなおも詰め寄った。

「おみつはわしの姪を……、京香を裏切ることとはできないということだ」

「父上！」

父の意図を察した源三が、とっさに叫んだ。

「源三。あの娘は今、京香に負い目を感じているはず。でなければ、あそこまでの勢いを自ら殺すような真似はすまい。違うか？」

「父上の仰る通りです。しかし、京香の存在をちらつかせることでおみつをここに止めておくことは、いささか」

「源三。私たちの仕事は、そういうものではなかったのか？」

いつになく低い声で、天膳が言う。目の奥の妖しい光が、源三の心を射抜いた。

目をそむけ、握り拳を作った源三に、天膳が追い打ちをかける。

「例え親兄弟であろうと、愛する妻であろうともその屍を越えてゆかねばならん。それは、お前自身がわかっていなければならないことのはず」

わかっている。江戸の庶民のためならば、わが身を、そして仲間
の命ですら捨て置かねばならな
い時があることを。

しかし……。

京香を喪つかもしれない恐怖と闘っている今の源三には、父が、
彼女を利用しようとしているこ
とに、我慢がならない。

いくら掟とはいえ、おみつを助けたいと願った京香の思いを踏み
にじるような真似だけはしたくない。

大きな目を細めて笑う京香の顔が、源三の脳裏に浮かんでは消え
る。

天膳がおみつにかけようとしている呪縛を解くには、一刻も早く、
京香を生きた状態で見つけ出
さなければならぬ。そう思った源三が顔をあげた時、忠直のもの

らしき、荒々しい足音が近づく。

「御免」

扉を開けた忠直の手には、お小夜の家で見つかった京香の小袖が握られている。

「父上。これから、縫物職人のお小夜なる者の家へ参ります」

「その着物は？」

「おみつがお小夜さんの家で見つけました。京香の着物でございます」

源三の進言に、天膳の顔色が変わる。そして今ひとり。

「忠直殿。私もお供させてはもらえませぬか」

源三の隣に座していた軍太夫が、青ざめた表情で申し出てきた。

第四章 四日目・不安・

「一体、どうしたというのじゃ？」

突然の申し出に、天膳が問う。忠直も、驚いた様子で軍太夫を見た。

源三を含む三人の視線に、躊躇ちゆうしゆしていた軍太夫だったが、重い口を開く。

「お小夜という名は、おみつの母と同じなのです」

「まことか？」

普段、滅多なことでは動じない天膳の聲が、心なしか上ずったものになる。

源三も思わず、軍太夫を凝視した。

「お小夜という名はどこにでもある名前ですが、もし、その者がおみつの母親であるならば、京香殿は……」

軍太夫が口をつぐむ。その先は、言葉を発しなくても容易に想像がついた。

お小夜が、軍太夫の愛した女性ならば、京香は今、風魔の手に落ちている。もしくは、すでに亡きものに。

その考えを封じるように、源三は、目をきつく閉じた。

京香ほどの女性が、簡単に命を失うはずがない。いや、そうあってはならないのだ。

源三は、自らの弱い心にそう言い聞かせるのが精一杯で、言葉を出せない。

重苦しい雰囲気が、気温が下がってきた広い道場を包む。

「よし。忠直、おみつはわしにまかせて、源三と軍太夫を連れてお小夜とやらの家へ向かえ」

天膳の言葉が、この空気を切り裂いた。と同時に、源三も目を開ける。

京香はきつと生きている。今はそれを信じ、一步步真相に近づくしかない。

「かしこまりました」

硬い表情のまま目配せしてきた忠直を見返し、源三は、軍太夫とともに立ち上がった。

「どこに行くの？」

裏玄関へ向かって歩く源三らに、こわばった表情のおみつが訊ねてきた。

「確認したいことがあって、お小夜さんの家に行くのだ。おみつは

「ここで待っているのだぞ」

おみつの肩に手を置いて、源三が語りかける。

「私は、連れていってくれないの？」

おみつの目が、まっすぐに源三を見つめてくる。

「今は、そなたを連れて行くわけにはいかないのだ。わかってくれ」

「じゃあどうして父さんがついていくの？ お姐さんのことは関係ないじゃない」

軍太夫に目をやり、おみつがなおも問うてくる。源三はもちろん、誰もが言葉を失う。

「……まさか、母さんに関係があるの？」

三人の間にたゆたう空気の意味を察知したのか、おみつの手が、袖口をつかんだ。

「ねえ、先生。そうなんでしょう？」

今にも泣き出しそうなおみつの震える声が、源三の胸を刺す。

「まだ決まったわけではないが、縫物職人のお小夜という女性が、そなたの母である可能性が出てきたのだ」

何も言えない源三の代わりに、忠直がおみつに告げる。

「……お小夜さんが、私の？」

「それを確かめられるのは、軍太夫殿ただ一人。もし、お小夜殿がそなたの母ならば、京香をどこへ連れて行ったのかも問い正さねばならない。私も父も、そして源三も、そんな姿をお主には見せたくないのだ。わかるな？」

表情を崩さず、淡々と忠直が続けた。顔をゆがめたおみつが、源三の袖を握りしめたままうつむく。

「おみつ。母や京香のことはこの三人に任せて、我らは小太郎殿の野辺の送りの支度をせぬか？
そなたの気持ちも痛いほどわかるが、小太郎殿のご遺体を、いつまでもこのままにしておくわけにいかんだろう」

「どうしても、連れて行つてはくれないの？」

下を向いたまま、おみつが、涙声で誰とはなしに訊ねてくる。

「小太郎殿亡き今、風魔の次の狙いはおそらくそなたに移るだろう。そなたを救おうとした京香の気持ちに報いるためにも、風魔側へ行かせるわけにはいかないのだ。ここはこの爺に免じて、呑んではくれんか？」

京香の名を出した父の言葉が、源三の胸に突き刺さる。こんなこと、自分の存在を利用して

いると知ったなら、京香は一体どう思うだろうか。

「おじいちゃん……ずるいよ」

それだけ言うと、おみつは源三の袖口から手を離れた。

おみつは、わかっている。京香の名を出せば、自分が動けなくなるのを父に看破されていることを。

「もし、お小夜さんが母さんだったら、どうするの？」

涙に濡れたおみつの目が、今度は軍太夫を見据えた。

「京香殿の居所を知るやもしれん重要人物だ。……今は、殺しはせん」

厳しい視線をおみつに向けて、軍太夫が言い切った。

おみつが一瞬だけ、安堵の表情を見せた。しかしすぐに顔を曇らせ、独り言のようにつぶやく。

「もし、お小夜さんが母さんだったら、お姐さんは……」

「おみつ。京香は死にはせん。わしの姪は、そんなやわな女ではないぞ」

「おじいちゃん……」

天膳の方を向いたおみつの頬を、一筋の涙がこぼれ落ちる。

「さ、急げ。日が暮れぬうちに手がかりをつかんでくるのじゃ」

おみつと天膳を交互に見つめてうなずくと、源三は、忠直らと夕暮れの空の下へと飛び出した。

第四章 四日目・再会・父と母・（前書き）

【用語解説】

・表長屋……表通りで町人たちが店を借りて暮らしている長屋のこと。店は八百屋、魚屋など、庶民の生活に密着しているものが多い。

・裏長屋……表通りからひっそんだ長屋のことで、一般住居を指す。

第四章 四日目・再会・父と母・

鴉^{からす}の鳴き声が、赤く染まった夕空に響き渡る。

軍太夫や忠直とともに長屋へ着いた源三の目の前に、大きな人垣が出来ていた。

「あ、先生！ ちょうどよかったよ」

源三の向かいに住む左官職人、為吉の女房おつるが、大きな身体を揺らして駆けてくる。

「一体どうしたのだ」

おつるに手をひかれた源三が表長屋へ近づくと、いきなり、甘い香りが鼻をついた。

「何だ？ この臭^{にお}いは」

「わからないけど、突然辺りに漂いだして……。一体、どこでこんなもの焚^もいてるんだよ」

おつるも、そして忠直もせき込みながらようやく言葉を出している。

一瞬、甘く感じた空気中の臭気は、徐々に刺激を伴って源三の鼻腔を強く刺激し始める。

「もしか、これは……大麻」

「大麻？」

口元を押さえた軍太夫が、源三の問いにうなずく。言われてみれば確かに、源三にも覚えのある臭いだ。

大麻は、標的の人物に暗示をかける際に用いる、麻薬の一種。修行時、そのように教えられた記憶がある。

「すまぬが、お小夜さんの家に案内していただきたい」

軍太夫が二、三度せき込んだのち、源三を見た。

忠直の方へ目をやるが、彼は、長屋の人達への対応でおおわらわだ。やむを得ず、源三は軍太夫を連れて、人垣とは逆の方へ歩き出す。

喧騒が遠ざかり、裏長屋のお小夜の家へ近づくにつれ、源三の鼻を襲う刺激臭が強くなるのがわかる。

まさか、お小夜が家で大麻を焚いたのか？　だとすれば、何のために。

もし、彼女がおみつの母で、川へ飛び込んだ京香を助けたならば、その目的は……。考えただけで恐ろしい。

「どうされました？　お顔の色がすぐれませんが」

「いえ、別に……。こちらです。お小夜さん、いるか？」

玄関先に軍太夫を案内し、襖の木杵を軽く叩く。しかし、中からの返事はない。

仕事か？ いや、そんなはずはない。

「お小夜さん」

再び問うても、反応がない。腹に据えかねた源三は、思い切って目の前の襖を開いた。

すると、外の空気に染まるのを待ちかねていたような強い臭気と煙が、源三らを襲う。

「……源三殿。この空気が漏れては……」

顔を覆い、せき込みながら言う軍太夫にうなずく。素早く土間へ足を踏み入れ、扉を閉めた。

「やはり、ここが大元か」

くぐもった声で、軍太夫がつぶやいた。

いてもたってもいられない源三は、白くたちこめた煙の向こうに目を凝らす。

女性の一人住まいだけあって、部屋はきれいに掃除されているのがわかる。ところが、中央に敷

いてあるせんべい布団が、不自然な形でめくれていた。

「源三殿！」

軍太夫が制するのにも構わず、源三は部屋の中央へ歩を進めた。

冷えた布団の中央が、ほのかに温かい。確かに、この上で誰かが寝ていた。

大麻が焚きしめられたこの部屋で、お小夜が寝ていたとは考えにくい。

と、いうことは……。

思いを巡らせた源三の後方から、小さな物音が聞こえる。

「……お小夜」

軍太夫の声に振り向くと、開いた扉の向こうに、目を見開いたお小夜が立っていた。

近くにいた軍太夫が、身をひるがえして逃げようとする彼女の手を引き、襖を勢いよく閉める。

「一体……何の用です」

低い声で、お小夜が問ってくる。動揺が隠しきれないのか、顔は青ざめ、身にまとう茶色の着物の袖口が小刻みに震えている。

一方の軍太夫も、普段の冷静なたたずまいはなく、顔をこわばらせたまま、お小夜を凝視している。

「お小夜さん」

緊迫した空気に、源三が割って入る。お小夜の血走った目が、源三に向けられた。それは、いつも穏やかな笑みを絶やさなかった彼女のものではなかった。

「ここで、何をしていたのだ？ お小夜さん」

はやる気持ちを抑え、源三は慎重に訊ねた。

「別に何も……。先生こそ、人の家に勝手に上がりこんで、何をするおつもりですか？」

「ここで、一人の女人に暗示をかけたのではあるまいな」

源三が一番訊きたかった、しかし、訊くのが恐ろしかった内容を、感情のない声で、軍太夫が問う。

「何を仰っているかが、わかりませんが」

「とばけるな！」

軍太夫の怒号が、部屋に響いた。しかし、お小夜は顔色を変えることなく彼を見据え、逆にこう問いかけてきた。

「……だとしたら、どうするおつもりで？」

第四章 四日目・取引・

軍太夫の手を振りほども、冷やかな声でお小夜は訊ねてきた。

「京香を……どこへやったのだ」

頭に血が上るのを感じながらも、源三はぐっとこらえて問い返す。

しかし、お小夜は答えない。さっき血走っていた目には妖しい輝きが宿り、唇の端は、源三らを
あざ笑うかのように上がっている。

「お小夜さん！」

「私たちの企みを阻まんとするあなた方に、そう簡単に、教えるとお思いですか？」

お小夜の言葉で、源三は京香が風魔の手中に落ちていることを確信する。

「では、今回のことは……」

「ええ。私たち先祖を虐げ、蹂躪してきた徳川幕府への恨みを、風魔というだけで、人を使って私
たちを消そうとしたあなたへの恨みを晴らすためには、どんなこと
でもします」

「待て！ それは違う」

「何が違つんです？ あなたに別れを告げられた翌朝に、紀州藩お抱えの忍び衆が私たちを襲つてきたんですよ。あなたの指図でなければ、だれがそんなことをしたと言つんです！？」

互いを見る目が、激しくぶつかる。

「父を殺され、泣きじゃくるおみつの目の前で、あなた以外の男に手ごめにされようとした私を助けてくれたのは、仲間たちだった……。子供がいては邪魔だと言われ、死んだ父の腕に抱かれたままの娘と別れなくてはならなかった私の気持ち、あなたに理解できますか？」

お小夜は源三に目もくれず、軍太夫を見据えて言い切る。

『敵陣』となつた紀州の山奥に、愛娘を置いて行かなくてはならなかった母の悲しみが、風魔に捕われた京香を思い、苦しむ自分の心に重なるような気がして、源三はお小夜から目をそらす。

「その娘を……おみつを悲しませてでも、本懐を遂げると言つのか」

「……おみつを？」

「そうだ。おみつは今、我らが手中にある。そして、そなたがどこぞへ隠している京香殿の安否を案じ、心を痛めているのだぞ」

お小夜を諭す軍太夫の顔は、変わらない。しかし、お小夜の表情

は一変した。

今までの、憤怒に満ちた表情は影をひそめ、こみ上げる感情を抑えきれない様子で、じつと一点を見つめている。

「おみつに……あの子に、会わせてください」

突然の申し出に、軍太夫の表情が再度こわばった。無論、源三も。

「会って、どうするというのだ」

「それは……」

一段と低くなった軍太夫の声。言葉に詰まったお小夜が、さすがのように彼を見上げている。

「よかるう」

「軍太夫殿！ 何を」

「ただし、条件がある」

「……条件？」

真意がわからず声をあげた源三を制した軍太夫は、お小夜のこわばった表情を冷めた表情で見つめ、続ける。

「そなたが捕らえた京香殿の身柄を、速やかにこちらへ渡すこと。

そして、奉行所へ自首せよ。さすれば、お上にも慈悲はある」

お小夜の顔が、たちまち青ざめた。

「私に、仲間を売れと仰るのですか!？」

「できぬと言うなら、そなたの願いを受けることはできん」

「あなたって人は……。己のためなら、娘をも利用するのですね」

お小夜の表情に、再度怒りの色がにじみ出る。

「改めて言う。おみつをこれ以上悲しませたくないのなら、我らの申し出を受けた方が賢明。明日の朝まで時をやる。よく、考えるのだな」

最後通告を出した軍太夫を見上げたお小夜は拳を握りしめ、何も言わずに外へと出ていく。

「お小夜さん! …… 軍太夫殿、一体何を考えておられるのです?」

「心配はいりません。あなたには耳の痛いことかも知れませぬが、風魔が、暗示をかけたであろう京香殿の命を奪うことは、まずないでしょう。お小夜も、おみつに会いたければこの話を吞まざるを得なくなる。その時が、勝負です。風魔の動向が気がりではありませんが、今しばらく、辛抱してください」

軍太夫が、表情を変えずに頭を下げてくる。

自分の父、天膳が京香の存在でおみつを説き伏せたように、軍太夫はおみつの存在を巧みに利用し、お小夜に揺さぶりをかけた。

これが、忍びのやり方なのか。こうやらなければ、目的を遂行することはできないのか？

京香の件に関する決断について、軍太夫に言いたいことは山ほどある。しかし今は、お小夜の決断にすべてを任せるよりほかはない。

源三は、京香をいまだ救えない自分の無力さを呪い、彼女が出て行った方向を見つめ、唇を噛んだ。

第四章 四日目・浮遊・

お小夜が去り、この家に用事のなくなった源三と軍太夫は、忠直にこのことを告げるため、表長屋に向かっていた。

お小夜は、軍太夫の申し出を受け、京香を返してくれるのだろうか。

不安だけが、今の源三の心を支配する。

「勝手に事を運んでしまい、申し訳ありません」

前を見たまま、軍太夫が謝罪の言葉を口にする。

「いえ……。突然のことで驚きましたが、今は、この方法しかないように私も思います」

今、風魔の手に落ちている京香との細い糸をたぐり寄せるには、お小夜の親心にすべてを託すしかない。

「源三！ どこへ行っていたのだ」

お小夜と源三の住まいから表長屋までは、そう距離がない。二人の重苦しい雰囲気は、近所の人たちの喧騒に、再びかき消される。

「実は……」

源三が耳元で今までのことを手短に報告すると、忠直の眼差しが一段と鋭くなった。

「わかった。お小夜の動向はこちらの手の者にも探らせておこう。

それよりも、長屋の住民に体調

を崩しているものも出ておる。源三、康太を呼んで来い。軍太夫殿は奉行所へ赴き、ことの次第を

奉行にお伝え願いたい」

「かしこまりました。小石川養生所への手配も済ませておきましょう」

「頼む」

軍太夫が会釈をして、素早く走り去る。源三も、感傷を振り切るように身をひるがえした。

「源三」

「はい」

もう一度振り返った源三に、忠直が厳しい表情を崩さずに言う。

「お小夜のことは、しばらくおみつには伏せておくのだ。よいな」

もちろん心得ている。せめて、京香が生きてこちらへ戻ってくるまでは、母のことは言えない。

源三は頭を軽く下げて、忠直に背を向けて駆け出した。

「あ！ 先生」

聞き覚えのある声とともに、夕焼けを背に、康太が走ってくる。

「ちょうどよかった。お前に頼みたいことがあるのだが」

「それどころじゃないんだよ先生。実は……」

源三の言葉をさえぎり、康太は声をひそめてある事実を告げる。

「小太郎殿が、生きている？」

「ああ。林さんの話だと、小太郎さんの背中には大きな傷があるだろう。もちろん、おみっちゃんもそれは知ってる。着物を着換えさせようとした新吉が、彼の身体を返したときに見たら」

体内を回らなくなった血液が、背中に大きなあざを作っていたものの、そこにあるはずの傷跡が全くなかったというのだ。

「おみっちゃんは訳がわからなくて混乱しているし、清水様も心なしか慌ててる。もし、小太郎さんが風魔側についてたら……どうするよ？」

お小夜が、おみつの母だとわかったただけでも大打撃なのに、祖父までもが風魔についていたとすれば、彼女の心が風魔側へ一気に傾くのは目に見えている。

「新吉は？」

「それが、何考えてるんだかさっぱりわかりやしないんだよ。無言のままじっと考え込んでるかと思つと、突然外へ飛び出して行つちまつて」

「外へ？」

「ああ。心当たりがある、って言つてたけど」

後頭部を搔きながら、心底困り果てた顔で康太がつぶやく。

「わかった。俺は道場へ戻るから、すぐその表長屋に行つてくれ。大麻が焚かれていて、具合が悪くなつたものも出ているらしい。養生所からも応援が来る」

「おみつちゃんのこと頼むわ。先生」

康太の肩を叩き、歩を速めた源三は、ほどなく道場へ着いた。

引き戸を開く音を聞きつけたおみつが、動揺を隠しきれない様子で源三に歩み寄ってくる。

「先生！　じいちゃんが……」

「ああ、さつき康太に聞いた。新吉が心当たりを捜しに出ているそうだな」

「うん。でも、心当たりつてどこなんだろう。兄さん、じいちゃん

に会ったことあるのかな」

独り言のようにつぶやいて、おみつがすぎるように源三の袖口をつかんだ。

しかし新吉は、小太郎の顔を知らないはず。彼の言う『心当たり』とは何なのか？

源三は、今後のことに思いをめぐらせようとするが、よい策が浮かばない。

おみつの母だったお小夜のこと。生きていた小太郎のこと。そして、囚われの身である京香のこと。

絡み始めた事実を解きほぐそうとすればするほど泥沼にはまり、頭が真っ白になる。

これからどう振る舞えばいいのかわからない源三の心は、完全に宙に浮いていた。

第四章 四日目・五里霧中・（前書き）

突然失礼します。作者の笠原です。

本日、50話の後半部分を修正致しました。
読者の方に混乱を招く事態になったことを、心よりお詫びいたします。

今後は、このようなことがないように気をつけて執筆してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2007・04・24 笠原綾乃

第四章 四日目・五里霧中・

道場を飛び出した新吉の目に、沈みかけた夕陽が飛び込んでくる。

あまりの眩しさに目をそらした先の空は闇に溶け始め、もうすぐ江戸の町に夜の帳が下りてくることを告げている。

まるで、自身の今の心境を表すような色だな 新吉は自嘲的に笑って、肩をすくめた。

幼い頃から『守らなくてはならない妹』だった、おみつ。

その妹が、幕府のかつての敵だと聞かされていた、風魔の血を引く娘だった。

父はともかく、兄がなぜ、おみつにあれほど冷たく当たったのかわからずに反発していたが、今なら、その理由がわかる。恐らく、上の兄二人は早々に聞かされていたのだろつ。

もし、自分が兄らと同じ時期にこれを聞かされていたらおそらく、同じ態度を取っていたに違いない。

なぜ、父は、自分だけにおみつの出自を明かさなかったのか？ そんな疑問が、新吉の中に湧き上がる。

確かに、幼いころの自分は、兄二人がすぐにできることをいつまでもできなかった。

林家の劣等生。そんな見方が、父、そして兄にもあったことを薄々気づいていた。だから家族と別れさせられ、独り、厳しい修行に身を投じなければならなかった。

そう考えて源三や京香、そして康太らに負けないように、何より、父や兄を見返してやるという

気持ちがあくじけそんな新吉の心を支え、耐え抜くことが出来たのだ。

その結果が『庶民のための御庭番』であるこの役目。上様を守る父や兄と違い、庶民を直接守るこの仕事は、やりがいと大きな充実感を与えてくれている。

しかし、今回のことに関して言えば、充実感どころか、虚しさだけが自身の心を支配する。

今まで以上にはつきりとわかった父子の溝、おみつが、風魔の末裔であったことすら知らずに川へ飛び込み、生死不明になってしまった仲間。

かけがえのない妹であったはずのおみつの存在が、新吉の価値観を壊し始めている。

その証拠に、おみつの出自を知ってから、彼女の顔すらまともに見ることができずにいた。

そんな新吉に追い打ちをかけたのは、おみつの祖父、小太郎が生きているという事実だ。いたたまれなくなつて『心当たりがある』と言って外へ出てきたが、そん

なもの、どこにもない。

おみつ自身は、何も変わっていない。風魔の血を引いていると聞かされても、彼女を助けてくれた京香を思つて涙を流し、自らが助けたいと願っているだろう。

そんなおみつを見守る源三も、康太も態度は何も変わらない。いや、それどころか、新吉の心とは裏腹に、『おみつを守る』という意味は強くなっているように見受けられた。

自分は、どうすればいい？　これから先、おみつを妹として慈しみ、守るにはどう気持ちを切り替えていけばいいのだ？

大店ばかりが並ぶ表通りを歩く新吉の身体を、木枯らしが強くなめていく。

両手を胸の前で組んで肩をすくめ、視線を上げた先に、今朝取り逃がした浪人、平沼が歩いて行くのが見えた。しかも、茶色の粗末な着物に袖を通した、見覚えのある女性を連れている。

あれは確か、源三の近くに住んでいる、縫物職人のお小夜だ。

なぜ、二人が連れ立って歩いているのかはわからぬが、新吉は再度距離を取り、平沼のあとをつけていく。

表通りの一角にある両替商の加納屋を曲がり、やや広い路地を抜けたところの突き当たりにある

竹垣が囲った家に、二人は入って行った。

「……ここは」

今朝、康太が最初に回ろうと言った良庵の診療所だ。

新吉は、音を立てずに玄関横の竹垣に近寄る。すると、しわがれた大きな声が耳に届いた。

「何？ あの量をもう使い切ったと言うのか！？」

「ええ。思いのほか、痛みが強く出たようでしたから、患者を楽にするために」

高く、冷えた声。源三の家の前で会う時とは全く違う声音に、新吉の背筋が寒くなる。

「馬鹿を申せ。確かにあの薬は痛みを和らげ、一時的には体が回復する。しかし、その後には」

「わかってますよ。先生。その症状を抑えるためにも、あの薬が必要なんですから」

「對馬殿^{たいま}」

お小夜の声が、平沼の下の名前らしき名を呼ぶ。

「断る」

「断ってもいいのかい？ 先生。あんたがこちらに提供した薬は、

元々御禁制の品だ。それがお上にばれちゃ、都合が悪くなりはないか？　な、次期御殿医殿」

平沼が、良庵の言葉を封じたらしい。衣ずれの音が気になった新吉は、そつと竹垣の穴から中をうかがう。すると。

「……今回限りじゃ。これ以上これを使わば、あの娘は死に至るぞ」

良庵が、平沼とお小夜の膝元へ白い包みを差し出したのを、夕焼けがはつきりと映し出した。

「あの娘が死のうが、俺らには関係ない。役に立たなければ、これを使つまでもなく殺すだけよ」

低い声で吐き捨てた平沼がお小夜とともに立ち上がり、近づいてくる。新吉は慌てて物陰に身を

隠し、奴らが歩いて行くのを見送って立ち上がった。

第四章 四日目・五里霧中・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第四章 四日目・心の闇・（前書き）

【用語説明】

・『煎^{せん}』：示現流の構えの一つで、垂直に立てた刀身を、体の中央に近い位置に置く構えのこと。

第四章 四日目・心の闇

連れ立って歩く平沼とお小夜は大川橋を渡り、地蔵のある小路を抜けて、新吉が今朝、彼を見失った笹やぶへと入っていく。

今朝のように襲撃されてもいいように、新吉は胸元から短剣を取り出し、辺りに気を配りながら歩を進めていく。

笹やぶの奥にある絵馬堂は古くから使われていないのか、壁のあちこちに穴があき、これ以上強い風が吹こうものなら、屋根ごと飛んでいきそうな様相を呈している。

周りを見回し、うなずきあった平沼とお小夜が、建物の中へ姿を消した。

その後を追う新吉の周りで、鴉が異様な鳴き声をあげた。

落ち葉を踏みしめる音が、少しずつ自身のいるほうへ近づく。

足音が止まった。

新吉は即座に目の前の大きな笹の木に身を隠す。

すると、新吉のいた場所へ手裏剣が二本、乾いた音をたてて突き刺さった。

新吉はすぐ隣の木の蔭へ移動し、その間を縫うように歩を進めながら刃を抜く。

すると右前方から、全身を黒の忍者装束に身を包み、目から下を覆面で覆った忍びが、新吉に襲いかかってくる。

逆手に持った短刀で相手の刀をなぎ払う。

辺りを見回すと、ほかに誰もいる気配はない。

随分となめられたもんだな。新吉は小さく鼻で笑い、目の前の忍びに向かって短刀を振りおろす。

しかし、その太刀筋は簡単に払われ、そのまま長刀が振りおろされる。

「ちっ！」

隙だらけだった体の前面を守るためにかざした手から、血がひとすじ流れ落ちた。

こいつ、ただ者じゃねえ　弾む息を整え、逆手に持っていた短剣を持ち直す。

暗がりではよくわからないが、新吉の目の前に、見覚えのある形が影をなしている。

その構えを見据えた新吉は、自分の鼓動が不自然に速くなるのを感じた。

見覚えのある、なんてものではない。これは、示現流の『煎』の構えだ。

この構えをよどみなくする人間は、限られている。

動揺とともに息をぐっと飲み込み、新吉は先に仕掛けた。

しかし、あっけなく斜めに上げた切っ先は払われる。

払った隙をつき、握りしめた拳を突き立てるが、すんでの所かわされる。

（この動きは……）

新吉の動きを的確に読むどころか、並みの忍びならばよけることのできない、裏の手までも察することができるのは……。

嫌な予感が、小石を投げた時の水面のように、新吉の胸に広がる。

正体を確かめるべく、新吉は相手の後ろに回り込み、腕をねじ上げ、覆面に手をかけた。

しかし、その手を邪魔するかのように、何かが飛んでくる。

新吉はとつさに忍びを突き飛ばし、自分は笹の陰に身を潜めた。

途端に、小さな爆発音が鳴り、辺りが白い煙に包まれる。

「待て……っ！」

遠ざかる二つの足音を追おうとしたが、煙を吸い込んで咳き込むばかりで、足が前に進まない。

煙幕が空気に溶けて無くなる頃、新吉の目の前には、笹の葉が風になびく姿があるだけだった。

第四章 四日目・心の闇・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第四章 四日目・衝突・

さっきまであかね色だった空が闇に覆われていく街の中を、新吉は脇目もふらずに駆け抜ける。

笹やぶの中で対峙したあの忍び……。

あの身のこなしから言つて、正体は、新吉が一番良く知っている人物だ。十中八九、間違いはないだろう。

なぜだ？

どうして、敵として姿を見せた？

答えの出ない問いを、新吉は心の中で何度も繰り返す。

そしてその問いかけは次第に、言いようのない怒りへと変わっていく。

こんなことになってしまったのは、誰のせいだ？

誰がいたせいで、仲間を一人失うことになってしまったのだ？と。

今朝までは、絶対に守らなければならぬ相手だったのに、今となっては、二度と許すことのできない相手へと変貌しつつある。

一度ついてしまった憎悪の導火線は、もう、新吉の理性で消すこ

とはできなかった。

勢いよく襖を開けた新吉を、源三が見上げてきた。

「おみつは？」

「おみつは、父上とともに例の遺体を番屋に預けに行っているが……どうかしたのか？」

疲れた様子の源三が、訝しげな表情で訊ねてきた。その手には、おみつがお小夜の家で見つけたという京香の小袖が握られている。まるで、京香自身を抱きしめているように、強く。

「お小夜さんは……」

やりきれない思いをぐっところえて、新吉はつぶやく。

「……………ああ。それに、京香は今、風魔の手に落ちている」

意味を察したらしい源三の言葉が、新吉の心にくすぶっていた疑問を確信に変えた。

「どうしたというのだ？」

怒りのまま、畳に拳を叩きつけた新吉に、源三が問ってくる。

「俺はさっき、この事件に関わっている浪人を追った際、一人の忍びに襲われた」

「何？」

「その忍びは……並の奴ならかわせない、俺の裏の手まで読み取って反撃してきた」

言葉を切って、源三を見据える。不規則に揺れるろうそく越しに新吉を見る彼の表情が、今までにないほどこわばった。

「先生以外に、そんなことができるのは一人しかいねえ。そうだろう？」

源三に再度問う声が、震えた。

小袖を握る源三の手が激しく震えるのを、新吉は目の端で捉えた。

幼いころから、ずっと、苦楽を共にしてきた新吉、源三。そして……京香。

そんな三人の絆を壊したのは、守らなければならなかった妹、おみつだ。

許せない　その思いのままに、新吉は立ち上がる。

「どこへ行く？　新吉」

「決まってるだろ。姐さんが……俺たちがこうなっちまったのは、誰のせいだと思ってるんだ！？」

「待て！ おみつを責めて何になる？ 今、一番傷ついているのはおみつなんだぞ！」

源三の鋭い声が、新吉を制する。それが、新吉の中にくすぶる憎悪の導火線に火をつけた。

「よくそんなことが言えるな。あんたは、一番近くにいた姐さんを奪ったおみつが、憎いと思ったことはないのかよ！」

新吉を見上げる源三の目の色が変わるのが、薄闇の中でもはっきりとわかった。

「とにかく、あんたがどう思おうと、俺はあいつが許せねえ。きつちりかたをつけさせてもらっ」

「新吉！」

出て行こうとした新吉の手が強くひかれ、頬に熱い痛みが襲ってきた。その衝撃で、新吉の身体が逆方向へふっ飛ばされる。

「それをおみつに言ってどうなる！？ お前はそれですむかも知れんが、自分の母親が、助けてくれたを京香を暗示にかけたと知った、おみつの気持ちはどうなるのだ？」

襟元をつかむ源三の手を振りほどき、新吉も彼に拳を見舞う。

「甘いんだよ！！ このままだと、いつか俺たちのどちらかが姐さ

んを斬らなきゃならなくなるかも
しれないんだぞ！ それでもいいのか？ …… あんたに、姐さんが
斬れるのか！？」

新吉は感情のまま叫んだ。すると、頬を赤く腫らした源三の目が
大きく見開かれ、新吉へのいま
しめが解かれた。

その直後、廊下で小さな物音がする。

「誰だ！？」

すぐ近くにいた新吉が、半分ほど閉じていた襖を開け放つ。

するとそこには、源三以上に顔をこわばらせたおみつが、身体を
震わせて新吉を見つめていた。

第四章 四日目・衝突・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第四章 四日目・決別・

「……おみつ。そなた、父と屋敷に帰るのではなかったのか」

新吉の背後から、源三の声がした。

「今言ったこと、本当なの？」

しかしおみつはそれに答えず、怯えた目で新吉を見上げる。

「お姐さんが風魔に……母さんに暗示をかけられてるって、本当なの！？」

「ああ」

すがってくるおみつの手を振りほどいた自分の声が、いつになく冷えていることを実感する。

「あたしの、せい……」

「わかってんじゃねえか」

「新吉！」

源三の鋭い声が飛んでくる。しかし、一度解き放ってしまったとどす黒い感情。そして、言葉は止まらない。

「おまえが、江戸に来なけりゃこんなことにはならなかったんだ」

宙を泳いでいたおみつの目が、再度新吉を見た。

「いや……姐さんと川へ飛び込んだとき、お前がいなくなっただよ！」

「新吉、やめろ！ 京香が行方不明になったのはおみつのせいじゃない」

新吉の肩を乱暴につかんだ源三の言葉が、ささくれ立った心をさらに刺激する。

「いい子ぶるのはよせよ、先生。あんただってそう思ったことはあるんだろっ！？」

振り向きざまに口にした言葉が終わると同時に、また、頬に強い痛みが走った。

同時に、壁に強く叩きつけられる。

「兄さん」

「さわんな！」

壁に叩きつけられた新吉を起こそうとしたおみつを突き飛ばす。

「いい加減にしろ！ おみつはお前の妹だろうっ！」

「やめて！ こんなのもう……もう嫌だよ！」

おみつが、再度新吉に殴りかかろうとしゃがんだ源三にしがみつ

いて泣き出した。

泣きそうな顔をしているくせに、しゃくりあげるおみつの頭に手を添える源三の姿が、新吉の心の闇をさらに増幅させる。

なぜ、優しくなれる？ 京香より、風魔の血をひくおみつのほうが大事だというのか？

「……勝手になれあつてりゃいいだろ。俺はもう、そいつの面倒を見るのはまっぴらごめんだ！」

「新吉！」

源三の声が、そして、おみつの泣きじゃくる声が追いかけてくるが、かまわず新吉は駆け出した。

「……つと。どうしたんだよ？ おい！」

玄関先で衝突しそうになった康太にも答えず、新吉は道場を飛び出す。

外はすでに暗く、今夜は月も出ていない。通りの店の玄関先はすでに木戸を閉めており、その隙間からもれるかすかな明かりだけが、新吉の足元をかるうじて照らしている。

京香はもう、帰って来ない。

その事実が、新吉の心を締めつける。

新吉が修行中の頃、京香が葵とともにいなくなった晩も、二度と帰って来ないだろうと覚悟を決めていたが、今回はあの時と訳が違う。

風魔に操られている京香の息の根を、自分らで止めなければならぬかもしれないのだ。

なのに源三は、おみつにかまけてあてにならない。なぜ、あそこまであいつを庇えるのか？

『あの子を放っておけないのは、あんたが一番よく知ってるじゃないか』

京香が去り際に新吉へ投げかけた最後の言葉が、突然、胸に迫ってきた。

放っておけない妹のはずだった。おみつが泣くのを見ていらなくて、幼いころから

『おみつは俺が守るんだ』

と、強く自分に言い聞かせてきた。

だけど今はもう……妹としては見られない。

たとえ京香が、無事に新吉らのもとへ帰ってきたとしても、おみつの身体に流れている『風魔』

の血は消えないのだから。

新吉の中で、何かが音をたてて崩れていくのがはつきりとわかった。

それは……新吉自身も気づいていない『公儀筆頭御庭番の息子』の血がもたらした、妹への決別であつた。

第四章 四日目・決別・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第四章 四日目・混迷・

犬の遠吠えが、江戸の町に何度も響く。

今の新吉の心に巣くう、深い闇のような空を見上げ、新吉は通りに立ち尽くす。

おみつへの怒りにまかせて飛び出しては来たものの、これから先、どうしたらいいの見当もつかない。

『あんたに、姐さんが斬れるのか!?!』

煮え切らない源三への腹立ちのまま口にしてしまった言葉を反芻する新吉の背筋に、冷たい滴が流れ落ちた。

もし、新吉自身がそう問われたなら。

今一度、京香が自分の前に敵として立ちはだかつたなら……。

自分の、もしくは源三の刃が、京香の身体を引き裂く　考えただけでも、身震いがする。

小さい頃からずっと共にいた、かけがえのない仲間。そんな彼女を斬るなんてことが、新吉に出来るわけがない。源三ならなおさらそうであろう。

どうすればいい？

どうすれば、風魔の手に落ちている京香を、前と同じ状態でこち

らに取り戻せるのか。

足下だけを見つめて考えを巡らせるが、有効な手段は全く思いつかない。

それどころか、どう考えても一人で彼女を救い出せる方法がないことに気づかされるのだ。

『よいか。そなたらは、三人揃ってやっと一人前じゃ。庶民を守り、江戸の治安を安定させるためには、何があっても協力し、ことに当たるのが肝要』

花ぐるまの結成時に、天膳から言われた言葉が、新吉の胸に重くのしかかる。

あの頃は……こんな日が来るなんて思いもしなかった。

いつ死ぬかわからないお役目だと理解はしていても、三人でずっと、江戸の治安を守っていけると信じていたのに。

源三と自分の心には大きな隔たりができ、京香が戻ってくる可能性は、限りなく低い。

これから先、自分はどうすればいいのだろうか？

とりとめのないことをつらつらと考えながら、わずかな明かりを頼りに、新吉は通りをあてもなく歩き出す。

そこへ。

「親分、こんな遅くまで御用の筋ですか？」

馴染みのない、しわがれた声が新吉を呼び止める。

「お前さんは？」

「夜鳴き蕎麦を引いてます、為吉つてもんです。一杯どうです？」

新吉はとりあえず蕎麦と熱燗を注文し、腰を下ろす。

「冴えない表情ですね。何かあったんですか？」

「ああ。まあな。それより、この辺じゃあまり見かけねえが、商売は長いのか？」

慣れた手つきでそばの水分を切る為吉に問いかける。ほっかむりを被っているせいで顔を見ることはできないが、しわだらけの手が、働きどおしであろう彼の人生を物語っている。

「ええ。最近では山城屋さんの辺りでよく引いてますよ」

「山城屋？」

為吉の口から漏れた『山城屋』の名前に、新吉は食いついた。

風魔とつながりがある山城屋の情報から、京香を救う手がかりをつかめるかもしれない。

「あの辺の客層はどんな感じだい？」

為吉が注いでくれた熱燗に口をつけながら、新吉は問う。

「そうですねえ。どういいうわけか、ご浪人さんが多いですよ」

浪人、か。恐らく、平沼もここに食べに来ているに違いない。

「どんな話をしてるか、聞いたことはないか？」

「いえ。……でも親分、なぜそのようなことを？」

為吉の指摘に、いや、と小さく首を振り飲み干すと、お代を置いて立ち上がる。

しかしその瞬間、新吉の目の前が大きく揺れた。慌てて木の板に手を置くが、力が入らない。

「だからあの時、この事件から手を引け、と言ったでしょう」

突然、耳元でささやきかけてくる、聞き覚えのある声。

「……てめえは」

つい先日新吉を、そして京香を脅してきた忍び　おみつの祖父、小太郎に違いない。

「申し訳ありませんが、しばらく眠っていて頂きますよ。今あなたに動かれては、こちらが動けなくなりそうですね」

冗談ではない。今、京香を救えるのは自分しかないのだ。

だが、時が経つにつれて新吉の身体からは力が抜けていき、頭の中にも白いもやがかかる。

胸の中にやった手が短刀をつかむ前に、新吉の意識は闇に吸い込まれてしまった。

第四章 四日目・混迷・（後書き）

次回（5 / 30 更新予定）より、ようやく五章へ移ります。
今後ともよろしく願います。

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第五章 五日目・鈴の音・

辺りに、深くて広い闇が広がっている。

冷たい空気が刃物のように、全身の皮膚を刺している。

どこへ向かって、私は歩いているのだろう。

泣きじゃくる、小さな少女。

『……おねえちゃん、たすけて』

振り向いた童女わらわめの顔を見て驚愕する。

『……葵』

名前をつぶやくと、脳裏に焼きついている童女の残像が消えた。

そして。

ちりん、ちりん。

頭の中に、涼やかな鈴の音が鳴り響く。

『さ、着いたわよ』

一定の間隔で鳴る鈴の音の間を縫うように、やわらかな声が、耳の奥を優しく刺激する。

『あなたの、そして、私の人生を狂わせた連中に復讐する時がやってきたのよ』

……ああ、そうか。

幼い時分に両親と引き裂かれ、辛い日々を送らねばならなくなつたのも、まだ小さかった葵を喪わなければならなかったのも、すべてあいつらのせいなんだ。

『そう……。失われた時間を取り戻し、新しい、幸せな時を刻むために、あなたは闘うの。私と共にね』

こくん、と頷いた自分の手が、温かいものに包まれた。導かれるまま立ち上がると、視界が大きく揺れる。

支えてくれた声の主に寄りかかると、甘い香りが、鼻を通して身体のみずみにひろがっていく。

『……これからしばらくは、私のことは忘れなさい』

支え、抱き止めてくれているはずの、声の主の言葉に、思わず身をこわばらせる。

『大丈夫です。私を思い出してほしいときは、またこの鈴を鳴らします。その時こそ……！』

ちりん、ちりん。……ちりん。

頭の中に響いていた鈴の音が聞こえなくなった時、すべての思考が閉ざされて、身体力がゆっ

くりと抜けて行った……。

第五章 五日目・鈴の音・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次の更新は、6 / 1の予定です。

第五章 五日目・夜明け前・其の一

新吉が道場を出て行ってから、どれくらいが過ぎたのか。

時刻はすでに子の刻を回り、『依頼』を受けてちょうど五日目。
京香が源三の前から姿を消して
二日を過ぎている。

『あんたに、姐さんが斬れるのか！？』

去り際に新吉が残した言葉が、源三の耳を何度も通り抜けていく。

江戸の庶民を守るために働く自分らには『死』はいつ襲いかかってきてもおかしくない、突発的なものだということは、源三は勿論、新吉や京香にもわかっている。

しかし、『仲間を斬る』という選択肢が目の前に横たわってこようとは、思いもよらなかった。

もし、今日の朝、京香が源三と軍太夫に襲いかかってきたら……、彼女を「斬らねば」ならないのは明白だ。しかし。

自分に、それができるのか？

「やっと、おみっちゃん眠ったぜ。先生」

小さく揺れる灯籠の炎を見つめる源三の意識が、康太の声で現実

に戻された。

「すまないな、康太。すっかり迷惑をかけてしまった」

「別に、気にしちゃいないさ。それより、一体何があったんだ？」

灯籠をはさんで腰を下ろした康太が、源三をまっすぐ見据えて訊ねてくる。

「新吉がえらい剣幕で出て行っと思ったたら、おみっちゃん泣きじゃくってるし。あんたまでいきなり部屋に閉じこもっちゃって」

「……………」

「さっき寝つくまで、彼女ずっと『自分のせいだ』って泣き続けて…………。見てられなかった」

かすかに震える声で、康太がつぶやく。

「俺なんかじゃ役に立たないかもしれないけどさ、話してくれないか？ 昔のよしみでさ」

昔馴染みで、源三らの仕事を理解している康太とはいえ、彼は外部の人間だ。役目に関すること
を漏らしてはならない掟がある。

しかし彼の厚意が、今ある現実を一人で受け止めるには限界が訪れている源三の心にゆっくりと
染み込む。

源三は、誰にも話さぬことを条件に、お小夜がおみつの母であったこと、京香が風魔に捕らわれ暗示をかけられていることを新吉がおみつのせいだと思い込んでいること、そして、軍太夫がお小夜に提案した明朝の取引のことを手短に説明した。

「新吉の奴……何考えてんだ。今朝まではあんなに心配してたのに、おみつちゃんが風魔の血を引いているってわかった途端、京香がいなくなったのは彼女のせいだなんてよ」

「よせ、康太」

言葉じりがきつくなっていく康太を、源三がいさめる。

「だけど先生。今、一番苦しんでいるのはおみつちゃんなんだぜ」

康太の言うことはわかっている。しかし。

「まさか、あんたもそんなこと考えてるんじゃないだろうな」

昨夕の新吉の問いと同じ言葉に、源三は答えられずに目をそらす。

「先生！」

康太の声が大きくなるのを目で制した源三に、鋭い眼差しが注がれる。

おみつの事情を知ってなお、彼女を守りたいと願っているである

う康太の純粋な気持ち、今の自分にはないことを黙っていても見抜かれてしまいそうで、絞り出すように本音を口にする。

「……思わなかった、と言えば嘘になる。だが、それでおみつを憎んでしまったら、彼女の純粋な願いを守ろうと命を賭けた京香の思いをも否定してしまうような気がして、できなかった」

言葉を切った源三は、目の奥にたまる熱いものをしまい込むように、きつく目を閉じた。

遠くから聞こえる犬の遠吠えが、京香が葵とともに行方不明になった夜、最後まであきらめずに捜し続けた幼い三人 源三、新吉、康太 の姿を脳裏に浮かび上がらせる。

あの時も、あきらめそうになった源三や新吉を励ましてくれたのは、ここにいる康太だった。

「先生は……京香のことが好きなんだな」

突然の康太の言葉に、源三は思わず目を見開く。

「当たり前だろう。俺と京香は従兄妹同士なのだから」

「そういう意味じゃあないんだけど、な」

意味ありげな康太の表情が、提灯の中で揺れる炎にうかぶ。

「どつという意味だ？」

「さあ、それは自分で考えるんだな。それより、これからどうするんだ？ お小夜さん、京香を連れて来るかな」

康太の口から出たお小夜の名が、源三を引き戻す。

「現段階では五分五分……いや、お小夜さんに母としての良心があるなら、連れて来ると信じたいがな」

「でも、新吉が言ってたことが本当なら……。京香は今、風魔の手先として動いてるんだろう？

下手すりゃ、裏切り者としてお小夜さんと一緒に殺される。もしくは、相手の言うままに、京香が彼女を殺してしまう可能性だってあるんじゃないか？」

康太の率直な言葉が、源三の胸を打つ。

忍びの世界は、主人への忠義が第一。

京香の本来の主は源三の父、天膳だが、今の彼女の主人は、今回の事件に関わる風魔の忍びなのだ。

源三の胸に、苦い思いが交錯し始めたその時、玄関先で、人が倒れ込んでくるような大きな物音が聞こえた。

第五章 五日目・夜明け前・其の一・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次の更新は、6 / 0 4、もしくは6 / 0 5の予定です。

第五章 五目・夜明け前・其の二・（前書き）

【用語説明】

・和木瓜^{わもっか}：花梨^{かりん}の果実を原料とした生薬で、のどの炎症に効くとされている。

第五章 五日目・夜明け前・其の二・

大きな音が、ようやく夢の世界へ行きかけたおみつの意識を、現^{うつ}へと引き戻した。

隣の襖が開き、二人分の足音が部屋の前を通り過ぎていく。

「……………京香！」

起きあがり、部屋から出たばかりのおみつの耳に、源三の悲痛な声が入った。

思わず駆けだし、源三にかかえられている女性の姿を後ろから凝視する。

康太が照らすほのかな灯りに照らされているだけなので、顔色を伺い知ることはできないが、お
でこの真ん中から分けられた、富士の山に似た額の形も、すつと通った鼻筋も、京香のものに違いない。

「……………お姐さん！」

京香を呼ぶおみつの鼻の奥が、熱くなる。

「京香、しっかりしろ。目を開けるんだ」

源三の呼びかけに、京香の目がうつすらと開いた。

「京香、わかるか？」

康太が源三の横から手をかざし、京香の目の前で二、三回振る。

「……………」

声にならないが、京香の口は源三を呼ぶように小さく開く。

「お姐さん」

おみつが涙をこらえて京香を呼ぶと、彼女の視線がこちらにゆっくりと注がれた。そして、かすかに微笑む。

「ごめんね。お姐さん……………」

京香のそばに行き、冷えきった手を握ったおみつの頬を、こらえきれない涙が濡らしていく。

「先生。ここじゃ、京香の身体が冷えちまう。おみっちゃんが寝てた部屋に」

康太の言葉にうなずいた源三が、京香を改めて抱き上げた。

後を追いつ、今まで自分が使っていた布団をめくる。まだ、ほのかにあたたかい。

それがなぜか、おみつを安心させた。

「京香、一体何があつたのだ？」

布団の中央に横たえられた京香に、源三が訊ねる。おみつも横で、彼女の返答を待つ。

源三を見ていた京香の目が、一瞬、空を泳いだ。顔は次第に苦渋の表情に変わり、彼女は小さく首を振る。

「何も……覚えていないんです」

小さくせき込みながら、かすれた声で京香が答えた。

おみつは、源三と顔を見合わせ、再度京香を見る。しかし、京香はまた首を振るだけで、何も答えられないようだ。

「そうか……。とにかく、無事に戻ってきてくれて何よりだ」

源三が、京香の手を強く握りしめた。

「京香。これ飲めるか？」

席をはずしていた康太が、湯呑みを持って戻ってきた。源三に再び起こされた京香の視線が移る。

「……康太」

「ったくよ、また心配させるんじゃないよ」

乱暴な口調とは裏腹に、湯呑みを差し出す手は優しい。

（幼なじみ……か）

身体はそばにいるのに、心はなぜか遠い。おみつは思わず三人から視線をそらしつつむいた。

「ごめんね」

「謝る相手が違っただろ、馬鹿。一番心配していたのは、この子だよ」
康太の手が、突然おみつの肩に置かれた。驚いて顔を上げたおみつに、康太はそっと目配せをする。

「……ごめんなさいね。あなたにまで心配と迷惑をかけてしまって」

源三に支えられている京香の手が、そっとおみつの手を握る。

胸が熱くなり、再び涙が目じりから落ちる。言葉にならなくて、首を振ることしかできない。

迷惑をかけたのは、私なのに。「私」という存在なのに。

「泣かないで。ほら」

冷えた手が、頬にそっと触れる。しかしその手はすぐに離れ、京香は激しくせきこんだ。

「大丈夫か？」

源三がそっと、京香の背中をさすった。落ち着くと、康太がすぐに診察を始める。

「別の薬が必要だな。先生、俺取ってくるよ」

「待ってくれ。どの薬が必要か教えてくれれば、俺が行く。林殿にこのことも報告せねばならないし」

「そうか。……じゃあ、花梨かりんを原料にした和木瓜わもっかという生薬が診療所にあるはずだから、それをもたらって来てくれないか」

「わかった。京香、少しだけ待っている。おみつ、京香を頼む」

乾いたせきが止まらぬなか、京香が源三に向かってうなずいた。しかし。

「先生！」

おみつは思わず、源三を呼んだ。

「どうした？ おみつ」

「……ううん。何でもない。気をつけてね」

かすかに笑みを浮かべておみつに頷き、源三が部屋から出ていく。

「おみっちゃん。先生なら大丈夫だよ」

力強い康太の言葉に首を縦に振って答えるが、おみつの心は晴れない。

なぜかはわからないが、今、源三を行かせてはならないような気がしてならないのだ。

（早く帰って来て。先生）

おみつは、源三が出て行った方向を見つめ、祈ることしかできなかった。

第五章 五日目・夜明け前・其の二・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次の更新は、6/07を予定しています。

第五章 五日目・夜明け前・其の三・

源三が出て行って、しばらく四半刻が過ぎた。

あと、どのくらい経ったら源三は戻ってくるのだろうか？

じりじりと時が過ぎるのを待つおみつの不安をよそに、康太が持つて来ていた煎じ薬が効いたのか、京香は規則正しい寝息を立てて眠っている。

「おみつちゃん、少し寝たらどうだ？ 京香は俺が看てるから」

後片付けを終えて戻ってきた康太に、おみつは首を横に振った。

源三が戻ってくるまではここを離れてはいけない おみつの中には、そんな確たる気持ちがある。

康太もおみつの意志を尊重してくれたのか、黙って横に腰を下ろした。

「……新吉のやつ、どこに行っちゃったのかな」

一番身近にいたはずの兄の名が、今のおみつの心をちくりと刺した。

自分が風魔の血を引いているばかりに、兄を苦しめ、怒らせていることが、今のおみつにはたまらなく、つらい。

「京香が戻って来たんだ。新吉の気持ちだって少しは落ち着くさ」

「そうかな？ 私は、そう思えない」

京香のことはきつと、きつかけに過ぎない。今の新吉自身が、自分の血を忌み嫌っているであろうことは、いくらおみつでも容易に察しがついた。

上の二人の兄は全て知っていたからこそ、あそこまで自分をいじめていたのだろう。

ただ一人、それを知らされていなかった新吉の胸の内を思うと、おみつの心は強く痛んだ。

「風魔の血を引いていようといまいと、おみっちゃんはおみっちゃんだろ。俺は気にしてなんかいないさ。先生だって、京香だってきつと、同じことを言うと思うよ」

康太が優しい眼差しで、おみつの肩に手を置いた。

熱のこもった口調に、おみつの心のつかえが取れていき、それが滴となって、またおみつの頬を濡らしていく。

「また泣く。俺と会ってから、泣きっぱなしじゃないか」

康太の手が、おみつの頭を少し乱暴に叩く。それがまた嬉しくて、おみつは顔を両手で覆う。

どうして、康太はこんな自分に優しいのだろう？

いや、彼だけではない。今はいない源三も、目の前で眠っている京香もそうだ。

家族でさえ忌み嫌う存在の自分を命がけで守ろうとしてくれているのは、何故なのか。

「血なんか関係ないんだよ」

「……………え？」

「風魔の血を引いてたって、じいさん思いで、真っ直ぐな君だから、助けてあげたくなるんだよ」

あさつての方を向いて、ぶっきらぼうに康太がつぶやく。

「じいさんを、捜すんだろ？」

康太の問いが、江戸へ来てからの激流に飲み込まれていたおみつの願いに火をつける。

「……………うん。じいちゃんと一緒に、紀州に帰る」

「なら、いつまでも泣いてちゃ駄目だ。少しでも早く、じいさんを見つけたさなきやな」

こちらを見た康太の笑顔に、おみつの頬もつられて緩む。しかし、和やかな空気を裂くように、京香が激しく咳き込み出した。

「京香、どうした!？」

京香の身体を起こした康太に促され、反対側から彼女の背中をさする。

のどの奥からはからっ風のような音が鳴り、息をするのも苦しそうだ。

京香の様子を診ていた康太が、小さく舌打ちをした。

「どうしたの?」

「いや……。おみっちゃん、京香頼めるか? 残った薬をもう一度煎じてくる」

「お姐さん、よくないの?」

表情をこわばらせたままの康太に戸惑いながらも、おみつは訊ねる。

「ちょっとな。万が一吐き出した物がのどにつまらないように見ていてくれれば、とりあえずは大丈夫だから」

「わかった」

康太と分け合っていた京香の全体重が、おみつにかかる。

「お姐さん。もう少しの辛抱だから、頑張ってね」

温もりがなかなか戻らない手。赤みがささない頬。生きようと、必死に空気を吸おうとする姿が痛々しい。

見ていられなくてうつむいたおみつの耳に、京香の咳とは違ったかすかな音が忍び込んで来た。

（……これは？）

京香の背中をさする手を止めずに、おみつは耳にすべてを集中させる。

規則正しい、鈴の音。音が大きくなるにつれ、耳元で聞こえる京香の息が穏やかになっていく。

「お姐さん、大丈夫なの？ ……っ！」

顔を上げたおみつの首に、突然、京香の細い指がからみついていた。

第五章 五日目・夜明け前・其の三・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次の更新は、6/10を予定しています。

第五章 五日目・夜明け前・其の四・

「…………お姐さん。どうし…………」

京香の指先が、おみつの首に食い込み始める。

同時に、さつきから聞こえる鈴の音はまた一段と大きくなり、おみつの耳を通り抜けていく。

あまりの息苦しさに、閉じようとした目をどうにか開く。

すぐそこにある京香の目は、おみつのを向いているのに、焦点が合っていない。一昨日、襲われた自分とともに川へ飛び込んだ時の輝きが、今の彼女からは感じられないのだ。

（ 暗示？ ）

薄れていく意識の中で、おみつは昨夕の源三の言葉を思い出した。

『京香が風魔に暗示をかけられている』

だとしたら、一刻も早くこの鈴の音を断たなければ。

おみつは、何か物音を立てようと畳に手を這わせた。何でもいい。

大きな音さえ出せる物ならば、何でも…………。

朦朧^{もつろう}とし始めた意識を辛うじて保っていたおみつの手に、何か冷

えた物が触れた。

力を振り絞ってそれをつかみ、京香のいる方とは逆の方向へ手を振ったその直後、おみつの首から力が抜けた。

大量の空気が身体の中へ突然入ってきて、おみつは激しく咳き込んだ。

「どうしたんだ！」

少したって、康太の声が聞こえる。

「おみつちゃん、いったい何があったんだ？」

康太が、咳が止まらないおみつの背中をさすってくれる。

「お姐さん……は？」

荒い息を繰り返し、ようやく落ち着いたおみつが顔を上げると、京香は布団の向こう側で倒れている。

「京香！」

肩で息をするおみつから離れ、康太が京香に近づいた時、あの鈴の音がまた、頭の中に鳴り始めた。

「だめ！ 康太さん」

おみつが叫ぶと同時に、康太の大きな身体が一瞬で壁に叩きつけ

られた。

「何すんだ！」

左肩を抑え、痛みに顔をゆがめた康太が、京香を見上げた。

「…………お前」

何を考えているのかすらわからない、無の表情で立ち尽くす京香のさまに、康太が言葉を失う。

康太に駆け寄ったおみつを一瞥^{いちべつ}し、京香が身をひるがえす。

「待て！」

おみつに構わず立ち上がり、京香を捉えようとした康太の手を、白い着物の袂^{たもと}がすり抜けた。

「お姐さん！」

おみつも立ち上がるが、突然のことで身体がびっくりしたのか、目の前が大きく揺らぐ。

「おみつちゃん！」

よろけたおみつを、康太が支えてくれた。

「君はここにいろ。京香は俺が連れ戻す」

「私が行く。行かなきゃ駄目なの」

康太の手を振りきって、おみつは京香の開け放した窓から表へ出た。

「おい！」

康太の声が追いかけてくるが、気にしてなどいられない。

冷え切った初冬の空気が、呼吸の整わないおみつの胸いっぱいに広がる。咳き込みそうになるのをこらえながら、遠ざかる京香を追いかけるおみつの耳に、先程とは比べようのないくらいの大きな鈴の音が響いている。

おそらく京香は、自身を洗脳している人物のもとへ向かっているのだろう。

しかし、ここで京香を逃してしまつたら、彼女が戻ってきたことを誰よりも喜んでいであろっ
源三に申し訳がたたない。

康太や源三の、そして、今回のことでおみつ自身を憎んでいるであろっ
新吉のためにも、京香を取り戻す。

そのためなら、彼女を洗脳している人間と渡り合つて死んでも本望だ。

そんな死に方なら、まだ生きているかもしれない祖父も、自分を責めたりはしないだろう。

あと、少し。

身軽さを自負してきたおみつの足が、少しずつ京香に近づく。

幾度かふらつきながらも先を走る京香の背中を追って、すぐ近くに見えてきた角を曲がる。

すると、目の前から風がこちらに吹き抜け、川の棧橋さんばしに人影が見えた。

（ あいつか ）

京香が立ち止まったのをうけ、自らもそこで足を止めた。すると。

「よく来たわね。おみつ」

聞き覚えのある声が、自分の名を親しげに呼ぶ。

湧き上がる警戒心をあらわにして前を見据えたおみつの頭上に月が現れ、声の主の正体を照らした。

京香をかばうようにして立ち、おみつに微笑みを向けていたのは……。

源三の兄、忠直に『母かも知れない』と言われていた女性、縫物職人のお小夜だった。

第五章 五日目・夜明け前・其の四・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次の更新は、筆者多忙のため6/17以降を予定しています。ご了承くださいませ。

第五章 五日目・再会・母と娘・

「……お小夜、さん」

目の前のお小夜を呼ぶおみつの声が、震えた。

「ようやく、会えたわね」

話しかけてくるお小夜の声も、おそらくおみつとは別の意味で、震えている。

「お姐さん……京香さんに暗示をかけたのは、あなたなの？」

おみつの投げかけた言葉に一瞬顔をこわばらせたお小夜だが、少しのちにはつきりと頷いた。

「どうして、そんなことを！？ お姐さんは関係ないじゃない！！」

声音が荒くなるのが、おみつ自身にもはつきりわかった。

「関係ない、とは言い切れないわ。この人は、あなたがお世話になっている源三様や、新吉さん同様公儀の人間なの。私たちの、敵なのよ」

『私たち』 まっすぐおみつを見据えて告げた言葉が、おみつの心を急速に冷やしていく。

「公儀の人間とか、そんなことはどうでもいい。お姐さんを……返してよ！」

「あなたの口から、そんな言葉が出るなんて思わなかったわ」

あまりにも穏やかなお小夜の口調に、おみつは思わず彼女を凝視した。

「だってそうでしょう？ あなたは、父や兄たちに疎まれて育ってきたのに」

お小夜の言葉が、心を貫く。

思わずうつむいたおみつの脳裏に浮かぶのは、新吉の上二人の兄に執拗にいじめられた、幼少の頃の光景……。

『やめてよ、おにいちゃん』

木の上に逃げても、すぐに追いつかれ、泣きながら必死に頼むおみつに、容赦なく突きつけられる木刀。

『うるさい。俺たちはお前の兄ちゃんなんかじゃないやい』

再度突き出された木刀を避けたおみつは、折れた枝とともに地面に叩きつけられる。

全身に広がる痛みをこらえ、起き上がろうとする彼女の頭上からは、

『まだあいつ生きてる』

『早くいなくなればいいのにな。あいつの母親みたいにさ』

『何してるんだよ！ 兄上！』

二人のあざ笑う声をかき消す怒号が、おみつのすぐ上で聞こえる。

自分を唯一助けてくれる、すぐ上の兄、新吉。

『またお前か。おい、二人ともやっちまおうぜ』

二人分の足音がしたかと思うと、新吉の重みとともに、衝撃がおみつの身体へと伝わった。

どうして、上の兄二人は自分をいじめるのだろうか？

新吉だけはいつも助けに来てくれるのに、父はなぜ、助けにきてくれないんだろう？

お母さんがいないから？ いや、自分だけ……お母さんが違うから？

いろいろな思いが胸にこみあげると同時に、涙があふれてくるのがわかる。

『こら！ 何をしている』

『やべっ！』

『今度は容赦しないからな。覚えとけよ、おみつ!』

聞き覚えのない低い声がすると同時に、上の兄二人の暴力が急に止んだ。

『大丈夫か？ 二人とも。全く、何ていう連中だ』

新吉の着物についた泥を落としてやりながら、見ず知らずのおじさんがつぶやく。

『へっちゃらだよ。こんなの、痛くもかゆくもねえや』

『お、ぼうず。いいぞ。小さい子を守ってやんないとな』

新吉の頭を優しく叩くおじさんの笑顔を見るおみつの目から、涙がいく筋も流れおちていく。

『馬鹿だなあ。泣くなよ、おみつ』

泥のついた新吉の手が、乱暴に頬をぬぐう。

『兄上なんかに負けるなよ。俺が絶対、おみつを守ってやるからさ』

……守ってやる。

何度も告げてくれた兄はもう、おみつのもとへは還らない。

道場を出ていく間際の新吉に突きつけられた冷たいまなざしが、

おみつの心を締めつける。

「戻っていらっしやい。おみつ」

思いがけない言葉が投げかけられた。思わず、おみつは顔をあげる。

「私と一緒にいれば、もう、虐げられることも、疎まれることもないのよ」

そうだ。私はずっと思っていたんだ。母さえいれば、兄にいじめられることもなかったのに、と。

しかし今、死んでいる、と聞かされていた母はこうして、おみつの目の前にいる。

私が、母と一緒に風魔側へ行けば……。もう、こんなに哀しい目に遭わなくてもすむ。

「そうよ。あなたが戻って来るのなら、京香さんを、源三様のもとへ戻してあげてもいいわ」

おみつの考えを見透かしたかのような穏やかな表情で、お小夜が言う。

母と一緒に行けば……。お姐さんを、先生のもとへ戻してあげられる。

そうすれば、兄だって先生への怒りを解くはずだもの

私さえ、いなければ。

兄と先生とお姐さん。また、三人が元に戻るんだ……。

母であるお小夜の言葉が、おみつの哀しみや苦しみを、ゆっくりと溶かしていくのがわかる。

おみつの心は今、風魔側へと大きく動き始めた。

第五章 五回目・再会・母と娘・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次の更新は、6/25を予定しています。ご了承くださいませ。

第五章 五日目・油断と後悔・

実家の清水邸へ戻り、事の次第を軍太夫に伝えるよう兄に依頼した源三は、小石川養生所で康太の指定する薬をもらい、道場へと急いでいた。

二度と戻ってこないのではないかと思っていた京香が、戻ってきた。

昨夕の新吉の言葉がひっきり、最初は半信半疑だったが、目の輝きも、おみつに対する心配りも、すべていなくなる前の彼女と何ら変わりはなかった。

そのことが、源三を心の底から安堵させた。二度と京香を離したくないと、強く思う。

恐らく、新吉が対峙した忍びの手合いが、京香のものにそっくりだったのだろう。

そんなことよりも、早くこの薬を持ち帰り、京香を楽にしてやらねば。そう思い、薬の入った紙袋を強く握りしめて速足で歩く源三の足を、突然、聞き覚えのある声が止めた。

「源三殿」

「林殿。なぜ、ここに？」

驚きを隠せない源三の提灯に照らされた軍太夫の表情は、どこと

なく陰りがあるように見える。

「私宛に、妙な投げ文がまいりましたので、ご確認したく参上しました」

「投げ文、ですか？」

「はい。それには、京香殿が源三殿のお宅へ戻ってこられたと記されてありまして。それで一度、お目通り願えればと」

京香が戻ってきて、まだ一刻も経ってはいない。

なのになぜ、こつも早く軍太夫の耳に届いたのか。

「京香は、身体が弱っておりますので休ませてやりたいのですが…今夜でなければならぬのでしょうか？」

「はい。是非に」

「理由を、お聞かせ願えますか？」

警戒心をそのまま声に乗せた源三から、軍太夫は目をそらす。

「先生！」

康太の叫び声が、二人の間の均衡を荒々しくやぶった。

「康太。どうした？」

「京香が……。京香が、おみつちゃんを襲った拳句に姿を消しちまっただよ！」

「何だと？」

息をはずませながら康太が告げる事実が、源三の血の気を一気に奪ったのがわかる。

なぜ、京香がおみつを襲う必要があるのだ？

「やはりそうか……」

「やはり、って、どういう意味なんですか？ 林さん」

康太が、怪訝な表情で軍太夫に問う。

「恐らく、今回京香殿が戻ってきたのは、おみつの母が仕組んだ罠。このままだとおみつの身も、危険にさらされることになります。康太殿、おみつは？」

「それが……。京香は自分が連れ戻すって言って飛び出しちゃって」

『先生！』

不安そうな様子で自分を呼んだあの時、おみつはもしかしたら、こうなることを察知していたの

かもしれない。彼女の言葉に耳を傾け、康太を行かせていれば、こんなことには。

「左様か。源三殿、すぐにおみつと京香殿を捜し出さねば、取り返しつかないことになりかねません」

波のように押し寄せ始めた自責の念に囚われていた源三の心を、軍太夫の言葉が引き戻す。

そうだ。今は、過ぎたことを悔やんでいる時ではない。

京香を、そしておみつをもう一度、こちらへ取り戻さねばならない。

「お小夜……いや、おみつが立ち寄りそうな場所に、心当たりはありませんか？」

軍太夫が訊ねてくるが、それはこちらが聞きたいくらいだ。

操られている京香はもとより、おみつの行動範囲すらわからないこの状況で、三人をどう捜せばよいのか、皆目見当がつかない。

「とりあえず、先生の長屋に行ってみないか？ 確か、お小夜さん近くに住んでるんだろ？」

康太の言葉にうなずいて、軍太夫とともに近くにあった橋を渡ろうと走り出す。

その時、強い風が三人の周りを吹き抜けた。

「お待ちください！」

突然、軍太夫が足を止めた。目を閉じ、じっと何かに耳を凝らしている。

「鈴の音……」

そうつぶやいた軍太夫がいきなり方向をかえ、川沿いに走り出す。

「林さん！」 「林殿！」

康太と同時に、源三が叫んだ。

第五章 五日目・油断と後悔・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

こんばんは。作者です。更新が日付変更線を越える少し前になってしまいました。
遅くなってしまう申し訳ありません。

次の更新は、6/30、もしくは7/01を予定しています。

第五章 五日目・畏怖・

「林さん！」

突如走り出した軍太夫の背中に、康太が叫ぶ。

あの先に、京香がいる！

「康太！」

確信した源三は、康太の名を呼び、軍太夫を追って駆け出した。

昼間の賑わいが嘘のような静けさが漂う街に、三人の足音だけが響く。

先に行く軍太夫、そして源三と康太の歩みに逆らうかのように吹き荒れる冷たい風も、今の自分を止めることなどできない。

今度こそ、京香の笑顔を取り戻す　　今、源三にあるのはその思いだけだった。

「おみつ！　お小夜！」

大通りに並ぶ庄屋街を過ぎて、源三の視界が開けた途端、軍太夫の声が辺りに響いた。

立ち止まり、康太と顔を見合わせて声のした方に顔を向ける。

源三らのはるか前方に、月明かりに照らされた四つの人影があるが見える。

「京香！」「おみっちゃん！」

源三は康太と同時に叫び、足早に人影に近づいた。

「……先生、康太さん」

二人を呼ぶ声こそかすれているが、返事を聞く限り、暗示にはかかっていないようだ。

「京香、聞こえるか？ 京香！」

源三は思い切って、京香を呼んだ。

しかし、つやのある声が耳に心地いい

『先生』

という返事は返ってこない。

それどころか、感情を持たない虚ろな目が、源三の心をきつく締めつけた。

予期せぬ冷たい汗が、背中を濡らしていく。

「一体、何のつもりだ？」

軍太夫が険しい声で、お小夜に問うた。

「どういづつもりで、京香殿を使っておみつを呼び寄せたのだ!？」

「あなたと取引するつもりは、さらさらないからです」

怒りを内に秘めた冷ややかな声が、その場の空気を一層冷たくさせた。

「その行為が、どれほどおみつを苦しめているのか、お前にはまだわからないのか!」

「あなたに、私やおみつの苦しみがどれほどわかるって言うんです!？」

解き放たれたお小夜の怒りに、軍太夫の言葉が止まる。

「ただ、風魔の血を引くというだけで迫害され、身も心も引き裂かれそうな思いをしてきた私の、そして、あなたの配下に命を狙われて江戸の町を駆け抜けていたおみつの気持ちを、あなたは考えたことがあるんですか？」

「なぜ、それを……」

力なく問い返す軍太夫の声には、明らかに動揺の色が混じっている。

「あなたは、自分の立身出世のために私を捨てて、娘の命を奪うことくらいとわらない人間。仲間を売るくらいなら、多少の犠牲はやむを得ないわ」

「お小夜さん！」

「やめて！ もうやめてよ！」

犠牲、というお小夜の言葉に血が上った源三を、おみつの叫びがさえぎった。

「もういいよ！ 私がお小夜さんと……母さんと一緒に行けば、もう誰も苦しまずにすむ。だから、争うのはやめてよ！」

「何言つてんだおみつちゃん！ あんた、風魔になるために江戸に出てきたのか？」

涙をためたおみつの目が、源三の隣にいる康太に釘づけになった。

「違うだろ。江戸に出てきたのは、じいちゃんと一緒にの生活を取り戻すためだろう」

「康太さん、でも……」

「あんたが今、お小夜さんと一緒に行ってみる。それで帰ってきた京香が正気に戻ったとき、喜ぶと思ってるのか？」

おみつの目から、涙がこぼれ落ちるのを源三は見る。

「いいかおみつちゃん。騙されちゃ駄目だ。あんたが一緒に行つて喜ぶ人なんて誰もいやしない。お小夜さんだってじきに、後悔するに決まってる」

「後悔？ 私が？」

康太の言葉をあざ笑うように、お小夜が問いかけてくる。

「ああ、そうさ」

確信に満ちた目で、康太はお小夜を見返した。

「娘と暮らせるようになれば状況が変わるとでも思ってるんだろうが、そうは問屋が卸さねえ。今度はあんたと一緒に、風魔の血を引く彼女が公儀に追われる身になるんだ。あんたにそれが耐えられるか？」

お小夜の顔が、こわばった。

彼の姿に、源三は圧倒される。

自分に対して物言わぬ京香を目にして動けない源三とは対照的に、康太は怯むことなくお小夜を追い詰めていく。

「悪いことは言わない。京香を返して、あんたもお上に自ら申し出るんだ。そうすりゃ、おみっちゃんの安全も保障される」

お小夜の微妙な心の揺れが、表情に表れたその時。

爆音とともに、白い煙幕が辺りを覆った。

複数の足音が、源三から遠ざかるのが聞こえる。

「お小夜！」「京香！」

軍太夫と源三の声が、重なる。

源三は、京香のぬくもりを求めて足音に追いつがるが、鼻につくかすかな香りが、その足を妨げる。

鼻の奥に焼きつく香気（かき）を追い出すようにせき込みながら、源三はどうにか煙の中を駆け抜けた。しかし。

追い求めた京香の姿はもう、どこにも見当たらなかった。

第五章 五日目・畏怖・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

大変更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。
次回の更新は、9月末を予定しています。
やや不定期更新になりますが、ご了承ください。

第五章 五日目・焦りと隙・

「母さん！ お姐さん！」

いち早く煙幕から抜け出した源三の背後から、おみつの悲痛な声が聞こえる。

源三の前方で足を止めたおみつの身体が、膝から崩れ落ちる。

「おみっちゃん！」

後を追ってきた康太が、座り込んだおみつの肩に手をかけた。

「……………どうして？」

涙に濡れた声で、おみつは誰にとなく問いかける。

「どうして、私を行かせてくれなかったの？ どうして？」

「おみっちゃん。あんた、自分の言ってることがわかってるのか！？」

「わかってるよ！」

二人の大きな声に、源三の視線がようやく隣に移る。

月明かりに照らされているおみつの目からは、とめどなく涙がこぼれ落ちている。

「私が行けば……お姐さんは戻ってきたんだよ」

源三の視線に気づいたのか、おみつが、こちらを見上げて言い切った。

彼女の言葉が、大きな刃となって源三の心に突き刺さる。

「父さんだって、お庭番としての地位を守ることができたのに……」

「……おみつ」

軍太夫のうつろな声が、犬の遠吠えにかき消された。

「どうして……」

おみつの声が、かすれる。

「おみつちゃん！」

康太が、力の抜けたおみつの身体を支え、脂汗がにじみ始めた額に手をやった。

「すごい熱だ」

意識を失ったおみつの身体を抱き上げて、康太は足早に歩き出す。

「何ぼうつと突っ立ってるんだよ。二人とも！」

康太の怒鳴り声に、軍太夫と顔を見合わせた源三は、言葉を発することなく後を行って行った。

……また、守れなかった。

傾いた月明かりが降り注ぐ道場の中央に座し、目を閉じたまま呪うのは、自分の非力。

葵と二人で脱走した夜も、おみつを助けて、川へ飛び込んだ夜も、そして……今夜も。

守ろうと手を差し伸べれば遠ざかる、かけがえのない従姉妹。

源三は、傍らに置いた木刀を手に取り、片膝を立てて空を斬った。

自らの迷いを振り切ろうと、幾度も素振りを繰り返す。

しかし、太刀筋が空を斬れば斬るほど、源三の心のもやもやは大きくなり、苛々が募る。

どうすれば、いい。

どう動けば、京香を助け、事件を解決することができるのか？

立ち尽くし、肩で息をしながら茫然と床板を見つめる源三の背後に、誰かが近づく。

「康太」

「相手になつてやろうか。先生」

「……おみつは」

「林さんがついてるよ。何かするんじゃないかと思ってしばらく見てたけど、おみっちゃんの手を握ったままじっとしてたから、ほつとこうと思って」

「今、おみつは父上預かりの身だからな。忠義第一の軍太夫殿に、手出しはできないさ」

「そうか」

一番下から木刀を持ってきた康太が正眼に構えたのを見て、源三も腰を落とす。

幾度か交わされる剣先の乾いた音が大きくなったと同時に、康太が上段から踏み込んできた。

中段から切っ先を流すが、康太の手はゆるまない。

修業時代よりも早い剣さばきに、さしもの源三も防戦一方だ。

上段からの太刀筋を、源三はかろうじて受け止める。

修行を途中で終えた康太が、自分を追い詰めていることを悟った源三の心の中に、なぜか冷たいものが駆けめぐる。

「俺が強いんじゃないさ」

心を見透かしたかのような言葉を発し、康太が離れた。

同時に、源三の目のすぐ先で、康太の持つ木刀がぴたりと止まる。

「先生が、隙だらけなんだよ」

にやっと笑った康太を正視できず、源三は目を伏せる。

「今のあんたじゃ、悪いが京香を救うことはできない」

遠慮のない康太の言葉が、源三の心の傷をえぐる。

「あんたがどう思ってるかは知らねえが、京香を救うためにはやっぱり、新吉が必要なんだ」

悔しいが……康太の言う通りだ。

うつろな目で、微笑みかけてすらくれない京香を見ただけで足がすくみ、心が動かなかった自分だけで、京香を救うことなどできるはずもない。

「確かにあいつは今、おみっちゃんに対して心を閉ざしてる。だけど、京香を救いたい気持ちには、同じだろ？」

「康太」

「おみっちゃんのことには俺に任せて、あんたはまず、新吉との溝を埋めるんだ。話はそれからだよ」

康太の目が、力強く源三を励ましてくれる。

おみつのことはさておき、今、京香を救うには、新吉の力がどうしても必要だ。

新吉が帰ってきたら、今の現状をありのままに話し、協力を仰ごう。

長い間連れ添ってきた自分らだ。新吉だって、わかってくれるはず。

冷えた空気に身をさらし、源三は、道場で新吉が帰って来るのを待つ。

しかし、夜が明けても、彼の姿がここに戻ることはなかった。

第五章 五日目・焦りと隙・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

更新が予告より遅くなり申し訳ありません。

次回の更新は、10月7日までの間に行う予定です。

第五章 五日目・苦渋・

白いもやが、目の前に広がっている。

その向こうから聞こえてくるのは、子供の泣き声。

新吉は、声のする方へゆっくりと歩き出す。

『何やってるんだよ』

『お前なんか、いなくなっちゃえばいいんだ』

泣き声とともに聞こえる、聞き覚えのある言葉に、思わず駆け出した。

少女をいじめている二人の少年の後ろには、忍び装束を身にまとう一人の男が立っている。

男の顔に目をやった新吉の心が、一瞬で凍りつく。

腕組みをし、冷ややかに見つめているのは……。

（俺？）

動けない新吉をよそに、忍び装束に身を包んだその男が、悠然と三人に近づいた。

それに気づいた少女が顔をあげる。

『……兄さん』

少女から聞こえてくるはずのないおみつの声が、男を呼ぶ。

男の手が、背中にさした刀に伸びる。

（やめろ！）

その意味を察した新吉は叫ぶが、声にならない。

男の刀が、少女に向かって振り下ろされる。

（やめてくれ！ そいつは、俺が守らなければならない、ただ一人の）

「おみつ！」

自分の叫び声で、新吉は目を覚ました。

半鐘の鐘と同じ速さで、胸の鼓動が全身をかけめぐり、また、目の前が暗くなる。

今のは……夢？

それとも、新吉が作り出した幻か？

身体の震えを止めるべく、新吉は目を閉じたまま、何度も息を吐き出した。

すると。

「気がつかれたようすな」

意識を失う直前に、自分の耳元でささやかれたのと同じ声が聞こえた。

「……てめえは」

声の主を確認して起き上がろうとするが、身体に力が入らない。

「薬が抜けるまでは、まだしばらくの時間が必要です。新吉殿」

昨夕の夜泣き蕎麦屋の主人為吉こと、おみつの祖父小太郎が、茶碗に乗せた盆を持って入ってきた。

「俺を捕らえて……どうするつもりだ」

顔色一つ変えない小太郎を睨みつけ、かすれた声で新吉は問う。

「昨夜も申し上げたはずです。今、あなた様に動かれると厄介だと^{ゆづべ}」

「なぜだ」

「まずは、召し上がりませんか？ 腹が減っては何とやらですぞ」

新吉の問いには答えず、小太郎は盆をこちらへ差し出す。

「いらねえよ。妙なものを入れられてたら敵わんからな」

「あなた様がお隠れになつては……おみつが悲しみます」

小太郎の言葉が、新吉の心を突き刺す。

別れ際に見た、泣きだしそうなおみつの顔が脳裏に甦る。

「私に引き取られてから、あの子はずっとあなた様のことを話しておられました。上の兄者にいじめられていた自分を、唯一」

「やめてくれ！」

昨夕の激情にかられ、小太郎の言葉をさえぎるように新吉は叫んだ。

「どうしてあんたらは親父の前に姿を現したんだ！ あんたらさえないけりや、おみつが産まれることも、仲間が風魔に操られることもなかったんだ！」

昨日、おみつに言ったのと同じことを小太郎にぶつけるが、何も言葉は返ってこない。

ただ、辺りを飛び回っているであろうすずめの鳴き声が、朝が来たことを告げているだけ。

その涼やかな声音は、時折自分のためにも朝食を持ってきてくれた京香を思い起こさせる。

『新さん、朝御飯持ってきたわよ』

記憶の中の声に耳をすませた新吉の目の奥が、熱くなった。

京香は、妹を守りたい一心で余裕を失くした自分の代わりに、おみつを守って風魔に堕ちたのだ。

「……何で、風魔なんだよ」

自分が守り抜く。　そう決意した妹に、なぜ、風魔の血が流れているのだ。

「……私らにとっても、おみつが産まれたことは、予想だにしないことでした」

おみつは、小太郎やお小夜にとっても望まぬ子供だったのか。

驚きのあまり、新吉は寝た姿勢のまま小太郎を凝視する。

その視線に気づいたのか、小太郎は一瞬だけこちらに目を向けた。

「私たちは、風魔を滅ぼした幕府……いや、徳川家に復讐するため、様々な地へ散らばり、その場所に根を張って生きてきました。数少ない女子は、権力者を籠絡させるため、他の男に心を開かぬように教育を徹底して参りました。しかし、お小夜は……」

名前を出したことで娘を思い出したのか、小太郎は、少し顔をしかめて言葉を切ると、唇を強く噛みしめてうつむいた。

第五章 五日目・苦渋・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次回65話のの更新は、10月7日（もしくは8日）の予定です。

第五章 五日目・過去・其の一 予感・

何を思い出しているのか、言葉を切った小太郎はうつむいたまま、何も言わない。

まるで、今の自分らを体現しているようなその姿を見ていられなくて、新吉は陽の入る方向に目をやった。

風に乗る木のさざめく音が、新吉の耳を通り抜ける。

いつも聞いている町の営み 人のざわめきや、店を開く木戸の音が辺りにないことから、この建物が人気のない場所に建てられていることがわかる。

「私らが紀州へ入ったのは、上様……当時紀州藩主であつた吉宗様を籠絡し、紀州を内側から支配することでした。そのために仲間内から白羽の矢が立ったのが、私の娘、お小夜でした」

独り言のように、しかし、はっきりとした口調で新吉に告げる声に、よどみはない。

「お小夜ももちろんそれを承諾し、我らは紀州へと入りました。ところが突然、私が体調を崩したことが、お小夜と軍太夫殿を引き合わせるきっかけになってしまったのです」

『……もう、大丈夫でしょう。しばらく安静にして、養生することです』

胸の痛みから頭を下げられない小太郎に代わり、薄い水色の着物に袖を通している娘のお小夜が、年配の医師に頭を下げた。

『とりあえず安心ですな。娘さん』

行商人の格好をしている若い男　軍太夫が、お小夜の肩をねぎらうように叩く。

『……はい。一時はどうなるかと。ありがとうございました』

お小夜は安心したのか、目尻にたまった涙をぬぐい、軍太夫に頭を下げた。

『では、私はこれにて。また明日参りますのでな』

『先生、ありがとうございました』

少し陰のある表情を崩さずに、軍太夫が医師に頭を下げた。

それに続いて、お小夜も頭を下げる。

『あの、本当に……ありがとうございました』

医師を見送った軍太夫に、お小夜はお辞儀を繰り返す。

『何も気にすることはありません。困った時はお互い様。それでは、私はこれで』

『あの！』

声音を変えずに立ち上がった軍太夫を引きとめようとするかのように、お小夜が少し切羽詰った様子で呼び止める。

その瞬間、軍太夫の胸を嫌な予感が走った。

『御迷惑でなければ……またいらして下さい。この辺には知り合いもおりませぬし、何かと……』

少し頬を赤らめて、うつむき加減に申し出る娘の様子を見下ろす軍太夫の顔に、笑みが浮かんだ。

『そうですね。父上様のご様子も気になりますし。顔を出すようにいたしましょう。では』

小太郎の視線に気づいたのか、表情を引き締めた軍太夫は足早に小屋を後にした。

その背中を見つめるお小夜の目に、いつもと違う憂いがあると感じた小太郎は、少し強く娘の名を呼んだ。

『……何です？ 父上』

『あの男、気をつけろよ』

『やだ、何を仰います。あのお方は父上のお命を助けて下さった方

ではありませんか』

布巾をしばるお小夜が、呆れたような笑みを浮かべる。

その横顔に、先ほど見受けられたような憂いはすでになく、早くに亡くした妻、お遥ようによく似た愛くるしい微笑みを浮かべて、小太郎を見つめてくる。

『何を勘ぐっておいんです、父上。私は、お役目を忘れてはおりませんよ』

いつもと変わらないお小夜様子は、小太郎を安堵させたものの、その一方で、一抹の不安が胸をゆっくりと支配する。

（大丈夫。お小夜は、お遥に似て意志の強い娘だ。心配はない）

いやな予感を消すように、何度も小太郎は心の中で繰り返した。

しかし。

その三ヶ月後、小太郎の不安は現実のものとなる。

第五章 五回目・過去・其の一 予感・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次回65話のの更新は、10月14日（もしくは15日）の予定です。

第五章 五日目・過去・其の二 確信・

小太郎とお小夜が山奥にある小屋へ落ち着いて、もうすぐ三月になる。

『小太郎さん、だいぶ元気になったようだね』

近くの百姓、おたねが、野菜をかごにたくさん入れて持ってきた。

『いつもすみません』

お小夜が、恰幅のいいおたねからかごを受け取って頭を下げると、白菜やかぼちゃが、勢いよく床にこぼれ落ちる。

『ああ、お小夜さん何やってるんだい。相変わらずおっちょこちょいだねえ』

『申し訳ない。おたねさん』

ここへ腰を据えてからというものの、すっかり落ち着きをなくしたお小夜に代わり、小太郎は頭を下げる。

『いいんだよ小太郎さん。周りのみんなも、あんたらが来てくれて喜んでるんだからさ』

おたねの言う意味がわからずに、小太郎は首をかしげる。

その直後、子供たちが勢いよく引き戸を開けて入ってきた。

『じいちゃん、あそぼう！』

『おじいちゃん、竹とんぼつくって〜』

収穫期の今、まだ農作業を手伝うには小さい子供たちが、小太郎のもとへ遊びに来ているのだ。

竹とんぼや駒などの遊び道具を作ってやったり、小太郎が鬼に扮してかけっこをすることも多々ある。

病が癒えたばかりの小太郎の身体には正直辛いのだが、逆に子供たちと遊ぶことで、以前の体調に戻るのが早まっているのを感じていた。

『小太郎さんが子供らの相手をしてくれるおかげで、あたしらの作業も早くて助かってるんだよ』

『じいちゃん、ずっとここにいろよね？』

おたねの言葉を受けて、息子の九太きゅうたが小太郎に問いかけてくる。

小太郎は、言葉に窮した。

身体が完全に癒えたらここを離れ、お小夜を城中へ送るべく、隠密理に活動を開始せねばならないのだから。

ところが。

『当たり前じゃない。何言ってるのよ』

お小夜が、思いもしないことを口にした。一瞬、娘に視線を移した小太郎だが、驚きを隠して九太に頷いた。

『本当だね？』

九太の目が輝いた。

それを見た小太郎の心に、針でつつかれたような痛みが走る。

（何なのだ？ この感情は）

最近、自分の心が見えなくなる時がある。

自分は今まで仲間とともに、「幕府をはじめとした徳川家への復讐」への一念で過ごし、娘を育ててきた。

だが、幕府の政策のせいで貧しくても、肩を寄せ合い、明るく生きているおたねたちを見ると、自分らの生き方が間違っていたのか、という疑問にぶちあたることもある。

……何を、考えている？

小太郎は、湧き上がる考えを必死に否定した。

「よかった。じいちゃん達がいなくなったら、おいら寂しいもん」

……寂しい？

小太郎は、笑顔で答える九太を凝視した。

自分らは、土地から土地へ、誰にも群れることなく流れ行き、息を潜めて生きてきた。

それが当然であつたし、寂しいなんて感情は、妻亡き後、いや、風魔が滅亡とされた時から、心の中からとうに追い出してきた物だつたのに。

『おじいちゃん、どうしたの？ 痛いのか？』

お七が、心配そうな目でのぞき込んでくる。

『いやいや。何でもないんだよ。さあ、今日は駒を作つて遊ぼうか』

無理やり笑みを作り、小太郎は駒作りに必要な道具を取り出した。

すると。

『あれ！ 軍太さんじゃないかい？』

ただでさえ響くおたねの声が、一層大きくなった。

行商人の姿をした軍太、こと軍太夫が一礼をする。

同時に、お小夜の頬がほんのりと染まつた。

『あんたも熱心だね。ここに行商に来たつて、買う銭なんか持つてる奴はいないのに』

『何言つてるんだよ母ちゃん。軍太さんは、お小夜姉ちゃんに会いに来てるんじゃないか』

『こら！ 何ませたこと言ってるんだよ。子供は黙つとれ』

おたねのひっくり返った声に、子供達の笑い声が小屋中に響き渡る。

しかし、九太の言葉に反応し、頬をさらに赤くしたお小夜と、頬がかすかに緩んでいる軍太夫を見た小太郎は、自分の嫌な予感が当たってしまったことを確信した。

第五章 五日目・過去・其の二 確信・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次回67話の更新は、10月22日の予定です。

第五章 五日目・過去・其の三 願い -

恐れていたことが現実になった夜、小太郎はお小夜に告げた。

『明日、ここを出るぞ』

いつもより低い声を発した自分を、娘は驚いた表情のまま見つめ返す。

『その理由は……お前が一番良く知っているはずだ』

『ええ。でも、私はここを離れるわけにはいきません』

『何だと!?!』

声を荒げて立ち上がった小太郎を見つめるお小夜の目は、今までにない輝きを放っている。

その目を、小太郎はたった一度だけ見たことがある。

十五年前、まだ恋人だった亡き妻が、お小夜を身ごもったことを自分に告げた時と同じ。

『お前、まさか……』

『はい。私は、軍太夫様の御子をこの身に宿しております』

よどみなく言い切ったお小夜から目をそらすと同時に、小太郎の身体から、力が抜けた。

『何てことをしてくれたんだ……。お前の責務は』

紀伊藩主吉宗を籠絡し、徳川家を滅亡させる足がかりを作ること。

それなのに、どこの馬の骨ともわからぬ男と恋仲になり、子供を身ごもるとは。

『軍太夫殿はまだ、我らの正体を知らぬ。悪いことは言わん。子は……墮すのだ』

『いやです』

『お小夜！』

『私、この子を産みます。早くに奥方を亡くされた軍太夫様とともに、新しい家族を作って行きたいのです』

『そんなこと……皆が許すと思うか』

小太郎の言葉に、お小夜が息をのむのがわかった。

『一時の感情に流されるな。お前は、軍太夫殿とわしを重ね合わせ、同情しているだけだ』

お小夜が目には涙を溜めて、小太郎を凝視する。

『子は、墮せ。何があっても産むことは許さん』

お小夜に背を向け、小太郎は言い切った。

同時に、扉を乱暴に開ける音と冷たい風が、小太郎の身体を通り抜ける。

『愚か者め……』

小さくつぶやいた小太郎は、傍らにあった瓶から酒を注ぎ、一気に飲み干す。

自分が身体を壊してしまったばかりに、お小夜は他人の愛にふれ、子までなしてしまった。

復讐のためだけに散らばっている仲間からすれば、これは裏切り行為だ。

しかし。

軍太夫と見つめあった時に見せた、娘の幸せそうな顔。

それが泣き顔に変わるのを見るのは、今の小太郎には耐えられそうもない。

なぜだ？　なぜ、迷う必要がある？

一族を再興することこそが、我らの幸せ。そのためには、赤子の命など消えても構わないはずなのに。

小太郎は再度、酒を茶碗に注いで飲み干した。

迷いを消すように、何杯も酒をあおる。

だが、量が増えれば増えるほど、小太郎の思考は、迷路に迷い込んでいった。

翌朝、お小夜とともに、商人姿の軍太夫が小太郎のもとを訪れた。

『旅の途中でこんなことになってしまい、大変申し訳なく思っております』

表情を強ばらせたまま、軍太夫は深く頭を下げる。

しかし、そのふるまいからは、初めて会った時のような沈んだ感じは見受けられない。

『私は、お小夜さんと会って生きる気力を取り戻したも同然です。彼女がいなければ……、妻を亡くした悲しみの淵から出ることはできなかつたと思います』

妻を亡くした悲しみは、小太郎にもよくわかる。

自分は、お小夜を育てていくことでこの悲しみから抜け出すことができたのだから。

『亡き妻との間にも子がおりますので公おおやにすることはかないませんが、お小夜さんとお腹の子供は私が幸せにします。ここに、留とどまっては下さいませんか』

『父上……』

お小夜が一步、前へ進み出た。

『父上を裏切ってしまったこと、申し訳なく思っています。でも私、この手でお腹の子を抱いてやりたいんです』

お小夜の言葉を聞いた小太郎の耳の奥で、ふと、亡き妻の声が響く。

「いつか、お小夜の子供を、この手で抱きたいわね」

それは、一族が滅んだ後に体の弱った妻が、常時口に出していた「願い」だった。

もし今、彼女が生きていたなら……お小夜に何と答えるだろうか？

いや、答えはもうわかっていた。彼女なら、こう言うに違いない。

「お産みなさい。そして、愛する人と幸せになるのですよ」

と。

脳裏に刻まれている柔らかな声を思い出した途端、小太郎の両目から涙がこぼれ落ちた。

第五章 五日目・過去・其の三 願い・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

次回68話の更新は、10月28日の予定です。

第五章 五日目・かりそめ

『何だと！？』

その日の夕刻、身重のお小夜を軍太夫にまかせた小太郎は、紀州の山奥から五里ほど離れた川岸でひざまずいていた。

『お小夜の使命は藩主吉宗を籠絡し、徳川家を崩壊させる一端を担うこと。それは承知しておるはずだ』

低く、抑揚のない声が、小太郎の全身を容赦なく冷やしていく。

『すべては、私の不徳の致すところです。お小夜の罪は、私がすべて請け負いますゆえ、何とぞ、娘だけは……』

赦してもらえぬとわかつてはいるが、口にせずにはいられない。

目の前の影は、何も語らない。その沈黙が、矢のように小太郎の心に突き刺さる。

『いかがいたします？ お頭』

傍らにいた目付役、平沼の鋭い視線が小太郎を射抜いているのがわかる。

針のむしろに座らされているような感覚が、小太郎の全身を冷やしていく。

目の前の人物は、なおも語らない。

沈黙だけが、辺りを包む。

『お頭！』

たまりかねたのか、平沼が叫んだ。

『……………もうよい』

『は！？』

抑揚のない声のあとに聞こえた間の抜けた叫びに、小太郎は思わず顔を上げる。

『任務を忘れ、男にうつつを抜かした拳句にやや子を宿すような女に用はないわ。お前とて同罪。二度と、我らの前に姿を見せるな』

語尾にとげを含みながらも、お小夜を、そして自分を赦す言葉を投げかけた目の前の人物に、小太郎はひれ伏した。

一陣の風が舞う。

同時に、その場にいるのは小太郎一人となった。

これで、お小夜は幸せになれる。

小太郎は、心の底から安堵し、何度も「ありがとうございます」とつぶやいた。

これから、自分とお小夜の身の上に、予想だにしない事態が起こ

るとも知らずに。

口を結び、何も言わなくなった小太郎を、新吉はじっと見つめていた。

その視線に気づいたのか、小太郎は

「私も結局、非情に徹することができなかったのです」

自嘲気味につぶやいて、小さくため息をつく。

「あなたの父君……軍太夫殿と私は、敵同士でありながら『妻を亡くした』悲しみで深く結びついていたのです。それが……私自身の判断をも狂わせる結果となりました」

「親父の……正体のことか？」

「はい。私はあの日、軍太夫殿が我らの正体を知る日まで、あの方が徳川家側の人間であることを知りませんでした」

「……馬鹿な。そんなわけねえだろう!？」

小太郎ほどの忍びとあろう者が、娘を孕ませた人間の素性を知らぬはずがない。

新吉はさらに注意深く、小太郎の様子を探る。

「お小夜は、感じていたようです。おみつを産んでから、あれの顔から、心の底からの笑いが消えたのにも、私は気づかぬふりをして、問いただせずにいました。早くに死んだ妻の分まで、お小夜を幸せにしてやりたい。ただ、それだけでした」

小太郎の言葉が、新吉の心の奥底を激しく揺さぶった。

まだ、おみつの正体を知らぬ数日前。

ただ、おみつを守りたい一心で、父や兄らから彼女を隠そうと躍起になっていた自分と、小太郎が重なったからだ。

「どいつもこいつも……馬鹿だよな」

新吉は、天井から射す光を見つめたまま、誰にともなしにつぶやいた。

自分も、小太郎も。そして……源三も。

一番大切なものを守りたい。なのに、手段を間違えて失おうとしている。

「新吉様。私と、手を組んでは下さいませぬか？」

少し間を置いてからの小太郎の発言に、新吉は思わず身体を起こした。

「手を組む、だと？」

「はい。昨夜はあなた様をここへ無理やりお連れして、一味の動向を窺ってまいりましたが、お小夜が思いもよらぬ行動を起こしまして……。このままでは、京香殿にも危険が及ぶ可能性が」

その行動が何なのかを訊いた新吉は、小太郎の答えに愕然とする。

もし、おみつがこのまま風魔に身をゆだねれば、京香は間違いなく邪魔者として亡きものにされてしまう。

しかし……。新吉はきつく目を閉じる。

風魔であるおみつには二度と関わらない。そう宣言して源三の道場を飛び出した自分だ。

今さら、おみつを守るための行動を起こせと言われても、無理な話だ。

「……俺に、何をしろってんだ」

「あなた様もご存じのはずです。今宵、風魔が山城屋を襲撃することとを」

平沼の言葉が、脳裏にひらめく。

『幕閣を揺るがす余興』 奴は確かに、そう言った。

「このまま山城屋が襲われては、幕府の……ひいては上様の行わんとする政は地に墜ちてしまいます。そうならぬためにも」

「風魔一族であるお前さんが、どうしてそこまで幕府に加担する？」

熱がこもった口調に違和感を覚えた新吉は、小太郎に問う。

「すべては、京香殿とお小夜を取り戻した際にお話しいたします。
ご協力いただけませぬか」

これ以上問うても、堂々巡りか。ならば。

「……いいだろう。ただし、今回限りだ」

新吉の言葉に、小太郎が深くうなずいた。

第五章 五日目・かりそめ・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

次回68話の更新は、11月12日（月）の予定です。

第五章 五日目・発見・

源三らが気を失ったおみつを連れ帰ってから三刻ほど経ち、陽の光はすでに、火の見やぐらの頂上まで到達している。

「……新吉のやつ、一体どこほつつき歩いてんだよ」

遅い朝食を済ませ、町へ出ようと深い青の着流しを身にまとった源三に向かって、薄い灰色の小袖に着替えた康太が不満を口にする。

「仕方があるまい。今の新吉には、心の整理が必要なのだろう」

昨夕の、憎しみに満ちた新吉の目を思い出し、源三は目を閉じる。

あれほどまでに守ろうとしたおみつが、幕府の敵である風魔一族の末裔。

もし、自分が新吉の立場ならば、それを黙って受け入れられるかは、定かではない。

「でもよ、どこにいるのかもわからねえのに、町に出るのは無謀だぜ。おとなしく待ってるほうが」

「いや、あいつは一度言い出したら聞かぬ男だ。何が何でも見つけ出し、話をしないことにはな」

康太は依然納得のいかない表情をしているが、動きださなければ何も始まらない。そう決意し、ふすまを開ける。

すると目の前に、桃色の生地に白い花びらをあしらった小袖を着たおみつが立っていた。

「おみつ！ 寝てなければだめではないか」

初めて会った時とはくらべものにならぬほど頬はこけ、顔色もあまりよくない。

「そうだよ、おみっちゃん。あんた、まだ熱が下がってないだろう」

源三の横からおみつの手を握った康太も、やや語気を強める。

「私も、兄さんを捜す。先生だけにまかせてじっとしてられないよ」

ふすまの脇をつかんでいる手に触れる。すると、お湯を沸かしたあとの鉄瓶のように熱い。

今すぐ倒れてもおかしくないのに、源三を見上げる目の輝きは、いつも以上に強い。

「しかし」

「寝てたら、母さんのこと考えちゃう。だから……」

うつむき、消え入るような声でつぶやくおみつの言葉に、思わず康太と顔を見合わせる。

やはり、おみつの心は風魔に大きく傾いているのだ。

母のもとへ逃げだしたいと思う心と、自分が行けば京香を助けられるという現状と。

自分でもそれをわかっているから、あえて行動を起こすことでそれから逃れようとしている　そう、源三は思った。

「わかった。康太、すまないがおみつのために薬を煎じてやってくれ」

「先生」

「おみつのことは、俺が責任を持つ。頼む」

「……たく、兄妹そろって頑固者なんだから」

口調は乱暴でも、軽く笑みを浮かべて去っていく康太の背中を見るおみつの目から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

康太の煎じた薬を飲み、半刻ほど休^{はんとき}んでいたおみつとともに街へ出たときには、陽も傾き始めていた。

おみつの足取りは軽やかで、源三は少しだけ安堵する。

「……兄さん、どこにいるんだろうね」

前を見たまま、おみつが誰にともなしにつぶやく。

「さあ。馴染みの女のところにもいてくれたらいいんだがな」

「女？ 兄さん、いい人でもいるの？」

「惚れた好いたの関係ではない。いわゆる、春を売る女ってやつだ」

「春を……売る？」

源三の言葉に立ち止まって訊ねてくるおみつだが、言葉の意味をはかりかねているようだ。

「要するに『一夜限りの関係』ということだ」

「一夜…限り。え！」

おみつの頬にかすかな赤みがさし、鳩が豆鉄砲をくらったような表情のまま固まる。

「やだ！ 兄さんったら。いやらしいんだから！」

頬をますます赤く染め、ぷつとふくらませておみつがまた歩き出す。そして。

「まさか、先生はそんな人いないでしょうね？」

「いるわけないだろう。そんな……」

言いかけた源三の脳裏に、なぜか京香の笑顔が浮かぶ。さらに。

『先生は、京香のことが好きなんだな』

という、康太の言葉も。

顔中がいきなり熱くなった源三は、慌てて首を振った。

なぜ、こんな時に京香の顔が浮かんでくるのだ？ 彼女と自分は、
れっきしたいとこ同士なのに。

「やっぱり先生もいるんでしょう？ そういう人」

「何を言ってるんだ。ほら、行くぞ」

おみつの追及をかわすため、源三は彼女の背後に回って肩を押した。

「あ！」

おみつが突然立ち止まる。

「どうした？ おみつ」

顔をのぞきこむと、やっと緩みかけたおみつの顔は、厳しいもの
へと戻っていた。

「あいつ……。紀州で、じいちゃんに話しかけてた侍だ」

「何！？」

源三も、おみつの視線の先を追う。

頬に大きなあざのある浪人風の男が、一瞬視線を泳がせたのち、ゆつくりと歩いて行く。

そして、後をつけている様子の小柄な男を見たおみつの身体が、小刻みに震え出す。

「……じいちゃん」

おみつの、すべてを絞り出すような声が、源三の耳をすり抜けた。
。

第五章 五日目・発見・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

次回70話の更新は、11月25日（日）の予定です。
しばらく間が空きますが、ご了承くださいm（ ）m

第五章 五日目・重荷・

二人の姿が、人波に消えようとしている。

「……じいちゃん」

源三は、駆け出そうとするおみつの肩をぐっと抑えた。

「先生」

見上げるおみつの目に、源三に対する非難の色が混じる。

「少し距離を置いて後をつけるのだ。今、小太郎殿の前に姿を見せても、何も答えてはくれぬはず」

少し熱いおみつの手を握りしめ、源三が歩を進める。

今はちょうど昼時。寺子屋帰りの子供が駆け回り、食を求める職人が、小料理屋に吸い込まれている。

しかし、今の源三には、世間の動向よりも目の前に行く小太郎、そして今回の事件の鍵を握るであろう浪人の背中しか見えていない。

隣を歩くおみつも、同じ思いだろう。

「どこに行くんだろ？」

「わからぬ。だが……」

この道の先には、幕府御用達の看板を掲げる大店が立ち並ぶ。

幕府を敵とみなしている風魔の人間が歩くには、似つかわしくない場所であるのだが……。

浪人が、そして小太郎が大通りを曲がった。

おみつとともに、角の家の軒先から様子をうかがう。

決して人通りの多くない場所で、浪人は辺りをうかがい、小太郎は背に負った荷物を確認するふりをして立ち止まる。

源三の手を握るおみつの手に、力がこもる。

浪人が、ある建物に入ってしまった。小太郎も後を追ひ、中へ消える。

「じいちゃん」

つぶやいたおみつが、心配そうに源三を見上げる。

「おみつ、ここを動くなよ」

念を押し、源三は二人が消えた建物に近づく。

日に焼けた、古い看板が並ぶ老舗の通りで、ただ一つ新しい看板の下に立ち、源三は息をのむ。

「……山城屋、か」

確認するようにつぶやき、建物の中に視線を走らせる。

辺りをうかがいながら、源三の前に姿を現したのは 濃い灰色の小袖に袖を通し、風呂敷包みを持った、新吉だった。

「新吉！」

源三はとっさに叫んだ。

大店の若旦那のように髪をきれいに結い上げた新吉の目が、大きく見開かれる。

「こんな所で、何をしているのだ」

立ち止まったままの新吉に歩み寄り、源三は問うた。

「先生こそ……何してんだ」

源三から視線をそらした新吉の声は、強張っている。

「俺とおみつは今、紀州で小太郎殿に声をかけていたという浪人を追って来たのだ。その浪人は、一番最初に父上がおとりになった際、お前や京香に襲いかかった浪人と同一人物に相違あるまい？」

新吉は源三から目をそらしたまま、何も答えない。

「新吉」

源三はもう一度、名前を呼ぶ。

「京香が昨夜、戻って来たぞ」

驚いた表情で、新吉が再度源三を見た。

「そなたの言う通り、風魔の手先としてだな」

動かしがたい事実を告げた源三が、視線をそらす。

「……それでもまだおみつと一緒にいるなんぞ、あんたも相当なお人よしだな」

新吉の低い声が、源三の心を突き刺す。

「……確かに、そうだな」

源三は、胸に広がる苦い思いとともに息を吐きだし、再度新吉を見た。

「そなたが今、おみつに心を閉ざす気持ちはよくわかる。それを止める、とは言えぬ。だが、京香を救いたい気持ちは同じであろう？」

視線がぶつかる。それだけで、源三は新吉と共通の願いがあることを実感する。

「確かに、姐さんを助けたい気持ちはあんたと同じだ。だが……俺はまだ戻らねえ」

「新吉」

「一つだけ、教えてやるよ」

新吉は、再び視線をそらす。

「あの浪人……平沼對馬としまは、山城屋と同じ穴むじなの貉だ。奴らは今日、幕閣を揺るがす『余興』を考えてるようだぜ」

「余興？」

「ああ。それに平沼とお小夜さんが昨日、連れ立って良庵先生の所へ薬を取りに行っていた。ご禁制の品だって言うから、阿片か何かだろう。……俺が言えるのはここまでだ。じゃあな」

こちらに構わず、新吉は早足で去っていく。再度呼び止めたかったが、近くにおみつを一人にしておくわけには行かない。

さっきの場所に戻ると、おみつは少しだるそうに壁にもたれかかっていた。頬には発熱特有の不自然な赤みが浮かんでいる。

「大丈夫か？」

おみつは無言でうなずいた。その仕草はやはり、兄の新吉にそっくりだ。

「あいつ……どこに入って行ったの？」

さっきより、少し息が荒い。立つのがやっとのおみつを支える。

「幕府御用達の山城屋という米問屋だ。どうやら、あの浪人と山城屋は仲間らしいな」

「御用達なの？」

「御用達になるには、幕府の厳しい調べが入るが、山城屋はそれをうまくかいくぐったのだらうな」

山城屋が御用達になった経緯よりも、平沼という浪人とともに企てているらしい『幕閣を揺るがす余興』という言葉がひっかかる。

『余興』とは名ばかりの風魔の作戦が遂行されれば、きっと、御政道に多大な影響が出るのは必定。

すぐに道場へ戻りたいのは山々だが、山城屋の動向も気になる。新吉の言つとおり、平沼とお小夜につながりがあれば、京香が姿を現す可能性も否定できない。

しかし、おみつの体力はすでに限界のようで、少しずつ源三に身体を預けている。

「先生？」

何も言わない自分を心配してか、おみつがうるんだ瞳で見上げてくる。額からは汗が大量に流れ落ちていた。

ここから離れるのは気が引けるが、今はおみつを休ませ、兄にとの次第を告げることの方が先決。

「おみつ。これから実家に戻ろうと思うが、つきあってくれぬか」

「実家って、おじいちゃん……じゃなくて、先生のお父さんの所？」

「山城屋のことを、兄に報告しなければならぬのだ。それに、あなたの身体も心配だ」

いつもならここで『大丈夫』と言ってくるおみつだが、何も言わない。

源三は体勢を変えておみつの身体を背負った。初めて会ってからわずか三日なのに、ずいぶん軽くなったことに驚く。

「ごめんなさい……先生」

かすれた声でつぶやいたおみつが、規則正しい寝息を立て始めた。

祖父の安否はどうか知れたものの、母は風魔として自分の前に立ちほかかる。

紀州でのびやかに育ったおみつにとって、今の状況はあまりにもむづい。

小さな心と身体に背負っている重い荷物に思いをはせた源三の心に、やりきれない思いが広がった。

第五章 五日目・重荷・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

年末繁忙期に入るため、次回71話の更新は、12月中旬を予定しています。

またしばらく間が空きますが、ご了承くださいm（）m（）m

第五章 五日目・現実・

「……左様か」

四半刻後、おみつを連れて清水邸へ赴いた源三の報告に、灰色の着流しの上に、薄い茶色の羽織を着た天膳が、きつく目を閉じた。

西にほぼ傾いた夕陽が障子を赤く染め、からすが遠くで鳴いている。

水をふくんだ竹が跳ね上がり、こん、と乾いた音が数回聞こえたのち、天膳が目を開けた。

「お主は、どうするつもりじゃ？」

鋭い目が、源三の心を射抜く。

できることならば、京香を風魔から救い出して暗示を解きたい。

感情を抑え、なるべく平静を装って、源三は本音を口にする。

しかし。

「……それは、不可能じゃ」

「父上！」

思いも寄らない天膳の言葉に、源三は思わず身を乗り出した。

「源三」

天膳が静かに口を開く。

「お前の気持ち、わからぬでもない。だがな、我ら幕府側の人間に憎しみを抱く風魔の暗示をかけられた京香が、次に誰を狙ってくるか……わからぬお前ではあるまい？」

たてた膝の先を強く握りしめ、源三は畳のふちに視線を落とす。

その先に、昨夜見た京香の顔が浮かぶ。源三は思わず目を閉じた。目を閉じれば、唇の端をくつと上げて笑う、彼女の微笑みを思い出すことができるのに。

「わしとて、可愛い姪を死なせたくはない。だが」

「……私情は、禁物」

やりきれない思いをぐつとこらえ、源三が低くつぶやく。

「何らかの理由で暗示が解けるのならそれに越したことはないが、そうなる前に、誰かが命を落としかねん。そうなれば……」

天膳がまた、口を閉ざす。

自分か、それとも、京香か。

今度相まみえることになった時、どちらかが死ぬことを覚悟しなければならぬ。

京香を死なせるくらいなら、自分が……。

目を閉じたまま思いにふける源三の耳に、複数の足音が聞こえる。

「御免」

兄、忠直の聲が、ふすまを開く音と同時に響いた。見ると、登城する際に身につける肩衣半袴かたぎぬはんばかまではなく、濃い灰色の着流しに黒の袴をまとっている。

「どちらかお出かけですか？」

「半刻のち、幕府御用達となった山城屋の宴に参るのだ」

山城屋。その言葉を聞いた源三はとっさに申し出る。

「兄上。その宴、私も同行してかまいませぬか？」

「先方は幾人来てもかまわぬと申しておったが、どうかしたのか？」

源三の声音に何かを察したのか、忠直が室内へ入ってくる。

隣に座るのを待つて、天膳が今までのことをかいつまんで忠直に話した。

兄の横顔がみるみる強張っていくのを目の当たりにし、源三の心もまた重くなる。

「幕閣を揺るがす『余興』か……」

つぶやく声は、山城屋に対する怒りに満ちているように思えた。

「忠直。すぐに軍太夫と康太を呼べ」

「軍太夫殿と、康太を？」

「左様。万が一幕閣の身に何かがあれば、上様の御政道が揺らぐは必定。源三一人では心もとないゆえ、今回だけは特例じゃ。すべての責はわしが負う。急げ」

「はっ」

一礼すると忠直はすぐさま立ち上がり、部屋を出て行く。

続いて立ち上がった源三に、天膳が声をかける。

「今夜のことは、おみつに決して気取^{けど}られてはならぬ。……よいな」

おみつが今夜の山城屋の計略を知ったなら、行くと行ってきかないだろう。

山城屋に出入りしている浪人が首謀者の一人なら、お小夜と……京香も、その場に現れないとも限らない。

源三は、天膳の目を見てうなずくと、頭を軽く下げて部屋を辞した。

第五章 五日目・現実・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります（月1回）。

年末繁忙期が続くため、次回更新は年明けになる予定です。

なかなか更新ができなくて申し訳ありません。また来年もよろしく願います。

今年1年、どうもありがとうございました。よいお年を

第五章 五日目・責任・

先ほどまで空を染めていた陽はかげり、闇が辺りを覆い始めた。

ひんやりとした、を通り越した冷たい空気が、針のように新吉の肌を容赦なく包み込む。

昼間は商人を装ってこの辺りを周回し、今は、小太郎とともに山城屋の動向を見張っている新吉の身体は、すっかり冷え切っている。

しかし、身体以上に新吉の心を冷やしているのは、当たってほしくなかった自らの勘であった。

『京香が昨夜、戻って来たぞ。……そなたの言う通り、風魔の手先としてだがな』

やるせない気持ちを乗せたであろう源三の声が、新吉の脳裏をかすめる。

やはり、自分が思ったとおりだった。

あの日、夕闇の中で対峙した正体不明のくの一は、京香だったのだ。

救えるものなら、救いたい。

しかし、風魔によって強い暗示がかけられている以上、下手な情をかけては、こちらが命を落としてしまう。

新吉は、来たるべき時が近づいているのを感じていた。

たえかけがえのない仲間であろうとも、御政道を守るものとして、決着をつけねばならない時が。

「どうやら、動き出したようですね」

深い思考の底であえいでいる新吉の耳に、小太郎の声が入る。

思わず顔を上げると、山城屋ののれんをくぐった平沼の背中が遠ざかっていくのが見えた。

「どうする？」

「とりあえず、後を追ってみましょう。もしかすれば、お小夜や京香殿が平沼と合流するかもしれません」

小太郎の口から出た京香の名に、思わず胸元の短剣を握りしめて立ち上がった。

見失わないように、かつ、適度な距離を保って、その背中を追いかける。

山城屋などの大店が立ち並ぶ大通りを抜けた平沼は、小さな川を渡る。

その道をまっすぐ行けば、先日、京香と対峙したあの笹やぶへ入るはず。

やはり、あの絵馬堂が奴らの本拠地か。だとすれば、そこには京香の姿もあるはず。

新吉は静かに息を吸った。もう……、引き返すことはできない。

「お斬りになるのですか？ 京香殿を」

小太郎からの突然の質問。しかし、新吉は切り返す。

「俺は、あんたのようになるつもりはない。御政道の邪魔をするならば、たとえ妹だろうが、容赦なく斬る」

「……そんなに、おみつが疎ましいですか？」

「許すつもりはない。俺が、姐さんをこの手で斬ると決めた以上はな」

間髪入れずに、新吉は答える。

「この事件が片づいたら、あんたの命も無いものと思ってくれ」

「私の命は、どうなってもかまいません。しかし」

いつになく低い小太郎の声が、新吉の心を捉えた。

「一つだけ申し上げます。おみつは……私の孫は、何が一番大切な知っている子です。あの子は決して、あなた方を裏切るようなこととはしないでしょう」

「……どういう……意味だ？」

意味を図りかねた新吉は、小太郎に問う。しかし彼は何も答えない。

そのとき、大きな物音が後ろから聞こえた。

新吉はとつさに、胸元から短剣を取り出す。むろん、自分より先に振り返った小太郎の手にもそれは握られている。しかし。

「……あれは」

小太郎の顔がこわばった。

「おい！」

何も言わずに駆け出した小太郎を追って、新吉も走り出す。

「お小夜、どうしたのだ？ お小夜！」

珍しく、小太郎が大きな声で抱きかかえた人物の名を呼んだ。

驚いた新吉は、小太郎の背中越しに女性の顔を凝視する。

薄闇の中なのではつきりと認識はできないが、その面差しはやはり、おみつによく似ていた。

「……父、上」

かすれた声で、お小夜が小太郎を呼んだ。

「一体、何があつたのだ？」

「お願いです、父上……。京香さんを、助けてあげて下さい」

「どういうことだ？ お小夜！」

「私は騙されていたんです。平沼に。自分らとともに行動すれば、父上もおみつも、いつかこちらへ取り戻してやると。ところが……」

そこまで言うと、お小夜は激しくせきこんだ。

昇りはじめた月明かりが、口元を押さえた指の隙間から血が流れ出ているのを照らしていた。

第五章 五日目・責任・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります
（月1回）。

大変長らくお待たせして、すみませんでした。

今後ともよろしく願いいたしますm（――）m

第五章 五日目・お人好し・（前書き）

【用語解説】

・中間：ちゅうげん 武家に奉公している女中方の部屋付の男性を指す。雑用に
あたった。

第五章 五日目 - お人好し -

「お小夜！」

お小夜の身体から力が抜け、小太郎の声がうわずった。

この状況から見ると、お小夜の命は風前の灯と言ってもいいだろう。

しかし、こうしている間にも、平沼の背中次第に遠ざかっていく。猶予はない。

「小太郎さん」

新吉は初めて、目の前で狼狽している老人の名を呼んだ。

「ぐずぐずしてたら、平沼を見失っちまう。俺は奴を追っから、あんたはお小夜さんを安全な所で休ませてやるんだ」

小太郎が、こちらを見上げる。しかし、その目は定まらず、表情には動揺の色がくつきりと浮かんでいる。

「安全な、所……」

小太郎の所在なさげなつぶやきに、新吉は小さく舌打ちをする。

いくら、老練な忍びとはいえ、紀州から江戸へ出てきて間もない小太郎に土地勘を求めるのは酷か。

一番安全なのは、小石川療養所。しかし、ここからだとなんに急いでも、お小夜の命の保証ができない。

ここから、一番近い場所は……。思いを巡らす新吉の脳裏に浮かんだのは、昨日、衝突したまま別れたきりの、源三の実家、清水邸。新吉の胸に、苦い思いが広がる。恐らく、自分と源三がおみつの出自をめぐって対立したことは、天膳の耳にも入っているはずだ。

だが、今は一刻を争う。

お小夜もさることながら、今、平沼の行き先を見逃せば、京香の命すら、あの世へ発ってしまう。

「小太郎さん」

新吉は再度、小太郎を呼んだ。

「お小夜さんは俺が必ず安全な場所へ連れていく。だから、あんたは平沼を追ってくれ」

「……しかし」

「しのこの言ってる時間はねえんだ。このまま奴らをのさばらせれば、今度は誰に類が及ぶのか、あんたが一番よく知ってるんじゃないのか？」

小太郎の目に、輝きが戻る。

一瞬、意識を失ったお小夜に視線を落とすと、娘の身体を新吉に

託してくる。

「平沼と、風魔のたくらみは、私が必ず阻止いたします。お小夜を……頼みます」

溢れる思いを閉じ込めるように低くつぶやき、小太郎は平沼が去って行った方向へと走り出す。

見送った新吉は、お小夜の身体を抱き上げ、清水邸へ向かって歩きはじめる。

しかし、足が、重い。

(……何をしているんだ？ 俺は)

許せないはずだ。おみつも。そして、自分の父を籠絡したお小夜も、彼女の父親である小太郎も。

なのになぜ、自分が追わねばならない平沼を小太郎に託し、自分はお小夜の命を救うために、決別したはずの源三の実家に向かっているのか。

目を閉じたままのお小夜に視線を落とし、新吉は、自分自身をあざ笑う。

結局……自分も源三と同じ『お人好し』ということか。

自身を鼻で笑ってお小夜を背負い直し、新吉は歩みを速めた。

「新吉さん。どうしたんですか？」

清水邸の重い扉を開けた年若い中間^{ちゅうげん}は、新吉のなりを見て驚きの声を上げる。

無理もない。普段滅多に着ることのない小ぎれいな着物姿で、なおかつ傷だらけの人間を背負っているのだから。

「事情はあとで話す。悪いがこの人を寝かせて、康太につなぎをとってくれないか？ 時間がねえんだ」

「わかりました。旦那さま！」

中間が、天膳呼びに中へ戻る。気まずい思いはぬぐえないが、致し方ない。

ほどなく、複数の人間の足音が聞こえて来た。

「ご心配をおかけして、申し訳ありません」

お小夜をどうにか寝かせ、家に居合わせていた療養所の人間に託した新吉は、別室で天膳に頭を下げた。

「大方のことは、源三から聞いておる。順を追って知らねばならなかったことを、一度に知り過ぎただけじゃ」

「清水様」

「いくら軍太夫との仲がしつくり行かずとも、幕府に仇^{あだ}なす風魔を憎むよう言い含められて育ったのじゃ。無理もない。だが」

言葉を切り、天膳が厳しい表情で新吉に向き直る。

「このお役目とおみつとのことは別問題。公私混同は今後、何があっても許さぬぞ」

新吉は無言で、深く頭を下げる。

「お前が連れてきたあの女子^{おなご}……。おみつの母親じゃな」

さすがは天膳。老いても、観察眼は衰えてはいない。

「はい。山城屋を見張っていたところ、近くで倒れこんでいたのを見つけました」

「そなたはなぜ、山城屋に目をつけておった」

言葉に詰まる。おみつの祖父と行動を共にしていたことを告げていいものか。

「今は、緊急事態じゃ。一瞬の迷いが、最悪の結果を生み出すことにもなりかねん。それはそなたも、よく知っているはずじゃ」

名前は出さずとも、天膳が、風魔に堕ちている京香のことを言っているのはよくわかる。

新吉は意を決して、小太郎のことも含め、昨夜からのことを天膳に告げた。

「平沼對馬……。やはり、奴が急先鋒だったか」

天膳が深いため息をつき、目を閉じる。

その直後、離れの方で大きな物音がするのを、新吉は聞いた。

第五章 五日目 - お人好し - (後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります
(月1回)。

第五章 五日目・対決・母と娘・

深く、暗い闇に沈むおみつの意識に、突然、悲鳴が割り込んで来た。

驚いて目を開けると同時にふすまの開く音がひびき、幾人かが歩く震動が、おみつの身体に伝わる。

おみつはゆつくりと起きあがった。眠る前にもらって飲んだ煎じ薬が効いたのか、身体が軽い。

布団から出たとたん、冷たい空気がおみつを包む。自らの腕で身体を抱えながら、ふすまに近づいた。

耳をすまし、誰も通っていないことを確かめて廊下に出ると、角を曲がったすぐの部屋の聞き慣れたいくつもの声が耳に入る。

「お小夜殿、決して悪いようにはせん。その人を放すのだ」

天膳の声がお小夜の名前を呼ぶ。部屋に向かうおみつの足が思わず止まった。

（……どうして、母さんがここにいるの）

おみつは身じろぎもせず、耳を澄ます。

「……そうか。あんたは、俺と小太郎さんを分断させるために芝居を打ったってわけか」

新吉の声が、小太郎の名を呼ぶ。新吉は、憎んでいるはずの小太郎と、行動をとみにしていたのか？

「私たち風魔が、あなた達の動きを知らないとでも？ たとえ誰であろつと、私たちの邪魔をするのなら消えてもらうしかないわ」

お小夜の言葉が、新吉と小太郎に思いを巡らすおみつの胸を激しく打った。

このままだと……祖父が殺されてしまう。

「ちくしょう！―！」

捨て台詞が聞こえるのと同時に、強い足音がこちらにせまってくる。

「……おみつ」

新吉の顔が、こわばる。

「兄さんは、じいちゃんどこで知り合ったの？」

「ちょうどいい。ちょっとこっち来い」

おみつから顔をそらした新吉に、おみつは腕を強く引っ張られた。

「おみつ……！」

天膳が驚きの表情で、こちらを見つめる。しかし新吉はそれにかまわず

「あんたらの邪魔をするのが、実の娘でもか!？」

新吉の言葉で、おみつを認めたお小夜の顔色が変わった。

捕らえていた腕の力が緩んだのか、白衣を着た少女がお小夜を突き飛ばして駆け込んできた。

「おしまちゃん」

新吉がおみつから手を放し、おしまと呼んだ少女を抱きとめる。

おみつははじかれたように前へ出た。

「母さん……」

つぶやいたおみつの身体が、急激に冷える。

「じいちゃんを、殺すつもりなの?」

お小夜が目をそらす。

「じいちゃんは、母さんのお父さんでしょう!？ それなのに」

「それが、忍びの掟なの」

あえぐように、お小夜が口にする。

「あなただって父上……、いえ、小太郎殿からそう叩き込まれて育ってきたはずじゃない」

冷気にさらされているはずのおみつの身体を、熱い何かが駆け抜ける。

「忍びの掟がなによ！ 風魔がなによ！ 私は、そんなことを知るために江戸に来たんじゃない！！」

目の奥が熱くなり、冷えたしずくがまなじりから落ちる。

「私はただ、いなくなっただじいちゃんと一緒に、紀州に……」

帰^{おえつ}りたかっただけ。その言葉よりも先におみつの口から出たのは、嗚咽^{おえつ}だった。

祖父を追って出てきた江戸で、出生のすべてを知った。

自分に流れる風魔の血で、源三や新吉、そして自分を受け入れてくれた京香にまで多くの迷惑をかけている。

言葉にならない思いや悔恨が、涙となっておみつの頬を濡らした。

「お小夜殿。そなたも人の子であり、人の親ならわかるはずじゃ。どれだけ、小太郎殿やおみつが苦勞してきたかを」

おみつの肩を、大きな手が優しく叩く。

「おじいちゃん……」

おみつはたまらず、天膳にすがりついた。小太郎と同じにおいが、二度と戻って来ない穏やかだった日々を思い出させる。

「待て！」

つかの間の安らぎが、新吉の言葉でかき消される。

振り向いたおみつの視線から、お小夜の背中が遠ざかっていく。

「待て！ おみつ」

天膳の手を振りほどいたおみつの背中に、新吉が叫んでくる。

「行かせて兄さん。このままだと、じいちゃんが殺されちゃう！」

「てめえだけは行かせるわけにはいかない。それはわかってるだろう」

新吉が再度、おみつの手を強く握った。

「風魔の血なんて、私にはどうでもいい。私は、じいちゃんを助けただけなの！！」

おみつは至近距離で、新吉を強くにらみつけた。

「新吉。そなたも一緒にお小夜殿の後を追うのじゃ」

「清水様、何を！？」

思いがけない天膳の言葉に、新吉の手が緩んだ。

「よいか。お小夜殿の行く先には小太郎殿だけではなく、京香もい

るかもしれぬ。今が、京香をも救う千載一遇の好機じゃ」

京香の名を聞いた新吉の表情が変わった。しばらくうつむいていたが、やがて。

「……仕方がねえ。俺の足を引っ張るなよ」

何かを飲み込むようにつぶやくと、胸元から短剣を取り出した。

「おみつ。これを持っていくがよい」

天膳が、自らの手に握っていた短刀を持たせてくれる。

「おじいちゃん」

「必ず、そなたのままで帰ってくると約束してくれ。それが、われら全員の望みじゃ」

天膳の目くばせで、新吉に救われたおしまが、着ていた白衣をおみつに着せてくれる。

自分は、自分のままで戻ってくる。京香や、小太郎とともに。

涙をぬぐって天膳にうなずくと、おみつは、新吉の後を追って駆け出した。

第五章 五日目・対決・母と娘・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります
（月1回）。

第五章 五日目・疑惑・

駆け出した新吉を追って外へ出たおみつの肺に、冷たい空気が一気に入る。

咳き込みそうになるのをぐっとこらえ、おみつは兄に遅れまいと速度を上げた。

屋敷を出てすぐの角を曲がる。武家屋敷の白壁が並ぶ小路を抜けて橋を渡るとすぐ、大店が立つ大通りへと抜ける道に出た。

「どこに行くの？」

小さな咳をして呼吸を整え前方に問うも、新吉は答えてくれない。

やむを得ない、か。

おみつを令、一番疎^{うと}んじているのは、兄の新吉なのだから。

湧き出る感傷を振り払い、おみつは再び前を向く。すると、見覚えのある光景が次々と目に飛び込んで来た。

大きな建物に沿って曲がり、少し走ると、新吉は、木戸を激しく叩いた。

激しく息を吐きながら上を見ると、そこには『山城屋』と書かれた看板が、月夜に照らされて光っている。

「はい」

おみつよりも幼い顔立ちの奉公人の少年が顔を見せる。

「旦那さんいるかい？」

新吉が訊ねると、大きな半纏はんてんを羽織った少年は思い出したように彼を見上げ、口ごもる。

「口止めでもされてるのか」

少年はうつむき、小さな声で、勘弁してください、とつぶやく。

「悪いが、こちらら時間がないんだ。今日ここに、幕府の要職の方々が招かれてることは知ってるんだ」

新吉の声が次第に低くなる。うつむく少年の身体が、小刻みに震えだした。

「お願い。何か知ってるなら教えて」

新吉の後ろから進み出て、おみつは少年の前にひざまずく。

少年の怯えた目が、おみつを捉える。

「旦那さんの居場所がわからないと、何人もの人が死んでしまうかもしれないの」

少年が驚いて、新吉のいる方を見上げる。しかしまた、自らの足元を見て唇をかみしめる。

「お兄ちゃんが言ったって、旦那さんには絶対言わない。だから……ね？」

おみつは笑みを作って、少年をまっすぐ見つめる。

「……旦那様は、いません。お客様をお連れになって、川向つの寮に行かれました」

「川向つ……」

新吉が、何かを思い出したような口ぶりでつぶやく。

「ありがとう！」

おみつは立ち上がって、今にも泣きそうな少年の頭を優しく抱きしめる。

「行くぞ、おみつ」

まだ、こちらを見ない新吉にうなずき、再びおみつは走り出す。

少しでも早く、山城屋の寮に着かなければ。

「おい」

新吉が前を見たまま話しかけてくる。

「今回のことが済んだら、お前……どうするつもりだ」

すべての決着がついたら……。そんなこと、考えてもいなかった。

風魔の血をひく自分はこれから、恐らく、幕府の人間に追われる立場になるだろう。

もちろん、小太郎も……、いや、違う。

軍太夫の話だと、小太郎と自分の正体はとうに、幕府側へ知られていたはず。

父から話を聞いた時は、不遇をかこつたことに対する怒りで気がつかなかった。

しかし何故、自分と小太郎は、現八代將軍の紀州藩主、吉宗のもとで生き永らえていたのだ？

吉宗の配下が家族を引き裂いたから？

自身が、軍太夫の娘だから？

そんなはずはない。幕府と敵対する風魔に生きていられては、困るのは吉宗のはず。

……何か、ある。

父が、幼い自分を置いて江戸へ出たのも、祖父が、成長した自分をいきなり置き去りにしたのも。

幕府側の忍びと、風魔の人間。両方の血を引くおみつに関わる何かが、複雑に絡み合っているはず。

「おい！ 何ぼおつとしてんだ！」

いつしか足が止まり、地面を見つめていたおみつに、前方から新吉の怒鳴り声が飛んでくる。

そうだ。今は、自分の出自などを気にしている場合ではない。

父親を亡きものにせんとしている母、お小夜から祖父を守り、京香も救い出さなければ。

おみつは顔を上げ、新吉の背中を追って走り始めた。

第五章 五日目・疑惑・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります（月1回）。

第五章 五日目・決心

(……おかしい)

忠直が乗る、質素な駕籠に寄り添うように歩く源三の胸に、嫌な予感が湧き上がる。

一旦は山城屋に向かった一行は、まだ年端も行かぬ奉公人の少年からの伝言で、川向こうにある主人の寮に赴くことになったからだ。

しかし、呼ばれているとされた幕閣を乗せた駕籠を、源三は見えない。

(やはり、罨か)

源三は、次第に生い茂る森を見回し、呼吸を整える。

風魔の狙いは幕閣に対する「余興」ではないのか？

それとも、新吉に感づかれたことを察し、作戦を変更したのだからか？

忠直を乗せた駕籠を取り囲む一行には、いざというときのために南町奉行所の捕方のうち、手練てだれの者たちが配置されており、天膳から命を受けた康太と軍太夫が、密かに着いて来ている。

もし、人通りの少ない暗がりで大人数に襲われたら、いくら軍太夫がいても歯が立たない。

それに……。

風魔の集団に京香がいた場合、否が応でも「敵として」対峙せねばならない。

源三の心が、ざわめく。

修業時代……いや、それ以前からともに過ごしてきたかけがえない従兄妹を、自分の手で斬らねばならないのか。

揺れる自分の心を示すかのように、一陣の風が、源三のまわりを吹き抜けた。

江戸の町を抜ける川を渡って、四半刻ほど歩いたのち、山城屋の寮についた。

さつきよりもつつそうと生い茂る木々があたりを包み、まるで四方を壁に囲まれているような圧迫感が、源三に迫ってくる。

「ようこそ、おいでくださいました」

山城屋の主、伝兵衛が姿を見せた。

源三よりも五歳か六歳上でありながら商才を現し、紀州の小さな米問屋であった山城屋を、幕府御用達まで押し上げ、吉宗の信頼も厚い。

その主人が、風魔の忍びとして幕府転覆を狙っている。

半ば信じられないことではあるが、ここに新吉のいう平沼對馬（へしうたいま）が現れれば、彼らのつながりもはっきりするはずだ。

「そちらの方は」

伝兵衛の穏やかな視線が、源三に注がれる。

「拙者の弟で源三と申す。今は野に下り寺子屋の師匠を務めております」

忠直の言葉に従い、源三は無言で頭を下げる。

「そうですか。さ、皆様がお待ちかねでございます」

一瞬、忠直が源三を見た。兄の鋭い目に軽くうなずき、一番後ろを歩いて行く。

寮全体は質素なつくりだが、材木は高級なものを利用しているのか、歩を進める際におこる耳障りな音が聞こえてこない。

源三はゆっくりとあたりを見回した。

漆喰で塗られた壁にも、木目が並ぶ天井にも、これといった仕掛けは見当たらない。

「どつぞ、こちらでございます」

一番奥の部屋のふすまを、伝兵衛が開ける。

するとそこには、忠直の上司である老中首座、飯沼大善と若年寄、^{ちから}太田主税、それに勘定奉行の吉田陽之新が顔をそろえていた。いずれも、吉宗の信頼厚き人物だ。

「これは清水殿」

「そなたも呼ばれておったのか」

忠直の顔を見た彼らの顔が、一様にほころぶ。

「そちらは確か」

「は。拙者の弟、源三でございます」

硬い声で返答する忠直に続いて礼をする源三の背中を、冷たい汗が流れおちた。

捕方をそろえているとは言え、相手は百戦錬磨の忍び。

自分と忠直、それに康太と軍太夫だけでは、勝負はついているも同然だ。

せめて、この三人だけでもここから無事に連れ出さねば。

意を決し、源三は立ち上がる。

「源三、いかがした？」

「供のものに言い残したことがございまして。少々、お時間を」

ふすまの近くで再度座りなおし手をつく、源三はその場を辞した。

「なんだって？ 上様ゆかりの人物ばかりが？」

建物より少し離れた場所で待機している康太と軍太夫に、源三は告げる。

「飯沼様はじめ、太田様、吉田様までが亡きものにされますれば、ご政道が乱れるは必定。

何が何でも、あのお方がただけでも、無事にお歸しせねばならん」

「あまりにも、分が悪すぎますな」

源三の考えと同じ意見を口にした軍太夫に、康太もうなずいた。

「今からじゃ新吉を捜しに行つて余裕はねえし……どうする？ 先生」

「とりあえず、捕方から二人ほど清水様のお屋敷へ戻ってもらい、ことの次第を告げるのが肝要かと」

「お願いします」

源三に軽く頭を下げると、軍太夫は表門の方へ音を立てずに走り去る。

「先生、あんたも戻った方がいい。もし今、思わぬ襲撃に遭ったら、

忠直様だけじゃ」

康太の言葉にうなずき、源三は宴が催されている部屋に戻るために振り返る。

「先生！」

康太の張りつめた声が、源三を呼び止めた。

「どうした？」

「もし、先生の前に京香が現れたら……斬るのか？」

どんな状況の時にも、明るく自分を励ましてくれた康太の目にも、動揺の色が浮かんでいる。

京香を、斬ることになったなら……自分は勿論、新吉や康太も、そして命を助けられたおみつも、一生消えることのない傷と罪を背負って生きていかなければならない。

それならば、いつそ。

「心配するな。京香は必ず、元に戻してみせる。たとえ……俺の命がどうなるうとな」

「……先生」

驚愕の表情に変わった康太から目をそらし、宴の席に戻るために源三は走り出した。

第五章 五日目・決心・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります（月1回）。

更新が大変遅くなり、申し訳ありませんでした。

ようやく物語も佳境に入ります。最後までお付き合いくださいますよう、よろしくお願いいたします。

第五章 五日目・知られざる想い・其の一

平沼と小太郎、そしてお小夜は、山城屋の寮へと向かっている少年から話を聞いた瞬間、新吉はそう確信した。

昨日、山城屋の屋根裏で聞いた『幕閣を揺るがす余興』。詳細はまだわからないが、とてつもなく大きな何かが動いているような気がする。

街を抜ける橋を渡り、昨日、京香と対峙した笹やぶへと入った。生い茂る笹の葉の隙間から漏れるわずかな月明かりが、新吉とおみつを照らす。

急げ。お小夜はともかく、平沼を止めなければこの『余興』は遂行され、ご政道が乱れるのは必至。

「待つて！ 兄さん」

後ろを走るおみつが叫んだ。

「俺たちには時間がねえんだ。そんなこと、お前だつてわかつてるだろうが」

足を止めたおみつの方へ向かう。

「あつちで、何か音がする……」

おみつが指し示した方向へ視線をやる。目を閉じ、耳に神経を集中させると確かに、刀を切り結ぶような音が、新吉にも届く。

もしかあの先に、平沼と小太郎がいる？

突然、周りに風が走る。顔を上げると、新吉が結論を出す前におみつが駆けだしていた。

「おい！ 待て！」

おみつの背中を追いながら、新吉は胸元から短剣を取り出した。

「じいちゃん！」

おみつが叫ぶと同時に、月明かりが、小柄な小太郎に斬りかからんとする大柄な平沼を、新吉の目の目に映し出す。

おみつは無謀にも、小太郎をかばって平沼の前に立った。

「ほう。あんたが小太郎殿の孫が」

おみつを完全になめ切っているのか、刀を下ろす。

「あんた、何の目的でじいちゃんを江戸に連れてきたのよ」

おみつの声もいつになく低い。

「連れてきたわけではない」

「同じよ！ あんたさえ紀州に来なければ、じいちゃんが江戸に出ることなんかなかったんだから！」

おみつの必死の抗議に、平沼は声をあげて笑う。

「やはり、まだまだ子供だな。何もわかっておらん。小太郎殿はな」

「やめる！」

「あんたをこつちへ引き渡すのを拒否する代わりに、風魔へ戻るのを承諾したのだぞ」

小太郎が制止するのに構わず告げた事実、新吉が思わず叫ぶ。

「どういうことだ！？ 平沼」

「言った通りよ。自分と孫を助けてくれた吉宗に恩を感じ、奴の子飼いになっていた小太郎殿がな、娘の小夜を忘れることはなかった」

余裕しゃくしゃくに答える平沼の横で、おみつは一点を見つめたまま、身じろぎもしない。

「小夜の娘を一時期、お前の父親に預けたのも、風魔に戻るための準備をしていたからだ」

「……何だと？」

自身の声が低くなるのを、新吉は感じた。

「だが、それが叶うことはなかった。当時、將軍就任が決まった吉宗が江戸へ出る際、軍太夫が再び、おみつを小太郎の元へ置いて行ったからだ。結局、厄介ものだったということだ」

平沼の笑い声が、癢かゆにさわる。しかし、何も言い返すことができず、小太郎とおみつを、交互に見つめることしかできない。

「所詮、風魔は世間の鼻つまみ者よ。お前は兄や公儀の犬に恩義を感じているようだがな、いずれ、命を狙われるのは目に見えてるぞ」

一点を見つめたままのおみつの肩を、平沼が叩く。すると。

「もし私が風魔に戻ったら……京香さんを、兄さんたちのもとに戻してくれる？」

「おみつ！」

荒い息の下から、小太郎が叫ぶ。

「じいちゃんは黙ってて！　どうなの？　平沼さん」

顔だけを平沼に向けたおみつの表情を窺い知ることはいできない。しかし、普段よりさらに低い彼女の声には、何か、とてつもない決意がみなぎっているように、新吉には思えた。

「……いいだろう」

笑いを含んだ平沼の顔が、月に再度照らされた。

「おみつ！　何を言ってるのかわかっているのか！」

どうにか立ち上がり、手を伸ばした小太郎を振り払って、おみつが歩み寄る。

直後、ひやりとした感触が、新吉の手に触れた。

「おじいちゃんに、返しておいて。戻れなくてごめんなさい。でも、お姐さんは帰ってくるから、って伝えて」

「お前……本気でこいつが、姐さんを」

見上げてきたおみつの目を見た新吉は、言葉をのんだ。

目の前にいるおみつの表情に、小太郎の過去を知った悲壮感はなく無く、瞳は、江戸へ出てきたあの頃の輝きを取り戻している。

「さよなら」

「待て！ おみつ！」

踵^{きびす}を返し、平沼の元へ向かうおみつの歩みに、よどみはない。

「小太郎殿。今度会うときは、孫に寝首を掻かれぬよう気をつけるんだな」

平沼とともに去るおみつの背中を見た新吉の全身から、冷たい汗がどつと噴き出した。

第五章 五日目・知られざる想い・其の一・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります（月1回）。

更新が大変遅くなり申し訳ありませんでした。
次回更新は5月25日（日）の予定です。

第五章 五丁目・知られざる想い・其の二・

「おみつ！」

小太郎の呼びかけに答えることなく、おみつは平沼と共に姿を消した。

新吉の手に握られた、天膳の短剣がさらに冷えていく感覚に、震える。

同時に、足下で葉が動く音がした。

すべての力を失ったように、枯草の上に座り込む小太郎を見た新吉は、体中の血が逆流せんとしているかのような怒りを感じ、彼の来ている忍び装束の肩口をつかんだ。

「何ぼさつとしてんだ！ あいつが、どんな思いで平沼について行ったかわかってんのか！？」

小太郎が、新吉を見つめる。しかしその目は、お小夜を保護した時以上に力を無くし、心の動揺をはつきりと示しだしている。

「てめえは『おみつは俺らを裏切ることはない』 そう言った。だが、お前もお小夜も、あいつを裏切ってここまで来たんだ。あいつが今、誰のために風魔に戻ったか考えてみやがれ！」

今、おみつがいちばん大切に思っているのは小太郎でもお小夜でも、新吉でもない。

彼女を救い、風魔に堕ちている京香、ただ一人だ。

早く追いかねければ、京香を助けるどころか、おみつ自身も命を落とすことになる。

あいつは自分ひとりで京香を助けるつもりだろうが、風魔は……平沼はそんなに甘くはない。必ず、おみつが風魔に飛び込んだ真の理由を察知しているはずだ。

空を見つめたまま、何の反応も示さない小太郎を見限った新吉は、天膳の短刀を握りしめて立ち上がり、二人の後を追った。

音を立てずに廊下を進む源三の目の前には、いくつもの部屋が左右両方に広がっている。

もしかしたらどこかのふすまの向こうに、京香がいるかもしれない。

源三は、誰もいないことを確認してひとつ、またひとつふすまを開け、人がいないかを目で追っていく。

しかし、今まで見てきたいずれの部屋も、もぬけの空だった。

どこにいる？ 京香。

源三は心の中で何度も問いかける。

風魔が襲いかかってくる前に見つけ出し、康太が軍太夫に引き渡すことができれば理想的なのだが、ここに、主の伝兵衛以下何人かの奉公人と、招かれた自分ら以外の人間がいる形跡はない。

京香の搜索をあきらめ、宴の席に戻ろうとした源三の背後から、複数の足音が聞こえる。

源三はすぐ横にある部屋の襖に手をかけて中へ忍び込み、廊下の物音に耳を澄ませる。

「ちょっと、一体どこへ連れて行くのよ」

少し低い、聞き覚えのある声に源三は息をのむ。

「せっかちな。さつきから、約束は守ると言ってるだろう」

「あんたは信用できない。だいたい、お姐さん……京香さんを兄さんに戻すなら、連れてくるのが筋でしょ」

なぜ、おみつがここにいる？ しかも、おみつと話す男は、京香の居場所を知っているのか？

「心配するな。幕府子飼いの人間が数人、ここに来ている。そやつらに返せば文句はないだろう。とにかく、ここに入ってる。今連れてくる」

突然、襖が開いた。慌てて身を潜めた源三の前に、おみつが転がり込んでくる。

「ちょっと！ 何するのよ！」

おみつの抗議に答えもせず襖が閉じられ、足音が遠ざかっていく。

「おみつ」

「……誰？」

小声で呼んだ自分を警戒する声が耳に届く。源三はそつと襖を開け、廊下の灯を部屋の中へ入れた。
あかり

「先生！」

大きな声を上げるおみつの口をふさぎ、廊下を見渡す。

誰も通らないことを確認して部屋を出た源三は、壁にかかっている灯籠の一つからろうそくを持ち出し、部屋の中央にある提灯に火を移した。

「なぜここにいるのだ？ それに、そなたを連れてきたあの男はいったい何者だ？」

突然、おみつの顔がくもる。唇をきつく噛みしめ、膝元に視線を落とす。

「……あの男は、平沼っていうの。私が風魔に戻れば、お姐さんを返すっていうから」

「何を考えている！？ 平沼と言う男が、京香を生きて戻すと本気

で思ったのか？」

「思ってたんじゃないよ。だから……自分で取り戻しに来たの」

おみつの目が、源三を見上げる。

「私にはもう、信じられる人がいないの。じいちゃんも母さんも私を裏切った。風魔ってだけで、兄さんだって……」

こらえ切れない涙が、おみつの頬を濡らした。

「私は、存在してるだけでみんなに迷惑をかける人間。でも、私の正体を知らないとはいえ、お姐さんは『新さんの妹なら、私にとっても妹同然よ。迷惑だなんて思ってたない』って、言ってくれた」

だからおみつは、体調が悪くても、何を知って傷ついても、必死で京香を救い出そうとしていたのか。

命だけではなく、京香は、おみつの心を救い、支えになっていたのだ。

おみつに寄せた京香の思いを知った源三は、胸が激しく締めつけられるのを感じていた。

第五章 五日目・知られざる想い・其の二・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります（月1回）。

少し早目の更新になりました。ご了承ください。

次回更新は5月25日（日）、もしくは26日（月）の予定です。

第五章 五日目・知られざる想い・其の三・

京香のひとことが、おみつを支えていた　その事実が、源三の心を強く励ます。

必ず、彼女を生きてこちらに取り戻さねば。そして、おみつと笑顔で再会させなければならぬ。

「先生」

頬に落ちる涙を乱暴に拭って、おみつがほえむ。

「心配しないで。必ず、お姐さんは私が取り戻すからね」

すべてを吹っ切ったような口調が気にかかった源三は、思わず口にする。

「京香を取り戻し、帰るのなら、そなたも一緒であろう？」

おみつの視線が、かすかに泳ぐ。やはり彼女は、死を覚悟している。

「……私が生きてたって、喜ぶ人なんかいないよ。父さんだって、……兄さんだって」

「馬鹿を言え。京香が戻った時そなたがいなければ、俺は彼女に何を言われるかわからぬ。康太にも……口をきいてもらえなくなるだろう。俺は一生、そなたを恨んで生きていかなばならぬが、それでもよいのか？」

彼女の気持ちを少しでもほぐそうと、源三は回りくどく、おみつを必要としていることを話す。

「……でも」

「京香の言葉を真似て言わせてもらえば、風魔であろうとなかろうと、今のおみつのままでいてくれれば、それでいい」

そう。それでいい。

京香が命がけで守らんとした、真っ直ぐで明るなおみつのままでいてくれたら。

京香がいなくなつて以来、胸の奥底でくすぶり続けていたわだかまりが、ようやく溶けていくのを源三は感じた。

「ありがとう……先生」

なごやかな空気が室内を包んだその時、こちらに近づく足音が複数聞こえた。

「……来たな」

表情を引き締め、おみつもうなずく。

「お姐さんは、来てないね」

源三も同じことを思っていた。

男の足音が、二、三人分。

恐らく、おみつがここへ来た目的を知って、利用せんと打ち合わせでもしていたのだろう。

「何か持っているか？」

おみつは小さく首を振る。

源三は、胸元に忍ばせておいた短刀を、おみつに手渡した。

提灯の明かりを消して長身を抜き、刃を返す。峰打ちの態勢だ。

足音がとまる。

同時に、襖をはさんで二人は身構えた。

襖が動き、人影が中へ入る。

男の肩をめがけて振り下ろした刃は乾いた音を立てて命中し、一人がくず折れた。

動揺したもう一人の男の足をおみつが引つ掛ける。

勢いよく倒れこんだ男の背中に乗って上半身を無理やり起こし、源三が訊ねる。

「平沼が連れてきた女性がいるはずだ。彼女はどこだ？」

髪の毛を無造作に結った男は、答えない。

「言わないと、これがあんたの喉元に突き刺さることになるよ」

切っ先を男の喉にあてがい、おみつが低い声で続ける。

源三も、奴の首を締めあげた。

「ま、待て……話す。平沼様が連れて来た女は、宴の席へ……」

宴の席　奴は、京香を使つて幕閣の要職にある飯沼らの命を狙っているのか？

後ろから首の付け根に当て身をくらわせ、源三は立ち上がる。

「先生。宴つて何？　奴ら、何を企んでるの？」

おみつの不安そうな眼差しが、源三を見据える。

ついに、きたか。

風魔に操られている京香と、対峙する時が。

源三は手短に、今夜ここへ来た理由を告げる。

「兄さんも、山城屋で同じこと言つてた。まさか、あいつらはそのためにお姐さんを？」

目をそらさずに、源三はうなづく。

おみつの表情が一気にこわばつた。

じつと一点を見つめ、何かを断ち切るようにきつく目を閉じると、
しほりだすようにつぶやく。

「……………許せない」

「行くぞ、おみつ。俺たちの手で必ず、この企みを阻止するのだ」

強くうなずいたおみつとともに、源三は、半開きだった襖を勢いよく開け放った。

第五章 五日目・知られざる想い・其の三・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります
（月1回）。

次回更新は5月28日～6月1日の間を予定しています。
ご了承くださいm（ ）m

第五章 五日目・悪夢・其の一・

犬の鳴き声すら届かない静寂な空気の中。

宴が開かれている部屋に向かい、源三とおみつが歩き出す。

必ず、風魔の陰謀を打ち碎き、京香を救い出す おみつも、
持ちは同じだろう。

「先生」

傍らのおみつが、袖口を軽く引いた。

足を止めて、角に身を潜める。

平沼を筆頭に、汚れた着物にほつれた袴をはいた何人かの浪人の
後ろ姿が、ゆっくりと遠ざかる。

その中には、鮮やかな青の振り袖を身にまとう、小柄な女性の姿
もあった。

「お姐さん……」

おみつがつぶやく。

このまま二人で乗り込むのも手だが、外で待機している康太や軍
太夫の手助けも必要になるか。

「おみつ、申し訳ないがここから表へ出て、康太と軍太夫殿に知ら

せてくれぬか？」

「康太さんと、父さんに？」

おみつの声が、少し低くなる。

「このまま二人で行くより、少しでも手錬てだれのものが多い方がいい。敵が何人現れるか皆目見当がつかぬしな」

「でも」

「大丈夫だ。軍太夫殿だって、我々とともに闘うそなたを見ればきつと、考えを改めてくれるはずだ」

不安そうにこちらを見ていたおみつだが、時間がないと悟ったのか、黙ってうなずき、障子の向こうへ消える。

源三は大きく息を吸い、宴の開かれている部屋の扉を開けた。

「遅かったではないか」

厳しい表情を崩さぬまま、忠直が耳打ちをする。

「それが……」

辺りが盛り上がっているのを確認し、おみつのこと、そして京香がこの宴に利用されようとしていることを告げる。

「源三殿、渋い顔をしてどうされた？ さ、ここは一献いっこん」

すでに頬を赤く染めた勘定奉行の吉田陽之新の勧めで、酒を口にする。

「ささ、ここからは綺麗どころも加わって頂きましょうか」

伝兵衛が軽く手を打つ。

すると、何人かの芸者衆が笑みをたたえて室内へ入って来た。

「……源三」

低く名を呼んできた忠直にならって、視線を動かす。

笑みを浮かべてはいるものの、芸者衆の目はうつろで、肌の色も透き通ったように白い。

そして。

芸者衆の列の最後に、京香が入って来た。

あまりにも変わった姿を見て、胸がかきむしられるように痛む。

いつも以上に白い肌。大きな目には以前のような力強さはなく、ただでさえ細かった顔の輪郭は一回りも細くなり、頬はこけている。

しかし、すでに酔いが回っている彼らはそんな芸者衆の様子に気づくことなく、頬を緩め、思い思いの芸者をはべらせ、声をあげて笑っている。

京香は、源三らの真正面に座している老中、飯沼大善の隣に座し

た。

一瞬、忠直と視線を合わせ、京香の様子を注視する。

飯沼に向って笑みを浮かべ、お酌をする姿は以前と変わらず、優雅だ。

「まあ、何をそんなに怖い顔をなさっておいでです？」

源三よりやや年上に見える、黒い振袖にふくよかな身体を包んだ芸者が、二人の間に座った。

「お姐さん、飯沼様の横に座っている芸者さん、なんていう名だ？」

忠直が少しくだけた口調で、彼女に訊ねる。

「ああ……あの人。ここ最近山城屋さんのお気に入りになった、京香さんとか言う人です。何でも、かなりの売れっ子さんだとかで」

「こちらに、まわしてもらうつわけにはいかんか？」

忠直が口の端をややあげながら問う。

京香を近くに置いておく方が、何か起きたときに保護しやすいだろう。

しかし、目の前の芸者の反応はかんばしくない。一瞬、伝兵衛の方を仰ぐように見つめる。

「如何されましたか？」

視線に気づいた伝兵衛が、ゆっくりと歩み寄る。

忠直は少し酔ったふりをして、先ほどと同じ問いを伝兵衛に向けた。

「これはお目が高い。ですがよりきれい所を準備しておりますので、しばしお待ちを」

伝兵衛が立ち上がり、部屋を出ようとしたその時。

乱暴に襖が開き、浪人たちが部屋になだれこむように入ってきた。

室内に、芸者衆の悲鳴がひびく。

そして。

「この続きは、あの世に行ってから楽しんでもらおうか」

長刀を肩にかけた平沼が、悠然と入ってくる。

源三は傍らに置いた刀に手をかけた。

「おっと。その刃を抜けば、あんたの一番大切な女が、ご政道を乱すことになるぜ」

平沼が一步引く。

「飯沼様！」

隣にいる忠直が叫んだ。

その視線の先には　　。

飯沼の喉元に刃を突き付けている、京香の姿があった。

第五章 五日目・悪夢・其の一・（後書き）

更新が予定より大変遅くなり、申し訳ありませんでしたm（
m（

第五章 五日目・悪夢・其の二・

源三と別れたおみつは、注意深く辺りを見回し、竹で作った垣根を越えた。

綺麗に整えられた庭には、幸いにも見張りの手はなく、あっさりと外へ出ることができた。

しかし、安心はできない。こうしている間にも、源三が風魔に操られている京香と対峙しているのかもしれないのだから。

「そこで何をしている！」

康太と軍太夫の姿を捜すおみつの背後から、声がした。

おみつの身体がこわばり、源三からもらった短刀に思わず手が伸びる。

ゆっくり振り返ると、長い棒をもった捕方らしき男が二人、おみつに向かって歩いてくるのが見えた。

康太と父に会うために、どう切り抜ければいい？ おみつは、近づく彼らを見ながら必死に考える。

「ここは今、出入り禁止の場所だ。なのになぜ」

「私……ここから逃げ出してきたんです。えらいお侍さんに、外に出れば小石川養生所の先生と、上様おつきの人がいるからって言われて」

尋問せんとする捕方の言葉を遮って、おみつは訴えた。

「えらいお人、というと？」

「お名前は聞かなかったけれど、とても背の高い人です。そのお二人のところに行けば、もう安心だよ、って」

訝しげに見る二人から目をそらし、両手を胸の前で組む。

「……そうか。よく逃げ出してこれたな。さ、こっちへ来なさい」

うつむいたまま、捕方の後について歩きだす。

「待たれよ」

背後からまた、声がする。

「林様」

捕方の言葉に、おみつの足が止まった。正体がばれぬよう、深く頭を下げる。

「その娘は何者ですか？」

「清水様に助けられ、逃げ出したものようです。林様と康太殿のところに行けば安心だと教えられたとか」

「承知しました。私が責任を持って康太殿のところへ送り届けましよう」

軍太夫の言葉に、二人が身をひるがえして先ほどの場所へ戻っていく。

「顔を上げる、おみつ」

彼らの足音が聞こえなくなるのを確認して、軍太夫が声をかけてきた。

やはり、ばれていたのか　おみつは、唇をかねて軍太夫を見据えた。

しかし、兄、新吉と同様、父もおみつを見つめてはくれない。

「なぜ、お前がここにいる？」

「早く康太さんの所に連れてって。このままだと、京香さんが風魔に利用される」

「何！？」

おみつは、源三から聞いたことのすべてを軍太夫に打ち明ける。

そして。

「私はただ、お姐さんを先生や兄さんの所に帰してあげたい。だからここにいるの」

軍太夫が初めて、おみつを見た。

「いいのか？ 京香殿を取り戻すということは、小太郎殿やお小夜と決別することを意味しているのだぞ」

「構わないよ。私が風魔にいる意味なんてどこにもない」

母のみならず、祖父も自分を裏切っていた。

改めて思う。

自分らの野望を達成するためなら、家族ですら犠牲にしようという忍びの世界など……大嫌いだ。

「そうか。なら私はもう何も言わん。京香殿を救い出し、この事件が解決したらどこへでも行くといい」

忍びの掟に従い、娘であるおみつの命を狙っていた父に言われるまでもない。

京香を無事に源三らのもとに帰したら、皆の前から姿を消す。

すでに源三に見抜かれてはいるが、自らの決意をもう一度反芻し、うなずく。

親子の間の張りつめた空気を断ち切るような足音が聞こえた。

「林さん！ ……おみっちゃんも。どうしたんだ？ 一体」

おみつの姿を認めた康太が、驚きの表情を浮かべる。

「康太殿、いかがされた？」

「あつと……。中で動きがあつたみたいだ。女性の悲鳴が」

（…………お姐さん！）

康太が言い終わらぬうちに、おみつは駆けだす。

「おみっちゃん！」

「急いで！ このままだと…………お姐さんと先生が！」

康太らの返事を待たずに、おみつは竹垣を飛び越える。

同時に、呼子笛の音が辺りに鳴り響く。

「何者だ！」

その音に反応したのか、建物を取り囲む浪人衆が、おみつの姿を認めた。

短刀を構えるおみつの横に、康太と軍太夫も到着して身構える。

「おみっちゃん。絶対、みんなで京香を連れ帰ろうな」

風魔の企みを軍太夫から聞いたのか、康太がおみつに耳打ちする。

京香がいなくなつてからずっと、家族にすら裏切られていた自分を支えてくれていたのは、康太だった。

風魔の末裔であると聞かされてからも変わることなく、勇気づけ

て励ましてくれていた。

そんな康太の言葉に応えたい。でも。

（ありがとう康太さん。私は……）

康太の言葉にうなづくことなく、おみつは浪人衆の中へと斬り込んでいった。

第五章 五日目・悪夢・其の三・

浪人が振り下ろしてきた刀をよけたおみつは、短刀を逆手で振り上げる。

悲鳴とともに、すぐに一人がくず折れた。

その手からこぼれ落ちた刀を拾い、再度身構える。

自分がひとりを斬る間に、康太と軍太夫は何人もの浪人を斬っていく。

しかし、三人に向かってくるその数は圧倒的に多く、なかなか建物までたどり着けない。

早く京香を救い出し、洗脳を解かなければ。

降りかかってくる火の粉を振り払うのが精一杯のおみつに、焦りが出てくる。

そんなおみつの神経を逆なでするように、一人の女が立ちはだかつた。

「……母さん」

おみつはぐつと唇を噛みしめ、母、お小夜を凝視する。

「おみつ。あなた、何をしているのかわかってるの？」

まるで小さな子供をあやすように、お小夜が口を開く。

「わかってる」

「あなたのいるべき場所は、風魔なのよ。私のそばなの。なのに」

「いるべき場所は、私が決める。目的のために家族を犠牲にする忍びの世界にいる気はないわ」

母の言葉をさえぎり、おみつは言い切った。

お小夜の顔が、悲しげにゆがむ。

「そう……。ならば私は、あなたを斬らなければならないわ」

お小夜が胸元から短刀を取り出した。

同時に、おみつに斬りかかる。

持っている刀を水平にして、お小夜の刃を受け止める。

振り払うと、おみつは上段からお小夜に斬りかかった。

身をひるがえしたお小夜が、胸に手を入れた。

とつさに身を伏せると、頭上で何かが刺さる音がした。

顔を上げた次の瞬間、お小夜の刀がおみつの頬をかすめて、背後の木に刺さる。

（しまった！）

すぐそばに、お小夜の顔が見えた。

傍らにある刀を取ろうとしたおみつの手を、容赦なく踏みつける。

「……っ」

「父上に相当鍛えられているようだけれど、まだまだね」

つぶやくお小夜の顔は、さっきまでとはうって変わって、冷淡で、感情のないものになっている。

これが、忍びの怖さか　。

額から、冷たい汗が頬に落ちる。

「もう一度だけ訊くわ。こちらに戻る気は」

「戻る場所なんていない！」

ひたひたと迫る恐怖感を振り払わんと、おみつは叫んだ。

「そう……」

おみつが手にしていた刀を、お小夜が無表情で拾おうとした。

そのお小夜の手をねじりあげて倒し、馬乗りになって刀を握った。

「私を……刺せるの？」

おみつは目を見開き、お小夜を見つめた。

「刺せば、あなたも私と同じになるのよ」

天下をひっくり返す　ただ、それだけのために、娘を、孫を裏切って来た母や祖父と。

公儀御庭番という自らの立場のためだけに、おみつを殺そうと動いてきた父と、同じ　。

鼓動が大きくなると同時に、みぞおちに痛みが走った。

力が抜け、前のめりになったおみつの首に、お小夜の手が食い込む。

息ができない。

意識がもうろうとする中、源三が、康太が、そして京香が、おみつの脳裏に浮かぶ。

(……違う)

自分がお小夜と対峙しているのは。

自分を信じ、助けてくれた人に恩返しするため　。

おみつは力を振り絞って、自らの拳をお小夜の身体に叩きつけた。

お小夜の手が、首から外れる。

そのままわきに転がり込んだおみつは、刀を手に取り、決着をつけようと振り上げる。

しかし、背後からつかんできた手が、それを許さない。

「……父さん」

「ここから先は、私に任せてもらおう」

軍太夫が、せき込み、ようやく立ち上がったお小夜と向き合う。

「もともとは、私が決着をつけねばならぬ相手だったのだ」

「でも！」

「お前の目的は、お小夜を斬ることではあるまい！」

おみつを見ずに、軍太夫が叫ぶ。

その視線の先には、空いた襖からの灯りが闇夜に浮かぶ「宴の部屋」がある。

「早く行け！」

お小夜の刃を受け止めた軍太夫が、再度叫ぶ。

父の言葉に背中を押されるようにして、おみつは、京香と源三のいる部屋へ向って走り出した。

第五章 五日目・悪夢・其の四・

京香の持つ短刀が、飯沼の首筋 急所に当たっている。

あの場所を斬られれば、出血が止まらなくなり、飯沼はすぐに命を落としてしまうだろう。

源三も、隣の忠直もなすすべがない。

「さんざん邪魔をしてくれたようだがな、これでもう終わりだ。まさか吉宗も、自らが組織した人間に腹心を殺されるとは、思いも寄るまい」

平沼の言葉が、源三の怒りに火をつける。

「勝手なことを申すな！ 自らの所行を棚に上げて上様に逆恨みし、幕府転覆のために、いたいけな少女を利用しようと企むとは……許せん！」

「吠えるのもそれまでだ。やれ！」

平沼が叫ぶ。

同時に呼子笛の音が高らかに鳴り響き、外がにわかに騒ぎだす。

（ のるかそるか！ ）

平沼の注意がそれたのを見た源三は、そばにあった杯をとり、京香に向けて、強く投げた。

手首に当たった反動で、京香の手から短刀が落ちる。

「飯沼様！」

忠直が叫ぶ。

飯沼は京香を突き飛ばして刀を手に取り、立ち上がる。

「おのれ！」

飯沼に襲いかかる刃を、駆けつけた忠直が払いのける。

再度、二人の刃が、激しい音を立ててぶつかりあう。

そのまま部屋の隅へと移動した二人の陰から、一人の芸者が姿を現す。

「……京香」

源三は息をのむ。

こちらを見た京香の目は鋭く、今にも斬りかかってきそうな殺気をたたえている。

手を伸ばせば、取り戻せるのに。

夜明け前に感じた恐怖とはまた違ういやな予感に、源三の足は再びすくむ。

「私はずっと……この時を待っていました」

「何？」

目をそらし、かすれた声でつぶやく京香に、源三は問う。

「私とあの人の人生を狂わせた幕府に復讐する……この時を」

再度こちらを向くと同時に、京香はかんざしを源三に振りかざした。

自身を守るために出した手の甲を、生温かい液体がすべり落ちる。

「京香……」

暗示が強い分、ためらいなく襲いかかってくる京香の動きは、いつもより数段早い。

次々と襲いかかってくるかんざしの先をよけるだけで精いっぱい、彼女の動きを封じるすべは見当たらない。

鋭い痛みが、今度は頬に走った。

頬の血をぬぐい後ずさりする源三に、一步、また一步、京香が近づいてくる。

やはり、だめなのか？

京香への暗示を解き、生きて取り戻すことは不可能なのか。

源三の胸に、絶望感がよぎったその時。

「やめて！ お姐さん！」

おみつが、自身と京香の間に割って入る。

「おみつ！」

「先生、あきらめちゃ駄目だよ」

まるで自身の心を見通したかのようなおみつの言葉が、源三の心を打つ。

「お姐さん」

おみつが、京香に向き直る。

「ごめんね。私のせいでお姐さんをこんな目に遭わせちゃって」

京香の動きが、止まった。

今まで、怒りの色をたたえていた目で、おみつを凝視する。

「でも……お姐さんのいるべき場所は、ここじゃないんだよ」

ゆっくりと、おみつの背中が京香に近づく。

「先生と、兄さんと、康太さんが……うつん。おじいちゃんや忠直様だって、みんな待ってる」

おみつが、京香の手からかんざしを取り上げた。そして。

「だから、帰ろう?」

おみつの日に焼けた手が、京香の白い肌を包む。

「……紀州に?」

思いがけない京香の言葉に、源三は驚く。しかしおみつは動じることなくうなずいた。

「そう。みんなで紀州に帰ろう。ね」

やや背の高いおみつを、京香がまるで子供のような目をして見上げた。

しかし。

「おみつ! 京香!」

京香の背後に近づく浪人を見た源三は思わず叫んだ。

動きを止めたままの京香をかばったおみつの背を、浪人の刃が斬り裂く。

「おみつ!」

「おみつちゃん!」

源三が叫んだ直後、部屋に入ってきた康太がその浪人の脇から逆

袈裟に斬り抜いた。

さらに襲いかからんとする浪人、忍びに相對する形で、康太が再び廊下へ出る。

痛みに顔をゆがめ、くず折れるおみつを受け止める形で、京香もその場に座り込む。

「おみつ！　しっかりいたせ！」

駆け寄った源三は、京香からおみつの身体を引き取り、肩口から背中にかけての傷に手を添える。

傷自体は浅いようだが、出血が多いのか、着ていた白衣がみるみる赤く染まっていく。

「先生……ごめんね」

源三の腕に支えられたおみつが、源三の手を取る。

「何を謝ることがある」

「私がいなければ、お姐さんは……こんなことに」

激しくせき込んだおみつは、力を振り絞って源三の腕を辞し、そのまま京香の方へ倒れ込む。

おみつの手が、京香の振袖の袖を強くつかんだ。

「……お姐さん、目を覚まして。先生と……一緒に……」

顔をあげて、力なくつぶやいたおみつはそのまま、京香の腕の中で意識を失った。

第五章 五日目・覚醒・

「おみつ！」

意識を失ったおみつの身体から、京香の胸に身を預ける形で力が抜けた。

源三はとつさに、京香の膝先に置かれたおみつの手を取り、脈があるのを確認する。

「……………い？」

突然、所在なさげな京香の声が源三の耳をかすめた。

「……………あおい？」

あおい？

意味がわからずに反芻した源三の脳裏に、幼子の泣き顔が浮かんだ。

京香を慕い、ともに脱走した夜に、何らかの理由で命を落とした少女。

彼女の心は今どこを……………いや、どの時代を彷徨っている？

「違う京香！ その子は葵ではない！」

京香が顔を上げた。しかし源三を見つめる目はまるで、行き先を

失った小さな子供のようだ。

源三はとっさに、京香の頬を強く叩いた。

「戻って来い！ 京香」

風魔でもなく、葵を喪ったあの夜でもなく、源三と、仲間たちの元へ。

頬を押さえ、しばし動かなかった京香だが、再び、ゆっくりと顔を上げる。

「先……生」

京香が、久しぶりに源三の通り名を呼んだ。

見上げてくる瞳にはいつもの穏やかな光が戻り、京香が闇から脱出したことを物語る。

「そつだ、俺がわかるか」

ぎこちなくうなずく京香の肩に手をまわし、こみ上げる想いをじつと堪える。

「この子は……」

京香が再度、視線を落とした。源三はそつと、彼女からおみつを引き離す。

「……おみつさん！」

京香が、源三の腕の中で目を閉じるおみつを見つめた。

「どうして……」

「お前が殺したも同然だ。なあ、京香さんよ」

京香の言葉をさえぎるように、忌々しい声が源三の背後から聞こえた。

振り返るとそこには、腕や頬に傷を作った平沼が、肩で息をしながら立っている。

「私……が？」

平沼を見上げた京香が突然、顔をゆがめて頭を押さえた。

「京香！ 大丈夫か！？」

激しくせき込む京香の肌からは血の気が失せ、額には冷たい汗が浮かんでいる。

「そろそろ薬が切れたようだな。暗示が切れたお前さんにはもう用はねえし……あんたともども、あの世へ行ってもらおうか」

下卑た笑みを浮かべた平沼が、悠然と刀を振り上げる。

（この二人だけは……俺が守る！）

源三は京香の腕を引き、おみつともども守る形でその場に伏せる。

しかし、平沼が振り下ろすであろう刃は源三に届かず、重い荷物が倒れるような衝撃が、源三に伝わった。

体を起こし振り返る。

すると、逆袈裟に振りぬいた形で腕を上げた、一人の男の足元に、脇から首筋までを裂かれた平沼が、目を開けたままで絶命していた。

「遅くなつてすまなかつたな、先生」

平沼を斬った男が、こちらを見下ろす。

「……新吉、そなた、どうして」

問いかける源三には答えず、新吉は襲いかかってきた忍びの首筋に刃を滑らせた。

「ぼさつとしてんなよ。まだ終わってねえだろ」

おみつを京香の隣に横たえた源三は、近くに落ちていた平沼の刀を取り、示現流の「満」の形をとる。

「引け！ 引けー！」

何者かが叫び、残った浪人、忍びらが一斉に表へ飛び出す。

外には何十人もの手練がいる。きっと、何人かでも捕らえてくれるだろう。

隅に固まっていた芸者衆を、捕方が廊下へ連れだすと、辺りは静寂に包まれた。

「先生！」

部屋の外にいた康太が、血相を変えて源三の元へ駆け寄る。

「てめえ、今までどこに行ってた！」

傍らにいる新吉へ掴みかかるうとするが、結った髪を乱した忠直に止められる。

「今はそれどころではあるまい。一刻も早く、京香とおみつの手当てをせねば」

「ここから近い診療所はどこだ？ 康太」

「ここだと……どんなに近くても良庵先生のところだぜ」

康太が、京香を抱き上げた源三の問いに慌てた様子で答える。

「よし、案内してくれ」

うなずいた康太が、おみつを抱き上げようと膝を折る。しかし、横から入る形で、新吉がおみつの腕を自らの首に回し、そのまま背負った。

「新吉」

驚いた顔の康太を見ずに、新吉が最初に廊下へと出る。

「源三、俺は幕閣の方々を送り届け、上様に報告せねばならん。二人を頼むぞ」

忠直も、新吉の後を追うようにしてこの場から立ち去る。

「康太、林殿はどうした？」

「わからねえ。おみっちゃんを追って中へ入った時にはぐれちゃった」

軍太夫の安否も気にかかるが、今は、京香とおみつの命を優先しなければ。

「行くぞ、康太」

死体が転がり、あちこちに血しぶきが飛び交う辺りを見回す康太を促し、源三も部屋を後にした。

第五章 五日目・永い夜・其の一

部屋をほのかに灯す炎が、風にあおられて揺れる。

犬の遠吠えすら聞こえない静寂の中で、源三と新吉は言葉を交わさず、部屋の中央で提灯をはさんで座っていた。

あれから四半刻もかからず診療所へついた一行に、良庵は嫌な顔一つせずに対応してくれている。

京香は、暗示をかけられた際に使われた薬を特定するために、良庵に預けられた。

おみつの傷口を縫うために、康太が手術を行っている。

「姐さんの暗示は……解けたのか？」

提灯の炎を見つめたままで、新吉が訊ねてきた。

「ああ。おみつが、命がけで解いてくれた」

思いもかけないことだったのか。妹の名を聞いた新吉の目が、源三を見た。そして。

「……あいつが今、心から信用してるのは、康太と姐さん、それに先生くらいのもんだろうな」

まるで自分の考えの中に沈むように、視線を落とす。

『じいちゃんも母さんも私を裏切った』

伝兵衛の屋敷でおみつが口にした言葉が、脳裏に浮かぶ。

「おみつは、小太郎殿にも裏切られたようなことを話していたが、それは……」

新吉へ問いかけた言葉をかき消すような足音が、こちらへ近づいてくる。

やや乱暴に襖を開ける音がした。

「……父上」

血相を変えた天膳が、忠直を伴って入ってくる。

「二人の具合はどうじゃ？」

いつになく質素な、薄い茶色の着物に同色の羽織をまとった天膳が、新吉の横へ座した。

源三が二人の今の状態を話すと、新吉が一本の短刀を横へ滑らせる。

「これは……」

「おみつからの預かりものです。自分は戻れないけど、姐さんは必ず戻るから、と」

天膳のしわだらけの手が、短刀をつかむ。

「あんな少女に……辛い思いをさせてしまったの」

天膳が、思いを封じ込めるように目を閉じる。何があっても動じない兄も、ただならぬ父の様子に目を伏せた。

獣の遠吠えが、遠くに聞こえた。

どれくらいの時がたっただろう。

また、足音が近づいてきた。入口に、皆の視線が集中する。

「康太……」

「大丈夫。傷口の縫合はうまくいったし、意識も戻ったよ」

血に染まった白衣を脱ぎながら告げた康太の言葉に、張りつめていた空気が一気に和んだ。

表情を変えずに見つめていた新吉が突然立ち上がる。

「おい、お前どこに行くんだよ？」

廊下へ出ようとする新吉の腕を、康太がつかむ。

「おみつに、会わせなきゃいけない人がいるんでな」

今度は康太の目をしっかりと見つめて、新吉が部屋を出た。

「誰だ？ 会わせなきゃいけない人ってのは」

背中を見送った康太をはじめ、天膳も忠直も首をかしげる。

「恐らく……小太郎殿であろう」

「小太郎さん？」

康太が驚いたように、源三を振り返る。

「小太郎殿は、何もわからず江戸へ出てきた孫娘に、その理由と経緯を話す義務がある」

おみつの『裏切った』という言葉が真実ならば、なおさらだ。

新吉は恐らく、小太郎が今、どこで何をしているのかの察しがついているのだろう。

納得したようなしないような表情で、康太がうなずいた。その時。

「いずれ……そなたにも話さねばならぬだろうな」

腕を組み、天膳が小さなため息をもらす。

「父上……」

忠直の表情が、険しいものへと変わった。

再び張りつめた空気を助長する足音が、またこちらへ近づく。

「良庵先生」

康太に無言で座るように促し、その横に座った良庵が口を開く。

「京香殿に使用された薬は、大麻ではないかと思われます」

「大麻っていえば、あまり依存性はないんですよね？」

薬草に詳しい康太が、良庵に訊ねる。

「はい。しかし短期間にかかなりの量の大麻を吸わされているようで、徐々に症状が現われているようです」

阿片が切れた際の中毒症状は、修行中に見たことがある。

自身を保っていらなくなり、薬を欲しがるかと思えば、辺りにあるものを突然投げつけて暴れていたように記憶している。

その光景を思い浮かべた源三は、唇をかんだ。

京香はこれから、地獄の苦しみに耐えなければならないのか。

「苦しみに耐えかねて、自害する可能性もあります。恐らく今夜が山かと」

良庵の低い声とともに、重苦しい空気が、辺りを包む。

「良庵先生。一晩……私がそばについてはいけなんでしょうか？」

思い切って、源三は申し出た。

何の力にもなれないとわかってはいるが、京香を、たった独りで苦しみの中に置いておきたくはない。

「しかし」

「良庵先生。この人は、ずっと近くで京香を見守って来た人間です。もしかしたら、彼女の抑止力になってくれるかもしれない。お願いします」

難色を示す良庵の背中を押すように、康太が頭を下げてくれる。

「良庵。わしからも頼む。今、京香を死なせるわけにはいかないのだ。彼女を救うために傷を負った、一人の少女のためにも」

天膳に続き、忠直も無言で頭を下げる。

「……辛い一夜になりますぞ。それでも構いませぬか？」

良庵の真剣な眼差しが、源三を見つめる。

その疑問を払拭するように、源三は、良庵の目を見てしっかりとうなずいた。

第五章 五日目・永い夜・其の二・

冷たい風を受けて走る新吉の耳に、犬の遠吠えが届く。

すべてが露呈し、呆然自失となった小太郎は今、どこにいる？

立ち上がろうとしない小太郎を置いてきた場所に到着した新吉は、あたりを見回す。しかし、小太郎の姿はおるか、仲間を求めて鳴いているはずの野犬の姿すら見当たらない。

首に縄をつけてでも、山城屋の寮に連れていくべきだった 新吉は、小さく舌打ちをする。

平沼は仕留めたものの、恐らく、お小夜はまだ生きている。風魔から追われていた時はおみつの成長を支えに生きていたのだろうが、今は、寄りどころのない心を、風魔に……お小夜に奪われかねないのだ。

（冗談じゃない）

背中に傷を負ったおみつはもちろんのこと、新吉にも、小太郎に訊かなければならないことが残っているのだ。

このまま、自分らの敵に回られてたまるか。

……しかし。

小太郎を捜しまわる新吉の足が、止まる。

風魔一族はもともと、ご政道の敵。

小さなころから父に、そして天膳にそう叩き込まれて育った。

だからこそ新吉は、おみつが風魔の血を引いているとわかったとき、彼女を心から追いだしたのだ。

なのに、おみつが風魔に行く決めて目の前から去って行った時には小太郎の裏切りに逆上し、今もこうして、おみつのために小太郎を捜しまわる。

（俺は一体……何がしたいんだ）

矛盾だらけの自身の行動に苦笑いするしかない新吉の前方で、枯れ葉を踏みしめる音が不規則に聞こえる。

とつさに身構えた新吉の目の前で、何者かが倒れ込むのが見えた。

小太郎か　そう思った新吉が駆け寄り、抱き起こす。

「おい！　大丈夫か！？」

「……新吉、か」

「親父？」

声を聞いて新吉は驚く。源三や康太とともにいたはずの父、軍太夫がなぜ、ここにいる！？

「何があっただ、おい！！」

力なくもたれかかってくる軍太夫に、新吉は問うた。

「おみつは……どうした？」

「おみつ？」

思いがけない名前が父の口から出たことに驚く。

「ああ。山城屋の寮で別れたきりなんだが……」

「背中に深手は負ってるが、命に別状はない」

「背中に深手？」

心配そうに、軍太夫が問うて来る。

「ああ」

短く答えながらも、新吉は意外な思いで軍太夫を支えていた。

何度もおみつを殺そうとした軍太夫が、今、その身を案じているとは。

「私は……何も見えていなかったのだな」

独り言のように、軍太夫が語りだす。

「今まで上様のため、御政道のためを思い、御庭番としての任務を遂行してきたつもりだったが……。大切なものを、見過ごしていた

のだらうな」

「親父にも、そんな感情があつたんだな。とうに捨てたと思つていたのに」

憎まれ口を叩く新吉に、軍太夫が鼻で笑つたのがわかつた。

「おみつが……思い出させてくれたのかもしれん」

「おみつが？」

吐く息とともに、軍太夫がうなずく。

「自身が風魔の血を引くことがわかつて、おみつはまず、世話になつた人たちへの義理を忘れなかつた」

そう切り出したのち、軍太夫は山城屋の寮で出会つた時のことを話します。

そして母、お小夜を斬ろうとした時のことも。

「その姿を見たとき、私は、一番大切なものが何なのか……教えられた気がした」

軍太夫が言葉を切つたとき、新吉の脳裏に、京香をかばうようにして倒れていたおみつの姿が浮かんだ。

どのような状況で深手を負つたかは知らぬが、あの姿がきつと、おみつの出した答えなのだらう。

小太郎、お小夜。軍太夫に新吉。「おみつ」という接点で繋がっているが、敵対する家族へ対しての。

「お前は……どうする？」

「は？」

突然の軍太夫の問いに、新吉が横顔を覗き込む。

「おみつのことだ。あいつ自身はこの事件が終わったなら、我々の前から姿を消すつもりでいる。だが、風魔がおみつに狙いをつけている以上、どこへもやるわけにはいかん。だが……」

軍太夫はもちろんのこと、新吉自身も公儀のお役目を預かっている身だ。

幕府と敵対する風魔の血を引くものを置いている以上、どこから火の粉が降りかかるかわからない。

かと言って、おみつが風魔に捕らわれ、今回の京香のようなことがあった場合には、今度こそ彼女を亡きものにしなければならぬ。恐らく、父も同じことを考えているだろう。

「俺らはともかく、康太や先生、そして姐さんは……あいつを斬れねえよ」

いや、彼らだけではない。新吉自身も、おみつを斬れと言われてそうできるかは自信がない。

「……だろうな」

軍太夫がつぶやく。

その直後。

新吉の耳に、複数の足音が聞こえた。

軍太夫が、新吉の手を振り払い、力を振り絞って立ち上がる。

「……来たか」

「何がだ？」

「お小夜を仕留め損ねたのでな、風魔が追手を差し向けているのだ」
胸元から薬のようなものを取り出し、軍太夫が飲み下す。

「今の親父一人じゃ手に負えないだろ。助勢するぜ」

「足手まといにはなるなよ」

目があった瞬間、微笑みを交わした二人の周りを、忍びたちが取り囲んだ。

第五章 五日目・永い夜・其の三・

柿洪色の装束に身を包んだ忍びたちが、じりじりと間合いを詰めてくる。

父、軍太夫の息がいつになく荒いのが、新吉の背に伝わる。いいところ、二、三人を相手にするのが限界だろう。

少なくとも五人、いや、それ以上は自分が相手にしなければならぬ。

新吉は深く息を吸った。

吐き切ると同時に、向かってきた一人の忍びの首筋を、短刀で裂く。

続けて、軍太夫へ向かう忍びを追い、首の付け根に刃を突き立てた。

声にならない叫びの後、男はその場でくず折れた。

その死骸を飛び越えた新吉の横から、小柄な忍びが斬りかかってくる。

切っ先が頬をかすめ、生暖かい滴がしたたり落ちるのを感じた。

その男を斬ったのは、軍太夫だ。

「ずいぶんと息が上がってるじゃねえか。無理すんなよ」

「お前に見くびられるほど、老けてはいない」

そういう問題ではないだろうに。

心の中で毒ついて、新吉は再度短刀を構え直す。

しかし、奴らはこれ以上二人を襲うことなく、闇へと消えた。

大きく息を吐いた新吉の隣で、軍太夫が木にもたれかかる。

「……ったく、仕方がねえな」

刀を胸元に納めた新吉は、軍太夫の手を引き、自身の背中に預ける。

「おい、何を」

「そんなんじゃ歩くのもやっただろうが。良庵先生の所で手当を受けんだよ」

見た目より重い軍太夫を背負った新吉も、足下がふらつく。

「……お前もたいした役に立たんな」

「うるせえ。怪我人は黙ってろ」

もう一度抱え直し、歩き始めた新吉に軍太夫は何も言わない。

背中から伝わる軍太夫のぬくもりが、新吉の心に染み入ってくる。

ぬくもりなど、とうに失くしたもの　自分には、父はいないものだと思っていたのに。

なぜ、こんなにも、胸が熱くなるのか。

その熱が、目頭へと移る。雫が頬にこぼれそうになるのをこらえながら、新吉は闇の中を歩いて行った。

「……新吉!？」

軍太夫を背負う新吉の姿が、目の前にいる康太には、とんでもない光景に映ったのだらう。目を丸くして駆けてくる。

「ちよいと深い傷が多いんでな、悪いが頼む」

意識を失った父はこれまた、重い。康太とともに奥の部屋に移し、中央にある布団へと横たえる。

「一体、何があっただんだよ？」

「風魔の忍びに追われていた。その時深手を負っただらう」

状態を確かめながら問ってくる康太に答え、立ちあがる。

「おい、新吉」

今度は答えず、入口に向かって歩を進めた新吉の前に、薄い灰色の着物を身にまとった忠直が姿を現す。

「忠直様」

「父が、そなたに話したいことがあるらしい」

「私に……ですか」

驚く新吉に、忠直がうなずく。

「本来であればおみつにもいてもらいたいところなのだが、今、薬が効いて眠っている。軍太夫も……」

「はい。深い傷もありますし、早く手当をしないと」

鋭い視線を向けた忠直に、後ろにいる康太が答えた。

康太に任せておけば、軍太夫のことは安心だ。それよりも。

「しかし忠直様。私はこれからある人を捜しに行かなければ」

「小太郎のことならば、心配はいらん」

忠直の後ろから、天膳の声が聞こえる。

「父上」

「その小太郎のことで、話があるのだ。あやつがなぜ、今、江戸へ

出て来なければならなかったのかを」

小太郎が、江戸へ出てきた理由　。

「それを、御存知なのですか？」

問うた声が、震える。天膳は新吉の目を見、はっきりと首を縦に振る。

「おみっちゃんと林さんのことはまかせろ、新吉」

康太が後ろから、強く、新吉の肩を叩いた。

振り返ると、康太があきれたように小さく笑う。

「何て顔してんだよ。てめえがしっかりしなきゃ、だれがおみっちゃんを守るんだ」

「ひとこと余計なんだよ、おめえは」

こんな時でも変わらず憎まれ口を叩く康太に、なぜか笑みが漏れる。

そういうところは小さいころと変わらない。でも、それが新吉を安心させた。

「新吉」

忠直が、新吉を呼んだ。小さくうなずき、新吉は天膳らのあとについていった　。

第五章 五日目 永い夜・其の四 (前書き)

こんにちは。作者の笠原です。

約1年4カ月、更新が滞ってしまい、大変申し訳ありませんでした。
本日より、週1〜2回で、更新を再開いたします！

どうぞよろしくお願いいたしますm ((m

第五章 五日目 永い夜・其の四

闇の中で暴れている空気に煽られ、襖が音を立てる。

提灯の中の炎が激しく揺れる中、目を閉じていた天膳が、ゆつくりと口を開いた。

「小太郎がおみつを置いて江戸に来たのは……上様の御命令じゃ」

「何ですって!？」

新吉は思わず声を荒げ、天膳を見つめる。

「平沼對馬（あまのり）が紀州に度々現れていたのを、手のものを使い報告して来た小太郎に、上様が断を下された。おみつを風魔の手から救うために、小太郎と我々、花ぐるまにて先鋒を叩こうと」

目を閉じたまま、天膳が言葉を切る。忠直が、後に続いた。

「しかし、おみつが紀州の見張りの目をかいくぐり、江戸へ出て来てしまったことで我らの計算が狂ってしまった」

淡々とした口調で話を進めるが、当時、天膳や忠直らが青ざめていたのは想像に難（かた）くない。

「上様は以前より、軍太夫に指令を出しておった。万が一、おみつが一人で紀州から出た場合は、その命を絶つように、と」

おみつの命を狙っていたのは、軍太夫自身の意志ではなく、吉宗

の命令　　？

新吉は、重いもので頭を殴られたような衝撃が身体中に走るのを感じた。

父の話聞き、吉宗が小太郎とおみつの存在を知っているであろうことの察しはついていたが、小太郎と吉宗の距離がここまで近かったことに、新吉は驚きを禁じ得ない。

「お小夜とおみつらを引き裂いたのが、軍太夫の同朋であることは知っておるな？」

父から聞いた話であると察した新吉はうなづく。

「責任を感じておられたのか、上様は、周りの者の反対を押し切り、小太郎とおみつに家を与えて何度も見舞いに訪れた。最初は頑なだった小太郎も、いつしかおみつが上様に懐いているのを知り態度を軟化させ、紀州藩を陰で支えることを決意したのじゃ」

だから小太郎は、平沼を追い詰めんとあそこまで動いていたのか。

今までの疑問が解けていくのを新吉は感じた。だが。

「しかし平沼は、小太郎殿が一度風魔に寝返ろうとしていた、と申していました」

新吉の言葉に、天膳が小さく笑う。

「裏切ろうとしていたのは事実じゃ。しかし、当時お小夜が平沼の子を身ごもっておったことを知り……こちらへ戻って来たのだ」

「……では、おみつには」

その先を告げられぬ新吉に代わり、忠直が頷く。

「父の違う弟、ないし妹がいる。だが、行方はおるか、生死すら知れぬ」

新吉は再度、きつく目を閉じた。

生まれた時から運命に翻弄され続けたおみつにとって、紀州で過ごした小太郎との日々が、唯一の安らぎのときだったのだ。

だが。

「一つ、腑に落ちぬことがあります」

目を開け、天膳の顔を見据えて、新吉は訊ねた。

「何じゃ」

「おみつを、私や姐さんと渡り合えるほど鍛えたのは、何故ですか？」

今度は、天膳が目を閉じた。

横目で天膳を見る忠直は、何も言わない。

今、新吉の耳に聞こえるのは、風に煽られ不規則に揺れる、襖の音だけ。

新吉は再度問いたい気持ちを抑え、天膳の言葉を待つ。

源三の道場でのことはおろか、自身の命を狙った父の追手をかくぐったからこそ、おみつは今、こうして生きているのだ。

風魔と決別し、紀州藩に仕えていたも同然だった小太郎が、おみつを鍛えた背後にはきつと、吉宗の意向があつたはず。

突然吹いてきた強い風が、提灯の中の炎を大きく揺らした。

同時に、天膳が目を開ける。

「将来、今のそなたと同じ職につけるため、上様が軍太夫から引き離れたのじゃ。花ぐるまの一員になるには、想像を絶する苦難を乗り越えなければならん。そこに、兄妹の情は必要ない。……そう言えば、わかるな？」

確かに……天膳の言うように、修行は壮絶を極めた。

他人をかまっていれば、自身がつぶれる　修行の厳しさに耐えられなかった仲間たちはみな、脱走、もしくは身体を壊して命を落とした。

もし、おみつが自分とともにいたなら、恐らく自分が、おみつをかばって命を落としていたに違いない。

何も言えずに頭を垂れる新吉の耳に、康太のものらしい足音が届く。

「失礼します」

「康太。軍太夫の具合はどうだ？」

忠直が、厳しい表情を崩さずに問う。

「命に別条はありません。ただ、肩から背中にかけての傷がかなり深く、今後、御庭番としての任務には……」

「戻れぬ、と申すか」

忠直の声が、低くなる。はい、とつぶやき、康太は手をついた。

風が、ついに提灯の炎を吹き消す。闇の中で、全身が冷えていくのがわかる。

今まで軍太夫が自分らにしてきた仕打ちを考えると、父を許す気にはなれない。

だが、自身を抑え、家族を投げうつてまで忠節を尽くしてきた軍太夫を思うと……新吉の心は大きく揺れた。

数回、火打石が鳴った。ほの暗い灯りが、再び部屋を照らした。

「新吉。なぜそなたが軍太夫とともに江戸へ来れなかったか……わかるか？」

突然、天膳が問いかけてくる。その意図をつかめない新吉は、ただ黙って首を振るほかなかった。

第五章 五日目・永い夜・其の五

「軍太夫は、そなたとおみつも連れて行こうとしておったのだ。二人は兄弟の中でも、忍びとしての素質は抜きんでいると言ってな」

天膳の言葉が、新吉の心を突く。

父は、おみつを……そして、彼女をかばい続けた自分を、疎んじていたわけではなかったのか？

「だが、上様がそれを許さなかった。心の優しいそなたらには、公儀御庭番よりも大事な職務がある。そのために、新たな訓練に励まなくてはならない、と申されてな」

新吉の目の前が、かすむ。頬にこぼれ落ちそうな滴を見られたくなくて、顔を伏せる。

「そして、上様から花ぐるまの構想を聞いた軍太夫は、断腸の思いでそなたらを手放した。あとは、先に申した通りじゃ」

新吉は、無意識に床に手をついていた。そして、今更ながら思い知る。

自分は……何もわかっていなかったのだ、と。

「新吉」

康太が、かすれた声で新吉を呼んだ。

「お前が……二人のそばにいてやれよ」

庚太の視線を感じながらも、新吉は首を横に振る。

自身の感情に振り回され、父の思いも、おみつの境遇も思いやれなかった自分に、今さら何ができる？

「康太の申す通りだ。軍太夫はともかく、おみつのそばにはいてやらねばならぬ」

他人の事情にあまり口出しをしない忠直までもが、進言してくる。

「軍太夫だけではない。小太郎やわしらも、おみつに多大な負担をかけた。その心を少しでも癒してやれるのは、今はそなたしかおらんのじゃ」

「……今のおみつの心を癒せるのは、私ではありません」

そう。今のおみつを癒してやれるのは、自分ではない。

彼女の出自を知らなかったとはいえ、『今、ここにいるおみつ』を受け入れてきた京香か、

出自を知つてなお、おみつを信じ、守つて来た源三だけ。

それを進言するが、天膳の表情が一瞬にして曇った。その横で、忠直が深いため息をつく。

そついえば……さっきまでいたはずの源三の姿が見えない。

「先生は？」

「京香のそばにいる。あいつは……今夜が山なんだ」

康太の声が、一段と低くなった。大麻を短期間に大量に吸わされ、強い禁断症状が表れる可能性が高いのだと言う。

「お前だってもう、おみっちゃんの出自に対するこだわりはないんだろ？ 山城屋の寮で、一番最初に彼女を背負ったのが何よりの証じゃないか」

庚太の言葉が、新吉の胸を突く。強く拳を握りしめて、目を閉じる。

こだわりのないといえば、嘘になる。だが、あの時軍太夫が言っていたように、自分が世話になった人への義理を忘れず、自分の命を投げうった彼女の姿こそが、本当の『おみつ』。

自分が命を賭けて守ろうと決意した、たった一人の妹なのだ。

かつての気持ちを思い起こし、新吉が目を開けたのと同時に、廊下で大きな音がした。

「……おみっちゃん！」

殺気をたたえ、扉を開けた康太が叫ぶ。

「何やってるんだ。寝てなきゃ駄目じゃないか!？」

「お姐さん……は？」

苦痛に顔をゆがめ、息を切らせながらおみつが問う。

「今、良庵先生に診て頂いてる。先生も……源三さんも一緒だから心配は」

「嘘！」

脂汗を浮かべながら、目だけを異常に輝かせて、おみつが康太の言葉を遮る。

「あのお姉さんは、暗示をかけられてた。じいちゃんに、暗示をかける時に南蛮渡来の薬を使う、って……教えられたことがある。だったら、お姉さんは」

「馬鹿なこと言うんじゃない！」

今度は新吉が、おみつの言葉を遮った。

「姐さんは……お前を信じて風魔に落ちたんだぞ！」

「新吉！」

おみつを支える康太が、顔色を変えて叫んだ。天膳や忠直も気色ばむ。

しかし、新吉はそれに構わず、おみつの肩を強く揺さぶった。

「姐さんは……京香は、こんなことでくたばる女じゃねえ！ 今度はお前が、そう信じてやらなくてどうするんだ！？」

「兄……さん」

新吉を見上げるおみつの目が、見開かれた。

新吉はもちろん、天膳も忠直も、康太も、京香が生きて戻る可能性が低いと感じている中、心に傷を負うおみつに、酷なことを要求しているとわかっている。

だが、おみつには何も憂えず信じていて欲しいのだ。

おみつを信じ、最後まで守り抜いた京香が、必ず笑顔で戻ってくると。

おみつの目から、涙がこぼれ落ちる。

江戸へ出て来たときよりも小さくなった妹の身体を、新吉は強く抱きしめた。

「……兄さん」

胸の中でつぶやいたおみつの肩が、幾度も上下する。

「大丈夫だ。何があっても、必ず先生が姐さんを助け出してくれる」

「そうだおみつちゃん。新吉の言うとおりだ。必ず京香は帰ってくる。先生と一緒に。それを信じよう」

しゃくりあげながら何度もうなずくおみつの背中をさすりながら、新吉は康太を見た。

うなずいた彼の目が、廊下へと移る。

（先生、頼む。姐さんを……京香を、助けてくれ。おみつのためにも）

康太の視線の先を見つめた新吉は、心の中でつぶやいた。

第五章 五日目・永い夜・其の六・（前書き）

今回「現在の社会通念上好ましくない表現」が含まれているかもしれません。

ご覧頂く際にはお氣をつけ下さいますよう、よろしくお願いいたします。

第五章 五日目・永い夜・其の六

目の前を歩く良庵が、つきあたりの部屋の前で足を止めた。

「何かありましたらお呼び下さいませ」

静かに告げる良庵に頭を下げ、源三が襖の引き手に手をかける。

「……あの」

振り返ると、やや青ざめた良庵が、源三を見上げてくる。

「はい。何か」

「いえ……。患者の様子にお気をつけ下さい」

目をそらし、立ち去る良庵の背中を見て嫌な予感がした源三は、慌てて襖を開けた。

そして足早に、室内の中央に敷かれた布団に横たわる京香へ近づく。

「……先生」

少し荒い息の下から、自分を呼ぶ京香の顔色はさらに白くなり、声もかすれている。

「すみません。ご迷惑ばかりかけて」

「何を言う。生きて戻って来てくれただけで、充分だ」

布団から出した京香の手を握りしめ、源三は小さく息を吐いた。

「おみつ……さんは？」

「心配はいらぬ。傷口の縫合は済んだし、意識もしっかりしている
そうだ」

京香の顔に、安心したような笑みが浮かんだ。しかし、すぐに小さく咳を始める。

「苦しいか？」

京香は無言で、小さく首を振る。

いつもそうだ。

どんなにつらくても苦しくても、京香は決して弱音を吐かない。

それが、源三にはひどくもどかしい。

どんなささいなことでもいい。自身の持つ悩みや戸惑いなどを、
打ち明けてくれれば。

また、ひどい咳が京香の口から漏れた。

せめて薬湯だけでも飲ませようと、京香の身体を支えて起こす。

「先生……お願いが、あります」

咳きこみながら、自身にすがりついた京香がつぶやく。

「何だ？」

「私が、私でなくなる前に……この部屋を出てください」

「何を言う！ そんなことができるか」

京香の頭をぐつと引きよせ、源三は声を荒げる。

ようやく、戻って来たのに。

京香を失うかもしれない そんな思いをするのは、二度とこめんだ。

しかし、そんな源三の思いとは裏腹に、京香の息づかいがますます荒くなる。

「……………」

「どうした？ 何が欲しい？」

息を吐き出すたびに、源三の袖口をつかむ手が強くなる。

「先生……私は、大丈夫……ですから」

大丈夫 そう言いながらも、白い額に無数の汗を浮かべる京香の目はすでに血走っており、禁断症状が強く出始めていることを物語っている。

今、欲しいはずの物の名前を口にせず、自身を保とうと必死に闘っている。

そんな彼女に、自分は何ができる？

京香の横顔を見つめ、自問する源三の身体が、ふいに浮いた。すぐに背中に痛みが走る。

ひときわ大きく息を吐いた京香が、突然、源三の身体を突き飛ばしたのだ。

「どうした！？」

「出て行つて……言っているじゃありませんか！」

荒い息の中、京香の声が大きくなる。

「これ以上、私を惨めな気分になせないで！」

脈絡もなく叫ぶ京香の顔には、怒りの色のはつきりと浮かぶ。

そのさまが源三の心に刃となって突き刺さり、言葉を発するどころか、身動きすらできない。

京香はさらにたたみかけてくる。

「紀州に帰してくれさえすれば、葵は死ななかった……私の腕の中で。寒い、寒いって言いながら……」

突き飛ばされたまま動けない源三の目を見ずに、京香は続ける。

「あの子が……いえ、私達は何をしたって言うんです？ 私達はただ、父上や母上と共に、穏やかに暮らしていけるだけでよかった。それなのに……」

何も映していない、虚ろなまなざし。

「御政道のため、江戸の平和のため……それが何です！ そのために、何人の子供が犠牲になったの！！ 私たちは……紀州に、帰らなかった。父上と、母上に逢いたかった。なのに……」

どうにか立ち上がった京香が、頬にこぼれる涙をぬぐうこともせず、襖に向かって歩き出す。

外へ面している障子に手をかけたが、激しく咳き込むと、足下からくず折れた。

大きな音とともに、障子が京香の指をなぞった形で破れ、その跡が下へと流れていく。

「京香！」

慌てて立ち上がった源三は、京香の身体を支えた。

振り返った彼女の表情はうつろで、目は、源三のはるか後ろを見つめている。

「京香、辛抱しろ。今は耐えるのだ！」

源三が思わず大声をあげた瞬間、京香の目に何かが宿った。

「……こないで」

「京香？」

「私が……私が悪いんじゃない！」

叫ぶと、京香の指が源三の襟元を握りしめた。そんな彼女の身体を、源三は強く抱きしめる。

「いやあああつ！ 来ないで！ 葵！」

腕の中で、今まで聞いたことのない声をあげ続ける京香。

痩せて、骨ばった拳が、彼の胸を何度も叩きつけた。その痛みは心にまで突き刺さる。それでも、今の自分にはこうすることしかできない。

一時の快樂のために果てのない苦しみを味あわせるより、今、堪えてもらうしかないのだ。

けれど。

（……無力だ）

源三は、京香の苦しみに添うことすらできない自分を、呪った。

葵を喪った夜。京香に何があったかは知らない。訊いたこともない。

しかし、あの日。

見知らぬ老人の家に彼女を迎えに行った朝からずっと、自分が京香を守るのだと決めていたのに。

今の自分は、彼女の苦しみを代わってやることはおろか、軽くすることもできず、ただ、抱きしめることしか。

第五章 五日目・永い夜・其の六・（後書き）

こんばんは。作者の笠原です。

現在叫ばれている「薬物汚染」。

京香が今置かれている状況も、まさに「それ」です。

彼女がその状況に置かれた背景は「風魔による洗脳」ですが、興味本位での「薬物使用」は、確実に人生を狂わせます。

この話を書くにあたり、笠原はそれをまざまざと見せつけられました。

次回も、京香の苦しみは続きます。

苦手な方は、ご覧頂く際お気をつけ下さい。よろしくお願いいたします。

第五章 五日目・永い夜・其の七・（前書き）

今回も「現在の社会通念上好ましくない表現」が含まれているかもしれません。

ご覧頂く際にはお気をつけ下さいますよう、よろしくお願いいたします。

第五章 五日目・永い夜・其の七

源三には見えぬ幻に向かって叫ぶ京香がまた、激しく咳き込んだ。

「京香！　しつかりしろ！」

少しでも楽にしてやりたいと戒めを解き、背中をさする。

しかしそれがまた恐怖心を煽るのか……京香がまた、源三の腕から逃げ出した。

「京香！」

「やめて……来ないで！　お願い！」

今度は、源三を見て叫ぶ。

「何を言ってる、京香。俺がわからないのか！？」

「私のせいじゃない……私が悪いんじゃないわ！」

小刻みに震える体を護るように抱え込む京香の腕が、異様なほど白い。

結んである黒い髪は乱れ、こけた頬にいく筋もの線を描く。

「京香、落ち着いてくれ。ここに葵はいない。お前を苦しめるものは何一つないのだ」

「うそ……嘘よ。葵はそこにいるわ！ 私を連れて行こうと、手をのばして……」

源三の背後を見つめた京香が顔をひきつらせ、身をひるがえ翻す。しかし、白い着物の裾に足を取られ、その場に倒れ込んだ。

「京香！ しっかりしろ！」

差し伸べた源三の手を、京香はものすごい力で握りしめて来た。

「京香？」

「……………くすり」

ついに吐き出された京香の本音に、源三は、冷や水をかけられたような感覚に襲われた。

「先生、お願い」

「……………京香」

「少しでもいいの……。これで、最後にする、から。先生……」

「駄目だ。頼む、耐えてくれ」

息を荒く吐き出した京香が、幾度も首を振る。そしてまた、立ち上がった。

「京香？」

足下がおぼつかないまま、入口の方へ向かって歩く。源三は慌てて、その後を追った。

「どこへ行く？ 京香！」

「くすりを、もらいに……」

「馬鹿を申せ！ そなたに薬を与えるものは、この建物にはいない！」

「離して!!」

ものすごい力で振り回された彼女の手が、源三を強く打った。頬に、生温かい液体が落ちる。

「ご浪人さんの言うことを聞けば……くすりをもらえる、って。あの人が……」

「誰だ？ その浪人というのは？ 何を聞くのだ!？」

嫌な予感に囚^{とら}われた源三が、京香の背中に問いかけた。

すぐに、京香がこちらを振り返った。そして、立ち上がろうとした源三の首に手をかける。

「……………」

「家族を壊した奴らを殺せば……好きなだけ、薬をくれる、って……」

低く、よどみのない口調。敵と対峙する時と同じ、鋭い目。

京香の細い指が、源三の肌に食い込む。

「家族、を、壊したとは……どういう、ことだ？」

京香の言葉の意味がわからない源三は、どうにか声を絞り出す。

「あのひとの、家族を……娘を、奪った……」

娘を、奪う？

源三の脳裏に、様々な光景が浮かんでは消える。

おみつが産まれて間もなく、同僚が小太郎に斬りかかり、お小夜を凌辱したあと、惨殺されていたと告げた軍太夫の苦渋の表情が。

お小夜が仕事場として使っている長屋の一角に落ちていた、京香の小袖が。

そして。

おみつを取り戻そうとしたお小夜とともに、うつろな目で立ち尽くしていた、京香の姿が。

「そなたに……薬をやる、と言ったのは、平沼……對馬ていまだな？」

平沼の名前を出した瞬間、京香の目が見開かれた。

源三の首にかけた手の力が、さらに強くなる。

取り戻してなお、京香の心は未だに紀州の山の中をさまよい、風魔に囚^ひわれている。

駄目、なのか？

二度と、あの柔らかな笑みは、

『先生』

と呼んでくれた、涼やかな声は、還って来ないのか？

源三は、京香の手首を掴んでいた自身の力を抜き、目を閉じた。

何も知らなかった幼い頃、天膳から厳しい教育を受ける兄の忠直を横目に見ながら、京香と遊んだ屋敷の庭も。

征夷大將軍に任命された紀州藩主、吉宗の命を自らに告げた父の厳しい顔も。

葵を喪い、自らを高めるために限界まで追い込んでいた、京香の真剣な横顔も。

薄れゆく意識の中で、ゆっくりとそれらが闇に墜ちて行くことしていた、その時。

自身の首から、戒めが解かれた。

突然、大量の空気を取り込んだ源三は逆に苦しくなり、激しく咳き込む。

「京……香？」

何度も、大きく息を吐き出しながら顔を上げた源三の視線の先に、京香が倒れ込んでいるのが見えた。

「京香！」

気を失った京香を起こし、首筋に手をやる。

指先に触れる弱い脈。急速に冷えて行く肌。

このままでは、死んでしまう。

京香を抱きあげた源三は、中央の布団に体を横たえ、自らも入って掛布団をかぶった。

流れ出ようとする彼女の命を繋ぎ止めようと、強く京香を抱きしめる。

（頼む……生きてくれ。京香。そなたを助けようと深手を負ったおみつのためにも）

そして。

今までずっとそばにいた……自分のためにも。

第五章 五日目・永い夜・其の七 - (後書き)

長らくお待たせして、申し訳ございませんでした。
次回よりようやく第六章に移ります。
引き続き、よろしくお願いいたします。

第六章 六日目・解放・

闇の中から、泣き声が聞こえる。

何かに導かれるように、京香は足を向けた。

ゆっくり歩く視線の先に、白い、かすかな明かりが見えた。

そこにうずくまる、小さな少女。

『おねえちゃん?』

覚えのある幼子の声を聞いた京香の背に、冷たい雫が落ちた。

『……いっしょに行こう。おねえちゃん』

立ち上がり、京香を見上げる幼子の顔には幾つかの擦り傷。

頼りなげな体には、無数の噛み傷。

そして。

『あの』夜、畏にかかった足の先は ない。

「……葵」

片足がないのをもろともせず、京香に近づく。

葵の手が、身動きできない京香に触れた。

氷のような冷たさに、体が震える。

『ひとりじゃさびしいよ、おねえちゃん』

光を映さない葵の目から、赤い雫が落ちた。

『父上も母上も、来てくれない……。ずうっと、ひとりぼっち』

京香から手を離し、葵が泣きじゃくる。

ひとりぼっち　葵の言葉が、京香の胸を刺した。

葵を、こんな所で独りにしたのは、自分。

あの夜、自分だけが生き残るために、動かなくなった少女を置いて逃げたのだ。

京香はしゃがみこみ、冷えきっている葵の頬をぬぐった。

「ごめんね……おねえちゃん、行くわ。葵と一緒に」

顔を手で覆っていた葵が京香を見下ろし、満面の笑みを見せた。

『こつちよ、おねえちゃん』

小さな、冷え切った葵の手を改めて握って立ち上がった京香は、闇の中へと歩き出す。

ところが。

「行くな！ 京香！」

姿は見えない。だが、すぐ近くで聞こえる源三の声に、京香の足は止まる。

「戻って来い！ そなたの行く道は、そちらではないのだ！」

『おねえちゃん？』

葵が、京香の手を引く。しかし、自らの意思とは関係なしに、京香の足は動かない。

「お姐さん！」

今度は、おみつの声が遠くから聞こえて来た。

「行かないで！ 先生も、兄さんも、康太さんも……おじいちゃんや、忠直様だって待ってる！」

待ってる？ 誰を？

「私だって待ってる！ お姐さんが戻ってくるのを、みんな待ってるんだよ！」

……私を？ みんなが、私を……。

葵の手を離し、京香は振り向いた。

葵がいた場所にほのかに灯っていた光が、ゆっくり京香に近づいてくる。

『おねえちゃん……そっちに、行っちゃうの？』

涙をためて、葵が京香を見上げた。

行けるわけがない。たった今、自分は葵とともに行くと思ったのだから。

でも、自身にそう言い聞かせる言葉とは裏腹に、京香の足は鉛のように重くなり、一步も踏み出すことができずにいた。

光がすぐ、そばに来た。

すると、その光は京香ではなく、葵の姿を飲み込んだ。

「葵！」

叫んだ京香の耳に、どこからか、葵の寂しげな声が聞こえて来る。

『おねえちゃん……さよなら』

「葵！？ どこに行ったの？ 葵！！」

姿の見えなくなった葵に向かって手を伸ばした京香が、あまりの眩しさに目がくらんだその時。

ものすごい力で、手を引っ張られた。

「京香！　しっかりいたせ！　京香！」

耳元で聞こえる大きな声に応えようと、京香は急いで目を開ける。するとすぐそばで、頬に傷を負い、結った髪の毛を乱した源三が真剣なまなざしを向けていた。

「先……生？」

かすれた声で、源三の通り名を呼ぶ。

「そうだ。俺がわかるか？　京香」

伸ばしたままの京香の手を、源三がまた、強く握り締めて来る。

「先……生」

もう一度源三を呼んだ京香の胸が熱くなり、頬に雫が伝う。

「よく……戻って来たな、京香」

声を震わせた源三が、寝たままの京香を包んだ。

そのぬくもりが、京香が深く、暗い闇から抜け出したことを教えてくれた。

追い詰められ、おみつとともに川へ飛び込んでから……いや、葵を喪ったあの夜から心の奥を苛んでいた闇すらも、降り注ぐ光に溶けて行くような感覚が、京香を包む。

今までにない晴れやかな思いが、胸を満たし始めたその時。

悲鳴とともに、多数の襖が倒れる音が、耳へ飛び込んで来た。
。

第六章 六日目・おみつの想い・

突然の物音の後、近づく大きな足音に、京香を包んでいた源三が、顔をこわばらせて体を起こす。

未だ横たわる自分はもちろん、源三も丸腰だ。万が一敵の襲来があつたなら、太刀打ち出来ないのは目に見えている。

「先生！」

京香の不安をよそに部屋へ飛び込んで来たのは、目を閉じたおみつを抱えた康太だつた。

「何があつた？」

「風魔の残党が、良庵先生を」

「何？」

京香をかばうように膝を立てていた源三が、立ち上がる。

「林殿は？」

「今、新吉が部屋に行つてゐる。他の連中は清水様と忠直様が」

「わかつた。俺が行く」

源三に頷いた康太が、胸元から短刀を取り出す。

「康太。そなたの分は」

「心配するな」

もう一本、同じ長さの刀を取り出し、康太が微笑んだ。

「京香とおみつを……頼む」

「あいよ」

どこか余裕のある声で康太が頷くと、源三が彼の肩を叩いて部屋を出た。

「久しぶり……でもないよな。どこまで人を心配させたら気が済むんだか。京香って奴は」

襖を閉め、軽口を叩く康太に、京香は肩をすくめて応える。

「どうもすみませんね。それより早く、おみつさんを寝かせてあげなさいよ」

体を起こし、這うように布団を出す。

「だけど」

「私は大丈夫。おみつさん、まだ眠ってるじゃないの」

「……背中に傷しょってるくせに、明け方近くまでずっと起きてたからな。あんたのことを心配して」

京香が横たわっていた布団におみつを寝かせた康太が、つぶやく。
あどけない表情で眠り続けるおみつのこけた頬に、涙の跡が幾筋もついている。

布団からはみ出たおみつの手を、京香は何も言わずにそつと握る。

おみつとともに川へ飛び込んだあの日。

縫物職人のお小夜に助けられたのもつかの間、屈強な男たちに押さえつけられ、すぐに煙管で薬を嗅がされた。そこから『何をしていたのか』、京香は覚えていない。

ただ、何者かへの憎しみを強く持っていたことだけは、覚えている。

「薬を嗅がされてから私は……何をしてたのかしら」

「京香」

「康太は、知っているんでしょう？ 私が何をして、あの場にいたのかを」

京香を見つめていた康太の目が、宙をさまよう。

突然のしかかった、葵を喪った時と同じ重み。

その後、頬に走った鋭い痛みで気がついた京香の膝元には、背中に傷を負ったおみつが倒れていた。

『あんだが殺したようなもんだ』

天膳や新吉と罾を仕掛けたあの夜、まんまとおびき出された浪人の言葉が、京香の脳裏によみがえる。

「私が……おみつさんを斬ったのね？」

「それは違う！」

唇を噛み締めた京香の言葉を、康太が即座に否定する。

「この子は、あんたを助けるために、自らの命を賭けたんだ。自身に流れる血を責めながら、それでも俺たちの元にお前を戻そうと、必死に……」

声を詰まらせた康太が、おみつを見下ろす。

「自身に、流れる血？」

京香の問いに、康太は小さく舌打ちをして顔をそむけた。

「この子は、林さんと縫物職人だったお小夜さんの子供だ。……風魔の血を引いてるんだよ」

しばらくの沈黙ののち、絞り出すようにつぶやいた彼の言葉で、京香はすべてを悟る。

おみつが、あの晩助けてくれたお小夜の子供ならば。

記憶のない間、自分は風魔の手に堕ちていたのだ、と。

「私がない間、つらい思いをしていたのね」

おみつを守るために川に飛び込んだことが、逆に、彼女を追いつめる羽目になってしまったのか。

京香は目を閉じ、自らの浅慮を悔いた。

守りたいと願いながら、おみつを追いつ込んだのは、紛れもない自分。

涙がこぼれそうになるのをこらえながら、京香は、おみつの手を強く握り締める。

それが眠りを妨げたのか、彼女の手がかすかに動いた。

「おみつちゃん」

傍らで康太がつぶやく声に目を開けると、目を覚ましたおみつが、京香と康太を交互に見つめていた。

「お姐さん」

「……ごめんなさいね。私のせいで」

こらえきれない涙が、京香の頬に落ちる。

「何で、お姐さんが謝るの？ 悪いのは……」

何かを思い出したように言葉を切ったおみつが、京香の手をそつと振り払った。

動きづらそうに、でも、京香と康太から逃げるように、寝がえりを打って背を向ける。

「おい、どうしたんだ？」

心配そうに声をかける康太にも、答えない。

小さく肩を震わせて、声を押し殺して、おみつが泣いている。

そんな彼女に、京香は今、かける言葉を完全に失っていた。
。

第六章 六日目・おみつの想い・（後書き）

いつもありがとうございます。作者の笠原です。

3月28日に頂きましたweb拍手コメントのお礼を、活動報告にてさせて

いただいております。

本当にありがとうございます！ ぜひ、ご確認くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8039a/>

花ぐるま事件帳～恩讐の彼方～

2011年7月6日13時00分発行